兵庫県文化財調査報告　第220冊

公園都市線（第２期）車両留置施設設置事業に伴う

二郎宮ノ前遺跡

発掘調査報告書

平成１２年度

兵庫県教育委員会

公園都市線（第２期）車両留置施設設置事業に伴う

二郎宮ノ前遺跡（にろうみやのまえいせき）

発掘調査報告書

平成１２年度

兵庫県教育委員会

北から

東から

南から

真上から

Ⅰ区全景（真上から）

Ⅱ・Ⅲ区全景（真上から）

内面（報告書番号121）

外面（報告書番号121）

例　言

1．本書は神戸市北区有野町二郎字宮ノ前・竹地先に所在する二郎宮ノ前遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の発掘調査は、公園都市線（第２期）車両留置設置事業に伴って行われたもので、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．各年度の調査概要と担当者は第２章のとおりである。

4．遺構名や柱穴番号は煩雑であるため、各調査年度毎に現場で付した番号をそのまま使用している。但し、建物名は記述が煩雑になるので統一を諮った。

5．遺物番号は本文・実測図版・写真図版を通して共通の番号を付した。なお、鉄製品にはＦ、石製品にはＳを冒頭に付し、他の遺物とは別に番号を付した。

6．本遺跡に関わる整理作業は平成11～12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。

7．本書の執筆は渡辺昇・山上雅弘・篠宮正・山本誠が下記のとおりに分担し行った。編集は山上が整理嘱託職員の宮田麻子の協力をえておこなった。
渡辺昇（第５章第２節）・山本誠（第４章第５節）・篠宮正（第４章第２・３節・第６章）
山上雅弘（残りの部分）

8．本文中で表した標高は東京湾平均海水準を基準とし、方位は原則として、国土座標系（第Ⅴ系）を用いた。

9．位置図は国土地理院発行の１／25,000地形図「神戸北部」を用いている。

10．本書にかかる写真・図面・遺物などは兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２－１－５）および魚住分館において保管している。

11．本書に用いた写真のうち、遺構写真は各担当者が撮影し、遺物写真は業者委託した。

12．発掘調査および報告書刊行にあたって下記の方々から御教示・御指導を頂いた。記して感謝致します。
肥塚隆保・中井均・多田暢久・高島信之・山崎敏昭・田中賢人・禰宜田佳男・重金誠・揚晶仲隆裕・吉川義彦・（故人）阿部嗣治・中西裕樹・堀口健弐・宮田逸民

目　　次

例　言
目　次

第１章　調査の経過 …… 1P

第１節　調査経緯と調査地点 …… 1P
第２節　整理作業の経過 …… 3P

第２章　地理的・歴史的環境 …… 5P

第１節　地理的環境 …… 5P
第２節　歴史的環境 …… 5P

第３章　遺跡の概要 …… 9P

第４章　古墳・古代の遺構と遺物 …… 11P

第１節　第１・２次調査の遺構 …… 11P
第２節　第３・４次調査の遺構 …… 19P
第３節　古墳時代～飛鳥時代の遺物 …… 21P
第４節　古代の遺物 …… 27P
第５節　石器 …… 29P

第５章　中世の遺構と遺物 …… 31P

第１節　第１次調査の遺構 …… 31P
第２節　第２～４次調査・小坂遺跡の調査 …… 47P
第３節　第１次調査の中世遺物 …… 48P
第４節　第２次調査の中世遺物 …… 58P
第５節　第３次調査の中世遺物 …… 58P
第６節　第４次調査の中世遺物 …… 59P
第７節　鉄製品 …… 60P

第６章　二郎宮ノ前遺跡出土坩堝付着物の分析 …… 61P

第１節　試料調査の方法 …… 61P
第２節　分析結果 …… 61P

第７章　まとめ …… 63P

第１節　調査の概要と変遷 …… 63P
第２節　古墳・古代 …… 65P
第３節　中世 …… 69P
第４節　遺跡の検討 …… 76P

挿図目次

第１図　調査区設定図
第２図　作業風景
第３図　周辺の遺跡
第４図　各時期の微地形
第５図　鋳造関係遺物
第６図　石器
第７図　中世地区割図
第８図　礎石建物（S＝1/100）
第９図　遺跡から見た東側の風景
第10図　礎石
第11図　坩堝全体像測定箇所
第12図　蛍光Ｘ線定性分析スペクトル
第13図　遺跡の旧地形
第14図　遺跡と南側の地形
第15図　古墳・古代の変遷
第16図　中世の変遷
第17図　遺跡の変遷と微地形

図版目次

図版１　遺跡の位置
図版２　有馬郡中心部の旧地形
図版３　有馬郡周辺の地理景観
図版４　遺跡周辺の旧地形
図版５　調査区全体図　１
図版６　調査区全体図　２
図版７　古墳・古代全体図
図版８　古墳・古代遺構配置図１・６区
図版９　古墳・古代遺構配置図２区
図版10　古墳・古代遺構配置図３区
図版11　古墳・古代遺構配置図４区
図版12　古墳・古代遺構配置図５区
図版13　第１次調査　古墳・古代ＳＨ１平・断面図
図版14　第１次調査　古墳・古代ＳＨ２・３平・断面図
図版15　第１次調査　古墳・古代ＳＨ４平・断面図
図版16　第１次調査　古墳・古代ＳＨ５・６平・断面図
図版17　第１次調査　古墳・古代ＳＨ７～９平・断面図
図版18　第１次調査　古墳・古代ＳＨ10・11平・断面図
図版19　第１次調査　古墳・古代ＳＢ８平・断面図
図版20　第１次調査　古墳・古代ＳＢ41・43・44平・断面図
図版21　第１次調査　古墳・古代ＳＢ56・61・82平・断面図
図版22　第１次調査　古墳・古代ＳＢ37～40平・断面図
図版23　第１次調査　古墳・古代ＳＢ15・67・71・87平・断面図
図版24　第１次調査　古墳・古代ＳＢ97～100・103平・断面図
図版25　第１次調査　古墳・古代ＳＢ79・83・84平・断面図
図版26　第１次調査　古墳・古代ＳＢ75・80・86・89・96平・断面図
図版27　第１次調査　古墳・古代ＳＢ48～50・54・74平・断面図
図版28　第１次調査　古墳・古代ＳＢ33・36・70・76・77平・断面図
図版29　第１次調査　古墳・古代ＳＢ52・53・58・105平・断面図
図版30　第１次調査　古墳・古代ＳＢ90・91・106平・断面図
図版31　第１次調査　古墳・古代ＳＢ45・46平・断面図
図版32　第１次調査　古墳・古代土坑（１）平・断面図
図版33　第１次調査　古墳・古代土坑（２）平・断面図
図版34　第１次調査　古墳・古代土坑（３）平・断面図
図版35　第１次調査　古墳・古代土坑（４）平・断面図
図版36　第１次調査　古墳・古代溝平・断面図
図版37　中世遺構全体図
図版38　中世Ⅰ区遺構配置図
図版39　中世Ⅱ区遺構配置図
図版40　中世Ⅲ区遺構配置図
図版41　第１次調査　中世Ⅰ区詳細図
図版42　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ27周辺図
図版43　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ28・29周辺図
図版44　第１次調査　中世Ⅲ区南端・第２次調査平面図
図版45　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ１平・断面図
図版46　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ２～７平面図
図版47　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ２・５平・断面図
図版48　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ３・４平・断面図
図版49　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ６・７平・断面図
図版50　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ10～13平・断面図

図版51　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ17平・断面図
図版52　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ18平・断面図
図版53　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ19平・断面図
図版54　第１次調査　中世Ⅰ・Ⅱ区ＳＢ65・42平・断面図
図版55　第１次調査　中世Ⅰ区ＳＢ14・16・60・93平・断面図
図版56　第１次調査　中世Ⅱ区ＳＢ62・94・87平・断面図
図版57　第１次調査　中世Ⅱ区ＳＢ 104平・断面図
図版58　第１次調査　中世Ⅱ区ＳＢ 101・102 平・断面図
図版59　第１次調査　中世Ⅱ区ＳＢ72・92平・断面図
図版60　第１次調査　中世Ⅱ・Ⅲ区ＳＢ73・63・69平・断面図
図版61　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ28・29平・断面図
図版62　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ51・85平・断面図
図版63　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ57・78平・断面図
図版64　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ59・64平・断面図
図版65　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ47・66平・断面図
図版66　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ35・88平・断面図
図版67　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ31・32・34・68平・断面図
図版68　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ27平・断面図
図版69　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ30・55平・断面図
図版70　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ24・26・81平・断面図
図版71　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ22・25平・断面図
図版72　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＢ20・21・23平・断面図
図版73　第１次調査　中世Ⅰ区池１全体平・断面図
図版74　第１次調査　中世Ⅰ区池１平・断面図
図版75　第１次調査　中世Ⅰ区池１溜枡平・断面図
図版76　第１次調査　中世Ⅰ区池１・２全体平・断面図
図版77　第１次調査　中世Ⅰ区井戸１平・断面図
図版78　第１次調査　中世Ⅰ区井戸２平・断面図
図版79　第１次調査　中世Ⅲ区井戸３平・断面図
図版80　第１次調査　中世Ⅰ・Ⅲ区井戸４・土坑(1)平・断面図
図版81　第１次調査　中世Ⅰ区土坑(2) 平・断面図
図版82　第１次調査　中世Ⅰ区土坑(3) 平・断面図
図版83　第１次調査　中世Ⅱ区土坑(4) 平・断面図
図版84　第１次調査　中世Ⅲ区ＳＤ58・土坑(1)平・断面図
図版85　第１次調査　中世Ⅲ区土坑(2) 平・断面図
図版86　第１次調査　中世Ⅲ区土坑(3) 平・断面図
図版87　第１次調査　中世Ⅲ区池３平面図
図版88　第１次調査　中世Ⅰ区溝・堀(1) 平・断面図
図版89　第１次調査　中世Ⅰ区溝・堀(2) 断面図・畠平面図
図版90　第１次調査　中世Ⅱ区溝・堀(1) 平・断面図
図版91　第１次調査　中世Ⅱ区溝・堀(2) 平・断面図
図版92　第３・４次調査　遺構配置図
図版93　第３・４次調査　ＳＢ201・202平・断面図
図版94　第３・４次調査　ＳＢ203・301・302平・断面図
図版95　第３・４次調査　土坑・溝平・断面図
図版96　古墳（１）出土遺物
図版97　古墳（２）出土遺物
図版98　古墳（３）出土遺物
図版99　古墳（４）出土遺物
図版100　古代（１）出土遺物
図版101　古代（２）出土遺物
図版102　第１次調査　中世Ⅰ区（１）出土遺物
図版103　第１次調査　中世Ⅰ区（２）出土遺物
図版104　第１次調査　中世Ⅰ区（３）出土遺物
図版105　第１次調査　中世Ⅰ区（４）出土遺物
図版106　第１次調査　中世Ⅰ区（５）出土遺物
図版107　第１次調査　中世Ⅰ区（６）出土遺物
図版108　第１次調査　中世Ⅰ区（７）出土遺物
図版109　第１次調査　中世Ⅰ区（８）出土遺物
図版110　第１次調査　中世Ⅰ区（９）出土遺物
図版111　第１次調査　中世Ⅱ区（１）出土遺物
図版112　第１次調査　中世Ⅱ区（２）出土遺物
図版113　第１次調査　中世Ⅱ区（３）出土遺物
図版114　第１次調査　中世Ⅱ区（４）出土遺物
図版115　第１次調査　中世Ⅱ区（５）出土遺物
図版116　第１次調査　中世Ⅲ区（１）出土遺物
図版117　第１次調査　中世Ⅲ区（２）出土遺物
図版118　第１次調査　中世Ⅲ区（３）出土遺物
図版119　第３・４次調査　中世（１）出土遺物
図版120　第３・４次調査　中世（２）出土遺物
図版121　第３・４次調査　中世（３）出土遺物
図版122　中世　鉄製品

巻首図版目次

巻首１　遺跡遠景　北から
　　東から
巻首２　遺跡全景　南から
　　真上から
巻首３　中世Ⅰ区全景　真上から
　　中世Ⅱ・Ⅲ区全景　真上から
巻首４　坩堝　内面（報告書番号121）
　　外面（報告書番号121）

写真図版目次

図版１　遺跡遠景　南東から
　　東から
図版２　遺跡遠景　南から
　　東から
図版３　遺跡遠景　東から
　　北から
図版４　遺跡全景　南東から
　　真上から
図版５　遺跡全景　真上から
図版６　第１次調査　調査区全景（南から）
　　調査区全景（南から）
図版７　第１次調査　調査区北部全景（南から）
　　調査区全景（北から）
図版８　第１次調査　調査区北端全景（南から）
　　中世Ⅰ区池１・３周辺（北から）
図版９　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＢ41周辺（南から）
　　ＳＢ48～50周辺（北から）
図版10　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＨ１（西から）
　　ＳＨ２・３（南から）
図版11　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＨ４　検出（東から）
　　ＳＨ４　焼失状況（東から）
　　ＳＨ４　完掘状況（東から）
図版12　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＨ５（南から）
　　ＳＨ６（東から）
図版13　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＨ７～９（北から）
　　ＳＨ７～９（東から）
図版14　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＨ10・11（北から）
　　ＳＨ11　（西から）
図版15　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＢ８（北から）
　　ＳＢ８　Ｐ507（北から）
　　ＳＢ８　Ｐ303（東から）
　　ＳＢ８　Ｐ319（東から）
　　ＳＢ８　Ｐ307（西南から）
図版16　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＢ41周辺（南から）
　　ＳＢ41周辺（北から）
図版17　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＢ41　Ｐ1462（西から）
　　ＳＢ41　Ｐ1382（西から）
　　ＳＢ41　Ｐ1449（南から）
　　ＳＢ41　Ｐ1956（北から）
　　ＳＢ41　Ｐ1954（北から）
　　ＳＢ61　Ｐ1950・1949・1948
　　（北から）
　　ＳＢ61　Ｐ1950（北から）
　　ＳＢ61　Ｐ1949（西から）
図版18　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＢ56（東から）
　　ＳＢ56　Ｐ1932（東から）
　　ＳＢ56　Ｐ1922（北から）
　　ＳＢ56　Ｐ1934（東から）
　　ＳＢ56　Ｐ1935（南から）
図版19　第１次調査　古墳・古代
　　ＳＢ15（北から）
　　ＳＢ37・40（西から）

ＳＢ38・39（北から）
図版20　第１次調査　古墳･古代
ＳＢ98・99（南から）
ＳＢ97（南から）
ＳＢ79（北から）
図版21　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ80（東から）
ＳＢ75（北から）
図版22　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ80　Ｐ2685（南から）
ＳＢ80　Ｐ2680（南から）
ＳＢ80　Ｐ2684（南から）
ＳＢ80　Ｐ2695（東から）
ＳＢ80　Ｐ2690（北から）
ＳＢ80　Ｐ2712（北から）
ＳＢ80　Ｐ2713（北から）
ＳＢ80　調査風景（東から）
図版23　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ75　Ｐ2701（南から）
ＳＢ75　Ｐ2703･2704（東から）
ＳＢ75　Ｐ2694（南から）
ＳＢ75　Ｐ2705（東から）
ＳＢ75　Ｐ2711（西から）
ＳＢ75　Ｐ2706･2707（北から）
ＳＢ75　Ｐ2707･2708（北から）
ＳＢ75　Ｐ2708（北から）
図版24　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ76　（東から）
ＳＢ77　（北から）
図版25　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ77　Ｐ2006（南から）
ＳＢ77　Ｐ2010（南から）
ＳＢ77　Ｐ2018（西から）
ＳＢ77　Ｐ2008（東から）
ＳＢ77　Ｐ2013（西から）
ＳＢ77　Ｐ2681（北から）
ＳＢ76　Ｐ1995（南から）
ＳＢ76・77　Ｐ1996（南から）
図版26　第１次調査　古墳･古代
ＳＢ48～50（南から）
ＳＢ48（東から）
図版27　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ49（東から）
ＳＢ50（東から）
図版28　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ48　Ｐ1592（南から）
ＳＢ48　Ｐ1593（西から）
ＳＢ48　Ｐ1594（西から）
ＳＢ48　Ｐ1595（北から）
ＳＢ49　Ｐ1600（南から）
ＳＢ49　Ｐ1628（西から）
ＳＢ49　Ｐ1627（西から）
ＳＢ49　Ｐ1603（北から）
図版29　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ49　Ｐ1605（南から）
ＳＢ49　Ｐ1626（西から）
ＳＢ50　Ｐ1703（西から）
ＳＢ50　Ｐ1696（南から）
ＳＢ50　Ｐ1692（東から）
ＳＢ50　Ｐ1699（西から）
ＳＢ50　Ｐ1704（東から）
ＳＢ50　Ｐ1702（北から）
図版30　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ52（西から）
ＳＢ52　Ｐ1679（北から）
ＳＢ52　Ｐ1680（北から）
図版31　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ53（東から）
ＳＢ54（北から）
図版32　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ53　Ｐ1727（東から）
ＳＢ53　Ｐ1682（南から）
ＳＢ53　Ｐ1681（西から）
ＳＢ53　Ｐ1725（東から）
ＳＢ53　Ｐ2110（西から）
ＳＢ53　Ｐ1845（東から）
ＳＢ54　Ｐ1650（南から）
ＳＢ54　Ｐ1688（東から）
図版33　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ74（東から）
ＳＢ33（北から）

図版34　第１次調査　古墳・古代
ＳＢ58（西から）
ＳＢ45（東から）
図版35　第１次調査　古墳・古代
ＳＫ１（北から）
ＳＫ24（南から）
図版36　第１次調査　古墳・古代
ＳＫ49（東から）
ＳＫ50（南から）
ＳＫ52（東から）
ＳＫ53（南から）
ＳＫ56（北から）
ＳＫ55（南東から）
図版37　第１次調査　古墳・古代
ＳＫ68（北から）
ＳＫ68断面（東から）
図版38　第１次調査　古墳・古代
ＳＤ93（西から）
ＳＤ93断面１（東から）
ＳＤ93断面２（東から）
ＳＤ93断面３（東から）
ＳＤ93断面４（西から）
図版39　第１次調査　中世Ⅰ区
全景（真上から）
図版40　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＢ２～５（南から）
ＳＢ２～５（北から）
図版41　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＤ５（東から）
ＳＤ１・４（西から）
ＳＤ７（北から）
図版42　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＢ２　Ｐ421（西から）
ＳＢ２　Ｐ255（北から）
ＳＢ２　Ｐ183（東から）
ＳＢ２　Ｐ403（南から）
ＳＢ２　Ｐ274（北から）
ＳＢ２　Ｐ191（北から）
ＳＢ２　Ｐ501（北から）
ＳＢ２　Ｐ299（北から）
図版43　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＢ３　Ｐ383（西から）
ＳＢ３　Ｐ257（南から）
ＳＢ３　Ｐ267（北から）
ＳＢ３　Ｐ273（北から）
ＳＢ３　Ｐ195（南から）
ＳＢ３　Ｐ197（北から）
ＳＢ４　Ｐ308（東から）
ＳＢ４　Ｐ320（南から）
図版44　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＢ１（北から）
ＳＢ１　盛土（北から）
ＳＢ１　Ｐ340（東から）
ＳＢ１　Ｐ330（南から）
図版45　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＢ18（南から）
ＳＢ18・19（北から）
ＳＢ18（東から）
図版46　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＢ18　Ｐ393（東から）
ＳＢ18　Ｐ394（東から）
ＳＢ18　Ｐ397（東から）
ＳＢ18　Ｐ148（東から）
ＳＢ18　Ｐ588（南から）
ＳＢ18　Ｐ399（南から）
ＳＢ18　Ｐ1890（南から）
ＳＢ18　Ｐ1891（南から）
図版47　第１次調査　中世Ⅰ区
堀１（南から）
堀１（北から）
図版48　第１次調査　中世Ⅰ区
堀１断面１（北から）
堀１断面２（北から）
堀１断面３（西から）
図版49　第１次調査　中世Ⅰ区
池１（東から）
池１（北から）
図版50　第１次調査　中世Ⅰ区
池１（北から）
池１州浜（北から）

図版51　第１次調査　中世Ⅰ区
池１・ＳＢ19（東から）
池１溜枡・州浜（東から）
敷石（東から）
図版52　第１次調査　中世Ⅰ区
池１溜枡（東から）
池１溜枡完掘（東から）
池１溜枡完掘（北から）
図版53　第１次調査　中世Ⅰ区
池１溜枡断割り（南から）
池１溜枡断割り（南から）
池１溜枡断割り（南から）
図版54　第１次調査　中世Ⅰ区
池２（南から）
池２（北から）
池２（東から）
図版55　第１次調査　中世Ⅰ区
池２断面１（北から）
池２断面２（北から）
池２土留杭痕跡（北から）
図版56　第１次調査　中世Ⅰ区
池２・集石（南から）
池２・集石（南から）
池２・ＳＫ８（西から）
図版57　第１次調査　中世Ⅰ区
ＳＫ5（東から）
ＳＫ2（北から）
ＳＫ6（西から）
図版58　第１次調査　中世Ⅰ区
井戸1（東から）
井戸1　断割り（東から）
図版59　第１次調査　中世Ⅰ区
井戸2（東から）
井戸2　断割り（東から）
井戸2　鎌出土状況（東から）
図版60　第１次調査　中世Ⅱ区
西側（南から）
東側（南東から）
図版61　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＢ42周辺（南から）
ＳＢ60周辺（東から）
図版62　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＢ104周辺（北から）
ＳＢ14・16周辺（北から）
図版63　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＤ58（西から）
ＳＤ58（南から）
図版64　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＤ66（南から）
ＳＤ66（西から）
図版65　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＤ66（西から）
ＳＤ66（東から）
ＳＤ65（西から）
図版66　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＤ66断面⑥（東から）
ＳＤ66断面⑤（東から）
ＳＤ66断面④（東から）
図版67　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＤ66断面⑨（南から）
ＳＤ66断面⑧（南から）
ＳＤ66断面⑦（南東から）
図版68　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＫ87断面（南から）
ＳＫ87（南から）
図版69　第１次調査　中世Ⅱ区
ＳＫ39（西から）
ＳＫ39断面（南から）
図版70　第１次調査　中世Ⅲ区
全景（真上から）
図版71　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＢ28・29周辺（北から）
ＳＢ57周辺（北から）
図版72　第１次調査　中世Ⅲ区
井戸３周辺（西から）
ＳＢ28・29周辺（西から）
図版73　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＢ28・29（西から）
ＳＢ28・29（東から）
ＳＢ28・29（南から）
図版74　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＢ28・29 Ｐ836・858(南から)

ＳＢ28・29 Ｐ835・857(南から)
ＳＢ28・29 Ｐ834（南から）
ＳＢ28・29 Ｐ841・863(南から)
ＳＢ28・29 Ｐ842・864(南から)
ＳＢ28・29 Ｐ845・866(南から)
ＳＢ28・29 Ｐ848（南から）
ＳＢ28・29 Ｐ856（北から）
図版75　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＢ21　Ｐ648（北から）
ＳＢ21　Ｐ654（北から）
ＳＢ24　Ｐ782（東から）
ＳＢ24　Ｐ708（北から）
ＳＢ24　Ｐ709（東から）
ＳＢ24　Ｐ713（東から）
図版76　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＢ31・32・68（西から）
ＳＢ59・64（西から）
図版77　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＥ３（東から）
ＳＥ３断面（西から）
図版78　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＥ４（南から）
ＳＥ４断割り（北から）
ＳＥ４井戸底（南から）
図版79　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＫ30～32（北から）
ＳＫ30（西から）
ＳＫ32（東から）
図版80　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＸ１（北から）
ＳＸ１　断面（西から）
図版81　第１次調査　中世Ⅲ区
ＳＫ21（南から）
ＳＫ23（南から）
図版82　第１次調査　調査風景　（南から）
調査風景　（北から）
調査風景　（南から）
調査風景　（南から）
調査風景　（北から）
調査風景
図版83　第２次調査　全景（北から）
ＳＫ１（西から）
ＳＫ１（西から）
図版84　第３次調査　Ｂ１区～Ｂ９区（東上から）
Ｂ６区～Ｂ11区（東上から）
図版85　第３次調査　Ｂ区　全景（真上から）
図版86　第３次調査　Ｂ１区～Ｂ７区（真上から）
図版87　第３次調査　Ａ区　全景（北から）
全景（南から）
近景（東から）
図版88　第３次調査　Ｂ１区～Ｂ10区（北から）
Ｂ１区～Ｂ３区（北から）
図版89　第３次調査　堀１・ＳＤ１・４（東から）
ＳＤ１・４断面（東から）
堀１断面（東から）
図版90　第３次調査　Ｂ１区～Ｂ６区（南から）
Ｂ４区～Ｂ６区（南から）
図版91　第３次調査　ＳＨ301・302・ＳＢ201・202・
ＳＫ46（北から）
ＳＫ46（北から）
図版92　第３次調査　ＳＢ202 Ｐ201(北から)
ＳＢ202 Ｐ202（北から）
ＳＢ202 Ｐ203（北から）
ＳＢ202 Ｐ204（北から）
ＳＢ202 Ｐ206（南から）
ＳＢ202 Ｐ207（南から）
図版93　第３次調査　Ｂ９区～Ｂ17区（北から）
Ｂ15区～Ｂ17区（南から）
ＳＤ21（北から）
図版94　第４次調査　Ａ区南半（北から）
Ｂ区（南から）
図版95　第４次調査　ＳＢ202（南東から）
ＳＢ201（南東から）
ＳＢ203（南から）
図版96　現場周辺の風景
南から
南から
北から
西から
遺跡東の祠
南から

図版97　第1次調査　作業風景
北から
西から
重機掘削
西から
北から
現地説明会
図版98　遺物古墳1
図版99　遺物古墳2
図版100 遺物古墳3
図版101 遺物古墳4
図版102 遺物古墳5
図版103 遺物古墳6
図版104 遺物古墳7
図版105 遺物古墳8
図版106 遺物古墳9
図版107 遺物古墳10
図版108 遺物古代1
図版109 遺物古代2
図版110 遺物中世1
図版111 遺物中世2
図版112 遺物中世3
図版113 遺物中世4
図版114 遺物中世5
図版115 遺物中世6
図版116 遺物中世7
図版117 遺物中世8
図版118 遺物中世9
図版119 遺物中世10
図版120 遺物中世11
図版121 遺物中世12
図版122 遺物中世13
図版123 遺物中世14
図版124 遺物中世15
図版125 遺物中世16
図版126 遺物中世17
図版127 遺物中世18
図版128 遺物中世19
図版129 遺物中世20
図版130 遺物中世21
図版131 遺物中世22
図版132 遺物中世23
図版133 遺物中世24　陶磁器
図版134 遺物中世25　鉄製品

遺跡の位置

第１章　調査の経過

第１節　調査経緯と調査地点

１．調査の経緯

神戸市北区から三田市にかけては昭和50年頃から始まった大規模都市開発（北摂ニュータウン開発などの一連の開発）によって、山林を中心に都市化が進み付近の景観は一変した。遺跡周辺でも西側の山をかすめるように、中国縦貫自動車道が昭和40年代に建設され、さらに平成10年には山陽自動車道が開通している。この開通にともなって中国縦貫自動車道とのジャンクションが遺跡南西約500ｍに建設され、遺跡背後の山地の景観も大きく変貌した。このように目まぐるしく変化する周辺環境の中で、段丘上の平坦地であった遺跡周辺は、宅地もなく一帯が水田として利用されていたため、開発には好適な場所となったようである。

上記の都市開発の中心である北摂ニュータウン建設では、人口の増加に伴い神戸へのアクセスの拡充が求められ、ニュータウンへの公共交通の乗り入れが必要となった。これに伴って、神戸電気鉄道三田線の横山駅付近からニュータウンへ乗り入れる三田線が新設されることとなった。この新線建設によって車両留置場が必要となり、調査地周辺が計画地として選定された。

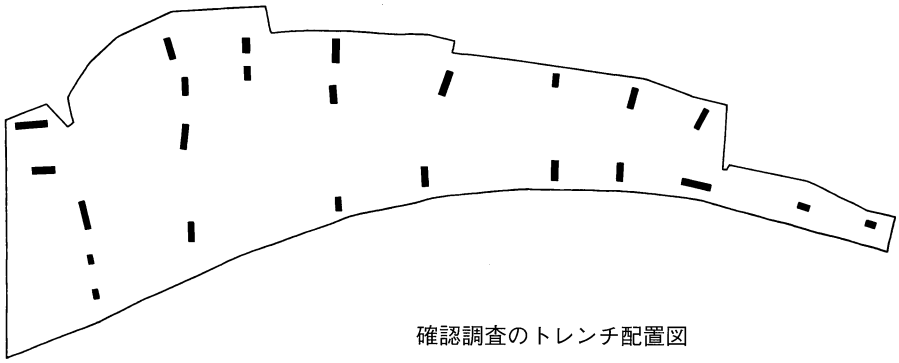
これをうけて、公園都市線（第２期）車両留置施設設置事業の計画に伴い、兵庫県都市住宅部都市建設課より平成５年11月30日付けで計画予定地の調査依頼がなされた。このため同年度に兵庫県埋蔵文化財調査事務所が確認調査に着手し、未周知であった本遺跡の存在が明らかにされ、調査が開始される運びとなった。この確認調査では、調査対象地区の全域から、遺構・遺物が検出され、中世の大規模な集落遺跡の存在が明らかにされた。また、同年度にさらに北側の確認調査を行ったが、遺跡の広がりは認められなかった。

以上の経過をうけて、平成６年度に車両留置施設敷地を対象とする本発掘調査（当時全面調査）が実施され、大きな成果がえられることとなった。しかし、事業が車両留置施設に引き込む線路の建設も含めて行わなければならないことから、工事の進捗に合わせて、本発掘調査は平成７年以降も断続的に行われ、平成10年度に一連の調査を終了している。

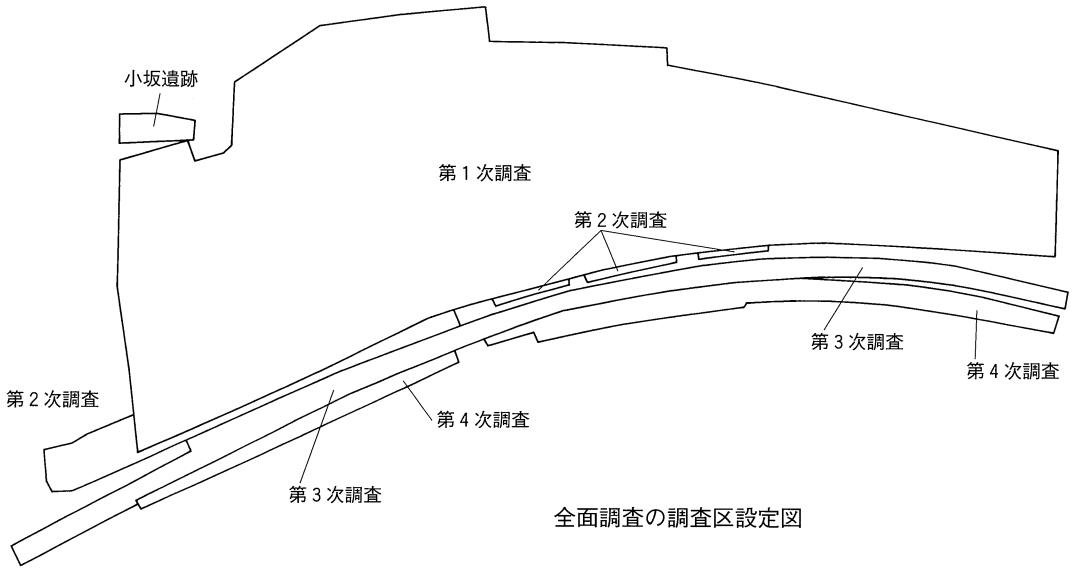
なお、本報告では平成６年７月５日～７年３月17日の期間行われた調査を第１次調査、平成６年12月19日～７年１月13日の期間行われた調査を第２次調査、平成９年10月31日～10年２月７日の期間行われた調査を第３次調査、平成10年11月２日～10年11月26日の期間行われた調査を第４次調査とした。その他、平成８年10月３日と11月５日には隣接する小坂遺跡の調査を実施している。それぞれの調査の地点は第１図下段のとおりである。また、確認調査は平成５年に実施した調査のトレンチの配置箇所が第２図のとおりである。

２．各調査の概要

第１次調査は車両留置施設のための調査で、調査地区の大半を占める。この調査によって、古墳時代から古代にかけての大規模な集落、13世紀から15世紀前半にかけてのやはり大規模な集落と、この集落の中核部分に居館が存在することを明らかにした。また、この居館には中世前半としては類例の少ない園池が存在することも明らかにされ注目された。なお、第１次調査期間中、平成７年１月17日阪神・淡



確認調査のトレンチ配置図



全面調査の調査区設定図

第１図　調査区設定図

路大震災が勃発し、調査は２週間中断された。第２次調査は第１次調査着手段階で調査を実施できなかった箇所の調査をおこなった。具体的には第１次調査と線路部分の境界にあたる箇所、南側の電車関連の構造物が存在した地区である。第１次調査と線路の間については工程の問題から第２次調査としてまとめて実施した。南側の電車関連施設については、１次調査着手段階では撤去が行われていなかったが、調査途中で撤去がおこなわれたため調査を実施することとなった。

なお、車両留置施設の工事に関連して、隣接する線路部分の改良工事も必要とされた。この工事に関連しては、一旦線路を東に移設して仮線路を敷設してから、線路部分の工事を行う必要が生じた。このため線路改良工事では仮線路部分をまず調査し、線路移設後、本線路部分の調査をおこなうこととなった。この仮線路部分の調査を第３次調査、本線路部分の調査を第４次調査として実施した。

このほか、車両留置場の建設に伴い、平成８年度に一部計画の変更が生じたため、神戸電鉄株式会社より調査の依頼がなされた。計画変更は開発範囲の拡張をともなっていたが、この部分は二郎宮ノ前遺跡に隣接する小坂遺跡の範囲であったため、あらためて同年度に確認調査をおこない、遺構を検出したので全面調査をおこなっている。

なお、隣接する小坂遺跡については　平成７年度に神戸市教育委員会が確認調査を行った。この結果、尾根上に古墳群が、西側斜面を中心に中世墳墓群がそれぞれ発見された。このため、古墳群を大橋山古墳群、中世墳墓群を坂本山墳墓群と呼称している。

３．現場調査の体制

各調査は下記の担当者が記載内容のとおり調査をおこなった。なお、第１次調査では多くの調査補助員の協力を得た。

西本寿子・廣崎秀行・橋本正人・高橋潤子・松井里美・武田みさ・武田和美・多賀明美・山門美保・寺内裕香・苅谷しのぶ・赤城伸子

調査概要と体制

No.		調査番号	担当者	調査期間	面積
二郎宮ノ前遺跡					
	確認	930185	山田清朝・所崎明雄	H6年1.10～1.13	262㎡
	確認	940213	西口圭介・杉原正行	H6年6.15	17㎡
1	全面	940069	渡辺　昇・山上雅弘・所崎明雄	H6年 7.5 ～H7. 3.17	12,317㎡
2	全面	940297	渡辺　昇・山上雅弘・所崎明雄	H6年12.19～H7. 1.13	940㎡
3	全面	970374	篠宮　正・野村展右	H9年10.31～H10. 2.7	1,588㎡
4	全面	980167	山本　誠・池田征弘	H10年11.2 ～H10.11.26	548㎡
小坂遺跡					
	確認	960295	山上雅弘	H8年10.3	5㎡
	全面	960306	鈴木敬二	H8年11.5	50㎡

No.をもって調査次数とする。ただし、開発事業名は平成８年度以降は道場南口車両留置施設建設事業で依頼を受ける。940213の調査はNo.１が２×４ｍ、８㎡。No.２が３×３ｍ、９㎡。この確認調査では、竹林の削平と、池の築堤などによって調査範囲は上面を削平され、遺構は残存しない。調査箇所は丘陵末端の斜面地に位置する。

第２節　整理作業の経過

１．整理作業の経過

本遺跡の整理作業は平成11・12年度の２か年にわたり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。なお、第１・２次調査の土器の水洗いとネーミングは平成６年の現場事務所にて行った。第３・４次調査については平成11年度に土器の水洗いからスタートしている。整理作業は①水洗い→②ネーミング→③接合・補強→④実測・拓本→⑤復元→⑥写真撮影の順に実施した。その上で遺物実測図とともに⑦トレース→⑧レイアウトを行い原稿執筆→編集の順に作業をすすめ報告書を刊行した。

なお、金属器については劣化を防ぎ、元の形状を復元するため保存処理をおこなった。保存処理作業は①形状観察・写真撮影→②脱塩処理→③Ｘ線透過写真撮影→④錆削除→⑤真空樹脂含浸→⑥乾燥→⑧密封乾燥保管の工程で行った。

整理作業の工程は平成11年度に復元までを実施し、残りの作業を平成12年度に実施した。

２．出土品整理

平成11年度

実測――――加藤裕美・三次綾子

保存処理―――栗山美奈・和田寿佐子・前川悦子・藤川紀子

平成12年度

実測――――宮田麻子・板東明子・石井三保

第２図　作業風景

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

二郎宮ノ前遺跡の立地する旧摂津国有馬郡は一帯が六甲山北麓に広がる丘陵地帯である。郡域の中央には篠山盆地に源を発する武庫川が貫流する。この川には郡域内の大半の支流が合流して南に流れ下り、六甲連山の東裾をかすめながらやがて武庫平野に達している。武庫川に合流する支流は、多くが開析の進んだ奥行きの深い谷を流れており、本支流を合わせると流域はほぼ有馬郡全域に及ぶ。

武庫川流域の平地には、大きな支流との合流点などでまとまった面積を有した場所がいくつか認められる。そのうち最も大規模なものが三田と道場～塩田付近に形成される地点である。この２地点は盆地状地形を呈し、丘陵を挟んで近接する。また、地理的に両者は郡域の中央に位置し、交通上でも摂津から丹波や播磨への分岐点にあたるため重要な位置を占めている。このため、歴史的にも有馬郡の中心域を形成し続けてきた。

道場～塩田付近に形成された盆地地形は南西端の二郎宮ノ前遺跡付近で有野川が北流して流れ、遺跡の北で西から流れてくる八多川と合流し、道場の集落あたりでさらに有馬川、北で長尾川に合流している。そして、有馬川は東の塩田方向を流れ、最終的には武庫川に合流している。これらの支流合流点の東側を中心に盆地状地形が広がっている。この盆地周囲は東側の塩田・中央の道場、北側で長尾川に面した宅原、遺跡北側の日下部などの地区で形成される。

二郎宮ノ前遺跡はこの盆地地形の南西端に位置する。現在の所在は二郎にあたるが、遺跡北側は日下部地内、さらに遺跡西側の小坂遺跡は八多町との地境に接している。現在の二郎集落の中心は遺跡南側の蛇行する有野川に隣接した場所に立地している。

二郎宮ノ前遺跡の東側約250ｍには有野川が流れるが、この間は氾濫原が広がり、遺跡との間は高さ３ｍ前後の段丘崖が隔絶する。一方、西側は南北方向に丘陵が延びて、背後を覆うように立地している。遺跡範囲はこの丘陵裾から有野川に向かって広がる標高175～177ｍ前後の段丘面一帯に所在する。遺跡からの眺望は東側に開け、北東には円錐形の鏑射山、南側には六甲連山が見渡せる。

遺跡は現在の行政区画では神戸市北区に所在する。眺望は東側に開け、道場の集落、遠方の鏑射山などを望むことが出来る。遺跡を中心にみると北側の三田市との市境までは北に約2.3㎞、西側の西宮市との市境までは約1.1㎞である。また、北東約１㎞には古くからの宿場町として知られる道場がある。

第２節　歴史的環境

二郎宮ノ前遺跡周辺では古墳時代後期～古代と中世（13～14世紀）の２時期の遺構が見つかった。ここではこの２つの時代を中心に周辺の歴史的環境について触れる。

縄文・弥生時代以前

遺跡の周辺では縄文時代に関する成果はあまり多くない。わずかな事例として紹介すれば以下の３遺跡がある。宅原遺跡・塩田遺跡からは後期ないし晩期と考えられる遺物が出土した。また、二郎宮ノ前遺跡に隣接する小坂遺跡で創期～前期の神宮寺式～高山寺式の押型文土器・石鏃が出土したことが知ら

れているにすぎない。

弥生時代

弥生時代になると宅原遺跡や塩田遺跡などを中心に成果がやや増加する。宅原遺跡では後期の竪穴住居や土坑が検出された。塩田遺跡は有馬郡の中期から後期の拠点的な集落として知られる。特にこの遺跡から出土する石器には通称、塩田石を用いた石包丁の製品・未製品がまとまって出土していることから、石包丁を供給した集落ではないかといわれている。また、日下部遺跡や八多中遺跡でも弥生時代後期の集落が明らかになっている。

古墳時代

古墳時代では、弥生時代末から古墳時代初頭の定塚古墳、4世紀末から5世紀初頭の北神№9地点遺跡1号墳などが知られる。古墳の数が増加する後期になると、6世紀後半に築造されたオキダ古墳は横穴式石室構造の主体部を有し、馬具を副葬することで知られている。また、尼崎学園内4号墳では石棚を持つ横穴式石室を有している。さらに、遺跡に隣接する大橋山古墳群では尾根頂上部に並んで7基の古墳が立地し、麓の二郎宮ノ前遺跡の古墳時代集落との関連が指摘されている。一方、集落遺跡はまだ検出数は少ないものの日下部遺跡・八多中遺跡でも小規模ではあるが集落が見つかっている。さらに八多中遺跡では7世紀代の灌漑水路が検出された。この他では長尾川流域の宅原遺跡などが知られる。

古代

奈良時代～平安時代中期頃に入ると周辺の遺跡の数は増加する。主な集落としては宅原遺跡・八多中遺跡・二郎宮ノ前遺跡などがある。特に、宅原遺跡では「評」の墨書のある土器が出土し、有馬郡衙の存在が推測されている。

八多川流域でも平安時代になると集落が検出されるようになるが、このうち下小名田遺跡では掘立柱建物が検出され、石帯や銅印が出土している。また、八多中遺跡では9世紀の掘立柱建物が検出されたほか緑釉が出土している。

平安時代後期～鎌倉時代

前代に引き続いて遺跡の数は多い。中世の集落は八多川流域では上小名田遺跡・下小名田遺跡、八多中遺跡・清水廻り遺跡などが知られる。また生産遺跡では12世紀後半から13世紀前半の須恵器椀を中心に焼成した小名田窯跡が清水廻り遺跡に隣接して立地する。

有野川と八多川が合流する地点付近の日下部遺跡・八多中遺跡では13世紀前半頃を中心とする集落が検出された。特に八多中遺跡では段丘上に早くから集落が立地している事が知られ、狭い谷中での集落の展開の状況を把握できる事例となっている。八多川上流の上小名田遺跡では12世紀後半に200㎡を越える大型建物が建てられ、富裕層の存在が明らかとなった。また、長尾川流域では宅原遺跡が知られ、16世紀代の小規模な園池が検出された。この他、有馬川の東側では塩田遺跡がある。この遺跡では塩田荘の荘官の居館と推定される掘立柱建物や墓が検出された。三田地域でも、対中遺跡や下所遺跡・川除・藤ノ木遺跡などをはじめ多くの調査成果が蓄積され、集落動向を把握できる段階になっている。

さらに、中世では室町時代後半の城館に関しても成果があがっている。道場の北側に立地する道場城では、主郭でトレンチ調査が行われた。この調査では、土塁の構築状況が明らかにされ、16世紀後半代の陶磁器が出土した。また、茶臼山城では山城の確認調査が行われ、郭内から掘立柱建物が検出された。赤松館の調査では多数の遺物が出土し、すでに消滅した館の存在が明らかにされている。

第３図　周辺の遺跡

〔参考文献〕

神戸市埋蔵文化財分布図　1996年　神戸市教育委員会

下小名田遺跡－（その４）－1993年　淡神文化財協会

宅原遺跡　宮之元地区の調査　1986年　妙見山麓遺跡調査会

神戸市教育委員会『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』1997年

神戸市教育委員会『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』1998年

『兵庫県史　考古資料編』兵庫県史編纂室　兵庫県1992年

『新修神戸市史歴史編Ⅰ』新修神戸市史編集委員会　神戸市　1989年

神戸女子大学考古学研究室『上小名田遺跡の研究』上小名田遺跡調査委員会　1994年

兵庫県教育委員会『八多中遺跡　清水廻り遺跡』　1998年

兵庫県教育委員会『小名田窯跡』　1997年

遺跡分布図一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1.	二郎宮ノ前	31.	東二郎	61.	附物
2.	小坂	32.	二郎南古墳群	62.	法仏坊廃寺
3.	小坂砦	33.	二郎南古墳群	63.	鹿堀
4.	八多中	34.	平田	64.	吉尾
5.	日下部	35.	馬場下群集墳	65.	吉尾
6.	北神N．T．No.17	36.	稲荷神社裏古墳群第4号墳	66.	吉尾城
7.	北神N．T．No.16	37.	平田古墳群	67.	上小名田
8.	常楽寺石造品群	38.	稲荷神社裏古墳群	68.	散布地
9.	北神N．T．No.15	39.	六郷城	69.	下小名田
10.	散布地	40.	稲荷神社裏古墳群	70.	豊浦古墳群
11.	北神N．T．No.48	41.	稲荷神社裏古墳群	71.	竜ヶ坪
12.	北神N．T．No.47	42.	稲荷神社裏古墳群	72.	上津
13.	北神N．T．No.46	43.	稲荷神社裏古墳群第1号墳	73.	上上津北古墳群
14.	北神N．T．No.45	44.	ヨタノ谷古墳群	74.	茶臼山城址
15.	北神N．T．No.35	45.	平田山上	75.	宅原遺跡群
16.	北神N．T．No.10	46.	山口町No.4	76.	雲禅寺廃寺
17.	北神N．T．No.9	47.	山口町No.10	77.	普門邸普門墓地石造品群
18.	塩田	48.	山口町No.9	78.	散布地
19.	東山中	49.	山口町No.5	79.	散布地
20.	鯉口古墳群	50.	山口町No.6	80.	宅原城
21.	鯉口古墳群	51.	山口町No.7	81.	散布地
22.	鯉口古墳群	52.	山口町No.11	82.	定塚古墳群
23.	鯉口古墳群	53.	山口町No.3	83.	天皇山古墳群
24.	日下部北	54.	山口町No.2	84.	鉢屋群集墳
25.	オキダ	55.	丸山城	85.	八景中学南古墳群
26.	二郎	56.	山口町No.12	86.	八景中学南古墳群
27.	散布地	57.	山口町No.1	87.	松原城
28.	二郎砦	58.	岡場	88.	八景中学南古墳群
29.	丸沢	59.	結場遺構群	89.	立石城
30.	下二郎	60.	下又垣廃寺		

第３章　遺跡の概要

１．遺跡の立地

二郎宮ノ前遺跡は有野川西岸の段丘上に立地する。遺跡の周囲は標高170～180ｍを測り、遺跡の範囲は南北300ｍ、東西90～120ｍほどの段丘上の平坦地全体に及んでいる。今回調査を行ったのはこのうちの西側の約60％である。調査は二郎宮ノ前遺跡が４次にわたり、小坂遺跡についても小規模であるが実施した。第１次調査は遺跡の立地する段丘面の西半分にあたり、第２次調査が南端から第４次調査との間。第３・４次調査は遺跡の中央をトレンチ状に縦断する形で実施した。小坂遺跡は第１次調査の南西側に隣接した場所を調査した。

遺跡周囲の地形は、西背後が南北に伸びる丘陵地形、東側が有野川に面する氾濫原となる。東側の平地は標高170ｍ前後で、遺跡の立地する段丘地形とは高さ２～３ｍの段丘崖で隔絶される。また、西側の丘陵は北側に下りながら伸びるが、遺跡の北側で埋没する。

遺跡内は南から北に緩やかに傾斜しており、中世の居館が検出された周辺がもっとも低くなる。また、第４図の地形図のとおり西側丘陵の裾部には浅い谷状地形が遺跡南端まで続き、北側へむけて認められる。この谷は遺跡東北隅まで続くが、この末端近くに池１が立地している。この地形から得られる湧水は各時代にわたって利用されたようで、各時期の遺構が集中している。そして、居館の周辺は高低差の少ない平地をもっとも広く確保でき、湧水の流れを集められる点で立地的には良好な場所である。

２．層序

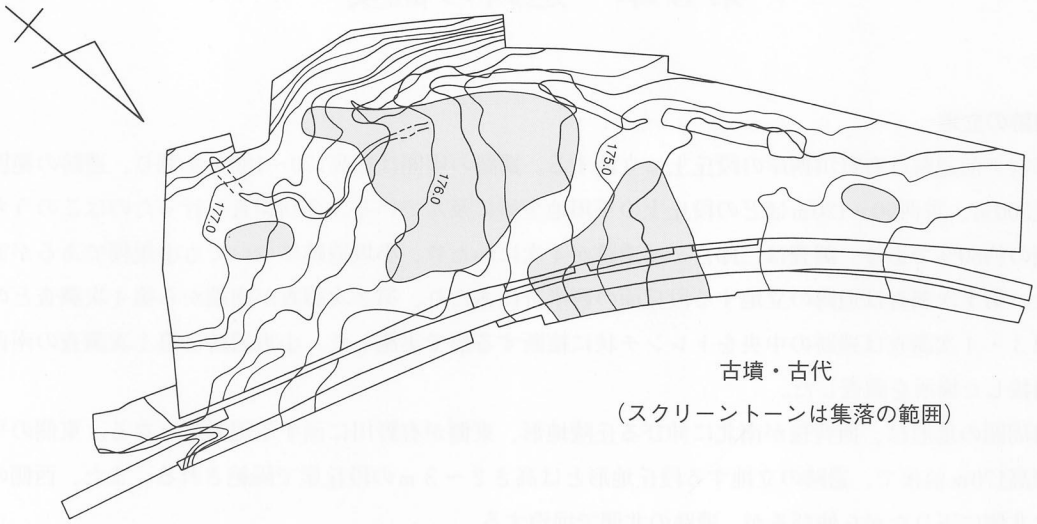
調査区の土層堆積は、大半の部分が開田による削平が著しく、耕作土・床土直下が遺構面であった。ただし、調査区中程、中世Ⅱ区とⅢ区の境周辺からＳＢ28・29の範囲には厚さ10～30㎝前後の灰色シルトの堆積が認められ、この下層に13世紀代以前の遺構が検出された。調査では遺構検出を１面でおこなったが、この範囲では灰色シルトの上層から13世紀後半以降の遺構が切り込んでおり、明らかに２面が存在した。中世遺構のうち、灰色シルトの埋土の遺構は14世紀前後以降と判断して報告した。

３．調査の概要

調査によって、古墳時代～古代、および平安時代末期～中世にかけての集落が検出された。このほか一部ではあるが、弥生時代の土器・石器も出土している。

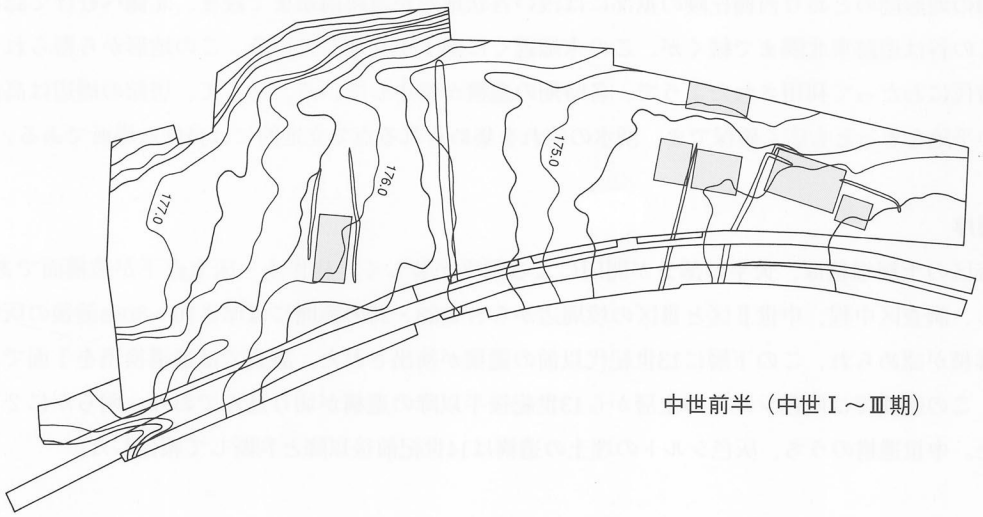
古墳時代から古代にかけての遺構は竪穴住居と掘立柱建物があるが、連続した集落のなかで竪穴住居と掘立柱建物が共存する時期があって、掘立柱建物のみが建つ時期へと移行したと考えられる。しかし、出土遺物の残りが良好でないことと、遺物量が必ずしも多くないことから遺構単位に明確に時期を分析する事ができなかった。このため本報告では、遺構を古墳時代～古代として一括で報告した。

平安時代末期～中世の遺構群は掘立柱建物が多数検出された。建物には大型のものが含まれ、区画溝や堀、さらに園池の存在から、いくつかの屋敷地と居館などで形成されている事が明らかである。特に、居館は堀１で囲まれた内部区画と堀２で区画する外部区画に大きく分かれ、そのそれぞれの内容が明らかになった点で注目される。

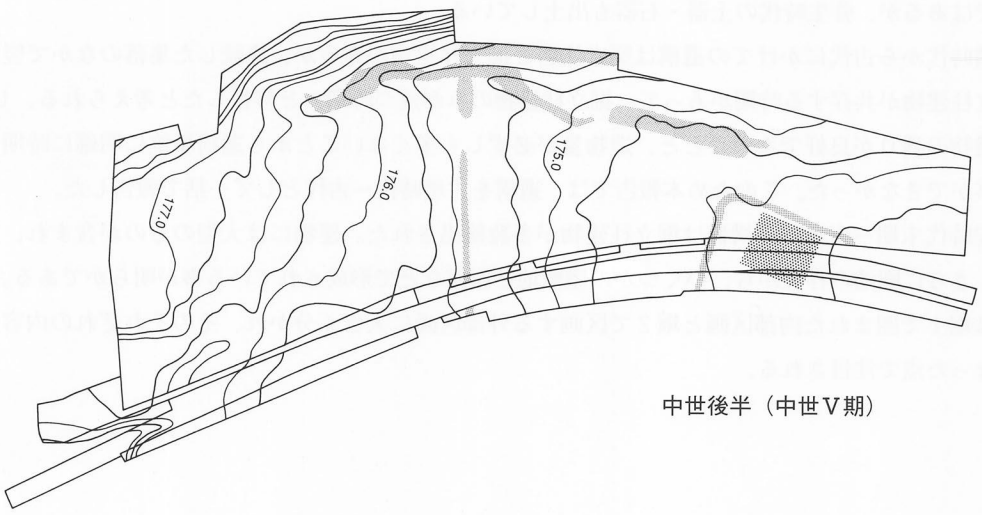


古墳・古代

（スクリーントーンは集落の範囲）



中世前半（中世Ⅰ～Ⅲ期）



中世後半（中世Ⅴ期）

第4図　各時期の微地形

第４章　古墳・古代の遺構と遺物

第１節　第１・２次調査の遺構

古墳時代後期から古代にかけて竪穴住居や掘立柱建物が多数検出された。検出された竪穴住居は第１次調査で11棟、掘立柱建物は46棟である。検出範囲はおおむね全域であるが調査区中程に特に集中する傾向がある。本章では竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝の順に報告した。調査はⅠ～Ⅲにわけておこなったが、本章の記述は調査区を一括でおこなった。

１．竪穴住居

第１次調査では竪穴住居は合計11棟検出された。第３・４次調査でも１棟が検出されているので二郎宮ノ前遺跡でみつかった竪穴住居は合計12棟となる。住居は調査区の中央付近でみつかったものが多く、その検出範囲は古代の掘立柱建物に重なっており、本遺跡では明らかに竪穴住居から掘立柱建物へ断続することなく変遷したと考えられる。

ＳＨ１（図版13）

調査区の南側で検出された竪穴住居であるが、床面のみが遺存していた住居である。平面はほぼ方形を呈し、南西辺に竈をもつ。規模は東西6.4ｍ、南北5.8ｍを測る。内部の柱構造は４本柱で周囲に周壁溝をもつ。柱間は3.1～3.65ｍを測るが、南北がやや長くなる。

ＳＨ２・３（図版14）

２棟が並んで検出された住居である。いずれも方形であるが、削平が著しいため平面プランの詳細は不明である。図示したものは壁の立ち上がりを断続的に確認したので提示したが、ＳＨ２の東面・ＳＨ３の東西面についてはさらに広がると思われる。また、ＳＨ２の中央部は近世の溝が切り状況を悪くしている。柱構造はＳＨ２がかろうじて３基が検出されたことからすると、４本柱構造ではなかったかと推測される。

ＳＨ４（図版15）

ＳＢ74に切られる遺構で、東西4.8ｍ、南北4.5ｍのほぼ方形を呈する。床面上に炭化した垂木が多数検出され、焼土が残存することから焼失住居と考えられる。住居の規模は東西4.8ｍ、南北4.5ｍを測る。北辺に接する周囲には焼土面が認められたが、これは作り付けの竈が存在した痕跡と思われる。周囲には周壁溝が３方に巡り排水溝へと続いている。これは住居下層に埋没流路が存在するための排水を特に意識したものと思われる。この他、住居の北東隅に長頸壺を埋めた土坑が検出されたが、状況から住居に関連する遺構と判断した。なお、住居にともなう明確な柱穴は検出されない。

ＳＨ５（図版16）

ＳＢ80・86に切られる住居で東西5.9ｍ、南北5.0ｍの長方形を呈する。全体に削平が著しく、壁は検出面から10㎝前後が残っているにすぎない。

北辺の中央やや東寄りに作り付けの竈が敷設される。一部途切れるが周囲には幅20㎝、深さ15㎝前後の周壁溝が残る。住居にともなう明確な柱穴は検出されない。

ＳＨ６（図版16）

ＳＤ93に重なって検出された住居である。上部の削平が著しいためかろうじて床面のみが残されていた。また、中世の建物ＳＢ78に切られる。東西に長い長方形のプランで西辺のみ周壁溝が検出できた。

ＳＨ７～９（図版17）

いずれも方形ないし長方形の住居で、３棟が重なって検出された。また、竪穴住居が建てられた後にさらにＳＢ90・91・106が重なり、中世段階ではＳＢ35が上面に建てられる。この数次に渡る重複のために詳細の判然としない部分が多い。３棟は重なっているが、建てられた順は切り合いからＳＨ９→８→７である。

それぞれの規模はＳＨ７が南北6.1ｍ、東西5.5ｍ、ＳＨ８が南北4.2ｍ、東西6.3ｍ、ＳＨ９が南北6.6ｍ、東西7.0ｍである。ＳＨ８は平面プランが台形となるが、切り合いによる攪乱が著しく本来のプランは判然としない。これらの住居の壁は0.25～0.3ｍ程度が遺存していた。このほか、ＳＨ７の西壁周辺には焼土痕跡が認められた、これはＳＨ８に伴う竈痕跡の可能性がある。

ＳＨ10・11（図版18）

いずれも床面がかろうじて検出できた竪穴住居である。ＳＨ10は周囲に周壁溝をもつ平面長方形の住居である。規模は東西5.2ｍ、南北6.0ｍ以上を測る。ＳＨ11は東西5.0ｍ、南北4.5ｍ以上の規模で方形プランとなる。ただし、両者とも削平が著しく、北側部分が消失している。

２．掘立柱建物

掘立柱建物は合計46棟が検出された。

ＳＢ８（図版19）

調査区の北端、中世のＳＢ２～５の下層で検出された建物である。規模は２間×５間の側柱構造で、方位は南北に棟の軸を持つ。規模は梁行13ｍ、桁行５ｍ、面積65㎡で、柱間は梁行2.3～2.6ｍ、桁行2.3～2.8ｍ前後である。柱間にはやや長短が認められ、建物の平面プランも西に傾き台形に近い形状となる。しかし、柱通りは良好で、柱穴の直径は0.5～1ｍ前後と大型のものである。建物規模なども考え合わせると集落のなかでも重要な建物と推測される。

ＳＢ41・43・44（図版20）

この３棟は重なって検出された。このうちＳＢ43・44は上面の削平が著しく、詳細な規模やプランが不明である。しかし、周辺の柱穴の検出状況からＳＢ41周辺には何時期かの建物が重なって建てられたことが確実であるため、あえて復元案として提示した。

ＳＢ41は、第２次調査区に一部またがって検出された建物である。大型の側柱建物で、棟の軸を南北方向にとる。規模は３間×５間、梁行５ｍ、桁行９ｍ、面積45㎡を測る。柱間は梁行きで1.6～1.8ｍ、桁行1.8ｍ前後となり、やや梁行が短くなる。東辺の柱穴１基が検出できなかった。柱並びや通りは均等で、平面プランに歪みも少ない。構成する柱穴は平面方形で直径50～70㎝前後、埋土は暗黒色シルトが充填される。ＳＢ43・44は建物の西辺のみが明らかになった。ＳＢ43は西・北辺の柱穴５基が検出された。西辺は長さ8.0ｍである。ＳＢ44も西辺と北辺の１部が検出された。柱穴は５基が検出され、西辺は長さ3.6ｍである。

ＳＢ56（図版21）

２間×３間の側柱建物である。南北棟で平面プランがやや北側に開き台形状になる建物である。また、

東辺の柱並びが悪く、柱配置も歪になる。規模は梁行３.6～3.9ｍ、桁行4.2～4.7ｍ、面積16.7㎡を測る。柱間は梁行1.7～2.1ｍ、桁行1.2～1.7ｍとやや長短がある。

ＳＢ82（図版21）

２間×３間の側柱建物である。東西棟であるがＳＢ56同様、柱並びが悪く、歪な柱配置になる建物である。規模は梁行の南辺が３ｍ、北辺が3.5ｍ、桁行が5.0ｍ、面積15.6ｍを測る。柱間は梁行1.6～1.8ｍ、桁行1.1～1.9ｍとやや長短がある。

ＳＢ61（図版21）

３間×３間の側柱建物である。南北4.6～4.7ｍ、東西4.6～4.8ｍとほぼ方形を呈する建物である。東辺は第２次調査区へ伸びている。柱間は1.5～1.7ｍ前後で、各辺とも共通している。

ＳＢ15（図版23）

２間×２間の総柱建物で、規模は各辺3.5ｍ前後、面積11.5㎡と小規模な建物である。
柱間は各辺共通で1.5～1.8ｍである。柱痕跡が観察できる柱穴は１基で、この痕跡の観察を基にすると柱の直径は12㎝前後と推測される。

ＳＢ37・40（図版22）

調査区の東端から第２次調査区にかけて検出された建物である。削平が著しくいずれも残存状況が悪い。ＳＢ37は４間×２間以上、ＳＢ40は３間×３間以上の規模の建物である。棟の軸方向はいずれも不明で、柱間も均等ではない。

ＳＢ38・39（図版22）

ＳＢ37・40と同様に調査区の東端から第２次調査区にかけて検出された建物である。削平が著しく残存状況は悪い。ＳＢ38は３間×２間以上、ＳＢ39は３間×３間以上の規模である。棟の軸方向はいずれも不明で、柱間も均等ではない。建物の中央にＳＫ37がある。

ＳＢ71（図版23）

調査区の西端、堀２の南西隅付近で検出された建物である。南側は堀２で、東側は整地のための削平で大半が失われているが、並びと柱穴の検出状況から古代の建物と判断した。検出できたのは３間×１間で、規模は西辺が６ｍ以上である。出土遺物には古墳時代末の33がある。

ＳＢ67（図版23）

桁行３間×梁行１間の建物である。梁行の間隔がやや広いため、本来は間に柱穴があった可能性がある。梁行3.9ｍ、桁行4.0ｍ、面積15.6㎡とほぼ方形の建物である。柱間は桁行が1.2～1.3ｍとやや短いのが特徴的である。

ＳＢ87（図版23）

３間×１間以上の建物である。北側の大半を堀２や周囲の面下げによって失っている。規模は南辺が3.4ｍを測り、柱間は1.2ｍ前後と狭い。

ＳＢ98・99・100（図版24）

３棟が重なって検出された。ＳＢ98・99は南辺を共有し、ＳＢ98→99の順に建てられた。ＳＢ98は２間×３間の東西棟で、側柱建物となる。規模は１辺3.3ｍ、面積10.8㎡。柱間は梁行1.8ｍ、桁行1.0～1.2ｍである。ＳＢ99は２間×２間の側柱建物である。梁行4.0ｍ、桁行4.7ｍ、面積18.8㎡。柱間は梁行1.5～2.3ｍ、桁行2.3ｍである。ただし、平面が方形を呈するので建物の棟方向は不明。ＳＢ100は２間×３間のやはり側柱建物。規模は梁行8.0ｍ、桁行4.9ｍである。柱間は2.5～2.9ｍ。棟の方向は南北棟で他の２

棟よりやや大型の建物である。

ＳＢ103（図版24）

３区の北端で検出された側柱建物である。規模は２間×３間以上で、梁行3.8ｍ、桁行6.0ｍを測る。柱穴の並びは良好で、柱間は梁行1.9～2.0、桁行2.0ｍを測る。柱痕跡の観察から柱の直径は10～15㎝前後と推定される。柱穴は30～50㎝前後の円形ないし楕円形を呈する。

ＳＢ83・84（図版25）

この２棟の建物はＰ2345が重なるが、検出面の残存状況が悪く両者の切り合いを明確にできなかった。また両者ともＳＫ87によって一部を削平される。

柱構造は側柱建物で、南北4.9ｍ、東西５ｍ、面積24.5㎡を測る。ＳＢ83は3間×３間の平面方形を呈する建物である。

ＳＢ84は３間×４間の南北棟で、柱間は梁行1.9～2.0、桁行2.0ｍを測る。柱痕跡の観察から柱の直径は10～15㎝前後と推定される。柱穴は30～50㎝前後の円形ないし楕円形を呈する。

ＳＢ79（図版25）

３区でＳＢ100と並んで建ち、北端を中世土坑ＳＫ87によって切られる。ＳＢ100とは柱間以外は方向、規模とも共通するため共存していた可能性が大きい。２間×３間の側柱建物で、建物方位は南北に軸を持つ。規模は梁行3.0ｍ、桁行3.5ｍ、面積10.5㎡を測る。柱間は梁行１～1.5ｍ、桁行1.1～1.2ｍである。

ＳＢ96（図版26）

ＳＨ５に西隅が接する建物である。切り合いからＳＨ５→ＳＢ96の順になることがわかっている。建物の規模は２間×３間で梁行4.5ｍ、桁行3.0ｍ、面積13.5㎡の規模を有している。柱間は梁行1.5ｍ、桁行1.2～2.1ｍであるが、桁行の中央の１間が広くなる特徴がある。

ＳＢ97（図版24）

２間×３間以上の側柱建物で、規模は梁行3.0ｍ、桁行3.5ｍ以上、面積10.5㎡である。柱間は梁行1.5ｍ、桁行3.5ｍ以上であるが、桁行の中央の１間が広くなる特徴がある。

ＳＢ86（図版26）

ＳＨ５・ＳＢ80と重なる建物で、切り合いからＳＨ５→ＳＢ86→ＳＢ80の順に建てられたことがわかっている。建物の規模は２間×２間で、各辺3.8ｍ、面積14.4㎡の規模を有している。

ＳＢ75・89（図版26）

２棟が重なって検出された。ＳＢ75は南北２間×東西２間の規模を有する方形建物である。柱間は1.1～1.3ｍ前後と短い。また、北辺を除く柱列各辺の中央が布掘り状になるのも特徴的である。この建物の柱穴は４隅の柱は単独で掘るが、柱通りの間の２基は各辺とも布掘り状に掘削する。柱痕跡の観察から柱の直径は15～20㎝前後と推定される。また、削平のためか梁行の柱穴１基が抜ける。

束柱は検出できなかったが、ＳＢ50のように小型の柱穴で浅いために削平された可能性が大きい。建物の規模は東西3.4ｍ、南北3.5ｍである。

ＳＢ89は南北5.1ｍ、東西4.1ｍで、柱穴は平面方形で、直径40～50㎝前後である。

ＳＢ80（図版26）

東側がＳＨ５・ＳＢ86に重なり、西側がＳＢ75・89に重なる建物である。切り合いは前述ＳＢ86の通りである。規模は２間×３間で、梁行は東辺が4.2ｍ、西辺が3.7ｍ、桁行は7.3ｍを測る。棟は軸を東西方向に持つ。西側の梁行側がやや幅が狭くなる特徴がある。柱間は梁行2.1ｍ、桁行が2.3～2.6ｍである。

SD93（西から）

SD93　①断面1（東から）　②断面2（東から）　③断面3（東から）　④断面4（西から）

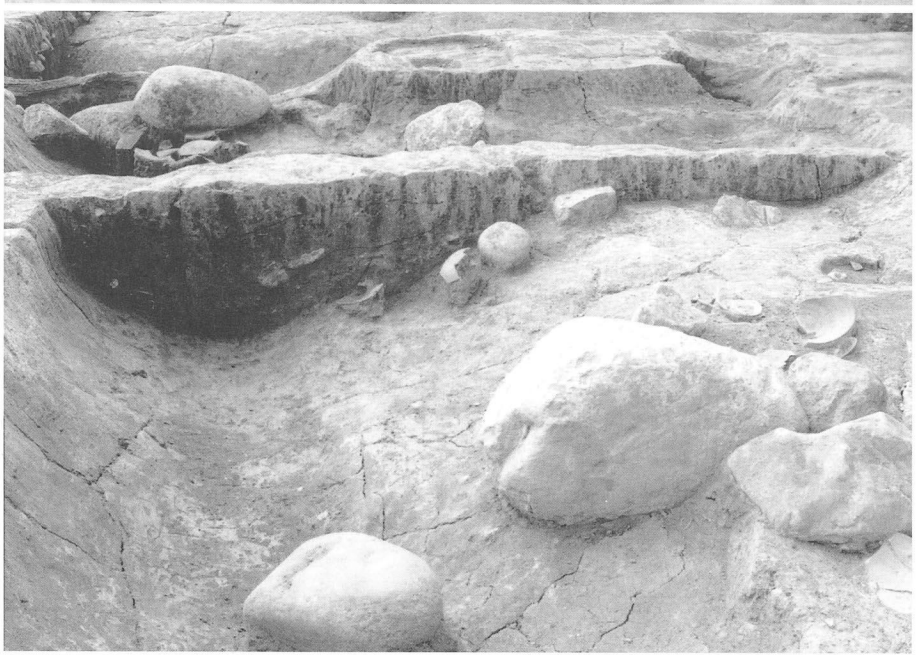
全景（真上から）

SB2～5（南から）

SB2～5（北から）

SD5（東から）

SD1・4（西から）



SD7（北から）

SB2　①P421（西から）　②P255（北から）　③P183（東から）　④P403（南から）

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

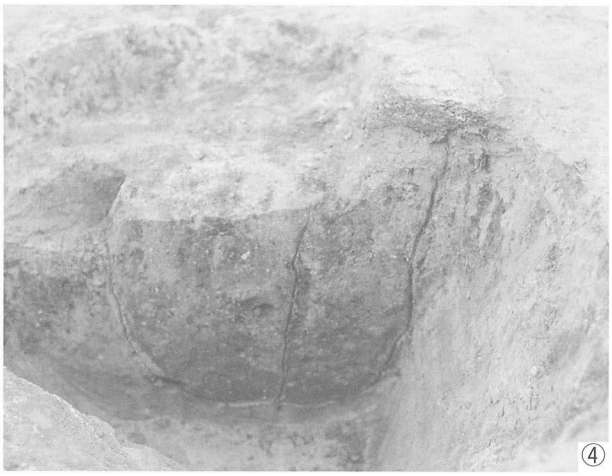
SB2　⑤P274（北から）　⑥P191（北から）　⑦P501（北から）　⑧P299（北から）

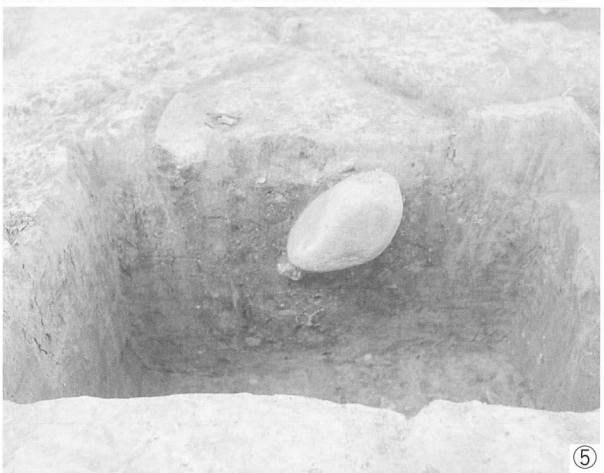
SB3　①P383（西から）　②P257（南から）　③P267（北から）　④P273（北から）

①

②

③


④


⑤

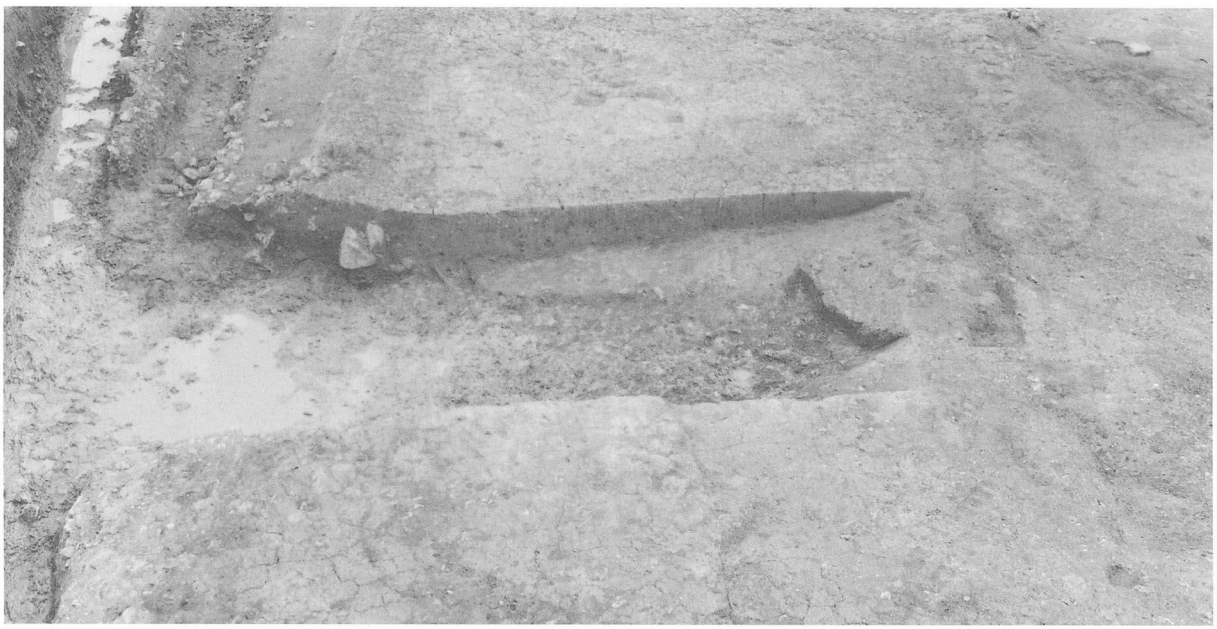
⑥

⑦

⑧

SB3　⑤P195（南から）　⑥P197（北から）　SB4　⑦P308（東から）　⑧P320（南から）

SB1（北から）



SB1盛土（北から）

SB1　①P340（東から）　②P330（南から）

柱痕跡の観察から柱の直径は15～20㎝前後と推定される。

ＳＢ48～50（図版27）

調査区の南西側に３棟が南からＳＢ48・49・50の順に並んで検出された。それぞれの規模はＳＢ48が２間×２間、東西2.9ｍ、南北3.3ｍ、面積9.57㎡を測る。柱間は東西1.4～1.5ｍ、南北1.6～1.7ｍ。ＳＢ49が２間×３間、梁行3.6ｍ、桁行4.3ｍ、面積15.48㎡。柱間は梁行1.4ｍ、桁行1.7～1.8ｍ。ＳＢ50が２間×２間、東西3.6ｍ、南北3.8ｍ、面積13.68㎡。柱間は東西1.8ｍ、南北1.9～2.0ｍである。ＳＢ49は棟の軸方向から南北棟となる。

ＳＢ52～54（図版27・29）

いずれも３間×２間の側柱建物である。ＳＢ53・54は南北棟、ＳＢ52は東西棟である。ＳＢ52とＳＢ54で内部にわずかではあるが焼土痕跡を認めることができた。ＳＢ52・53は柱穴が平面方形で直径50～60㎝、柱間は2.0～2.6ｍで、桁行に比べ、梁行の間隔が広いのが特徴である。ＳＢ52は２間×３間、規模は梁行4.7ｍ、桁行6.9ｍ、面積32.43㎡。ＳＢ53は２間×３間、規模は梁行3.4ｍ、桁行5.0ｍ、面積17㎡である。

ＳＢ54は２間×３間、規模は梁行4.7ｍ、桁行5.7ｍ、面積26.79㎡。柱間は梁行2.2～2.4ｍ、桁行1.8～1.9ｍで、梁行は東に長く、西に短くなる。梁行の中央の１基が検出できなかった。

ＳＢ74（図版27）

ＳＨ５の上に建てられた小型の建物で、規模は２間×２間、東西2.3ｍ、南北2.2ｍ、面積5.06㎡を測る小型の総柱建物である。

ＳＢ33（図版28）

ＳＤ92に接して検出された小型の建物である。規模は２間×２間、東西3.6ｍ、南北3.3ｍ、面積11.88㎡を測る。内部に束柱が検出されたことから総柱建物と評価できる。

ＳＢ33周辺には２間×２間で総柱構造をとる建物が集中する。ＳＢ36・ＳＢ70とも束柱がないが、これは束柱が削平されたために失われたのではないかと思われる。このため、基本的にはこれらの建物は小型の総柱建物と評価しておきたい。

ＳＢ36（図版28）

小型建物である。規模は２間×２間、東西3.1ｍ、南北3.3ｍ、面積10.2㎡を測る。

ＳＢ70（図版28）

面積10.8㎡の小型建物である。規模は２間×２間、各辺も3.3ｍを測る。

ＳＢ76（図版28）

ＳＢ77と切り合って検出された小型建物である。規模は２間×２間、東西2.7ｍ、南北3.3ｍ、面積8.9㎡を測る。

ＳＢ77（図版28）

ＳＢ76と切り合って検出された側柱建物である。ＳＢ76→ＳＢ77の順に建てられた。規模は２間×３間、梁行2.2.ｍ、桁行6.6ｍ、面積14.52㎡を測る。柱間は各寸法ともほぼ2.2ｍである。

ＳＢ58（図版29）

中世の建物であるＳＢ28・29の敷地中央付近に検出された側柱建物で、規模は２間×３間、梁行3.4～3.5ｍ、桁行4.9～5.2ｍ、面積17.5㎡を測る。柱間は梁行1.7ｍ、桁行1.5～2.3ｍを測る。出土遺物には30～32がある。

ＳＢ105（図版29）

中世の建物であるＳＢ28・29に重なって付近に検出された側柱建物で、棟は南北方向に軸を持つ。規模は２間×３間、梁行4.4ｍ、桁行7.3ｍ、面積32.1㎡を測る。埋土の状況から古代の建物と考えた。柱の残存状況は悪く、柱並びも均等ではない。

ＳＢ106・90・91（図版27・30）

ＳＨ８～10に重なって検出された建物で、３棟が重なって検出された。これらの建物は埋土の状況や柱穴の構造から古代の建物と考えた。いずれも柱の残存状況は悪く、柱並びも均等ではない。ＳＢ91は２間×３間、梁行3.7ｍ、桁行5.6ｍ、面積20.7㎡の規模である。柱間は梁行1.1～1.8ｍ、桁行1.7～2.4ｍである。ＳＢ90は２間×３間の東西棟、梁行3.2ｍ、桁行5.3ｍ、面積16.9㎡の規模である。柱間は梁行1.5～1.7ｍ、桁行1.4～２ｍである。ＳＢ74は２間×３間の南北棟、梁行4.0ｍ、桁行6.7ｍ、面積26.8㎡の規模である。柱間は梁行2.0ｍ、桁行2.0～2.8ｍを測る。ＳＢ90からは土師器甕39が出土した。

ＳＢ45・46（図版31）

調査区南端でみつかった建物で、２棟がやや方向をずらして検出できた。ＳＢ45は２間×３間の側柱建物で、南北方向に軸を持つ。規模は梁行４ｍ、桁行6.6ｍ、面積26.4㎡を測る。柱間は梁行1.8～2.1ｍ、桁行2.2ｍで、梁間の中央の柱がやや東にずれる特徴がある。

ＳＢ46は２間×４間の側柱建物で、同じく南北方向に軸を持つ。規模は梁行4.2ｍ、桁行8.4ｍ、面積35.2㎡を測る。柱間は梁行2.1ｍ、桁行1.8～2.7ｍである。この建物には東柱が南側に１基検出されたが、この範囲の桁行は他の部分に比べてやや長くなる。この他、２棟はいずれも柱穴平面は方形を呈している。

３．その他の遺構

土坑

みつかった土坑は円形・方形など様々なものがある。ここでは、遺物が出土したものや、特徴的なものをピックアップした。

ＳＫ１（図版32）

調査区北端、中世Ⅰ区の池１の東で検出された。平面方形で長さ0.95ｍ、幅0.69ｍ、深さ0.24ｍである。土師器甕（砕片のため未実測）などが出土した。

ＳＫ３（図版32）

堀１の東側に検出された土坑で、堀によって切られる。検出範囲での規模は東西１ｍ、南北1.2ｍ、深さ0.3ｍである。

ＳＫ24（図版32）

ＳＤ93によって切られる土坑で、平面方形、東西2.45ｍ、南北2.45ｍ、深さ0.55ｍの規模を測る。壁の立ち上がりは直で底部は水平である。

円形土坑（図版33）

調査区の南西側には、平面が円形で断面が２段掘になる土坑が多数検出された。埋土は多くが灰色砂質土と黄色シルトが混在した締まりの悪い土砂である点も共通している。これらの遺構は近世の埋桶の可能性も残されるが、少量ながら出土した遺物を尊重し、今回は奈良時代前後のものと評価して報告する。

この土坑に分類される遺構にはＳＫ49・51・52・53・54などがある。それぞれの規模は以下のとおりである。ＳＫ49は直径1.3ｍ、深さ0.55ｍ、内径0.7ｍ、深さ0.5ｍ。ＳＫ50は直径1.4ｍ、深さ0.4ｍ、内径は方形で長軸0.7ｍ、短軸0.65ｍ、深さ0.4ｍ。ＳＫ51は直径1.75ｍ、深さ0.6ｍ、内径1.08ｍ、深さ0.6ｍ。ＳＫ52は直径1.6ｍ、深さ0.65ｍ。ＳＫ53は直径1.4ｍ、内径1.1ｍ、深さ0.52ｍ。ＳＫ54は直径1.9ｍ、内径0.98ｍ、深さ0.7ｍである。

ＳＫ68（図版35）

ＳＢ50に重なって検出された。北側ではＳＤ119につながる土坑で、周囲の壁の状況から、もともと自然流路であった部分が埋没したものを人工的に掘削した遺構である。埋土はシルト層と砂質土が混ざり合っている。内部には土器が少量含まれていた。この土坑は集落の生活に関連した機能を果たしたと考えられる。西側の尾根側からと、南側からの流下してくる湧水を集める遺構と考えられる。

その他の土坑（図版33・34）

ＳＫ37は直径1.2ｍ、深さ0.3ｍ。ＳＫ33はＳＢ3の中程に検出された土坑で長さ1.2ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍを測る。ＳＫ45は円形の土坑で直径1.8ｍ、深さ0.8ｍを測る。ＳＫ47は長い楕円形で、長さ0.9ｍ、幅0.58ｍ、深さ0.44ｍを測る。ＳＫ55は直径0.93ｍ、深さ0.1ｍを測る。ＳＫ56は長い楕円形で、長さ1.45ｍ、幅0.73ｍ、深さ0.1ｍを測る。ＳＫ57は長方形で、長さ0.9ｍ、幅0.62ｍ、深さ0.27ｍを測る。ＳＫ58は円形で直径1.1ｍ、深さ0.38ｍを測る。ＳＫ59は直径1.4ｍ、深さ0.75ｍを測る。ＳＫ42は円形で南北にやや長い平面プランを持つ。直径1.35～1.45ｍ、深さ0.64ｍを測る。壁を直に掘削し、内部に礫を投棄していた。ＳＫ88は南北に長い楕円形を呈する。直径1.8ｍ、深さ0.18ｍを測る。

ＳＫ43・58（図版33）

この２つの遺構に関しては個別の詳細図を掲載していない。両者とも人為的な遺構ではなく自然の営為によってできたものと判断したためである。

ＳＫ58は調査区の中程で検出された。窪地状の地形に土砂が堆積した遺構で、中世のＳＤ58下層に位置する。内部からは土器196・226・210・239が出土している。ＳＫ43は南西から流下していた自然流路の痕跡に土砂が堆積したものである。

４．溝

古墳時代の溝にはＳＤ21・30・40・93・95・96・118・119などがある。ＳＤ96を除くと全体に断続的なものが多い。また、ＳＤ118・119は自然流路であるが部分的に人口の手が加えられ、集落と密接に関わった遺構である。但し、集落域の区画溝など、集落の構造に関わるものは全く検出されなかった。

ＳＤ96（図版36）

調査区を横断する溝で、西から東に流れる。西側で緩やかに北に曲がり、ＳＤ118の湧水を取水していたと考えられる。調査区内での検出範囲での長さは40ｍである。規模は幅1.1～1.3ｍ、深さ0.6～1.0ｍでほぼ一定の規模で構築されている。断面は基本的にＶ字で壁を急勾配に掘削する。埋土は大半がシルト質土が堆積し稀に礫などが投棄されていた。

溝は調査区の中程に１か所屈曲部をもつ。これはＳＢ33の立地に制約をうけてのことと考えられるため、ＳＢ33構築後この溝が掘られ、建物とある時期共存していたのではないかと考えられる。

ＳＤ21・30・95・96（図版32）

これらの溝はいずれも検出距離が短く、小規模である。いずれも土器を出土しているため紹介した。ＳＤ21・30は自然の窪地状地形である。ＳＤ95・96は途切れ途切れに南北に検出された一群の溝状地形の一部である。

ＳＤ40（図版32）

ＳＢ106の北側に検出された溝で、断続的であるが長さ10ｍに渡って検出された。幅は1.5～1.8ｍである。

ＳＤ118・119（図版32）

この２本の溝は部分的に人為的な加工の入る箇所があるが、基本的には自然流路である。なお、人工的な加工が顕著な部分はＳＫ68の周辺であるので、この周辺のみＳＫ68として別記した。さらにこの溝は調査区の南西端、ＳＫ43から北に続く自然流路からＳＫ68などをとおって、この溝に流れ、さらに中世の池１・２下方へと流れる埋没流路の一部である。少なくともこの周囲から水が湧くことは、ＳＤ93などの遺構の立地から考えると、古墳時代にはすでに意識されていたのであろう。

第２節　第３・４次調査の遺構

第３・４次調査では古墳時代から近世にかけての遺構を検出した。特に古墳時代から中世にかけての遺構が中心である。第３次調査の調査地点は鉄道の軌道敷であったため、Ａ区からＢ20区にかけては著しく削平を受けていた。特にＢ10区からＢ20区にかけてはほとんど遺構は検出できなかった。

ここでは、古墳時代から古代にかけての主要な遺構について記述し、中世の遺構は第１・２次調査と関連あるため第１節で記述することとする。

１．掘立柱建物

ＳＢ201（図版93）

ＳＢ201は竪穴住居ＳＨ301・ＳＨ302の南側に位置する掘立柱建物である。建物の規模は桁行４間×梁行３間で、桁行8.0ｍ、梁行3.8ｍを測る。柱間寸法は、桁行2.0ｍ、梁行1.1～1.4ｍである。梁行方向は北から25°東に傾いている。柱掘形の形状は円形もしくは隅丸方形で、直径0.5～0.8ｍ、深さ0.3～0.5ｍである。柱痕跡は直径0.2ｍで、柱穴Ｐ103は柱掘形の底より0.1ｍ程度沈んでいる。

遺物は柱穴Ｐ103の掘形から坩堝が出土した。また柱穴Ｐ110から須恵器坏Ｈ蓋が出土した。

ＳＢ202（図版93）

ＳＢ202は掘立柱建物ＳＢ201の北側に位置する掘立柱建物である。竪穴住居ＳＨ301と土坑ＳＫ46を切っている。建物の西側の一部は調査区外にあり調査できていない。建物の規模は桁行５間×梁行４間で、桁行9.5ｍ、梁行6.3ｍを測る。柱間寸法は、桁行1.8～2.1ｍ、梁行1.4～1.6ｍである。梁行方向は北から54°西に傾いている。柱掘形は円形で、直径0.5～0.7ｍ、深さ0.4～0.6ｍで、柱痕跡は直径0.2ｍを測る。柱穴の重複関係から竪穴住居ＳＨ301と土坑ＳＫ46より新しい。

遺物は土師器の小片が出土したのみである。

ＳＢ203（図版94）

ＳＢ203は掘立柱建物ＳＢ201の東に位置する掘立柱建物である。建物の北東のほとんどは調査区外に延びており調査できていない。建物の規模は東西２間以上×南北１間以上で、東西2.8ｍ以上、南北1.4ｍ以上で、柱間寸法は、1.4ｍ程度である。南北方向は北から15°東に傾いている。柱掘形は円形で、直径0.5ｍ程度である。

ＳＢ203に確実に伴う遺物はない。

２．竪穴住居

ＳＨ301（図版94）

ＳＨ301は掘立柱建物ＳＢ201の北に位置する竪穴住居である。東側は調査区外に延びており調査できていない。竪穴住居ＳＨ302および掘立柱建物ＳＢ201に切られている。平面形は南北7.2ｍ、東西は竈を中心に考えると8.2ｍの長方形が考えられる。竈の主軸は北から32°西に傾いている。床面の標高は174.5ｍを測る。壁の高さは北西側で最高0.2ｍである。壁溝は検出できなかった。主柱穴は２本確認した。柱間は4.0ｍで、柱掘形は円形で、直径0.6ｍ前後、深さ0.25～0.3ｍで、柱痕跡は直径0.2ｍを測る。竈は北壁中央に位置していると考えられ、焚口部分の床面は良く焼けている。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋、土師器甕が出土した。

ＳＨ302（図版94）

ＳＨ302は竪穴住居ＳＨ301の南側に重複して位置する竪穴住居である。竪穴住居ＳＨ301を切っている。平面形は南北6.0ｍ、東西は竈を中心に考えると6.8ｍの長方形が考えられる。南側はさらに1.6ｍ程度の広がりがみられるが主柱穴とのバランスが悪い。竈の主軸は北から52°西に傾いている。床面の標高は174.6ｍを測る。壁の高さは北西側で最高0.2ｍである。南側のみ壁溝を検出した。主柱穴は２本確認した。柱間は3.2ｍで、柱掘形は円形で、直径0.4ｍ前後、深さ0.2～0.45ｍで、柱痕跡は直径0.2ｍを測る。竈は北壁中央に位置していると考えられ、竪穴住居ＳＨ301によって削平を受けているため、焚口部分の床面は良く焼けていることが観察できたのみである。

遺物は出土しなかった。

３．土坑

ＳＫ46（図版95）

ＳＫ46は掘立柱建物ＳＢ202の西側に位置し、ＳＢ202の柱穴Ｐ201に切られている土坑である。南西側は調査区外に延びている。平面形は不整方形の可能性が高く、規模は南北2.6ｍ以上、東西1.8ｍ以上、深さ0.2ｍ以上である。埋土はシルト質細砂で、焼土塊や炭が多量に混じっていたが、遺構そのものは火を受けた様子はない。

遺物は大小の焼土塊が多量に出土したが、土器類は出土しなかった。

４．溝

ＳＤ21（図版95）

ＳＤ21は調査区の南端に位置する溝である。段丘下を南から北に向かって流れている。幅3.5ｍ前後を測り、深さ0.5ｍ前後を測る。洪水砂で埋まった後、ほぼ中央部に幅1.3ｍ前後の溝を新たに掘削している。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・壺Ｃ、土師器鉢、弥生土器甕、鞴羽口が出土した。

第３節　古墳時代～飛鳥時代の遺物

１．竪穴住居（図版96）

ＳＨ01（1）

ＳＨ01には須恵器坏Ｈ身1がある。小片で、立ち上がりは短い。

ＳＨ02（2）

ＳＨ02には須恵器坏Ｇ身2がある。底部はヘラキリの後ナデ調整を行っている。

ＳＨ06（3）

ＳＨ06には須恵器壺Ｃ3がある。直立する短い口頸部をもつ。

ＳＨ08（4・5）

ＳＨ08には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｈ身がある。坏Ｈ蓋4は歪みが大きく、天井部はヘラキリ未調整である。口縁部に別個体が融着している。坏Ｈ身5は底部がヘラキリ未調整で、内面は仕上げナデを行っている。立ち上がりは内傾し、受け部とほぼ同じ高さである。

ＳＨ09（6）

ＳＨ09には須恵器坏Ｈ蓋6がある。小振りで天井部はヘラキリ未調整である。緑灰色の自然釉がかかっている。

ＳＨ07（7～9）

ＳＨ07には須恵器坏Ｈ身・坏Ｇ蓋・坏Ｇ身がある。坏Ｈ身7は立ち上がりが屈折せずに立ち上がっている。坏Ｇ蓋8は身受けのかえりが口縁部より下に突出している。天井部はヘラケズリを行い内面は仕上げナデを行っている。つまみはやや扁平であり、天井部は黄灰色の自然釉がかかっている。坏Ｇ身9は底部中央がやや突出しており、底部はヘラキリ未調整である。

ＳＨ07・09（10・11）

ＳＨ07・09には須恵器坏Ｉ・瓶類がある。坏Ｉ10は丸い底部から口縁部は内弯している。底部はヘラキリ未調整で内面は仕上げナデを行っている。瓶類11は底部の一部で底部はヘラキリ未調整で腰部はヘラケズリを行っている。

ＳＨ03（12）

ＳＨ03には須恵器平瓶12がある。平底で丸味をもつ体部に傾斜する口頸部が付く。口縁部は欠けている。体部上半に緑灰色の自然釉がかかっている。

ＳＨ04（13～16）

ＳＨ04には須恵器坏Ｉ・長頸壺、土師器高坏・甕がある。

坏Ｉ13は口縁部が外反し、丸い底部はヘラキリの後ナデ調整を行っている。長頸壺14は脚台をもつ。外傾する口頸部の中央に２条の沈線が巡る。土師器高坏15は脚部は欠損し、浅い皿状の坏部のみが残る。内面に放射状の暗文がある。土師器甕16は口縁部を欠く球形の底部である。被熱により調整は不明である。

ＳＨ10（17～22）

ＳＨ10には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ蓋・坏Ｇ身・高坏、土師器甕がある。

坏Ｈ蓋17は天井部がヘラキリ未調整で緑色の自然釉がかかっている。坏Ｇ蓋19は器高が高く、つまみを欠く。天井部に緑色の自然釉がかかっている。坏Ｇ身20は底部をヘラキリの後ヘラケズリを行ってい

る。高坏18は脚部を欠き、坏部は浅い皿状である。土師器甕21・22は「く」字状に外反する口頸部で、21は体部が張らず、22は体部が大きく張る。

ＳＨ11（23・24）

ＳＨ11には土師器甕23・24がある。23は底部を欠き、24は口縁部を欠く。体部外面は縦方向のハケ調整、口頸部内面は横方向のハケ調整を行っている。いずれも良く火を受けており、23は内面に炭化物の付着があり、24は外面の一部が剥落している。

ＳＨ301（25～29）

ＳＨ301には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｈ身、土師器甕がある。坏Ｈ蓋25～27は26・27は口縁部の破片である。25は天井部をヘラケズリしているが中央部にケズリ残しが存在する。坏Ｈ身28は受け部・立ち上がりとも短い。土師器甕29は体部外面に縦方向のハケ調整、口頸部内面に横方向のハケ調整を行っている。

２．掘立柱建物およびピット（図版97）

ＳＢ58（30～32）

ＳＢ58には須恵器高坏・坏Ｂ蓋がある。高坏30・31は30が脚部を欠き、31が口縁部を欠く。坏Ｂ蓋32は天井部を欠くが、器高は高い。身受けのかえりをもち、天井部には自然釉がかかっている。

ＳＢ71（33）

ＳＢ71には須恵器坏Ｂ蓋33がある。内面に短い身受けのかえりをもつ。天井部はヘラケズリを行っている。

ＳＢ70（34～36）

ＳＢ70には須恵器坏Ｈ蓋・高坏・甕がある。坏Ｈ蓋34は天井部はヘラキリ未調整であるが一部補助ケズリを行っている。高坏35は脚部のみで坏部を欠く。甕36はやや扁平の球形の体部のみで口頸部を欠く。注口はわずかに突出している。底部は回転ヘラケズリの後、下部のみ手持ちヘラケズリを行っている。

ＳＢ91（37）

ＳＢ91には須恵器坏Ａ37がある。底部はヘラキリ未調整である。

ＳＢ90（39）

ＳＢ90には土師器甕39がある。口頸部が「く」字状に外反する大形の甕である。

ＳＢ201（41）

ＳＢ201には須恵器坏Ｈ蓋41がある。天井部はヘラケズリを行っている。口縁部の一部のため高坏の可能性もある。

Ｐ1967（38）

Ｐ1967には須恵器高坏38がある。口縁部と脚端部を欠く。脚の短い高坏である。

Ｐ86（40）

Ｐ86には須恵器坏Ｇ身40がある。底部はヘラケズリを行うが、中央部はケズリ残している。内面は仕上げナデを行っている。

Ｐ68（42）

Ｐ68には須恵器坏Ｈ身42がある。立ち上がりの断面が三角形である。

3．土坑（図版97）

ＳＫ01（43～49）

ＳＫ01には須恵器坏Ｉ・坏Ｇ蓋・坏Ｇ身・高坏・椀、土師器把手がある。

坏Ｉ46は外反する口縁部で底部はヘラキリ未調整である。坏Ｇ蓋43は器高が高く、つまみを欠く。身受けのかえりは短くシャープさがない。天井部に緑灰色の自然釉がかかっている。坏Ｇ身44・45は44が器高が高く底部をヘラキリ後ナデている。45は器高が低く底部をヘラケズリしている。高坏47は脚部を欠き坏部のみである。坏部は器高が高い。椀48は口縁部と底部の間に段をもつ。底部はヘラキリ未調整である。土師器把手49は扁平で荒いハケ調整である。

ＳＫ68（50・51）

ＳＫ68には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ身がある。坏Ｈ蓋50は天井部がヘラキリ未調整である。坏Ｇ身51は口縁部がやや外反し、底部はヘラキリ後ナデている。

ＳＫ33（52）

ＳＫ33には須恵器坏Ｈ身52がある。立ち上がりを屈折させており、受け部に自然釉がかかっている。底部はヘラケズリを行い、内面は仕上げナデを行っている。

ＳＫ47（53～56）

ＳＫ47には須恵器坏Ｉ・坏Ａ・坏Ｂ蓋がある。坏Ｉ53・54はいずれも口縁部が外反し、底部はヘラキリ後ナデを行っている。53は器高が高く、54は器高が低い。坏Ａ55は底部がヘラキリ未調整であり、内面は仕上げナデを行っている。坏Ｂ蓋56は身受けのかえりをもつ。つまみを欠いている。

ＳＫ43（57）

ＳＫ43には須恵器甕57がある。口頸部は外反し口縁端部は肥厚する。体部はタタキの後カキメ調整を行っている。

ＳＫ32（58）

ＳＫ32には須恵器瓶類58がある。やや外傾する口縁部の破片で２条以上の沈線がある。平瓶などの口縁などが考えられる。

4．溝（図版98）

ＳＤ93（59～69）

ＳＤ93には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｈ身・坏Ｇ身・甕・平瓶、土師器把手がある。

坏Ｈ蓋59～61は59・61が天井部をヘラキリ未調整で内面仕上げナデを行っている。60は天井部をヘラケズリしている。坏Ｈ身62は立ち上がりが屈折しており、底部はヘラケズリを行っており、内面は仕上げナデを行っている。坏Ｇ身63・64は形態や法量が非常に良く似ている。口縁部がやや外反し底部はヘラケズリを行っているが、一部にヘラキリの痕跡が残っている。甕65～67のうち65は口頸部のみで体部を欠く。口縁部下端に沈線を巡らし段を作る。頸部は絞り技法で作っている。66は口縁部を欠く。頸部中央に沈線が巡る。球形の体部に沈線を巡らし、注口をあける。底部はヘラケズリを行っている。67は体部のみで口頸部を欠いている。球形の底部はヘラケズリを行っている。平瓶68は口頸部から体部の一部のみしか残っていない。体部の蓋部分を中心にカキメが残っている。土師器把手69はやや上方を向き、断面は扁平である。

ＳＤ97（70・71）

ＳＤ97には須恵器坏Ｇ蓋・高坏がある。坏Ｇ蓋70はやや大振りで器高が低い。高坏71は脚部の一部で外面に緑灰色の自然釉がかかっている。

ＳＤ95（72・73）

ＳＤ95には須恵器坏Ｈ蓋・甕がある。坏Ｈ蓋72は天井部がヘラキリ未調整である。甕73は口縁部を欠く。頸部中央には２条の沈線が巡る。球形の体部には沈線が巡り注口を開ける。底部は手持ちヘラケズリである。

ＳＤ119（74）

ＳＤ119には須恵器甕74がある。口頸部を欠く。２条の沈線の間に列点文を配し、注口を開ける。底部はヘラケズリを行う。

ＳＤ30（76）

ＳＤ30には須恵器坏Ｇ蓋76がある。身受けのかえりが口縁部より下に突出しており、全体に厚い。

ＳＤ118（77・78）

ＳＤ118には須恵器坏Ｉ・甕がある。坏Ｉ77は底部がヘラキリ未調整で一部窯体が融着している。内面は仕上げナデを行っている。甕78は大形の外傾する口頸部の破片であり、端部が肥厚している。頸部は２条一単位の沈線の間を櫛状工具の条線で埋めている。

ＳＤ24（79）

ＳＤ24には須恵器坏Ｈ蓋79がある。口縁部と天井部の間に沈線を巡らし段を作っており、口縁端部内面にも段を作っている。天井部はヘラケズリを行っている。

ＳＤ21（80～85）

ＳＤ21には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｈ身・壺Ｃ、土師器鉢、弥生土器甕がある。

坏Ｈ蓋80は口縁部と天井部の間に段を作っており、天井部はヘラケズリを行っている。坏Ｈ身81は器高が高く、底部はヘラケズリを行い、内面は仕上げナデを行っている。壺Ｃ82は口頸部は直立し、肩の張った球形の体部をもつ。底部はヘラケズリの後、カキメ調整している。土師器鉢83は球形の体部に屈折して外傾する口頸部をもつ。弥生土器甕84・85は平底の底部の破片で、84は体部外面をタタキ調整しており、弥生時代後期、85は弥生時代中期に位置づけられる。

５．包含層出土の土器（図版99）

包含層出土としたものは、遺構検出時において出土したものや、明らかに古代以降の遺構に混在して出土ものの中から主要なものを抽出して図化した。

第１次調査（75・86～115・119・120）

第１次調査の包含層には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｉ・坏Ｇ蓋・坏Ｇ身・坏Ｂ蓋・坏Ｂ身・高坏・椀・長頸壺・鉢・甕・円面硯、弥生土器壺がある。

坏Ｈ蓋101～103は天井部がいずれもヘラキリ未調整である。坏Ｉ75は底部がヘラキリ未調整で内面は仕上げナデを行っている。坏Ｇ蓋86・87・104は86はつまみを欠き、87・104は宝珠形のつまみが付く。坏Ｇ身88～90・105は底部がヘラキリ未調整のもの（88・89）、底部がヘラキリ後ナデを行うもの（90・105）があり、105はさらに体部下半を丁寧なヘラケズリを行っている。坏Ｂ蓋93・109～111は身受けのかえりを持つもの（109・110）と口縁端部が垂下するもの（93・111）とがある。前者はやや扁平な宝珠

形のつまみが付き、後者は扁平なつまみが付く。110は緑色の自然釉がかかり、別個体の土器片が融着している。口径から坏B身と考えられる。坏B身94・95は底部をヘラ切りの後、高台を貼り付けている。高坏92・106・107はいずれも脚部に沈線を1条巡らす。上部に位置するもの（92）、中央部に位置するもの（106）、下部に位置するもの（107）がある。椀91・96は91が直立する体部中央に1条の沈線を巡らし、底部はヘラキリの後、補助ケズリを行っている。96は器高が高く、底部はヘラケズリを行い、内面は仕上げナデを行っている。長頸壺97・108は頸部（97）と底部（108）がある。97は外傾する頸部の中央に2条の沈線が巡る。108は脚台部に4個の円孔を穿ち、端部を坏G蓋の口縁端部に類似させている。鉢98・99は底部に刺突孔をもつもの（98）ともたないもの（99）とがある。99は体部に2条の沈線が巡る。甕100・113・114は口頸部が外反する（100・113）と口頸部が長く外傾するもの（114）とがある。前者は体部にタタキを行い、100は頸部と体部にカキメを行っている。後者は頸部にヘラによる波状文を描き、その後2条の沈線で区画している。円面硯112は脚下半を欠いている。海は深く、陸は周辺の一部しか存在しないが、使用痕跡は明確ではない。脚部の透かしは残りが悪いが、「十」字形の可能性が高い。弥生土器壺119・120は口縁部（119）と底部（120）である。

第3次調査（116・117）

第3次調査の包含層には須恵器坏H蓋・坏H身がある。坏H蓋116は口縁部の破片である。坏H身117は立ち上がりが屈折し底部はヘラキリ未調整である。

第4次調査（118）

第4次調査の包含層には土師器甕118がある。「く」字状に外反する口縁部の内面は横方向のハケ調整を行っている。

6．鋳造関係遺物（第５図）

鋳造関係遺物には坩堝・鞴羽口・焼土塊がある。

坩堝（121・122）

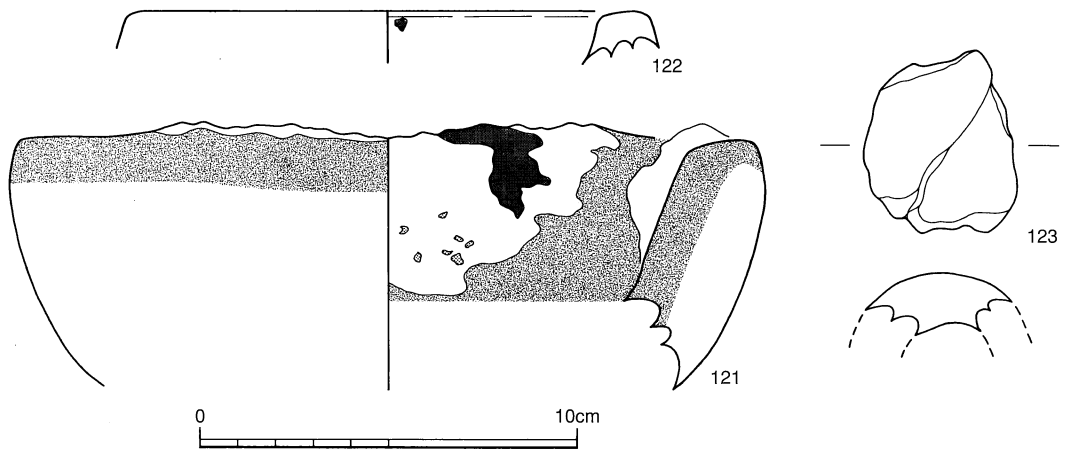
坩堝はＳＢ201の柱穴Ｐ103から２分割の１個体（121）と柱穴Ｐ84からの１個体（122）の合計２個体出土した。121は口径18.4cmで器厚は3cmの椀形である。胎土はわずかにスサの入る粘土で口縁端部から内面にかけての厚さ約1cm程度は高熱による発泡化が見られる。口縁部の一部に赤色や黒色・緑色の付着物が存在し、注口部ではないかと考えられる。特別な注口は作っていない。122は口縁部の破片で121より小振りである。器厚は口唇部で1.4cmを測る。口縁端部は面を作り、内面にわずかに赤褐色の付着物が存在する。

鞴羽口（123）

鞴羽口はＳＤ21から１点出土した。細片であり、全形はわからない。外径5cm前後、孔径2.5cm前後を測る。

焼土塊（124）

焼土塊は土坑ＳＫ46から出土した。最大長15cm程度のものから、最小1cm程度のものまで約数百個体、12.7kgの総量がある。外面あるいは鋳型面を残存するものは存在しないが、隣接するＳＢ201の柱穴Ｐ103などから青銅用の坩堝が出土していることや、厚みや出土量などから何らかの鋳型の可能性が高い。



第５図　鋳造関係遺物

第４節　古代の遺物

１．第１次調査の遺物（図版100）

古代の遺物は８世紀～10世紀前後のものが含まれるが、全体的には少量の出土に止まり、かつ遺構から出土した遺物は非常に少ない。出土した遺物には土師器杯・甕、須恵器杯Ａ身・杯Ａ蓋・杯Ｂ身・杯Ｂ蓋・稜椀蓋・皿・高杯・鉢・鉄鉢・壺・甕などの土器のほか、緑釉皿・碗などの陶器がある。全体的な比率は須恵器が圧倒的に多く、土師器は杯と甕などの器種に限られ、そのなかでも煮沸具が大勢を占めている。

遺構出土の遺物（図版100）

ＳＫ３（125～128）

ＳＫ３から出土した遺物には土師器甕（125）、須恵器杯蓋（126）・皿（127・128）がある。甕は口縁部を外反させるもので、杯蓋はつまみのないタイプで、平安時代前半頃の遺物と考えられる。125は口径17.1㎝、126は口径16.1㎝、器高3.4㎝、127は口径15.6㎝、器高2.7㎝、128は口径13.9㎝、器高2.9㎝である。

ＳＫ37（129～131）

ＳＫ37から出土した遺物には土師器甕（129）・鉄鉢（130・131）がある。甕は口径28.45㎝で頸部をくの字に外反させ長胴になるタイプである。鉄鉢は底部を回転ケズリする。131は口径23.5㎝、器高12.3㎝である。129は口径28.5㎝である。

ＳＫ88（138）

須恵器高杯138が出土した。138は低い脚部を持つ個体である。

ＳＫ58（134～136・139）

ＳＫ58から出土した遺物には須恵器杯Ａ身（134）・杯Ｂ蓋（135）・杯Ｂ身（136）・壺（139）がある。壺139は底部片で、外面は体部下半をケズリ調整する。134は口径11.1㎝、器高4.0㎝、135は口径15.3㎝、器高2.1㎝、136は口径16.5㎝、器高5.0㎝である。

ＳＤ40（132・133）

須恵器甕（132）・鉢（133）の２点が出土した。132は口径11.7㎝、133は口径18.6㎝である。

ＳＤ30（137）

須恵器高杯137が出土した。脚部の破片である。

包含層出土の土器（140～152）

包含層から出土した土器には土師器杯（140・141）・須恵器杯Ａ身（142～143）・杯Ｂ蓋（145）・稜椀蓋（146）・杯Ｂ身（144・147・148～152）・緑釉碗（153～155）がある。

土師器杯は口径13.9～14.1㎝、器高2.5～2.6㎝である。140は器表が磨滅し調整技法を観察することができないが、141では暗文などは施されていない。杯Ａ身は口径12.1㎝、器高3.8～4.0㎝である。杯Ｂ蓋はやや丸くカーブする天井を持ち、上部外面のつまみ周辺をせまくナデ調整する。つまみは扁平である。口径13.8㎝。146は稜椀蓋で、口径は17.8㎝である。杯Ｂ身は底径の比率が大きく、高台が踏ん張る148や直線的な体部を持ち、小さい高台になる149など様々な時期のものが認められた。総じて器高の低い個体が多い。

杯Ｂ身の口径は9.8～18.3㎝、器高3.7～5.1㎝である。特に150は口径18.3㎝と大型の製品である。

緑釉は3点を図化した。いずれも貼り付け輪高台をもつ個体で、浅く薄い釉を施釉する。近江産と考えられる。

2．第2次調査（図版101）

第2次調査では遊離した遺物であるが、少量が出土している。この時期の遺物としては須恵器壺（156～159・161）・杯A（162）・高杯（160・163）・甕（164）が出土している。これらの遺物は第2次調査の南端地区から出土したもので、すべて近世の窪み地形の埋土に混入していた。付近にこの時期の遺構がないことから、水田の開墾に伴って移動した土砂に混入した土器と考えられる。これらの遺物は甕・壺などの貯蔵具が多くを占める。156は口径19.5㎝、157は口径21.3㎝、158は口径23.1㎝である。

159は肩部に耳が付く双耳壺である。164の甕は口径50.4㎝の大型のもので、頸部に3段の波状文とそれを区切る突帯を入れている。

3．第3次調査（図版101）

第3・4次調査の北側には第1次調査のＳＢ41が検出された周辺に隣接する地区でまとまった古墳・古代の集落が検出された。ここで報告した土器はすべてこの周辺から出土した遺物である。なお、第4次調査でも古代の土器は少量出土しているが細片であるため図化しなかった。

ＳＢ202（165・166）

Ｐ203からは土師器甕（165）、Ｐ204からは土師器甕（166）が出土した。いずれも口径16.0㎝前後で胴部が球形になる小型品である。

ＳＢ201（167）

Ｐ110から土師器甕（167）が出土している。口径13.1㎝、胴部が球形になる小型の甕である。体部外面にハケ目調整を施す。

ＳＤ21（168～170）

ＳＤ21から出土した遺物には須恵器杯Ｂ蓋（168・169）と須恵器杯Ａ身（170）がある。
170は体部外面に黒色の付着物が認められる。168の蓋は13.7～15.7㎝、杯は口径11.5㎝である。

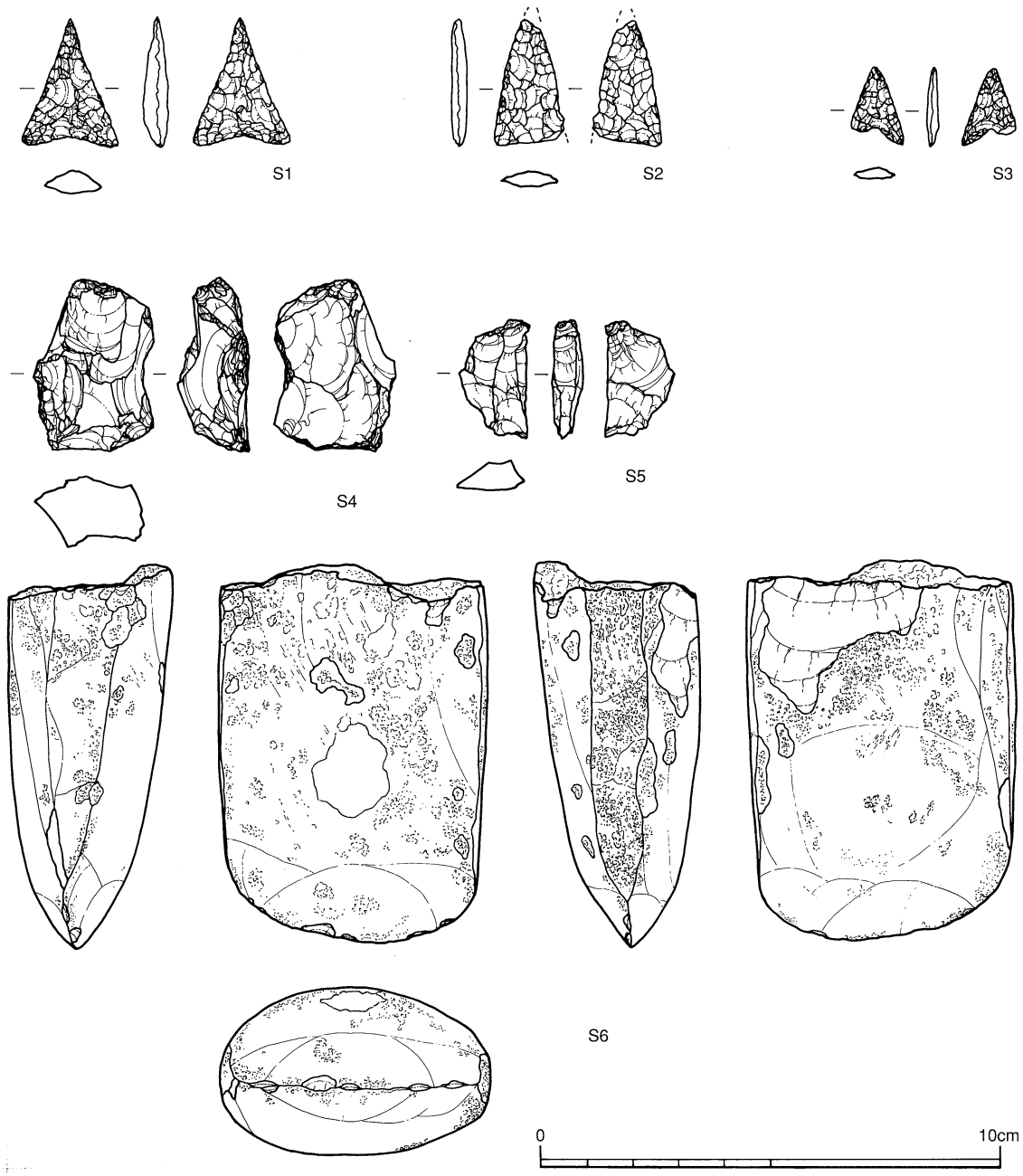
包含層（171～173）

包含層から出土した遺物は少量であるが須恵器広口壺（171）・鉢（172）・甕（173）の3点を図化した。

広口壺171は頸部と肩部の基部にカキ目を施し、内面にわずかにタタキのあて具痕跡を残す。172は鉢の口縁部片で、口径21.5㎝を測る。甕173は頸部を丸く外反させて、口縁外面に面を持つ。また、頸部にタタキの痕跡を残す個体である。口径は25.6㎝を測る。

第５節　石器（第６図）

石器は６点図化した。石鏃３点、石核１点、剥片１点、石斧１点である。ほとんどの石器が遺構面精査時に出土するなど、単独の状態で出土していることから、ここでは石器のみの所見にとどめておく。Ｓ１～Ｓ３は安山岩（サヌカイト）製の石鏃で、Ｓ１・Ｓ３は形態的特徴から縄文時代に属すると考えられる。また、Ｓ２は形態的特徴からは縄文・弥生時代に属するものと考えられるが、風化の度合いが強いので、これも縄文時代の遺物の可能性が高い。Ｓ４の石核、Ｓ５の剥片はチャート製である。時代を特徴づける形態の遺物ではないが、近隣の三田市には、旧石器時代のチャート製石器群を検出した溝口遺跡が存在することから、旧石器時代の遺物である可能性は高い。Ｓ６は深成岩系の石材を用いた太形蛤刃石斧で、弥生時代に属するものであろう。基部側は欠損するが、すり石等に転用された痕跡はない。



第６図　石器

第５章　中世の遺構と遺物

第１節　第１次調査の遺構

本遺跡の第１次調査は、前述の通りⅠ・Ⅱ・Ⅲの３地区に分割してⅠ～Ⅲ区の順に実施した。古墳・古代の項では一括して遺構を報告したが、中世は遺構が膨大な数に登り、地区全体に稠密に広がるので、調査工程に従って分割して記述した。

１．Ⅰ区

二郎宮ノ前遺跡では多くの中世遺構が見つかったが、特にⅠ区は多数の遺構が稠密に検出された。注目される池１（園池）の検出や、堀１・ＳＤ１・４などの区画溝の存在、周辺の多数の建物・柱穴の検出は、本地区が遺跡のなかでも最も重要な場所であることを表している。

Ⅰ区の検出面での標高は174～175ｍ前後で、東西方向には西側から東に向けて低くなり、南北方向には南側から北側に下る地形となる。但し、南北方向は比高差が0.5ｍと余り高低差がなく、周囲は平坦地を広く確保できる場所である。

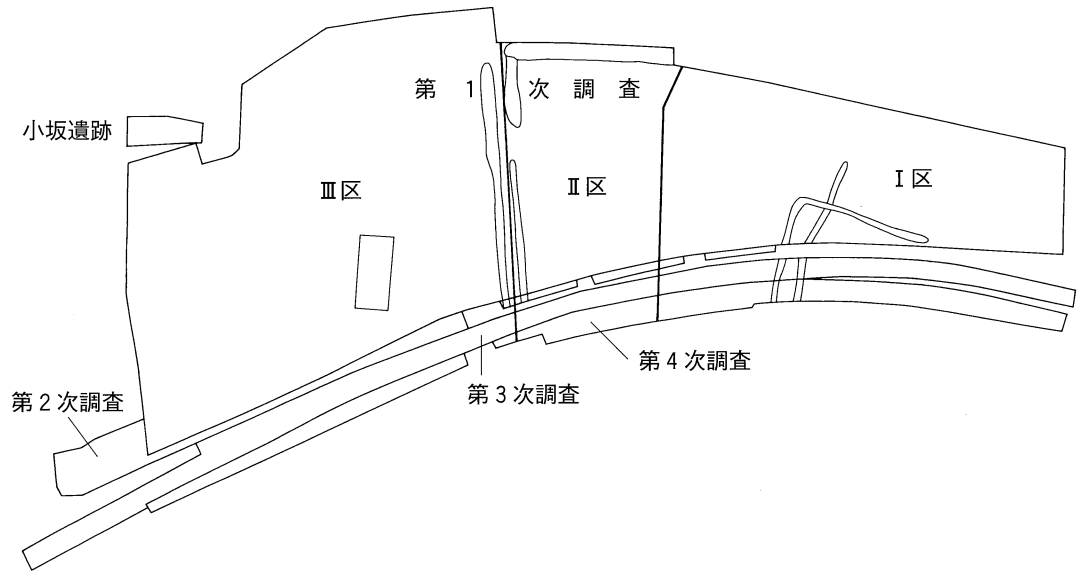
遺構面は南側では安定したシルト層であるが、北端のＳＢ１周辺から北側ではシルト層と礫層が混在した２次堆積層の上に遺構面が形成される。

遺構には掘立柱建物17棟・礎石建物・園池・用水池・石組井戸・溝・土坑などがある。

掘立柱建物

ＳＢ１（図版45）

４間×３間の総柱建物である。ＳＢ２～５の北側で検出され、南辺の柱穴がＳＢ２・５の検出面を１層下げた段階で見つかっているので、これらより古い建物であることがわかっている。棟方向は南北棟



第７図　中世地区割図

で、規模は桁行（南北）8.4m、梁行（東西）7.5m、面積63㎡を測る。平面形態は方形に近いが、柱間の長短によって南北方向を桁行と考えた。柱穴は確認調査の範囲を除きすべて検出できた。

柱間は南北辺が2.0～2.1m、東西辺が2.5～2.6mを測り、建物周囲は段丘地形上ではなく、シルトの堆積層の上に立地している。このため建物の敷地内には図のトーンの範囲内に地山から削りだした盛土層の広がりが認められた。この層は厚さ5～15㎝前後で低い東側により厚く盛られる。柱穴P330には柱材が遺存していた。

ＳＢ２・５（図版46・47）

ＳＤ１とＳＤ７によって区画された内部に検出された建物である。検出状態からすると、ＳＢ３・４より下層で検出され、ＳＢ６・７より上層に位置する。それぞれの建物間ではほとんど柱穴が切り合わないが、検出時の柱穴がＳＢ３・４より下のほうから、順に見つかった事実から前後関係を特定した。ＳＢ２は４間×４間規模の南面廂付きの総柱建物である。規模は桁行（南北）11.4m、梁行（東西）8.5m、面積96.9㎡を測り、棟方向は南北を向く。柱間は梁行2.0～2.2m、桁行2.0～2.4mで、南面廂部分の柱間は1.2m前後である。建物の柱並びは南側が良好であるが、北側はやや歪になる部分が多い。

各柱穴は円形ないし楕円形で直径は25～80㎝前後とばらつきがある。ただし、この柱穴の大小は側柱・束柱・隅柱などの位置による相違はない。

柱穴のうち柱痕跡が確認できたのはP421・P183など13基である。柱痕跡から推定される柱の直径は15～20㎝である。この内、P236には柱芯が遺存していた。

柱並びや柱通りは庇部を含めた南側３間については良好であるが、北側の１間にはややばらつきが認められるうえ、柱穴もやや小規模となる。

ＳＢ５はＳＢ２と並びを共有し、建物間はほぼ１間であるため、両者は１棟の可能性も残されるが、本報告ではＳＢ２の付属建物として報告した。本建物は２間×３間の総柱建物で、建物方位を南北軸に持つ。柱穴は円形ないし楕円形、直径25～40㎝前後でややＳＢ２より小型である。建物の東側に方形の炭層（トーンの範囲）が検出されたが、ＳＢ５の周囲にも薄く焼土や炭層が散布していた。このことから、柱穴は検出できなかったものの、ＳＢ５およびこの炭層の範囲一帯をＳＢ２に付属した厨房施設と考えることができ、ＳＢ３・４と同一の構造を有していたと推測される。

ＳＢ３・４（図版46・48）

ＳＤ４とＳＤ６によって区画された内部に検出された建物で、前後関係は前期の通りである。ＳＢ３は４間×４間の南北棟で、規模は梁行8.8m、桁行10m、面積88㎡である。柱間は梁行2.2m、桁行2.5mで明確に桁行が梁行より長くなっている。また、南側で柱２基分が空白となる。柱穴は円形ないし楕円形で直径30～60㎝前後である。ＳＢ２同様、側柱・束柱での規模の偏差はないが、柱穴個々の規模はかなり大小が認められた。

ＳＢ４はＳＢ３の付属建物で、北東端にＳＫ２が設けられる。ＳＢ３と分けて２棟としたのは南北の柱並びがややずれることと、両者の境で柱間がやや短くなることを根拠としている。但し、ＳＢ２・５と同じく一棟である可能性も残される。

４間×３間の総柱建物で、規模は梁行8.5m、桁行6.9m、面積58.6㎡である。柱間は梁行2.1m、桁行2.2～2.5mを測る。柱並びは良好であるが、北側の１基と南側の梁行の中央の柱穴がやや東に偏る。これは内部の間取りに合わせて柱を配置したためと考えられる。柱間は南北2.2～2.4m、東西2.0～2.1mで南側が長く、北側で柱間が短くなる傾向がある。ＳＢ４の南北側にはＳＫ２が掘削するが、この土坑は柱

並びのなかに納まっていることから、明らかにＳＢ４と関連する遺構と考えられる。また、ＳＫ２は内部に炭・焼土を多量に含んでいたことから、ＳＢ４周辺が厨房空間であったと推測される。

ＳＢ６・７（図版49）

この２棟は小規模な側柱建物で、ＳＢ２～５の下層に検出された。周囲は柱穴の重なりが著しく、ＳＢ２～５の他にも何時期かの建て替えが考えられる。このため、規模や並びなどの復元にはやや疑問も残されるが、一応復元案として本建物群を提示した。

ＳＢ６は梁行５ｍ、桁行7.6ｍ、面積38㎡である。また、ＳＢ７は東西4.6ｍ、南北5.3ｍ、面積24.3㎡である。

ＳＢ10（図版50）

調査区の北端で見つかった小型の掘立柱建物である。中央に確認調査のトレンチが入り規模の詳細は不明であるが、状況から考えて３間×３間程度の建物と考えられる。検出範囲での規模は南北７ｍ、東西6.5ｍ、面積44.2㎡である。

ＳＢ11・12（図版50）

Ⅰ区のＳＢ２～５の西側には小型の建物が重なって検出された。これらの建物は柱間が短く、柱の並びが悪いことから、中心建物に付属する小屋的な建物であったと考えられる。ＳＢ11はＰ397やその他の柱穴に根石が据えられる。建物構造も南辺の３間は均等に揃うが、その他の部分では柱間にばらつきが認められ、柱並びも悪い。規模は南北7.5ｍ、東西6.5ｍ、面積48.7㎡である。柱穴が浅いのは、建物周囲が礫層上に位置するための、掘削の困難さからではなかったかと推測される。

ＳＢ12はＳＢ11に重なって見つかった礎石建物である。検出規模は２間×２間であるが、周囲の検出状況が悪いため実際の規模は不明である。礎石は１辺20～25㎝程度の小さなもので、水平面を上面に据えている。

ＳＢ13（図版50）

検出状況から３間×２間前後の掘立柱建物と推定される。南端の柱穴が池１の洲浜下層から検出されたため、池１より古い遺構と考えられる。南北辺が7.9ｍ、東西辺が4.3ｍ、面積33.9㎡である。

ＳＢ17（図版51）

池１の西側で検出された建物で、南北７間×東西３間以上の総柱構造の建物と推測されるが、西側は調査区外に延びており詳細は不明である。規模は南北16.5ｍ、東西6.5ｍ以上、面積107.2㎡以上である。ただし、上層の削平が著しいため、検出できた柱穴の深度はいずれも浅い。柱通りや間隔は全体に均一で、柱間は梁行が2.0～2.2ｍ、桁行2.0～2.7ｍ前後である。

ＳＢ18（図版52）

５間×５間の総柱建物で池１の東側にＳＢ19とならんで検出された。全体に検出状況は良好であるが北端周辺や堀１に重なる箇所はいくつかの柱穴が失われている。規模は東西10.5ｍ、南北12.5ｍ前後、面積131.25㎡である。

柱間は梁行（東西方向）2.0ｍ、桁行が（南北方向）が2.5～2.7ｍである。柱並びや柱通りは良好で、平面プランにも大きな歪みは認められない。柱穴は円形ないし楕円形で直径20～50㎝前後でやや大小があるが、側柱と束柱の間に大きな規模差は認めがたい。ただし、柱穴の深さは東に深く、西に浅い。これは建築時の地表の高さが西から東に傾斜していたためと考えられる。柱の直径は柱芯の確認から12～15㎝前後と推定した。

ＳＢ19（図版53）

５間×４間の総柱建物で池３の東側、ＳＢ18の南側に検出した。全体に検出状況は良好である。規模は東西8.5ｍ、南北11.4ｍ、面積96.9㎡を測る。柱間は東西2.0～2.2ｍ、南北2.0～2.5ｍである。建物の棟方向は南北軸を向く。柱並びや柱通りは良好で、各辺、コーナーとも大きな歪みは認められない。柱穴は円形ないし楕円形、直径30～50㎝前後でやや大小があるが、側柱と束柱の間に大きな規模差は認めがたい。ただし、柱穴底の深さが東から西に浅くなる傾向はＳＢ18と同じである。柱の直径は柱芯の確認から12～15㎝前後と推定された。

ＳＢ65（図版54）

ＳＢ18・19の東側、堀１の南に検出された掘立柱建物で、２間×３間の総柱構造の南北棟である。規模は梁行4.6ｍ、桁行7.0ｍ、面積32.2㎡を測る。柱穴は平面円形で直径30㎝前後である。柱通りや柱並びはほぼ均等であるが、柱間は梁行2.2ｍ、桁行2.0～2.4ｍで東辺が不均等になっている。

ＳＢ９（図版38・41、居館中心建物）

堀１の東側には、第１～４次調査区に跨がって小規模な溝に区画された一角が復元できる。この部分は堀１の内部の中心域を占める箇所である。規模は南北17ｍ、東西13ｍ前後、面積220㎡前後と推定される。柱並びないし礎石列や、礎石の据え付け痕跡から建物を復元できたわけではないが、おそらくこの場所に居館の後半時期の母屋が存在したと推測される。

礎石建物（挿図第８図）

Ⅰ区の礎石建物はＳＢ11の１棟があるが、このほかにもＳＢ２・３が建った場所周辺に明らかに礎石と思われる石材が散見される。このうち、明かなものを図示した。おそらく、この周辺にＳＢ２・３が廃絶後礎石建物が建てられたことは確実である。しかし、時期が不明で上面の削平のため建物は復元することができなかった。一応、礎石建物が存在したことをここでは指摘しておくに止めたい。（第10図写真は第８図東端の礎石である。）

池

池１（図版73～75）

庭園にともなう園池である。規模は南北10ｍ、東西８ｍの規模を測り、検出面からの深さは40～50㎝である。平面は隅円の方形を呈し、北側に溜枡状（以下、溜枡）の施設を付属させる。池の底は水平で、側壁の立ち上がりはややゆるやかな傾斜面をなす。側壁の中位より上には直径５～15㎝前後の角礫が部分的に敷かれる。この礫が敷かれているのは南辺と北東辺の一部に限られるが、状況から考えて周囲を礫敷きにしていたと推測される。このほか礫は溜枡の北西側一帯にも広く敷くように広がっている。こちらの礫は拳大以下のものが大半を占めるが、やや大型のものも認められる。状況から考えてこれらの礫は池周囲を囲んだ洲浜と評価できる。

溜枡は底に横木を置き側壁部分に護岸用の杭を打つ。上層には多量の礫を投入し半分ほどを埋めている。中程には直径50㎝大の礫も投棄される。同様の遺構は東畑遺跡（神戸市北区）などにもあるが湧水を濾過するためのものであろうか。

池への水の導水は南側の池２からの湧水と、北側の溜枡周囲からの湧水があったと思われる。この一方の中継点に溜枡が存在する。このためやはり溜枡は池と密接な遺構と評価できる。池の排水は具体的には不明であるが、池からはＳＤ１・４へつながるＳＤ９がある。あるいはこの溝が排水をになった可

能性もある。

池２（図版76）

池１に先行して掘られた池で、立地から湧水を溜めるための池と推測される。池１が機能する段階ではすでに埋め立てられていたことが分かっている。

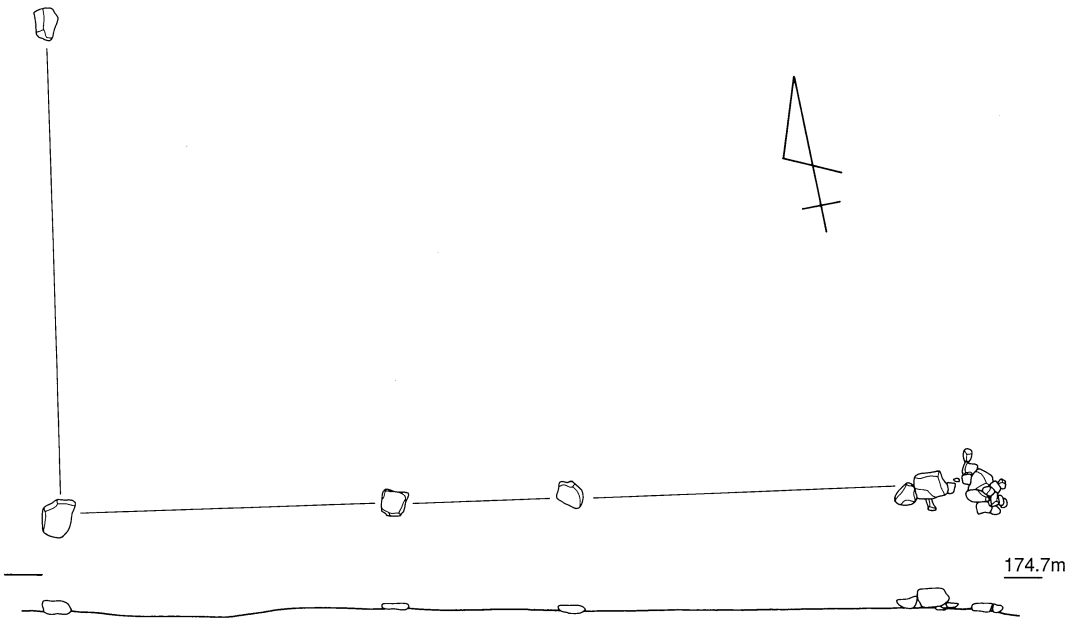
南北方向を向いて掘られており、規模は長さ29ｍ、幅５～６ｍを測る。検出面からの深さは0.2～0.4ｍである。底はほぼ水平であるが中程に陸橋部をもつ。また、池１寄りにはＳＫ８がある。

井戸

ＳＥ１・２（図版77・78）

Ⅰ区では石組井戸２基がいずれも調査区西側で検出された。ＳＥ１は井戸の半分が検出できた。堀方の直径は3.8ｍ、井戸側内は1.0ｍ、深さ3.0ｍの規模を有している。井戸側に使用している石材は川原石が多く、横積にしながら目地が通らないように積んでいる。

ＳＥ２はＳＢ10～13の北側に隣接して検出された井戸である。堀方の直径は3.1～3.3ｍ、井戸側部分の下部には水溜めとして、丸太をくり抜いた桶を据えていた。桶の直径は72㎝、長さは69㎝である。ＳＥ２から出土した遺物からこの井戸は15世紀代に下ることが判っているが、２基とも深い石組構造であることや、石の積み方が共通している。井戸が検出された周辺には礎石建物などの小型の建物が多く検出され、多数の炭・焼土が散布していた。また周囲の基盤層は礫混じりのシルトであまり整地に向いた場所ではない。以上のことから、14世紀段階には周囲は厨房的な空間となっていた可能性が高い。



第８図　礎石建物（S＝1/100）

土坑

ＳＫ４（図版80）

池１と溝１・４の間で検出できた土坑で、長さ1.3ｍ、幅1.11ｍ、深さ0.2ｍを測る。内部には暗褐色の土が充填され、炭も若干出土している。遺物は出土していない。

ＳＫ２（図版81）

方形の土坑で規模は南北4.55ｍ、東西4.4ｍ、深さ20～28㎝である。内部は多量の小礫で埋つくされ、西側には炭を大量に混入した箇所が認められ、東辺はＳＤ７を切っている。この土坑上層には丹波焼壺253が出土した。しかし、これは整地層に混じった土砂からの出土と考えられるので、遺構の時期は他の遺物に併行すると考えられる。また遺構の検出状況から考えて、ＳＢ４に密接に関わる位置からの出土であること、埋土下層に多量の炭を混入する事実からすると、建物の厨房に関連した遺構と考えられる。

ＳＫ５（図版81）

ＳＤ７と同時に埋められた土坑で、土坑底に多数の土器を包含していた。状況から考えて、意図的な掘削土坑ではなく、建物を建てるために窪地になった土坑を埋め立てた痕跡と考えられる。なお、この時の整地によって建てられたのはＳＢ２である。

規模は長さ5.3ｍ、幅1.2ｍ、検出面からの深さ10～12㎝を測る。

ＳＫ６（図版80）

堀１の南西隅に検出された地鎮め遺構である。堀方は直径33㎝、深さ15㎝の大きさで、内部に土師器鍋（249）、土師器皿３枚（うち１点を図化248）を埋納していた。

ＳＫ７（図版80）

堀１の南辺に隣接する位置に検出された土坑である。北側がやや尖りぎみであるが概ね楕円形を呈している。規模は長さ2.15ｍ、幅1.35ｍ、深さ0.3ｍである。

ＳＫ97・98（図版82）

円形の小型土坑で池２の南端を切って検出された。ＳＫ97・98は平面円形、それぞれの規模は前者が直径1.12ｍ、深さ0.19ｍ、後者が直径1.23ｍ、深さ0.1ｍである。

ＳＫ９（図版82）

平面方形の土坑で、池２に切られている。南北2.4ｍ、東西2.1ｍ、検出面からの深さ0.4ｍを測る。埋土はシルト質土である。

堀・溝・その他

堀１（図版88）

堀１は居館域の内郭を囲う重要な堀である。調査によって西辺54ｍをほぼ完掘し、南辺約39ｍ、北辺のコーナー部分を調査した。規模は幅1.7～3.0ｍ、検出面からの深さは0.6～0.7ｍであった。堀底のレベルから観察すると、水の流れは南西隅のコーナーから北・東のそれぞれの方向に流下していたようである。堀内部の埋土は灰色シルトで底部には有機質の堆積層が断続的に認められたことから、埋没時には水が滞留していたと考えられる。

この堀は改修が著しく、少なくとも４段階の改修が行われ、プランを変更しているようである。初期の段階は幅が狭く小規模な溝でＳＤ４に合流している。次に、幅が広くなり、同じプランで流れる時期。さらに、堀が南に伸び現在のプランになる時期があったようである。この時期も最低２時期あるようで

断面に改修痕跡を認めることができた。これらのプランは周囲の溝との関係でみると、ＳＤ１・４・６・７などで区画されていたものが後半段階になって堀１の区画に定着していったと解釈することが出来る。前後関係からいえばＳＤ１→ＳＤ４・６→堀１の順で区画が行われたことになる。

ＳＤ１・４・５・６・７（図版88・89）

ＳＤ１・７はＳＢ３を囲う溝である。ＳＤ１は西側で南北に流れ、東に折れて調査区を横断している。この溝は堀１の周辺から東側ではＳＤ４と重なっている。一方、ＳＤ７は断面Ｖ字の溝でＳＫ５と同時に埋められたようである。従って、ＳＢ２が機能した段階では既に存在しなかったようである。

ＳＤ４・６はＳＢ３を区画する溝である。こちらの溝は建物を３方に囲んで存在したようである。ＳＤ６はＳＤ４と交わったのち、さらに南側へ流れ堀１に合流する。ＳＤ１・４は東側では重なって検出された。それぞれの溝の規模はＳＤ１が幅0.3～0.5ｍ、深さ0.2ｍ、ＳＤ４が幅0.3ｍ、深さ0.15ｍ、ＳＤ５が幅1.0～1.6ｍ、深さ0.25ｍ、ＳＤ６が幅0.5ｍ、深さ0.2ｍ、ＳＤ７が幅0.5ｍ、深さ0.15ｍである。ＳＤ７を除くと断面はいずれもＵ字形である。

以上のように、この範囲では堀１を含め、建物の建替えや屋敷地の区画変更に伴って何度も溝プランの変更が行われている。これらの溝と堀のあいだでは、堀のほうが溝よりも大きいという点の他に、溝が建物に近接して掘られているのに対して堀は一定の距離を置いている特徴があげられる。このことから堀１が掘削された段階で、明らかに屋敷中心域の区画意識が大きく変化したといえる。

ＳＤ15

ＳＢ17から西に向かって流れる溝である。幅0.5ｍ、深さ0.2ｍで断面はＵ字形になる。南北方向に直線的に流れる溝で、ＳＢ18・19の間を通り、第２～４次調査区も貫いている。西端はＳＢ17付近で削平のために途切れている。

耕作地

畠（図版89）

Ⅰ区の南側には畠の鋤溝が広がる。堀区画の外側にあたり、堀１が存在した段階では建物もなくなっている範囲である。この鋤溝内の土が、部分的に耕作土と床土の下に薄く広がる灰色シルトであることや、掘立柱建物がすべて下層から検出されることから、本遺跡の中世後半の遺構と判断した。

２．Ⅱ区

掘立柱建物

Ⅱ区ではⅠ区でみられたような大型の建物は検出できない。最大のものでもＳＢ62の４間×４間程度で、ＳＢ42のような小型の建物が多く検出できた地区である。

ＳＢ42（図版54）

ＳＢ95・62の東側に検出された掘立柱建物で、堀１東辺の外側に位置する。２間×３間の総柱構造で棟方向は南北を向く。規模は梁行の南辺が5.1ｍ、北辺が4.6ｍと南側に開く。桁行は6.7ｍ、面積は33.5㎡である。柱間は梁行2.3～2.6ｍ、桁行2.0～2.6ｍである。柱穴は平面円形で直径30㎝前後であるが柱芯が観察できるものはなかった。柱通りや柱並びはほぼ正確であるが、柱間は東辺が不均等になる。柱穴からの遺物の出土はない。

ＳＢ14・16（図版55）

ＳＤ66の東側に検出できた建物で、重なって検出された。２棟とも２間×３間相当規模の建物である。ＳＢ14は側柱構造の南北棟で梁行5.5ｍ、桁行6.8ｍ、面積35.7㎡。柱間は2.4～2.5ｍを測る。ＳＢ16は総柱構造で梁行5.0ｍ、桁行6.5ｍ、面積32.5㎡。柱間は2.3ｍ前後を測る。前後関係はＰ2727の切り合いからＳＢ16→14順である。

ＳＢ72・73・92（図版59・60）

ＳＤ66西辺の内側にはＳＢ14・16を始め５棟の建物が並んで検出できた。これらの建物はＳＢ14・16を除くといずれも南北棟である。ＳＢ72・92は小型の簡易な建物と考えられる側柱建物で、ＳＤ119の埋没後に建てられている。いずれの建物も東に向かってやや下る地形の上に立地している。状況からすると上面をかなり削平されていると思われる。

ＳＢ72は２間×２間の総柱建物である。規模は東西4.3ｍ、南北4.8ｍ、面積20.6㎡。柱間は2.1～2.3ｍである。

ＳＢ73は２間×４間の総柱建物である。規模は梁行4.2ｍ、桁行９ｍ、面積37.8㎡。柱間は2.1ｍを基本として0.8～3.3ｍまでの幅がある。桁行の柱が狭い間隔であるのが特徴的である。

ＳＢ92は２間×３間の側柱建物である。規模は梁行4.4ｍ、桁行6.3ｍ、面積27.7㎡。柱間は1.8～2.8ｍである。

ＳＢ104（図版57）

ＳＢ102に重なって検出された建物で、棟の軸を南北にとる。２間×５間の建物で、南側の束柱が抜けるため、中抜け総柱と評価できる。規模は梁行4.9ｍ、桁行12.5ｍ、面積61.2㎡を測る。柱間は梁行2.2～2.7ｍ、桁行2.1～3.1ｍで、北側ほど柱間が狭くなる。

各柱穴は平面円形で、堀方の直径40～50㎝前後である。柱並びや柱通りは良好で、柱間は2.0～3.0ｍを測る。柱穴の埋土は灰褐色シルトで、ＳＢ102よりやや上層で各柱穴を検出している。

ＳＢ102（図版58）

北端がＳＢ104に重なり、東側はＳＢ101に接して見つかった建物である。３間×３間の方形を呈し、南北6.5ｍ、東西6.7ｍ、面積43.5㎡の規模を持つ。束柱は南東側の１基が抜ける中抜け総柱である。柱間は2.0～2.3ｍ、柱並びや柱通りは良好である。柱穴は円形で堀方の直径は20～30㎝である。

ＳＢ101（図版58）

３間×２間の東西棟でＳＢ102に接し、ＳＫ87に切られる建物である。総柱建物であるが、柱並びがやや悪く、建物全体の柱配置も不均衡である。規模は梁行3.4ｍ、桁行6.5ｍ、面積22.1㎡である。柱間は梁行1.6～1.9ｍ、桁行1.6～2.7ｍを測る。柱穴は円形ないし楕円形で堀方の直径は20～70㎝とばらつきが認められた。状況から考えて、簡易な建物と考えられる。

ＳＢ62・95（図版56）

ＳＢ62は４間×４間の中抜け総柱建物で、Ⅱ区では最も大型の建物である。南側のＳＢ95は規模から付属屋と考えられる。

ＳＢ62の柱並びや通りは南側が比較的良好であるが、北側は不均等になる。東西８ｍ、南北7.8ｍ、面積62.4㎡、柱間は梁行1.8～2.2ｍ、桁行1.6～2.3ｍで、梁行は西辺ほど狭くなり、桁行は北側ほど狭くなる傾向がある。柱穴は円形、堀方の直径は30～40㎝である。

ＳＢ95は東側が建屋の主体になる部分で、これに西側の庇状の１間が付属する構造である。梁行3.8ｍ、

桁行4.8ｍ、柱間は梁行2.3ｍ、桁行3.9ｍである。面積は17.1㎡と小規模な建物である。

ＳＢ62・95の南にはＳＤ65が流れ、南東端のＳＫ39に隣接する部分でコーナーを持っている。これらのことからＳＢ62・95からＳＤ65にかけての範囲が屋敷地として意識されていたと考えられる。

ＳＢ94（図版56）

ＳＢ62の西側に重なって検出された建物で、３間×２間の南北棟である。検出状況が悪いため、束柱が検出できなかった箇所もあるが削平によるものかどうか判断がつかない。このため、結論はだせないが、ここでは中抜け総柱建物と判断しておく。規模は梁行4.1ｍ、桁行6.9ｍ、面積28.2㎡である。柱間は梁行4.1ｍ、桁行6.9ｍである

ＳＢ93（図版55）

Ⅱ区やや南寄りで検出された建物である。規模は南北5.1ｍ、東西5.4ｍ、面積27.5㎡である。柱間は南北0.9～1.5ｍ、東西1.5～2.5ｍである。柱間がやや不揃いであるが、概ね３間×３間の側柱建物と評価できる。ただし、方形のため棟方向は不明である。周囲の削平が著しいため検出状況は良好ではない。

ＳＢ60（図版55）

ＳＢ94の西側で検出された側柱建物である。周囲の削平が著しく検出状況が良くない。南辺の柱並びを基準に考えると桁行３間×梁行２間の東西棟となる。規模は梁行６ｍ、桁行4.5ｍ、面積27㎡である。柱間は梁行1.6～2.9ｍ、桁行1.5～2.7ｍである。ただし、柱穴が直径20㎝前後と小さいことや、柱間や柱並びにばらつきがあることから考えると簡易な建物と評価できる。

土坑・墓

ＳＫ39（図版82）

墓は建物付近に見つかった長方形のＳＫ39がある。建物付近にみつかったもので屋敷墓と評価される。ＳＫ39はＳＢ62・95の南側に検出された土坑墓である。平面プランは隅円の長方形を呈し、長さは1.95ｍ、幅1.35ｍを測る。検出面からの深さは0.3ｍである北東端付近の頭部位置には須恵器椀（449）、土師器皿が据えられていた。土坑に隣接してＳＤ68がＬ字形に屈折して曲がり、ＳＢ62を母屋とする屋敷の南東に位置する。ＳＫ39の時期は12世紀末～13世紀初頭ころである。

ＳＫ103・104（図版82）

円形の土坑でそれぞれ直径１ｍ・0.9ｍ、深さ0.4ｍ・0.3ｍを測る。ＳＤ119を切って土坑が設けられることから、天水溜の土坑と考えられる。

ＳＫ38（図版82）

隅円方形の土坑である。直径0.9ｍ、深さ0.2ｍの小規模なものである。内部には炭を少量含んでいた。埋土は暗褐色のシルトである。

ＳＫ87（図版83）

Ⅱ区中央の南側に見つかった土坑で、平面は方形で南北5.5ｍ、東西5.2ｍの規模を持つ。深さは0.3～0.35ｍで南が深く、北側にやや浅くなる。

この土坑が建物に伴うかどうかは不明であるが、Ⅰ区のＳＫ２などに共通する特徴を持っていることから生活に密接に関連した遺構であると考えられる。内部からは丹波焼・備前焼・須恵器・土師器などが多量に出土しており、備前焼擂鉢445がⅣＢ期のものであることからこの土坑の埋没時期は15世紀に下ると考えられる。

溝

Ⅱ区で検出された溝は堀２を除くと、建物群周囲に検出されたものが多く、規模も幅40～80㎝前後と小さいものが多い。前述のＳＤ65は屋敷地の区画溝、ほかにＳＤ117・110・97・98などがあるがいずれも屋敷区画や雨落ち溝と思われる小規模なものである。

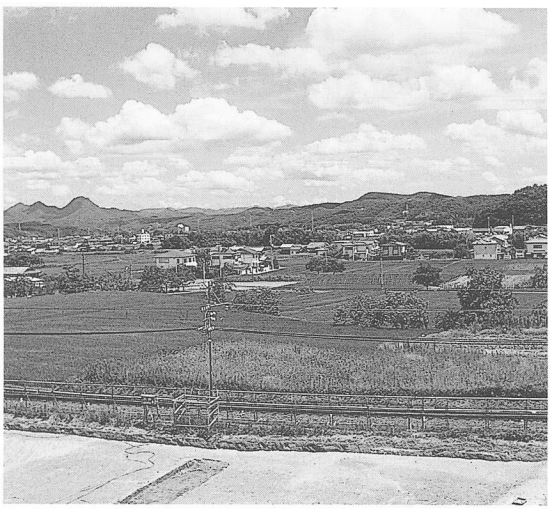
堀

堀２（図版90）

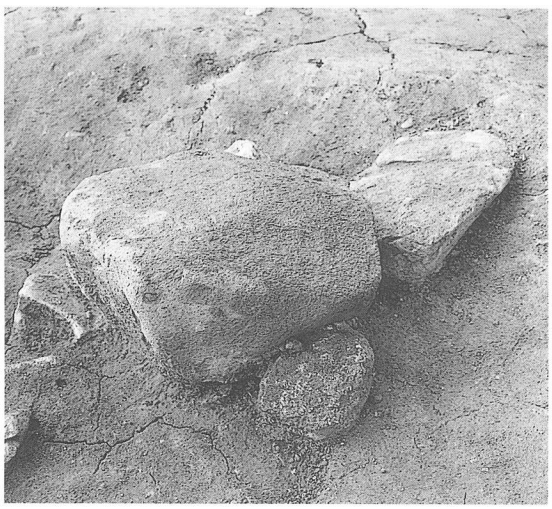
Ⅱ区とⅢ区を南北に分断する堀である。調査区内では堀の南辺と西辺を検出した。南辺は調査区を横断して、東側が調査区外に伸びる。西側は丘陵裾部で屈曲し、西辺に接続している。堀の西辺は約40ｍほど北に伸びたところで途切れている。南に平行したＳＤ65は東側のＳＤ58北背後に堆積した土砂層の分析から、ＳＤ65が埋没したのちに堀２が機能したことがわかっている。

堀の規模は南辺の入口部を挟んで東側が小規模、西側が大規模になり、両者の規模は大きく異なる。東側は幅２ｍ、深さ0.4～0.6ｍ前後で、西側は規模が大きく幅３～４ｍ、堀の東西の途切れ部には門址が検出された。堀の途切れ部は幅３ｍ程の間隔があるが、この間には土坑状の遺構が４基並ぶ。堀の両肩に接して２基が設けられ、やや南にずれた位置に、１間の間隔を置いて２基が並ぶ。後者の２基が門扉の軸受け柱の痕跡と考えられる。

堀の内部からは多くの遺物が出土したが、丹波焼の甕の形式からすると、堀の埋没年代は15世紀前半と考えられる。



第９図　遺跡から見た東側の風景



第10図　礎石

3．Ⅲ区

Ⅲ区では掘立柱建物28棟・井戸２基・土坑・溝が検出された。なお、建物のうちでＳＤ58として報告した遺構は建物の基礎痕跡と考えるので、これもあわせて建物の項で紹介する。

掘立柱建物

ＳＢ63・69（図版60）

Ⅱ区の東端で検出された建物で２棟が南北に並ぶ。ＳＢ63は２間×３間の総柱構造の東西棟で、桁行6.6ｍ、梁行4.0ｍを測る。柱並びは均等ではなく、全体にやや台形のプランを呈する建物である。ＳＢ69は東側が調査区外に伸びる。２間×２間以上の側柱構造である。いずれにしても２棟とも小型で簡易な建物と考えられる。

ＳＢ28・29（図版61）

重なって検出された建物でＳＢ28→29の順に建てられた。さらにＳＢ28以前に、もう一時期建物が存在した可能性があるが、重複が激しく規模などを明らかにすることは出来なかった。検出状況は西側の削平が著しく、柱穴が浅くしか検出できなかった。東側は比較的残りがよく、柱穴も深さ平均40㎝前後が残されていた。

ＳＢ28は東西８間×南北４間（18×8.5ｍ、面積153.0㎡、46.4坪）の規模を有する総柱建物である。柱間は桁行2.2ｍ、梁行2.0～2.2ｍを測る。柱の並びは良く揃っており、柱間もほぼ均等である。柱穴は大型のものが多く直径40～60㎝で、平面は円形ないし楕円形を呈する。Ｐ859・875・845などで柱芯が遺存していた。柱痕跡はほとんどすべての柱穴で観察できたが、その観察からすると、柱の直径は15～20㎝前後と推定される。

ＳＢ29は東西７間×南北４間（15.5ｍ×8.5ｍ、面積131.7㎡、39.9坪）の規模を有する総柱建物である。柱間は桁行2.2ｍ、梁行2.0～2.2ｍである。柱の並びは良く揃っており、柱間もほぼ均等である。柱穴は大型のものが多く直径40～60㎝で平面は円形ないし楕円形のものである。柱材が遺存した柱穴はＰ842・848・1345などがあるが、柱の面取りがわかるものはなかった。また、ＳＢ28同様に柱痕跡は多数の柱穴で確認することができた。この観察から柱の直径はやはり15～20㎝前後と推定できた。

ＳＢ28・29を中心として南にはＳＤ90、北側にはＳＤ92がそれぞれ位置する。これらの溝はＳＢ28・29を中心とする屋敷地の区画を意識したものと考えられる。さらに、西側にはＳＢ51と、この西側に柵があって屋敷の西境の役割を果たしている。

また、２棟が建つ敷地の東側には薄く炭混じりの焼土層が広がり、この焼土には土師器皿の細片も多数含まれていた。そして、この周囲の柱穴の埋土にも焼土が含まれ、土師器を中心とする遺物が出土するものが多く認められた。以上から、２棟の厨房機能を果たしたのは建物東側の焼土が広がる周辺ではないかと推測される。

ＳＢ51（図版62）

位置や検出状況から考えて、ＳＢ28・29に付属する建物と考えた。柱構造は３間×２間の総柱建物で、棟方向は南北棟となる。しかし、規模は梁行3.0ｍ、桁行3.8ｍ、面積11.4㎡の小型建物である。柱間は梁行1.5ｍ、桁行1.2～1.8ｍを測る。柱穴の直径は30～40㎝である。この他、この建物の西側にはＳＢ28・29を中心とする屋敷域を区画する柵が配置される。

ＳＢ57（図版63）

ＳＢ57・59・64の３棟が軒を接して並んで配置される。いずれも総柱建物でＳＢ28・29に平行して建つことから、これらに付属する建物と考えられる。

ＳＢ57は４間×３間の東西棟である。規模は梁行7.2ｍ、桁行10ｍ、面積72㎡を測る。柱間は2.4～2.5ｍである。建物の柱穴はおおむね円形で、直径30～40㎝、埋土には暗褐色シルトが充填されている。柱痕跡の観察から柱の直径は10～15㎝前後と推測される。柱間は広く2.4ｍ前後を測る。建物の内部東側には土坑（ＳＫ10）が付属する。このＳＫ10は方形の土坑状のもので東西4.3ｍ、南北2.8ｍ以上の規模を持つ。深さは0.2ｍで埋土は暗褐色シルトに炭を多数含む土砂が充填されていた。このような土坑はＳＢ３・４のＳＫ２と同じような機能をもったのではないかと考えられる。

ＳＢ59（図版63）

ＳＢ59は２間×３間の南北棟である。規模は梁行4.2ｍ、桁行7.5ｍ、面積31.5㎡を測る。柱間は2.4～2.6ｍ前後を測る。建物の柱穴はおおむね円形で、直径20～40㎝、埋土には暗褐色シルトが充填されている。柱痕跡の観察から柱の直径は10㎝前後と推測される。柱間は2.1～2.5ｍ前後を測る。

ＳＢ64（図版64）

ＳＢ64は４間×３間の東西棟である。規模は梁行9.6ｍ、桁行7.1ｍ、面積68.1㎡を測る。柱間は2.4～2.6ｍ前後で、北辺ほど並びが不均等になる。建物の柱穴はおおむね円形で、直径30～50㎝、埋土には暗褐色シルトが充填されている。柱痕跡の観察から柱の直径は10～15㎝前後と推測される。

ＳＢ78（図版63）

３間×４間の束柱が一部抜ける中抜け総柱建物である。規模は東西9.2ｍ、南北8.4ｍ、面積77.2㎡を測る。柱間は東西2.5～2.3ｍ、南北2.7～3.0ｍである。東側に束柱が集中し、西側が欠けることから、東側に床構造をもつ建物と考えられる。

柱間は東辺の１間分が1.8ｍと短いので、この部分は廂になる可能性がある。その他の部分の柱間や並びはほぼ揃う。平面形状もほぼ方形を呈している。

ＳＢ35（図版66）

ＳＤ58に接するように配置された東西棟である。２間×３間の中抜け総柱建物で、規模は梁行4.3ｍ、桁行6.8ｍを測る。柱穴は円形ないし楕円形で、直径は30～40㎝前後、柱間は梁行1.9～2.3ｍ、桁行1.9～2.7ｍである。建物の柱配置は北辺がやや歪になっており、隅部が矩形にならない。

ＳＢ88（図版66）

３間×２間の中抜け総柱で、建物の方向は南北を向く。規模は梁行5.2ｍ、桁行7.3ｍ、面積37.9㎡を測る。柱間は梁行2.0～3.2ｍ、桁行1.2～2.5ｍ前後と長短の差が大きい。建物の南側から中程までの範囲には雨落ち溝が検出できた。検出状況が悪く、北側では柱穴の深さが15㎝程度のみが残存していた。柱穴の埋土は灰色シルトで、耕作土直下で検出されたことから、時期的に新しい遺構である。

ＳＢ34（図版67）

東側に束柱を持たない３間×４間の中抜け総柱である。ＳＢ78と同様に束柱を持たない側が土間構造であったと思われる。規模は梁行6.8ｍ、桁行9.4ｍ、面積63.9㎡を測る東西棟である。柱間は梁行2.0～2.6ｍ、桁行2.0～2.4ｍである。検出の状況からＳＤ58の下層になることがわかっている。従って、ＳＢ31・32・34・ＳＤ58のなかでこの建物が最も古い遺構となる。

ＳＢ31・32・68（図版67）

ＳＢ31・32・68の３棟が重なって検出された建物で、この３棟は東側の一部ないし大半が調査区外にのびる。全体を調査できなかったため棟の方向は不明である。特にＳＢ68は検出範囲が西辺の一部であるため詳細がほとんどわからない。ＳＢ31は２間以上×４間の総柱である。規模は梁行4.5ｍ、桁行8.5ｍ、面積38.2㎡以上を測る。柱間は2.0～2.1ｍである。ＳＢ32は３間×３間以上の側柱建物である。規模は東西6.5ｍ、南北6.9ｍ、面積44.8㎡以上を測る。柱間は2.2ｍである。

ＳＢ68は３間×２間以上の側柱建物である。規模は東西５ｍ、南北４ｍ以上、面積20㎡以上を測る。柱間は1.5～2.3ｍである。

ＳＢ85（図版62）

ＳＢ35とＳＢ88の間に検出された建物である。南側に検出されたＳＢ57とは接しすぎるため、同時併存が考えられない。また、柱穴埋土はＳＢ35とＳＢ88に近い柱穴が認められるめ、これらの建物に並んで建てられたものと考えられる。建物の規模は梁行3.9ｍ、桁行6.8ｍ、面積26.5㎡を測る。柱間は1.9～2.4ｍであるが、梁行の棟持柱が2.4ｍともっとも長くなる。

ＳＢ27（図版68）

ＳＢ28・29の南側、ＳＢ55・24・26・81に重なって検出された建物である。調査区の南寄りに位置する大型の建物で、規模は３間×６間の南北棟である。柱構造は一部に検出できなかったものがあるが、状況から総柱と評価したい。南側でＳＢ24・26、西側でＳＢ55、東側でＳＢ81などと重なって検出された。建物は南北方向に軸を持つ建物で、北側にはＳＢ28・29がある。

規模は梁行7.5ｍ、桁行16.8ｍ、面積126.0㎡を測る。柱間は梁行側には2.3～3.1ｍで、桁行側にやや広く2.5～3.0ｍを測る。ただし、梁行は2.6ｍ、桁行は2.8ｍ前後を基本的な間隔としているようである。

柱穴は円形のものが多く、直径は40～60㎝前後とやや小規模で、柱芯の観察から柱は直径15㎝前後であったと推測される。柱並びや通りはやや歪な部分も認められる。

ＳＢ30・55（図版69）

ＳＢ55はＳＢ27に重なって、ＳＢ30はその西側に位置する。いずれも側柱構造の東西棟である。ＳＢ55は２間×４間、梁行4.5ｍ、桁行10.5ｍ、面積47.5㎡である。柱間は梁行2.0～2.4ｍ、桁行1.2～2.5ｍである。ＳＢ30は１間×２間、梁行3.7ｍ、桁行5.4ｍ、面積19.9㎡である。梁行側の柱間は棟持柱の有無が不明なため詳細は不明である。桁行の柱間は1.2～2.5ｍとなる。柱穴は小規模で直径30～50㎝前後、形状は円形のものが大半を占める。

ＳＢ24・26（図版70）

ＳＢ27の南側に重なって検出された建物で両者とも束柱の一部が欠ける。

ＳＢ24は２間×４間の南北棟である。規模は梁行６ｍ、桁行8.7ｍ、面積52.2㎡である。柱間は梁行2.5～3.6ｍ、桁行1.7～2.5ｍと長短がある。

ＳＢ26は２間×４間、規模は東西6.5ｍ、南北6.2ｍ、面積40.3㎡である。柱間は2.1～2.3ｍである。東柱が東側のみに検出できたため、東側は床構造を伴う建物と推測される。ＳＢ24の南辺から西辺の一部にかけては西側から続く溝が付属している。

ＳＢ81・25（図版70・71）

この２棟は接して検出された。ＳＢ25の西辺はＳＢ81の東辺と柱穴が切り合う関係にある。柱並びや柱間は両者とも揃っているので、１棟の建物であった可能性が大きい。

ＳＢ25の北側は大半が近世の水田造成のために削平される。検出できた範囲は４間×３間、東西8.3ｍ、南北7.2ｍである。ＳＢ81は２間×４間の中抜けの総柱建物である。規模は梁行4.4ｍ、梁行9.5ｍ、面積41.8㎡である。束柱が１基検出できたが、そのほかには検出されなかったので、柱束の一部が抜かれる中抜け総柱建物である。

ＳＢ20（図版72）

調査区南端で検出された建物で、南東隅が調査区外に伸びる。上面が大きく削平されているため、検出できた柱穴は検出面から15～20㎝前後と浅い。２間×５間以上で、柱構造は側柱、棟の方向は東西棟となる。規模は梁行10.7ｍ、桁行4.5ｍ以上、面積48.15㎡以上である。柱間は梁行2.3～2.7ｍ、桁行2.0～2.2ｍである。

ＳＢ47（図版65）

調査区の西寄りＳＢ78の西側で検出された建物で、平面方形に近いプランをとる。検出状況は良くないが、明らかに部分的に束柱が存在しない中抜け総柱と考えられる。東西４間×南北３間で、南辺には束柱を伴い柱間も割合に均等である。規模は東西8.8ｍ、南北8.3ｍ、面積73㎡である。柱間は南側が2.2～2.4ｍで揃っているが、北側は2.7～2.8ｍを基調とし、広い部分では3.5ｍのところもある。

ＳＢ66（図版65）

棟方向は不明で、東西３間×南北３間前後の側柱建物である。規模は東西７ｍ、南北８ｍ、面積56㎡で、柱間は2.2ｍ前後である。

ＳＢ22（図版71）

井戸４の周囲に検出された建物で、規模は２間×３間の南北棟であるが、周囲の削平が著しく、一部の柱穴は残存しない。ただし、束柱は全ての部位に存在するので総柱と判断される。梁行4.1ｍ、桁行7.8ｍ、面積31.9㎡測る。柱間は梁行2.0～2.1ｍ、桁行2.5～2.9ｍである。また検出できた柱穴も浅いものが多い。

ＳＢ21・23（図版72）

ＳＢ23は２間×６間分が検出された建物であるが、東側は近世の水田開田時に削平され、詳細が不明となっている。規模は梁行4.5ｍ、桁行8.5ｍ、面積38.25㎡以上である。柱間は東西辺が2.2～2.3ｍ、南北辺は1.6～1.9ｍを測る。

ＳＢ21は３間×２間分を検出したが、削平のために南側が詳細不明である。検出範囲での規模は梁行4.4ｍ、桁行5.3ｍ以上、面積23.32㎡以上である。柱間は梁行2.1～2.3ｍ、桁行1.6～2.0ｍを測る。

ＳＤ58（図版84）

幅0.5～0.75ｍ、深さ0.2ｍ程の小規模な溝が四周を囲む。ただし、状況からこの遺構は建物の基礎の区画溝と考えられる。囲まれた内部では、確実に伴う柱穴はＰ1201のみと考えられる。溝で囲まれた範囲が建物の敷地であるが、削平されて詳細は不明である。

溝の南東隅にはＳＫ30が掘削される。但し、溝と土坑の埋土が異なるため、ＳＫ30はＳＤ58の会所ではないと考えられる。同じく、南東隅には、ＳＫ30の南にＳＫ31がある。こちらの方は埋土が溝に近いため会所的な同様の遺構の可能性がある。溝で囲まれた範囲の規模は南北10.9ｍ、東西9.5ｍ、面積103.5㎡である。

土坑

ＳＫ25・30・31・32（図版85）

ＳＤ58の南東隅に検出された土坑群である。ＳＤ58の建物と密接に関連する施設と考えられる。ＳＫ30は平面方形、南北2.5ｍ、東西2.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。ＳＫ31は平面隅円の方形で長軸を南北方向に持つ、長さ2.4ｍ、幅1.7ｍを測る。ＳＫ25は平面円形で直径1.95ｍ、深さ0.38ｍを測る。ＳＫ32は不定形で長さ1.55ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.25ｍを測る。

ＳＫ21（図版85）

ＳＤ20の西南隅に検出された土坑で、平面は長方形を呈する。規模は長さ2.15ｍ、幅1.6ｍ、深さ0.25ｍである。内部に角礫を充填していた。溝の隅部に検出されたことや、埋土が溝と同質であるため、溝の会所的な機能を果たした遺構と考えられる。

ＳＫ84（図版85）

ＳＢ88の内側に検出された土坑である。長さ1.3ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。埋土に炭を多量に含み土坑の両端に拳大の礫を据えている。この土坑はＳＢ35の内部に検出されたことからこの建物の生活痕跡と考えられる。

ＳＫ12・28・23・29（図版85・86）

これらの土坑はＳＸ６の北側にまとまって検出された。いずれも16世紀後半から近世の土坑である。ＳＫ12は平面長方形の土坑で、規模は長さ1.65ｍ、幅1.2ｍ、深さ0.23ｍである。ＳＫ28も平面長方形土坑で、規模は長さ1.95ｍ、幅1.5ｍ、深さ0.21ｍを測る。ＳＫ23は平面円形の土坑でＳＸ６に隣接して検出された。直径2.1～2.15ｍを測る。内部に礫を多量に投棄する。ＳＫ29は南北に軸をもつ土坑で、平面長楕円である。長さ2.65ｍ、幅1.45ｍ、深さ0.25ｍである。

ＳＸ２（図版86）

調査区の南東端に検出された土坑状の遺構である。平面プランは不定型、一部の壁を小規模な石積みで補強していた。この遺構の周囲にはＳＫ12・23などの土坑が検出された。検出状況からこれらの遺構は水溜や汚水処理のためのものと考えられるが、それぞれの性格をあきらかにすることは出来なかった。内部から出土した土器から、16世紀代の遺構である。遺跡の大半は15世紀で廃絶し、耕作地に変わっていったようであるが、わずかにこの遺構周囲から第２次調査ＳＫ１の周囲にかけて１６世紀から近世にかけて屋敷地が残るようである。

溝（図版90）

Ⅲ区の溝は様々な箇所に認められる。しかし、総じて小規模である。ここでは地区内の主要な溝について説明する。

ＳＤ65（図版90）

堀２に先行して居館域を区切った遺構としてＳＤ65がある。規模は幅1.5～2.5ｍ、深さ0.2～0.3ｍと浅い溝であるが調査区を横断して検出された。検出範囲での長さは60.5ｍである。

ＳＤ90・93（図版43）

ＳＢ28・29の屋敷地を区画する溝は、南側がＳＤ90、北側がＳＤ93である。両者とも建物の方向に平行して掘削される。ＳＤ92は建物の隣接箇所でくの字に折れていることなどを考えるとやはり建物の屋敷区画と考えられる。

ＳＤ20（図版44）

南端のＳＤ20は屋敷区画のための溝と考えられる。規模は幅0.6～1.2ｍ、深さ0.15～0.2ｍを測る。西側でＳＥ３周囲を囲み、一端はそのまま東に続き、調査区外に流れている。東側は開墾による削平のために段差を生じているが、元々は傾斜面で溝は連続して流れ、南側にＳＥ４を所有する屋敷区画があったと推定される。

井戸

ＳＥ３・４（図版79・80）

ＳＥ３は石組井戸である。堀方は平面円形で直径3.4ｍである。井戸の内径は0.98ｍで、深さ3.1ｍを測る。石組はやや中央部で膨らみ胴張り状を呈する。下端には胴木などは認められなかった。内部からは丹波焼の甕が出土している。

ＳＥ４は平面円形で直径1.28ｍ、深さ2.15ｍの素掘りの井戸で、底に礫を敷いていた。

池

池３（図版87）

調査区の南側ＳＢ27の東側で検出された窪地状の地形である。内部には須恵器を中心とする土器細片が含まれていた。用水を溜めるための池と考えられる。池の部分は図版中央の窪地であるが、周囲は開田による開墾でかなり改変を受けている。内部からは土師器皿・堝、須恵器椀・皿・鉢などの磨滅した細片が多量に出土した。

規模は南北９ｍ、東西8.7ｍ、検出面からの深さ0.1～0.35ｍを測る。

第２節　第２～４次調査・小坂遺跡の調査

１．第２次調査

第２次調査のうち、１次調査の東に沿った地区については前述の報告のなかで述べたとおりである。ここでは、南端の部分について報告しておきたい。この範囲では中世後半期の16世紀代の遺物少量と、近世の遺構を検出した。近世の遺構としてはＳＫ１がある。この他、近世に下る柱穴や、土坑状遺構をいくつか検出した。また、包含層内には中世・古代の土器も出土している。このため、もともとはこれらの時期の遺構が存在したと思われるが、大半が近世遺構の削平によって失われたと考えられる。

ＳＫ１（図版44）

全面調査に接した調査区南側で検出された土坑である。この地区は近世遺構が主体である。周辺は浅い落ち込みや溝が数基みられるが、明確な遺構は検出されていない。唯一遺構の性格が確認されたのがＳＫ１である。

ＳＫ１は、不定の円形で長径0.9ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.15ｍを測る。埋土は地山混じりの黄灰色のシルト質細～中砂である。埋土には炭を含み、底部分には繊維質の有機質の断片がみられた。底の形状は中央部が僅かに深いものの、平坦になっている。埋土中位（底に接していない）から遺物が出土している。土師器皿（659）に６枚（Ｆ５～Ｆ10）の銭貨が入れられており、僅かに離れて鉄器が１点出土している。土師器皿は通常の型作りの皿でやや小型である。その内側中央から少し南東にずれて６枚の銭貨が埋納されている。銭貨はすべて寛永通寶で背文はみられない。新寛永で、６枚は束ねられていた。並べ方は出土状態の上面から「表・表・裏・裏・表・裏」となっていた。孔内以外にも繊維質の有機質の断片がみられたことから、布で包まれていた可能性が考えられる。鉄器は刀子である。これらの状況からみて、近世墓と考えられる。二郎宮ノ前遺跡では近世の確実な例である。周辺でも六文銭の出土例は他地域に比べて少なく、六文銭の好例となろう。

２．第３・４次調査

第３・４次調査でも中世の柱穴が多数検出された。しかし、調査区の幅が限定されているため、建物に復元できるものはなかった。また、北端では堀１・ＳＤ１・４・15の東側の続きが検出された。これらの遺構については第１次調査の項で報告したとおりである。

３．小坂遺跡の調査

第１次調査に隣接する西斜面の調査である。柱穴５基が検出されたが、周囲は竹林などによる開墾が著しく、遺構の残りは良好ではなかった。しかし、この斜面に中世の集落域が広がっていることが明らかとなった。

第３節　第１次調査の中世遺物

二郎宮ノ前遺跡で出土した中世の遺物には土師質の皿・堝・羽釜、須恵器皿・椀・捏鉢・甕・壺、瓦器皿・椀、陶器の丹波焼擂鉢・壺・甕、瀬戸・美濃焼碗・天目碗・鉢・皿、備前焼擂鉢、磁器の中国産の白磁碗・皿・水注、青磁碗・皿、染付皿などがある。また、石製品では石鍋、硯、滑石製小型模造品、鉄製品では鏃・火打鎌・釘・不明品などがある。

この他、中世最末期～近世の遺物も出土しているが、少量であるため合わせて本項で報告する。この時期の遺物としては中国産の染付皿・唐津焼碗・皿、他に銅銭などがある。また、近世の遺物では丹波焼・三田焼の製品などがある。

なお、個々の遺物の記述は、出土遺構ごとに行い、そののちに包含層遺物について報告した。

１．中世Ⅰ区の遺物

今回の調査でもっとも多くの遺物が出土しており、全体遺物量のうちのほぼ2/3が本地区からの遺物である。ただし、その大半を占めるのが椀・皿を中心とする須恵器である。特に、ＳＢ２～５から園池周辺を中心とする範囲からの出土が多く、この周辺では堀や池などの埋没遺構の埋土などにも多量に須恵器が投棄されていた。

池・井戸（図版102・103）

池１（174～195）

池１から出土した土器には①埋土、②溜枡遺構、③護岸ないし池下層の３か所がある。

①は埋土ないし護岸から出土した土器、16点を図化した。174・175は土師器の堝である。どちらも全体の器形が不明であるが頸部でくの字に折れ、口縁端部を外方につまむ特徴がある。口径24.4～26.3㎝を測る。残りの個体はすべて須恵器である。176～180は皿で、いずれも器形が低い個体である。口径7.5～8.6㎝、器高1.5～1.7㎝を測る。椀181～185は器高が低い一群であるが、口径15.1～16.4㎝、器高4.2～5.7㎝である。173は体部がやや湾曲しながら立ち上がるが、その他はおおむね体部が外方に開き、直線的に立ち上がる。さらに、186・187は鉢で口径25.0～27.5㎝を測る。188は甕である。189は丹波焼の鉢で、口径31.0㎝を測る。口縁部が断面三角形で体部が直線的に開く個体である。口縁部外面がわずかに下方に垂下する。

②溜枡遺構から出土した土器は４点ある。須恵器鉢（190）・椀（191・192）、滑石製石鍋（Ｓ７）である。椀は口径16.2㎝で①に共通する特徴を持つ。石鍋は口径20.5㎝で口縁部直下に断面台形の鍔を持つ個体である。破断面の一部に工具による切断面を残す。

③は須恵器椀２点（194・195）、土師器羽釜（193）がある。椀は2点とも底部片で、底径がやや大きく、高台痕跡はなく、内面に段なども認められない。195は外面底部周辺に墨書を施す。羽釜は口径20.2㎝で内面を板ナデ調整している。

池２（196～208）

池２から出土した土器は少量である。出土遺物はできる限り図化した。すべてが埋土からの出土であるが、深度の浅い遺構であるため取り上げ時に前後の時期のものが混入している。

土師器皿（196）や須恵器皿（197）・椀（198～203）・鉢（204）、中国産白磁（207）などが池と同時期

の遺物と考えられる。土師器皿は口径8.0cm、器高1.2cm、須恵器皿は口径7.9cm、器高2.3cmとやや背高になる。椀は口径16.6～18.6cmで、高台付椀203は口径14.7cm、器高5.5cmである。鉢は口径17.4cm、器高5.9cmである。瀬戸の卸皿208は15世紀代のもので底部に卸目を格子状に施す。底径8.9cm。須恵器壺片205・206は10～11世紀の製品である。208は池南端で出土したもので、中世Ⅱ区周辺からの混入が考えられる。

ＳＥ１・２（209～213・Ｆ1）

２基の石組井戸から出土した土器は少量である。図化したのはＳＥ１が須恵器椀の２点（209・210）、ＳＥ２が土師器羽釜（211）、須恵器鉢（212・213）、鉄製品の鎌（Ｆ１）の４点である。

ＳＥ１出土の210は底部に墨書が認められる破片である。209はやや高台部が明瞭にわかる個体で、口径14.2cm、器高4.4cmを測る。体部が丸みを持ちながら内弯して立ち上がる個体である。

ＳＥ２から出土した211は口径22.6cmと小型で、緻密な胎土をもつ個体である。212・213は口径22.6～28.2cmでややうすい器壁をもち、口縁部端部を肥厚させない個体である。211の羽釜は14世紀代に下る遺物である。

掘立柱建物（図版104）

掘立柱建物から出土した土器は多くはない。出来るかぎり図化したが、大半の建物の時期が明らかにできる出土量ではなかった。

ＳＢ１（219）

Ｐ559から土師器皿219の１点が出土した。口径8.3cm、器高1.7cmを測る。手づくねの皿で底部から体部にかけて丸く立ち上がる。

ＳＢ２（214～217）

Ｐ191（215）・278（214）・269（216）・264（217）からそれぞれ須恵器皿が、Ｐ403からは須恵器椀（218）が出土している。皿は口径7.8～8.0cm、器高1.0cm前後でいずれも器高が低い。椀218は口径16.2cm、器高4.3cmで、外方に開く体部で口縁端部は丸くおさめる。

ＳＢ３（220～222）

Ｐ259（220）から土師器小皿、Ｐ315（221・222）から須恵器椀が出土した。土師器皿は体部に指頭痕跡を残す個体である。内面に省略したミガキをわずかに観察できる。

ＳＢ４（223～225）

Ｐ308（223）から須恵器椀、Ｐ541から須恵器椀（224）、土師器堝（225）が出土した。椀は口径14.8～15.4cm、体部が直線的な個体である。堝は口径22.0cmで端部を外方の折るが、頸部は直立する。

ＳＢ５（226～228）

Ｐ535（226）から須恵器皿、Ｐ527（227）から須恵器椀、Ｐ206から青磁碗（228）が出土した。226は口径8.1cm、器高1.3cm。227は口径16.8cm、器高4.7cm。青磁碗は口径15.7cmの蓮弁文碗である。

ＳＢ17（229・230）

Ｐ89（229）・Ｐ48（230）で須恵器椀が出土した。229は口径15.8cm、器高5.6cmである。体部中位でやや屈曲の認められる個体である。

ＳＢ18（231～233）

Ｐ394（231）・Ｐ588（232・233）から須恵器椀が出土した。これらの椀は口径14.7～17.1cm、器高4.4～5.0cmである。

ＳＢ19（234）

Ｐ600（234）から土師器皿が出土した。磨滅の著しい個体であるが、ナデは体部中位より上方に施すようである。口径13.4㎝、器高3.2㎝を測る。

柱穴出土遺物（235～241）

建物に復元できなかった柱穴から出土した遺物については、特に、ＳＢ２・３に関連するものと、礎石建物に関連する柱穴から出土した遺物を図化した。図化した遺物の出土遺構は次の通りである。Ｐ386からは須恵器皿237・椀239、Ｐ259からは土師器皿235、Ｐ261からは土師器皿236、Ｐ277からは須恵器椀238、Ｐ389からは須恵器椀240、Ｐ252からは須恵器椀241が出土した。また、礎石建物に関連する柱穴と考えられるＰ94からは須恵器椀242が出土した。これらの遺物の法量は須恵器皿が口径7.9㎝、器高1.5㎝。椀は13.8～15.2㎝、器高4.4㎝。土師器皿は口径11.0～13.1㎝を測る。

土坑（図版105・106）

ＳＫ２（243～251）

埋土の中に多量の土器小片が含まれていた。大半が須恵器椀・皿である。図化したのはこのうちの９点である。土師器皿（243・244）、須恵器皿（245～247）・椀（248～250）・鉢（251）などがある。各器種の法量は土師器皿が口径8.6～10.8㎝。須恵器皿が口径8.1～8.5㎝、器高1.5～1.8㎝。椀は口径15.6～15.7㎝、鉢は口径30.6㎝をそれぞれ測る。

須恵器の椀はいずれも体部が直線的で外開き気味。高台内面には段はなく、胎土もやや粘性に欠けるものである。まれにやや大きめの礫を混入するなどの特徴がある。鉢は口縁部片でやや断面に肥厚が認められる。口縁部の内面の一段下がったところがやや凹線状に窪む特徴をもつ。

この他、検出中に上層より出土した土器として丹波焼甕２点（252・253）がある。252は口径31.4㎝、253は口径29.1㎝、器高30.1㎝を測る。この2点は甕の口縁部が外方に折り曲げられるが、既にＮ字状口縁の痕跡を残さない。さらに252ではわずかに口縁内面に凹線状の沈線を残すのみである。この２点は15世紀以降に下る製品である。

253の破片の1部が堀１から出土したことから、堀１の埋没年代は15世紀代に下る。また、この２点はＳＫ２の他の遺物よりかなり下るため、土坑埋没後の整地土に含まれた遺物と評価できる。

ＳＫ５（254・255）

土師器堝１点（255）と皿２点が出土した。皿はうち１点（254）を図化した。口径9.4㎝、器高1.7㎝を測る。堝は頸部と体部の直線的な個体で、タタキが体部のみに認められる個体で、口径21.6㎝、器高15.0㎝を測る。土師器皿は手づくねの製品である。

ＳＫ９（256）

池３の上層で検出された土坑であるが、内部から須恵器鉢１点（256）が出土した。内面に使用痕跡が顕著に残る個体で、底径5.7㎝を測る。

ＳＫ６（257～268）

ＳＫ６から出土した土器には土師器小皿（257～262）・中皿（263・264）、瓦器椀（265）・皿（266）、須恵器皿（269～292）・椀（293～319）・鉢（267・268）がある。

各器種の法量は土師器小皿が8.2～8.8㎝、器高1.2～1.4㎝。中皿が12.1～13.1㎝、器高2.5～2.8㎝。瓦器椀が口径13.5㎝、器高5.7㎝。皿が口径8.8㎝、器高1.7㎝。須恵器皿が口径7.1～8.7㎝、器高1.1～1.8㎝。椀

が口径15.2～17.5cm、器高4.1～6.6cm。鉢19.0～28.1cmである。

堀・溝（図版107・109）

ＳＤ１（320～334）

ＳＤ１から出土した土器には土師器皿（320）、須恵器皿（321～324）・椀（325～332）・甕（333・334）がある。土師器皿は体部を２段ナデするもので口径12.8cm、器高2.6cmである。須恵器皿は口径7.6～8.7cm、器高1.1～1.4cmである。椀は口径14.9～15.9cm、器高4.6～5.2cmで、総じて器高が低い個体である。330は口縁端をやや内傾させている。甕は口径29.0～43.9cmで口縁部のつくりは厚手になる。

ＳＤ４（335～343・Ｓ8）

ＳＤ４から出土した遺物には土師器甕（335）、瓦器椀（336）、須恵器皿（337）・椀（338～341）・鉢（342）、青磁碗（343）と石鍋（S8）がある。

土師器甕は体部をくの字に折り、口縁端部を外方につまむ。口径24.3cmを測る。瓦器椀は踏ん張る高台を有する個体であるが破片のため詳細は不明である。口径12.4cm、器高5.8cmである。須恵器皿は口径8.1cm、器高1.3cmを測る。椀は口径14.3～17.6cm、器高4.0～6.6cm。鉢は口径32.8cmを測る。口縁部が肥厚しない個体である。青磁碗は口径15.0cmである。石鍋は切断面の残る破片で何かに転用しようとした可能性がある。

ＳＤ６（344～349）

ＳＤ６から出土した遺物には土師器皿（344）、須恵器皿（345・346）・椀（347～349）がある。土師器皿は口径8.3cmで手づくねで底部に指頭痕跡を残す。須恵器皿は口径7.2～7.9cm、器高1.3～1.4cm。椀は口径15.2～16.0cm、器高3.7～4.6cmである。

ＳＤ７（379～398）

ＳＤ５から出土した遺物には土師器小皿（379・380）・中皿（381・382）・甕（383）、須恵器皿（384～387）・椀（388～395）・鉢（396～397）・甕（398）がある。

土師器小皿は口径8.2～8.5cm、器高1.1～1.2cm。中皿は口径11.8～12.4cm、器高2.0～2.6cm。甕は口径27.8cmである。甕は内面にハケの痕跡がわずかに観察される。須恵器皿は口径7.1～7.6cm、器高1.0～1.5cm、底径4.1～5.0cm。椀は口径15.1～15.9cm、器高4.3～4.6cm。鉢は口径29.0～30.7cmである。椀は体部が直線的に立ち上がるものがやや多い。

堀１（399～404・Ｓ9）

堀１から出土した遺物には瓦器椀（399）、須恵器皿（400）・椀（401・402）・鉢（403・404）、石鍋（Ｓ９）がある。各器種の法量は瓦器椀が高台径7.6cm、須恵器皿が口径7.7cm、器高1.4cm・椀が口径15.6cm、器高4.3cm・鉢が口径27.4～29.0cmである。須恵器鉢403は口縁部が肥厚し、縁帯状になっている。404は口縁部が肥厚するが上下の拡張は認められない。瓦器椀は内面底部に暗文が観察される。石鍋は底部片である。

ＳＤ１・４合流部（350～378）

土師器小皿（350～352・346）・中皿（353・354）、瓦器椀（355）、須恵器皿（356～361）・椀（362～375）・鉢（376～378）がある。

土師器小皿は口径8.5～8.7cm、器高1.3～1.5cm、中皿は口径11.6～15.8cm、器高1.7～2.1cm。瓦器椀は器表の磨滅した個体である。口縁部がやや内弯しながら立ち上がり、高台はハの字に開く。口径13.9cm、

器高5.4㎝である。須恵器皿は口径7.3～8.5㎝、器高1.5㎝前後、底径4.0～6.1㎝、椀は口径14.3～17.8㎝、器高4.2～4.9㎝、鉢は口径28.8～29.9㎝である。椀は体部が直線的に立ち上がるものがやや多いが、374は丸く立ち上がる体部を持つ。

包含層（図版110・405～432・S10・12）

包含層遺物は須恵器の椀・皿が大半を占める。ただし形式的に大きな差を認めがたいので、他の器種を中心に図化した。図化したのは土師器小皿（405・406）・中皿（407）、須恵器椀（411～415）・皿（408～410）、丹波焼甕（416・417）、常滑焼甕（418・419）、唐津焼皿（431）・碗（432）などの土器・陶器。中国産の白磁水注（429・430）、青磁皿（420～422・425・426）、碗（427・428）、白磁皿（423・424）などの磁器。石鍋（S10）、滑石製小型模造品（S11）、硯（S12）などの石製品である。

土師器小皿は口径8.8㎝、器高1.3～1.4㎝、中皿は口径10.3㎝、器高1.9㎝。須恵器皿は口径6.7～7.7㎝、器高1.2～1.7㎝、椀は口径15.1～15.7㎝、器高4.2～5.0㎝。丹波焼甕は口径19.3㎝、器高35.6㎝である。429・430は白磁の水注であるが、池１の周辺で出土した。429は口径10.0㎝で、やはり池1の洲浜からの出土である。また、白磁には423などのような切り高台の製品が含まれる。この他、常滑焼の製品は甕の体部片であるが体部に押印を施す。滑石製の小型模造品S11と硯S12も池１の洲浜周辺からの出土である。S11は長さ6.8㎝、幅3.8㎝である。S12は長さ5.7㎝、幅3.7㎝である。唐津焼皿432は砂目の目あとを残す個体で折縁皿となる。唐津焼碗432は口径11.2㎝で、両者とも近世初頭の製品である。石鍋S11は鍔が突帯状になり、口径11.2㎝を測る。第Ⅳ型式前後の製品と考えられる。青磁皿は口径10.3㎝、器高2.1～2.4㎝、碗は蓮弁文碗で14.8～15.3㎝、器高4.2㎝を測る。

２．中世Ⅱ区の遺物

中世Ⅱ区では堀２を中心に遺物が出土したが、近世～近代の水田の開発による上層の削平が著しいためか量的にはあまり多くない。また、Ⅰ区で見られた須恵器椀・皿が多量に投棄された状況は認められなかった。

土坑（図版111）

ＳＫ87（433～446）

須恵器椀（433～436）・鉢（437～441）・壺（444）、丹波焼碗（443）・小鉢（442）・甕（446）、備前焼擂鉢（445）が出土した。

須恵器椀は口径12.8～14.0㎝、器高3.8～4.5㎝、底径5.0～6.5㎝である。底径が大きく、体部が直線的に立ち上がり水挽き痕跡を顕著に残す。鉢は口径3.8～4.5㎝で、口縁部が肥厚した一群である。437・438・439は直線的な体部で、口縁外面がやや丸くなる。上方への拡張はまだ未発達であるが、下方へはやや垂下する。440は上方への拡張が進んだ個体で口縁部内面を強くナデる。441はしゃくれた口縁部をもち内面をナデる。丹波焼の小鉢は内面に窯印を描く。口径19.1㎝の小型品で、口縁端部を丸くおさめている。甕は口径39.3㎝で、折り曲げた口縁部を一度屈曲させる、Ｎ字状口縁の退化した形態を残している。類例としては稲荷山窯跡などに求めることが出来る。丹波焼碗は底部片であるが陶器質の焼成で赤褐色を呈する。高台周囲の状況や器壁が薄いことから丹波焼の製品と考えた。備前焼擂鉢は口縁部が上方に拡張し、外面が縁帯状をなす。口径31.0㎝を測る。備前焼Ⅳ期の製品である。

ＳＫ38（448）

瓦器椀（448）が出土した。直線的に立ち上がる体部で内面にミガキ調整を密に施す。口径14.2㎝。

ＳＫ39（449）

墓に副葬された遺物である。須恵器椀・土師器皿が出土した。このうち図化したのは須恵器椀449である。口径16.4㎝、器高5.3㎝、底径6.5㎝を測り、体部が直線的で底径がやや大きい個体である。

堀・溝（図版111～113）

堀２（452～491）

堀２の遺物については、まず堀の東側と西側に分け、さらに東側を①南辺の東、西側を②南辺の西と③西辺に分けて記述を進める。南辺と西辺のコーナー部分でまとまった出土量があったが、この部分については基本的には南辺に含めて報告している。

①南辺の東から出土した遺物には須恵器皿（452～454）・椀（455～464）・鉢（465・466）、常滑焼甕（469）、瀬戸・美濃焼碗（468）、中国産白磁碗（467）がある。

須恵器皿は底が厚手のもので体部が小さく立ち上がる特徴がある。口径6.8～7.2㎝、器高1.0～2.6㎝である。椀は底体部の境が湾曲しながら立ち上がるものが多く、器高がやや低い特徴がある。口径13.4～16.5㎝、底径4.3～6.5㎝、器高3.5～5.0㎝である。461は外面に墨書を施す。鉢は口径31.1～32.3㎝で口縁部の断面は三角形ないし上方に拡張する。椀464のみが体部が丸く立ち上がり、高台痕跡が明瞭に残る。鉢466は特に口縁部の上下の拡張が目立つ。外面をやや丸くナデる。

②南辺の西から出土した遺物には土師器小皿（470）・中皿（472）、須恵器皿（471）・椀（473～477）・壺（478）、丹波焼甕（479・480）がある。土師器小皿470が口径7.9㎝、器高1.6㎝、中皿472が口径11.2㎝、器高3.2㎝で体部を２段ナデする。体部中位で屈曲し体部下半から底部にかけて指頭痕跡を観察する。須恵器皿471は口径7.5㎝、器高1.4㎝で、椀は口径12.8～15.6㎝、器高3.9～4.7㎝、底径4.4～5.0㎝である。歪みのある個体が多いが、総じて体部は直線的で口縁部を丸く納める。丹波焼甕480は口径43.6㎝で、Ｎ字形を若干止めるが、479は口径36.9㎝でさらに省略がすすむ。

③西辺から出土した遺物には土師器塝（481）・須恵器皿（482）・椀（483～485）・鉢（486～489）、丹波焼壺（490）・甕（491）がある。土師器塝481は口径25.2㎝で、口縁部が直立し体部が丸く球になる個体である。タタキは頸部の直下に残る。須恵器皿482は体部が厚く器高が高い。口径7.6㎝、器高2.6㎝である。椀は15.1～15.7㎝、器高4.3～4.6㎝を測る。鉢は断面が四角形になるもの（486）、三角形になるもの（487）、肥厚し上方に立ち上がるもの（488・489）がある。口径は25.2～29.4㎝を測る。

丹波焼壺は数少ない出土遺物の1点である。490は口径27.8㎝で、口縁端部を尖らせておえる。甕491は口縁部をくの字に折り外方に引き出している。体部は肩部で大きく屈曲し、下半で再度小さな屈曲が認められる。外面は板ナデなどによって成形痕跡を粗く消すが、部分的に粘土紐接合痕が確認される。口径39.6㎝、器高55.6㎝、底径23.5㎝、胴径59.0㎝を測る。

ＳＤ65（447・451）

遺物の出土は少量で、図化しえたのは須恵器椀２点（447・451）のみである。447は小さな底部をもち、体部が直線的に開く個体である。口径15.1㎝、器高4.3㎝。451は高台付椀である。他の遺物も須恵器椀の破片が大半を占める。

ＳＤ110（450）

須恵器椀１点（450）が出土した。口径11.7㎝と小型の椀であるが、高台が明瞭で内面底部は落ち込み状の窪みが認められる。

掘立柱建物（図版114）

柱穴出土の遺物は全体的に少量であるが、建物関連の遺物出土はなお少数に止まった。建物関連の遺物については図化可能なものを出来る限り図化した。その他の遺物については必要なものに限定して図化している。

ＳＢ62（493）

Ｐ2043から丹波焼碗（493）が出土した。底径6.3㎝で、色調は赤褐色で堅緻な焼成で、薄い器壁を有する個体である。

ＳＢ72（494）

Ｐ2585から土師器中皿（494）が出土している。口径16.2㎝、器高2.3㎝を測り、体部上半は２段ナデ、底部には指頭痕跡を残す。

ＳＢ101（495）

Ｐ2393から須恵器鉢（495）が出土している。口径29.0㎝で、口縁部はやや上方に拡張が認められる。

ＳＢ102（496・497）

Ｐ2349から須恵器皿（496）が出土した。口径7.8㎝、器高2.1㎝を測る。器高の高い個体である。Ｐ2349から瓦器椀（497）が出土した。口径15.7㎝、器高5.2㎝を測る。体部が丸く立ち上がり、内面にミガキ調整を施す。

ＳＢ14・16（498・499）

ＳＢ14のＰ2802から須恵器椀（498）が出土した。口径14.0㎝で体部がやや丸く立ち上がる。ＳＢ16のＰ2719は須恵器高台付の椀（499）で体部下半の破片である。

柱穴出土の遺物（500～502）

柱穴から出土した遺物には以下のものがある。Ｐ2776からは土師器甕（500）が出土した。口径27.8㎝、内外面にハケ調整を施す。Ｐ2724からは土師器羽釜（502）が出土した。口径23.0㎝で、口縁部直下に鍔を持つ。Ｐ2747からは須恵器椀（501）が出土した。口径15.5㎝、器高4.9㎝である。このうち、Ｐ2747はＳＢ14・16に関連する柱穴である。

包含層（図版114・115・503～533）

包含層から出土した遺物は、Ⅱ・Ⅲ区の境付近で出土したものが多い。この内、丹波焼の鉢（503～508）はＳＤ58北側の礫混じり層から出土したもので、ここでは他の包含層と分けて報告した。

503は鉢で井根口遺跡（篠山市）などで出土しているものに類例が認められる。口径23.4㎝、器高7.1㎝、底径16.2㎝を測る。504～508は擂鉢である。口縁端部を断面方形に終える504、体部を直線的に開く505、内方に口縁端部をつまむ506～508がある。壺509は口縁部を屈曲させて内面に凹線状の窪みを残す個体である。口径17.5㎝を測る。

その他の包含層出土の遺物は以下のとおりである。土師器皿（510）・椀（511）・堝（512～515・518）・羽釜（516・517）、瓦器椀（519）、須恵器鉢（520）、丹波焼甕（532・533）、瀬戸・美濃焼碗（529

～530）・鉢（531）・天目碗（526・528）、中国産青磁碗（521・522）・皿（525）、白磁皿（523）、黄釉盤（524）などが出土している。

土師器皿は口径9.9㎝で、体部に指頭痕跡を残す。椀は内面体部が落ち込む個体である。511は内面底部の凹む個体である。堝はすべて口縁部の破片で、全体の器形を知れるものはない。518は体部が球形になる個体で、512～514もやや球形気味となる。515は口縁部から体部にかけて直線的になる個体である。口径18.4～22.3㎝である。羽釜は器壁が厚い個体である。516は口径22.0㎝で、517は口径23.8㎝である。その他の器種の法量は以下のとおりである。瓦器椀は口径15.0㎝、須恵器鉢は口径25.4㎝、青磁碗は16.1～16.4㎝、皿は劃花文を内面底部に施したもので口径11.5㎝、器高1.9㎝。黄釉盤は口径25.8㎝を測る。瀬戸・美濃焼天目椀は口径12.2～11.0㎝、器高6.3㎝。丹波焼甕は口径33.7㎝、器高42.2㎝である。また、瀬戸・美濃焼鉢は口径17.8～28.6㎝を測る。

3．中世Ⅲ区の遺物

中世Ⅲ区では土坑を中心に遺物が出土している。やはり上層の削平が著しく遺物出土量は多くない。また、Ⅱ区同様須恵器椀・皿など13世紀前半に伴う遺物が極端に少ない。一方で瀬戸・美濃焼の製品が一定量出土していることも留意される。

土坑・溝・池（図版116）

ＳＫ30（534～537）

土師器皿（534）・堝（535・536）、丹波焼壺（537）が出土した。土師器皿は口径9.8㎝で、体部下に指頭痕跡を残す。堝は体部から口縁部にかけて直立気味になる器形を持つ個体である。536は口径21.1㎝、器高15.4㎝。535は口径22.6㎝である。両者とも外面のタタキに粗いタタキが残る。タタキは体部では横方向で、底部は不定方向となる。タタキの範囲は頸部よりやや下で省略され、内面にはわずかにあて具痕跡が残る。丹波焼壺は数少ない個体の１つである。口径15.1㎝を測る。赤褐色の器表を持ち、外面は平滑にナデ調整する。

ＳＫ31（538～543）

土師器小皿（538）・羽釜（539）、須恵器椀（542）・皿（540）・壺（543）、丹波焼碗（541）が出土した。土師器小皿は口径8.1㎝、底部は糸切り底になる。須恵器皿は口径8.3㎝、器高1.7㎝である。椀は口径14.1㎝、器高4.4㎝である。壺は底部片で糸切り底になるものである。底部径9.5㎝である。羽釜539は口径30.4㎝で下方に垂れる小さな鍔をもつ。

ＳＫ25（545・546）

丹波焼碗（546）・須恵器甕（545）が出土している。丹波焼碗は口径13.8㎝、器高4.9㎝、底径5.8㎝である。硬質の焼きで体部は直線的に開き、口縁部付近で小さく内傾する。須恵器甕は口径18.8㎝で口縁部を僅かに屈曲させる。体部外面には綾杉文のタタキが観察される。

ＳＫ29（544）

土師器堝（544）が出土した。硬質の焼けで陶器質に近い。口径22.1㎝を測り、口縁端部を小さく外方に折り、頸部は直立気味に立ち上がり、体部はやや球形になる個体である。

ＳＫ84（552）

須恵器椀（552）が出土した。口径13.7㎝、器高4.5㎝、底径6.9㎝、底径が大きく杯に近い器形になる。

ＳＫ103・104（551・553）

ＳＫ103からは土師器皿（551）、ＳＫ104からは須恵器椀（553）が出土した。551の土師器皿は口径9.9㎝、器高2.7㎝で体部に指頭痕跡を顕著に残す個体である。この土師器皿は器形から14世紀代に下るものである。須恵器椀553は口径12.5㎝、器高4.5㎝、底径4.9㎝である。

池３（547～550）

須恵器椀（548）・皿（547）・鉢（549）・土師器椀の高台底部片（550）の４点を図化した。

須恵器椀は口径15.4㎝、器高4.9㎝で体部が丸く内弯しながら立ち上がる。皿は口径8.9㎝、器高1.8㎝である。鉢は口縁部片で口縁部がやや肥厚し、内面をナデて小さく窪む個体である。

ＳＤ20（556）

瀬戸・美濃焼の卸皿556が出土した。口径13.7㎝で口縁部に小さく内傾するかえりをもつ。卸目は縦横方向に施す。

ＳＤ21（557）

瀬戸の鉢557が出土した。口径16.3㎝で口縁部に内傾するかえりをもつと思われるが欠損する。底部は糸切りである。

ＳＤ58（554・555）

土師器皿554と須恵器椀555が出土した。土師器皿は体部に顕著な指頭痕跡を残す。時期は14世紀代に下る。須恵器椀は口径15.3㎝、器高4.2㎝、底径8.6㎝で、底径が大きく杯に近い器形になり、体部に水挽き痕跡を顕著に残す個体である。

ＳＸ２（558～561）

近世の遺構である。内部には紅皿558、青磁の水滴の蓋559、染付小碗560、扇面型皿561が出土した。559～561の３点は三田焼と考えられる。

井戸（図版117）

ＳＥ３（562）

ＳＥ３からは土師器羽釜562が出土した。厚手のもので鍔は短く断面台形のもので、貼り付け位置は口縁部の直下である。胴部を欠損するため全体の形状は不明であるが、全体に筒状の体部を有する個体と思われる。

ＳＥ４（563・564）

丹波焼の甕２点（563・564）が出土している。563は口径34.2㎝で体部上位でくの字に折れる器形である。564は口径43.2㎝、器高55.5㎝、底径23.8㎝と大型の製品である。両者とも肩部はなで肩で、口縁は外方に折り、小さく屈曲させる。外面は器表を丁寧にナデる。内面は板ナデやナデによって器面調整を施すものの粘土紐の接合痕跡などが顕著に観察される。

掘立柱建物（図版118）

ＳＢ28・29（565～573）

この２棟に関連して出土した遺物は土師器皿が中心で、図化したのは以下の９点である。出土した遺物の器種は以下のとおりである。Ｐ845・846から土師器小皿（565）、Ｐ841から土師器小皿（566・568）・中皿（568・569）・堝（570）・羽釜（571）、Ｐ868から土師器中皿（569）、Ｐ876から須恵器椀

(573)、P1065から須恵器椀（572）が出土した。

土師器小皿は口径7.8～8.7cm、器高1.1cm前後、中皿は口径11.8～12.7cm、器高2.0～2.4cm、土師器堝は口径22.0～28.8cm、須恵器椀は口径15.2～15.3cm、器高4.4～5.7cmである。

ＳＤ58（574～577）

P1097はＳＤ58に関連する建物の柱穴である。ここから出土した遺物には土師器中皿（574～576）、須恵器鉢577がある。中皿は口径10.9～12.1cm、器高1.9～2.1cm、小鉢は口径14.7cm、器高5.9cmである。

ＳＢ27（578）

ＳＢ27のP745からは土師器椀578が出土した。

ＳＢ21（579）

P689から丹波焼擂鉢579が出土した。口径29.8cm、口縁部を肥厚させる個体で、内面に1本描きの擂目、内面の口縁部直下にナデによって境線を施す。

ＳＢ31（580）

P1144から瀬戸産の天目碗580が出土した。口径11.7cmである。

ＳＢ32（581）

P1145から土師器中皿581が出土した。口径11.6cm、器高1.9cm、底部は糸切りの可能性が大きい。

ＳＢ59（582）

P1123から土師器中皿582が出土した。口径11.2cm、器高1.6cm、手の字状口縁の退化したものである。

柱穴から出土した遺物（583・584）

P1195からは土師器皿583、P1201からは須恵器椀584が出土した。P1195はＳＢ32に、P1201はＳＤ58にそれぞれ関連する柱穴である。

包含層（図版118・587～592）

Ⅲ区の包含層から出土した遺物は非常に少ない。図化できたのは8点である。この地区で特に量的に目立ったのは丹波焼である。図化した遺物は土師器が1点、丹波焼が4点、須恵器が1点、中国産の磁器が2点である。

丹波焼には皿（587）・擂鉢（588）・甕（589・590）がある。土師器には羽釜（585）がある。口径21.4cm、上方に反る薄い鍔を有する。須恵器には鉢（586）がある。口径33.7cmで口縁部が肥厚し、縁帯が上方に立ち上がる。磁器は青磁（591）の底部片と染付皿の底部片である。青磁は13世紀代のものと判断されるが、染付は景徳鎮産（592）のもので16世紀後半代の製品である。

丹波焼皿は口径9.7cm、器高2.0cmである。擂鉢は口径27.6cm、口縁部を肥厚させる個体で、内面に1本描きの擂目、内面の口縁部直下にナデによって境線を施す。甕は口径26.5cm、器高31.4cmで口縁部を外方に折り、小さく屈曲させる個体である。

第４節　第２次調査の中世遺物

第２次調査ではコンテナ１箱分の遺物が出土した。大半の遺物が包含層出土で、遺構から出土したものはＳＫ１のみであった。これらの遺物のなかには比較的新しい16世紀～近世の遺物が多く含まれているのが特徴である。

ＳＫ１（図版121　659・Ｆ5～Ｆ10）

ＳＫ１からは土師器皿659・寛永通宝（Ｆ５～Ｆ10）が出土した。土師器皿は器壁がやや厚い個体で手づくねの皿である。口径9.1㎝を測る。寛永通宝はＦ５・10が半割れになる。

包含層（図版121　660～664）

包含層から出土した中世・近世遺物には土師器堝・瀬戸焼小碗・丹波焼鉢・須恵器椀などがある。土師器堝660は外面に格子目タタキを施す個体で口径23.6㎝、堝661は外面に平行タタキを施し、口径27.6㎝を測る。両者とも16世紀末の製品である。須恵器椀662は口径15.9㎝、器高4.2㎝を測る。瀬戸焼小碗663は口径11.7㎝である。

664は丹波焼鉢で口径は楕円形の歪みを持つ。長軸の口径は15.2㎝、短軸の口径は13.0㎝である。近世の製品である。

第５節　第３次調査の中世遺物

出土した遺物は多くが包含層のもので、遺構にともなう良好な資料は少ない。

１．柱穴（図版119　593・594）

Ｐ103から土師器皿（593）、Ｐ89からは須恵器椀（594）が出土している。593は底部糸切りで開き気味の体部を持つ。口径13.4㎝、器高2.3㎝である。594は体部に水挽き痕跡を顕著に残す。口径13.8㎝、器高4.4㎝、底径6.6㎝である。

２．溝（図版119　595～611）

ＳＤ36からは比較的まとまった遺物が出土している。土師器は小皿５点（595～597・601・611）と中皿３点（598～600）と羽釜602がある。小皿は口径8.6～10.8㎝、器高1.3㎝、中皿は口径13.2、器高2.1～2.7㎝を測る。小皿601・611は14世紀代に下る製品である。

須恵器皿は２点（603・604）がある。口径7.4・8.4㎝、器高1.5㎝を測る。椀（605～609）は５点がある。法量は口径14.2～16.0㎝、器高4.2～5.1㎝を測る。610は小型の須恵器甕で口径17.4㎝である。青磁碗612は蓮弁文碗である。口径16.4㎝で体部を直線的に開く個体である。

３．包含層（図版119　613～628）

包含層から出土した中世遺物には土師器堝（624）、須恵器椀（613）・鉢（622）、丹波焼擂鉢（614・615・617～620）・甕（621）、瀬戸・美濃焼碗（623）、中国産白磁碗（625・626）・青磁碗（627・628）などがある。

土師器堝624は口径20.6㎝で口縁部から体部にかけてすぼまるような器形で、口縁端部をが外反させる。須恵器椀613は口径14.4㎝、器高4.1㎝である。開き気味の体部から口縁部付近ををやや上方に折る。622は鉢である。ややしゃくれぎみの口縁になり、口径27.0㎝を測る。丹波焼擂鉢は大半が小片で全体の器形を知れるものは少ない。614は口径24.2㎝で、口縁部は断面四角形で肥厚せず、口縁部上面に面を持つ。615・618は底部片、616は体部片で一本描きの擂目を施す。617は口縁部を内傾させてつまむ。619・620は口縁部をナデてやや尖らし気味におえる。619は口径25.2㎝、620は口径27.6㎝である。甕621は口径25.4㎝で口縁部を玉縁にする個体である。瀬戸・美濃焼碗623は口径18.8㎝である。中国産の白磁碗625・626は白磁Ⅳ類の個体で、口径15.6・16.4㎝である。青磁碗627は中世のものであるが、628は近世に下る製品である。

第6節　第4次調査の中世遺物

1．柱穴・土坑（図版120　629～639）

Ｐ351から土師器甕629・630が出土した。口径20.0～24.0㎝で外面体部にハケ調整を施す。630では上方が縦ハケであるが、体部下半は横方向のハケ調整を施す。Ｐ350から土師器椀632が出土した。底部片で高台を残す。底径6.4㎝である。Ｐ318から土師器堝634が出土した。口縁部の小片で口径21.9㎝を測る。Ｐ357から土師器甕635が出土した。口径24.1㎝である。

土師器皿633は口径10.9㎝の口縁部片である。須恵器椀636は底部片である。須恵器椀639は口径13.9㎝である。丹波焼擂鉢637は口径28.3㎝で内面に1本描きの擂目を残す。

2．土坑・溝（図版120　636～650）

ＳＫ301から須恵器椀636が出土した。ＳＫ310から須恵器鉢638が出土した。口径22.7㎝で断面を丸く肥厚させ、上下に拡張する個体である。ＳＫ307から丹波焼擂鉢637が出土した。断面を上方に尖らせておえる個体である。ＳＤ301から須恵器椀639が出土した。口径13.9㎝、器高4.9㎝である。

溝から出土した土器で図化できたのはＳＤ301のみである。土師器皿640は底体部をくの字に折り、端部をややとがらせる個体である。須恵器椀は641～647の７個体が出土した。口径14.2～17.4㎝、器高4.4～5.3㎝、底径5.1～8.2㎝で、総じて体部が大きく開き気味で底部が大きめである。高台痕跡が認められるものや、内面底部に段を持つものはない。鉢は648・649の２個体を図化した。648は口縁部を下方に垂下させ、口径28.8㎝を測る。649は口縁部を上下に拡張し、口縁端を丸く終える個体である。口径30.4㎝である。丹波焼擂鉢650は口径30.4㎝で体部を開き気味に立ち上げ口縁部をやや直立させる。

3．包含層（図版121　651～658・Ｆ2～Ｆ3）

包含層から出土したもののうち土器は土師器甕（651）１点・堝（652）１点、須恵器椀（653）１点、丹波焼椀（654）１点・擂鉢（655・656）２点・壺（657）１点、唐津焼皿（658）１点の合計８点、この他、キセル（Ｆ2）・銭貨（Ｆ3・Ｆ4）の３点などを図化した。

各遺物の法量は土師器甕が口径19.1㎝、堝は口径25.2㎝。須恵器椀は口径13.8㎝、器高4.2㎝である。丹波焼擂鉢は口径17.3㎝・23.0㎝、壺は口径20.7㎝、唐津焼皿は口径10.7㎝をそれぞれ測る。

丹波焼碗は底部片であるが酸化炎焼成であることや、薄手で直立気味に立ち上がる体部を有することから丹波焼と考えた。擂鉢は口縁部をやや内傾気味に上方につまむ、体部は上半から弧状に丸く立ち上がる。唐津焼皿は胎土目の目跡を残す。

鉄器ははすべて近世の製品である。Ｆ２は煙管の吸い口、長さ5.1㎝、火皿の直径は1.6㎝である。Ｆ３・４は寛永通宝である。

第７節　鉄製品

本遺跡から出土した鉄製品は少量ですべて包含層からの出土である。種類は銅銭・釘・火打鎌・鏃・不明品などがある。ここに報告するのは第１次調査と第２次調査の出土遺物である。

火打鎌（Ｆ11）はⅠ区包含層出土である。長さ6.6㎝、最大幅2.3㎝を測る。鏃（Ｆ12・13）はいずれもⅠ区からの出土で、いずれも先端部を欠損する。Ｆ12は粗矢で、残存部は長さ5.2㎝、幅0.65㎝を測る。Ｆ13は残存部の長さ6.85㎝、幅1.27㎝を測る。

釘はＦ14～Ｆ21の8点を実測した。Ｆ14～17は１寸半、Ｆ18～21は大型のクギであるが、いずれも折れているため全長は不明である。全長の判る１寸半のＦ17で長さ5.2㎝である。

Ｆ22は不明品であるが、鋤先の断片である可能性がある。

第６章　二郎宮ノ前遺跡出土坩堝付着物の分析

掘立柱建物跡ＳＢ201の柱穴Ｐ103より出土した土製品（遺物番号121）は、その形状と付着物から坩堝と考えられる。保存処理にあたって、事前に金属器担当の岡本が奈良国立文化財研究所において、埋蔵文化財センター遺物処理研究室の肥塚隆保室長の指導と助言を得て、付着物の蛍光Ｘ線分析による材質調査を行った。

第１節　試料調査の方法

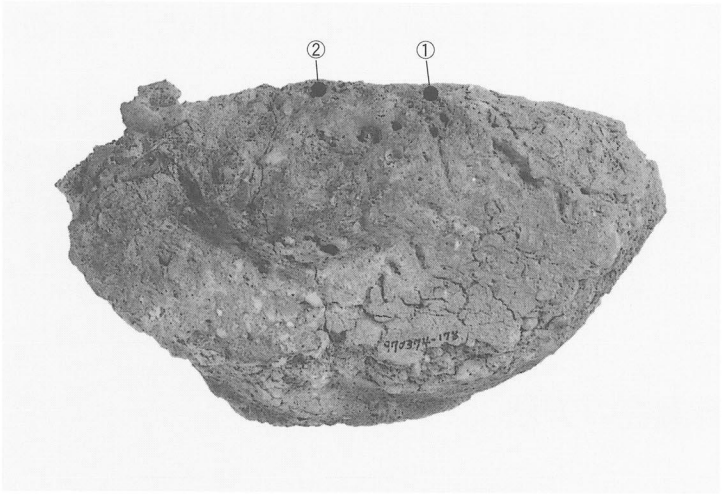
調査は、奈良国立文化財研究所において行った。試料が小さく表面の風化が進んでもろいため、エネルギー分散型微小点蛍光Ｘ線分析装置（株式会社テクノス社製ＴＲＥＸ650）を用いた非破壊による調査のみにとどめた。ターゲットはモリブデン（Mo）、管電圧45Kv、管電流0.3mA、測定時間200sec、コリメーターは1mmϕを使用し大気圧中で測定した。対象試料は坩堝の口縁部および内面の一部に集中的に盛り上がって付着している。対象試料の全体的な表面の色調は、赤色・緑色・黒色を中心に下方は白色を帯びた淡緑色などを呈しており、一部光沢がある。測定個所は、第11図の様に比較的風化の進んでいない表面の赤色・黒色部分の２箇所を選び、下記の条件で実施した。測定の結果は次頁に示した図の通りである。

第２節　分析結果

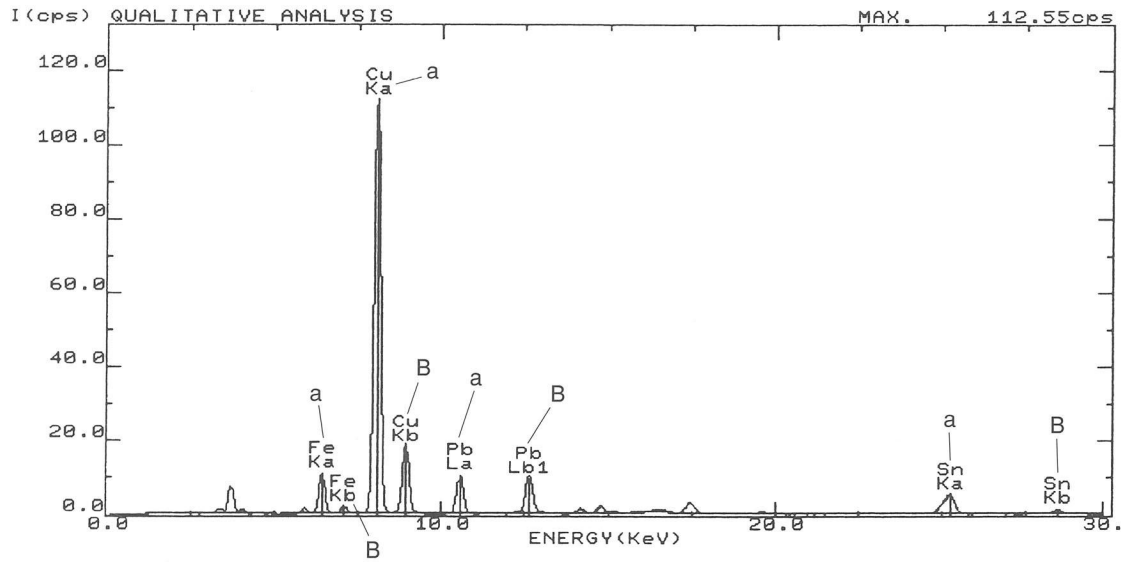
蛍光Ｘ線分析は、特徴として試料の形状や表面状態が良好な場合には、再現性のよい定量的なデータを得ることが可能であるが、今回の試料のような表面が風化した状態のものからは、元素の定量分析までは行うことはできない。しかしながら試料の構成元素の傾向から試料の材質の特徴を得るための定性分析には効果的である。

今回の分析では、色調の異なる赤色・黒色部分の２箇所を選び分析を行ったが、両者の大きな違いは認められなかった（第12図）。分析の結果、鉄（Fe）・銅（Cu）・鉛（Pb）・錫（Sn）などの元素を検出した。このことから、分析試料は、主に銅（Cu）と錫（Sn）を主成分とする合金、いわゆる青銅で、これに鉛（Pb）を含有していることがわかった。赤色部分は酸化銅（Cu_2O）であると考えられる。試料からは、他に鉄（Fe）もわずかに検出した。鉄については、試料が埋蔵されていた周囲の土の中に含まれていたものが、試料中に浸透したものであると考えられる。

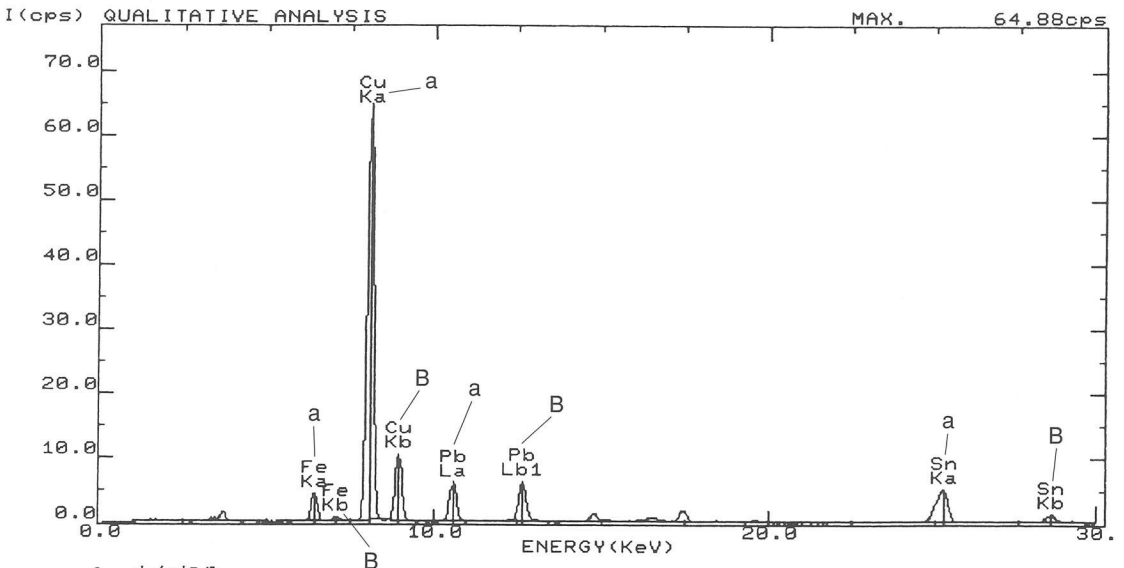
今回の分析値から青銅製品を造るための坩堝であり、スラッグが付着していることからガラス製品のための坩堝でないことが判明した。



第11図　坩堝全体像および測定箇所



1．黒色部分



2．赤色部分

第12図　蛍光Ｘ線定性分析スペクトル

第７章　まとめ

第１節　調査の概要と変遷

二郎宮ノ前遺跡は南北300ｍ、東西100～130ｍ、標高174～177ｍの段丘上に位置する。この段丘は南から北に向けて緩やかに傾斜する地形で、北端でやや平坦な地形（第17図のスクリーントーン部分）が広く展開する。一方、遺跡の東側は有野川に沿って延びるが、東端で２～３ｍ前後の段丘崖によって画される。

遺跡の旧地形は第13図の通りである。今回調査の対象となった地区は西側の丘陵斜面を調査した小坂遺跡を除くと、大半が段丘面上の水田である。水田は南側の緩傾斜地は１筆が小さいが、北側の居館が検出された周辺は高低差がなく、フラットな地形のため水田が大きい規模になっている。

また、遺跡の南西には丘陵から用水溝が引かれるが、この水源は第14図の谷地形と考えられる。第１次調査区では用水溝の下層が一部に検出できたが、用水溝が引かれた時期は中世ないし近世と思われる。この遺跡は15世紀以降確実に耕作地化が進んでいるので、これ以降、耕作地が維持ないし整備されたと思われる。第１次調査の南東端で検出されたＳＸ１・ＳＸ２などはこの耕作地経営のための施設と考えられる。いずれにしても15世紀以降は集落が廃絶し、居館の存在も忘れ去られた。現在の遺跡の字が竹であることも、遺跡の存在が全く記憶されなかったことを物語っている。第１次調査と第２次調査の南東端には僅かながら近世陶磁器を包含する遺構が認められたことから、集落の一部が近世まで段丘端に残された可能性もある。ただ、残念ながら今回の一連の調査は段丘端にはほとんど及んでいないため、この点については詳細に検討することが出来なかった。今後の調査に期待したい。

第13図　遺跡の旧地形

第14図　遺跡と南側の地形

また、遺跡の第１次調査区の内部では西側の丘陵裾に小規模な谷状地形が北に向かって形成される。この谷地形は古墳時代にはすでに存在しており、丘陵からの流水によって小規模な湧水を供給したと考えられる。集落の立地も谷地形の水を意識していたようで、古墳・古代の集落の立地や、中世の堀や池などの配置にその意図が読み取れる。

いずれにしても今回の二郎宮ノ前遺跡の４次に渡る調査によって、有野川に面した段丘地形に大規模な集落遺跡の存在が明らかになった。この集落遺跡は古墳時代後期～古代、中世の２時期を中心として営まれ、遺跡全域に稠密に遺構が検出された。検出された遺構は竪穴住居11棟・掘立柱建物106棟・礎石建物・池・堀・溝・土坑など多様なものが含まれる。また、出土遺物はコンテナ150箱分に相当し多様な遺物が出土している。

第２節　古墳・古代

１．出土遺物

古墳・古代の遺物は確実に古墳時代に属するものと、7世紀代～８世紀以降のものにわけて記述を行う。ただし、前者の遺物と後者の遺物の境界は必ずしも明確でない。一応の目安として平城京のⅠ期以降と以前で分けている。

出土傾向　古墳・古代の遺物は時期ごとに出土範囲が異なることはなく、ほぼ重なって出土している。その上、遺構内から出土した土器が少量であったため時期ごとの建物の詳細を知ることには若干の不安が残された。

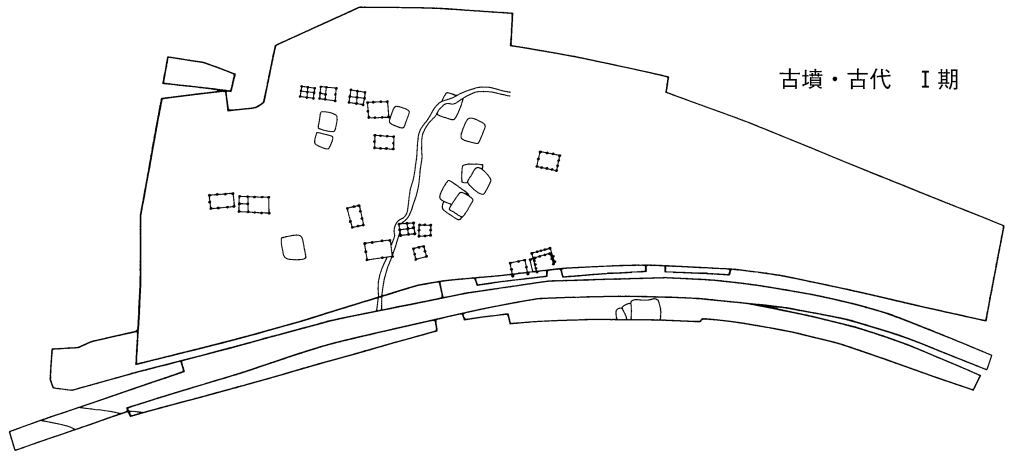
古墳時代～飛鳥時代の土器は116点を図化した。この内訳の比率は須恵器が104点と圧倒的に多く、土師器が11点と少量である。須恵器は坏類・高坏などの小型品が中心で壺や甕は少ない。一方、土師器は甕などの煮沸具が大半を占め、15の高坏なども混じっているが少量である。

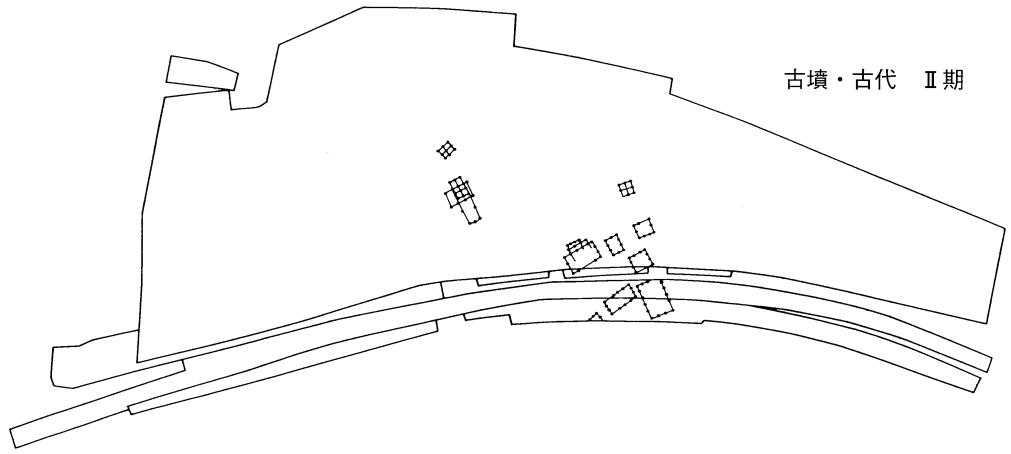
古代の土器は前述のとおり８～９世紀のものが中心で、緑釉碗など一部に10世紀に下る遺物がある。この時期の遺物も時期差をもっており、時期ごとにまとまった土器量がないため詳細な分析には困難が伴う。大まかな傾向は前代と同じく、比率は須恵器が圧倒的に多く39点、土師器が７点と少量である。また、須恵器は坏類などの小型品が中心でやはり大型品は少量である。一方、土師器も甕などの煮沸具が大半を占め、他には140・141のような坏などが少量認められる。この他、少量であるが弥生時代の土器・石器も出土している。

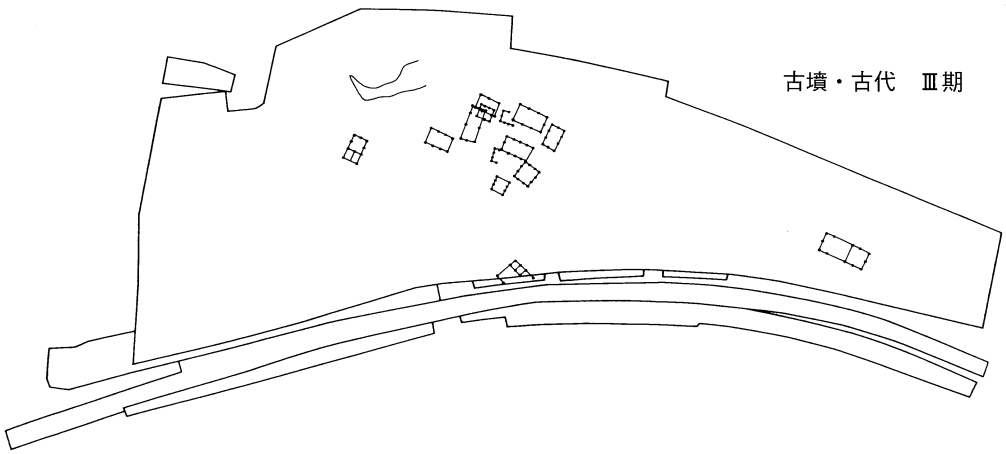
２．古墳・古代の集落の変遷

古墳時代の集落は竪穴住居が主流であるが、７世紀代前半には前述のように掘立柱建物と共存した時期があったと考えられる。また、西側の山裾の谷地形には湧水が流れていたと思われ、部分的には表層に小規模な水の溜まりや流れがあったと思われる。この湧水を確保するためにＳＫ68のような人工的な水溜やＳＤ93のような用水溝が掘削される。そして、比較的東側に建物が集中し、湧水を頼りに集落が形成されていった様子が窺われた。

竪穴住居は12棟で調査区の中央付近にやや集中する傾向がある。総じて小型の住居で平面は長方形を呈している。ＳＨ１・４などでは作り付けの竈を持つ。掘立柱建物も面積15㎡前後の小型ものが多い。







第15図　古墳・古代の変遷

ＳＢ41・202などは比較的大型であるが、このタイプの住居は調査区北東寄りの一群に集中する。

古墳・古代の集落の時期は、遺物からすると７世紀～10世紀前後と考えられる。ただし、このうち確実に10世紀に下る遺物は緑釉などごく少数のものに限られ、いずれも包含層出土のものである。このため、確実に検出した建物に伴っても良いと考えられる遺物群の時期は９世紀までと考えるのが妥当である。しかし、遺構出土の遺物があまりにも少量であるため、個々の建物の時期を詳細に知ることは不可能である。このため、今回は建物の切り合い関係と軸方位から集落の変遷を検討した。

集落を構成する建物には竪穴住居と掘立柱建物があるが、これらは重なるようにして検出され、多いところではＳＨ7～9、ＳＢ90・91・106のように５棟が重なって検出された。さらに建物方位も個々にはかなり差が認められる。このため、検出された遺構はすべてが同時に存在していないことが確実で、集落の存続期間中には何度も建て替えや、建物の移転を行ったことが推測される。

以上のことをふまえて建物の変遷を考えると第15図のような変遷が考えられる。以下、集落の変遷について検討を行う。

建物方位から各遺構を分類すると３グループに分けられる。①棟の中軸線が南北方向ないし、これに直行する東西軸に近いもの。②棟の中軸線が西に大きく傾くグループ。③棟の中軸線が東に大きく傾くグループ。以上である。

古墳・古代Ⅰ期

集落の開始期で、竪穴住居と掘立柱建物が共存した時期である。集落群の中央をＳＤ93が貫いて流れる。この溝を中心に建物群がやや点在して建つ。検出された遺構は第３・４次調査のＳＨ301・302を除くと、南側に限られる。竪穴住居はＳＤ93の北側にやや集中が認められ、同じ場所で複数回の建て替えが行われている。これに対して掘立柱建物はこれをとりまく外周に配置される傾向がある。小型で総柱構造になるＳＢ48～50とＳＢ33・36・70などは構造から倉と考えられる。

この時期は山裾の湧水を意識した立地となっている。また、用水溝（ＳＤ93）の開掘とともに、この時期のみ建物分布がやや拡散する特徴がある。

古墳・古代Ⅱ期

建物は掘立柱建物のみとなり、範囲が調査区の中央北東寄りに集中する。集落構成は総柱構造の倉と、側柱構造の建物で構成される。ただし、この集落群はさらに東側に続いており、全体を把握することは出来ない。側柱構造の建物には大型のＳＢ41・201と小型のＳＢ82・52・61などがある。側柱建物は第３・４次調査区に跨がって検出され、整然とした配置ではないが「コ」字状に近い配置をとる。この集落群に近接するＳＢ15は付属する倉である。他に、倉は柱間などからＳＢ41に重なるＳＢ42・43も含めて考えてよさそうである。

調査区中央にはやや離れて小規模な建物群が立地する。この内ＳＢ90・91・106は３期に渡って建て替えが行われ、西側の倉ＳＢ76とセットになる。この時期は集落が集中傾向にありコンパクトにまとまる特徴がある。ただし、この時期も同じ場所での複数回の建て替えが認められ、やや長期間の集落を観察している可能性がある。

個々の建物はＳＢ56など小型の側柱建物には平面プランがやや台形になる特徴がある。また、この時期の建物は、他の時期に比べ建物の軸方位が同じ方向を向き、配置を意識している点で興味深い。

古墳・古代Ⅲ期

掘立柱建物のみで構成され、調査区中央に集中して建つ。集落の集中する箇所は１か所であるが、Ｓ

Ｂ８のみが北端に建てられる。ただし、周囲にはこの時期の土坑ＳＫ１・４が検出されており、さらに複数棟の建物が周囲に存在していた可能性は十分残されている。集落の立地からするとこの時期も山裾の谷地形に流れる湧水を強く意識した集落構成に戻っていることになる。

建物の構成は全体に側柱建物が多く、大多数は住居と考えられる。束柱が検出されなかったが、小型のＳＢ75などは状況から考えて倉と思われる。ただし、これらを倉と考えたとしても倉の数は他の時期に比べるとやや少ない。またＳＢ75では柱穴の堀方が布掘り状に掘削されていた。

側柱で特徴的なのは、Ⅱ期のＳＢ201のように柱間が短く、整然とした柱配置になる建物はなく、側柱建物は柱間に2.７ｍとやや広めの間隔のものが含まれ、梁行が必ず２間となっている。柱穴は直径40～60㎝前後が多いが、ＳＢ８のように直径70～80㎝のものも認められた。

４．集落の時期と様相

集落は大きく３期に分けられ、それぞれに立地を変えながら変遷していることを検討した。Ⅰ期は竪穴住居の遺物の時期や掘立柱建物との混在から７世紀前半頃までと考えられる。Ⅱ期は集落の集中する調査区北東側周辺で７世紀末～８世紀頃の遺物を比較的多く検出したことから、おおむねこの時期を想定したい。Ⅲ期は倉の減少や、側柱建物の梁行が２間にかぎられる点から８～９世紀頃の建物群と推定した。ただし、この３世紀に渡る期間の間、継続して集落が存続していたかどうかについては、やや建物の検出数が少ないため、結論することはできない。

集落の様相は各時期によってそれぞれに違いを見せている。Ⅰ期は山裾の湧き水に頼りながら、やや多数の人々が集落を営んだ時期で、用水溝なども開削され、遺跡周辺の耕作地の開墾が開始された時期と考えられる。Ⅱ期は用水溝が廃棄されるにともなって、集落が北東に移動している。ただし、これは状況から考えて集落が小規模になったと評価するよりは、拡散的であった集落が建物群ごとにまとまる傾向を見せた結果ではないかと推測される。Ⅲ期は再び、山裾の湧水に依拠した集落が戻ってくる時期である。この時期もやはり、Ⅱ期と同じく遺跡全体に建物が小グループ毎に散在したと推測される。

第３節　中世

１．中世の遺物

中世の遺物は12世紀末～15世紀前半が中心で、遺構の変遷もこれに沿う。遺物量の比率でみると13世紀代の須恵器椀・皿の類が圧倒的に多い。以下、種別毎に土器を概観する。

土師器

土師器は皿・塝が圧倒数を占め、他に甕・椀などが出土している。

皿　皿には小皿と中皿がある。いわゆる手の字状口縁のものは582（ＳＢ59、Ｐ1123）のみである。小皿には手づくねのものと糸切りになるものがある。いずれも口径７～８㎝前後である。手づくねの小皿の器形は①大部分が比較的大きい底部から短い体部を持つもの、②ＳＫ５の254のようにやや開き気味の体部を持つものや、③510・534のように底部付近に指頭痕跡を残しやや器高が高くなるものがある。

中皿は口径10～12㎝前後である。いずれも手づくねで、口縁部をヨコナデないし外開き気味に立ち上げるものである。①口径11～12㎝で底部が大きく、口縁部を１段ないし２段にナデるもの（234・235・494）と、②口径10～11㎝で底部の比率がやや小さく、器高が比較的高くなるもので、特に体部下半に指頭痕跡が顕著なもの（236・381・382）の２種がある。①はさらに細分が可能と思われるが、資料は総じて残りが悪く詳細を明らかにできなかった。

①については、口径の大きなものがないこと、口縁部のナデが省略気味である事などから考えて13世紀代前半～中頃に該当する。

②は口径が小型化し、器高が低く、体部の指頭痕跡が顕著な一群である。明らかに①の退化形態と捕らえられる個体である。

煮沸具　煮沸具はすべて土師器である。塝・羽釜・甕がある。塝は口縁部に玉縁を持つもので、多くは体部が直立気味で（ＳＫ５の255・ＳＫ30の536など）一定量の出土をみた。

羽釜は様々なタイプを含むが出土量はいずれも少量に止まる。562（ＳＥ３）・516は厚手の器壁を持ち口縁部直下に台形の鍔を張りつける。193（池１）は口縁部が内傾し一段下がったところに小さな鍔を持つ。571（ＳＢ28・29、Ｐ841）・577も同じタイプの口縁部片と考えられる。

502（Ｐ2724）は球形の体部で口縁部直下に鍔を持つ個体である。539（ＳＫ31）は薄手の個体で小さな鍔を持つ。口縁部片であるが小片のため詳細は不明である。585は陶器質である。

甕は92（ＳＤ7）・320（Ｐ2776）・629・630の４点がある。全体の器形を知ることが出来る個体はない。外面にハケ調整を施し、内面はナデ痕跡を残すものが多い。

須恵器

須恵器は椀・皿が圧倒数を占めるが、ほかに鉢・壺・甕などが出土している。

椀　椀は口径11～15㎝前後のもので、器高が低く、体部が開き気味で直線的な特徴を持っている。内面底部を一段窪ませるものや、高台痕跡を顕著に残すものはほとんど認められない。これらの諸特徴は神出Ⅱ期第２段階(1)に併行するもので、概ね12世紀末葉～13世紀前半に比定される。

ただし、ＳＫ87出土遺物である433～436などの椀は他のグループと形態・焼成等の点で特徴を異にする。この一群は底径が口径に比してやや大きく、体部に顕著な水挽き痕跡を残す。焼成は還元炎で硬質な製品（ＳＫ87出土資料など）である。

②が出土する遺構は中世Ⅱ・Ⅲ区など14世紀以降の遺構から出土しているものが多い。

鉢　鉢には様々なものが含まれる。①口縁部が肥厚せず、断面が台形になるもの、②口縁部が断面三角形になるもの。③口縁部を上方に拡張し縁帯を形成するもの。④拡張した口縁部がしゃくれたような断面形となり、外面に面をもつものなどがある。神出窯の編年に従えば①が神出Ⅱ期第1段階、②が神出Ⅱ期第2段階、③が神出Ⅲ期第1段階に相当する。

最後の④の時期は14世紀後半～15世紀前半ころと推測される。

瓦器

本遺跡では瓦器出土は極少数に止まる。さらに、器表の残りが悪いものや小片が多く、ミガキなどの調整を細かく観察できるものは少ない。総じていえば、外面にミガキの認められるものがないこと、高台はしっかりと残っており痕跡のみを残す個体は認められない。これらのことからすると、概ね13世紀前半の遺物群が中心と考えられる。

丹波焼

中世の丹波焼は擂鉢・壺・甕・碗・羽釜などが出土し、ほかに近世の鉢1点がある。丹波焼の出土量は量的にまとまったものが出土している。ただし、出土した遺物は包含層出土のものが多く、時期を検討する材料には乏しい。

擂鉢　擂鉢は大きく5時期のものに分けられる。①口縁部の断面が方形になるもので、a内弯しながら立ち上がる650、b直線的に立ち上がる614、c口縁端を上方に向け、面を外面に向ける189の3タイプがある。

②は口縁部を内弯しながら立ち上げ、端部を尖らせて、外面を体部上半から丸くおさめるタイプである。655・656が代表例である。

③はやや厚手の器壁を持ち、口縁端部を内側につまむものである。506・617を代表例とする。

④は③と同じく口縁部を内側につまむが端部をまるくおさめるタイプである。507・508がある。

⑤は口縁部をやや尖らせておえるものである。619・620などが代表例である。また、579・588は口縁部内面に境線をもつ。

①は三本峠・井根口遺跡などに類例の求められるもので丹波焼の開始期に近い製品と考えられる。④はＳＫ87から出土した資料を典型例とするが、この資料には備前焼Ⅳ期の擂鉢が共伴しており、備前焼の時期から15世紀代と考えられる。また、有鼻遺跡（三田市）(2)の墓出土遺物にも同タイプのものがあるが、この遺物も15世紀代のものである。

⑤タイプの擂鉢は口縁部直下の圏線をもたないものが中尾城(3)・釜屋城（三田市）(4)・内場山城（篠山市）(5)などで出土しおり、遺跡の時期から16世紀に下ると考えられている。さらに、圏線を持つタイプの遺物は16世紀末の時期が比定されている。

甕　甕は井戸4・堀2などからの遺物があるが、大半が包含層出土である。

①Ｎ字状口縁の名残を残す417・480、②Ｎ字状口縁が退化して口縁部を屈曲させる446・479・491・563・564・589・590、③Ｎ字状口縁が退化して、口縁部内面に凹線を残す252などがある。さらに④253や621・533などは口縁部の屈曲の痕跡が全くなくなったものである。

甕では以上の4タイプが出土した。しかし、擂鉢のように初期の三本峠資料に近い製品は皆無であった。①～③のタイプは稲荷山窯に類例の求められるもので14世紀から15世紀にかけての資料とされている。型式的には①がＮ字状口縁の痕跡がまだ残るもので、三本峠北窯資料にもっとも近く、以下②・③の順で退化したと考えるのが妥当である。さらに、③タイプは有鼻遺跡の墓出土資料がある。これは前

述の擂鉢の④に併行し、時期は15世紀と考えられる。以上から出土した甕は①・②が14世紀で、③が15世紀でとらえられるようである。その他の器種には杯・羽釜・壺・鉢などが出土している。いずれも少数であるが、これらの製品は焼成が酸化炎で、硬質な製品で、他の器種に類似した胎土であることから丹波焼と考えた。杯は体部が直線的に立ち上がり口径10～11㎝前後とやや小型の製品である。鉢は503の2個体がある。いずれも、伊根口遺跡などで出土しているが、類例は少数の出土に止まる。出土時期は14世紀頃までのものが多い。

壺は416・490など数点しか出土していない。時期から考えて多量に出土してよい器種である。しかし、兵庫県内の消費地遺跡でも壺の出土数は少ない。509はN字状口縁の痕跡を残すもので肩が貼る個体である。416・490は口縁部のみの個体でN字状口縁の痕跡はすでになくなっている。

瀬戸・美濃焼

瀬戸・美濃焼の製品には鉢・碗・天目碗・卸皿などがある。出土した遺構にはSD66の東側で碗、SB31のP1144、Ⅲ区のSD20・21で卸皿、Ⅱ区包含層で天目碗・碗等が出土した。いずれも、中世Ⅱ・Ⅲ区に偏って出土しており、出土遺構の年代は14世紀以降のものに限られる。また、これらの遺物の年代は14世紀後半以降と考えられる。

磁器

実測可能なものは出来る限り掲載したが、磁器の出土量は全体に少量に止まり、白磁が少ない特徴がある。また、白磁には口禿げの口縁部をもつものは認められなったが、白濁し光沢を持った一群が混じっており、この一群のなかには切り高台を有する個体も含まれる。これらの一群は明らかに14世紀以降のものと考えられる。

石鍋

石鍋はすべて滑石製で口縁部付近の観察できる破片が3点あった。これらの破片は体部がやや内傾しながら立ち上がる点や、鍔の断面が長方形になる点などの特徴を有している。これらの点は木戸編年(6)では概ねⅢ—a類前後に該当するもので12世紀後半頃に盛行するといわれている。この他、滑石製品には舟形の小型模造品などがある。また、滑石製品には幾つかの破片で鋸様の切断面が観察された。遺跡内で廃棄された滑石製品が転用されていたと考えられる。

2．中世の集落の変遷

中世以降の遺物の検討から遺構は12世紀後半～19世紀代のものまでが検出された。しかしこのうちで遺構が調査区全体にわたって広がるのは13世紀～15世紀中頃に限定されるため、この時期が本遺跡の盛期と考えられる。ここではまず、遺構の中心時期である、13～15世紀の画期について触れ、各時期の遺構の変遷を辿ってみたい。

13世紀～15世紀中頃の遺跡の盛期の中で、遺物群を観察すると次の2時期に大きく分けられる。前期は須恵器椀が存在し、丹波焼や瀬戸・美濃焼などの国産陶器を共伴しない時期。後者は丹波焼や瀬戸・美濃焼が出土し、須恵器椀の出土が少量になる時期である。この2時期の遺構は調査区全域に渡って重なって検出されるが、概していうと前者は中世Ⅰ区、後者は中世Ⅱ・Ⅲ区に集中する傾向がある。また、遺物から得られたこの2時期の他、さらに遺構の埋土から分析すると、後者を2時期に分割できる。埋土が前者では概ね黒褐色シルトであるのに対して、後者は灰褐色～灰色シルトとなるのである。この2つの時期は調査区の中世Ⅱ・Ⅲ区の境周辺で見られた上層・下層の遺物の様相差にも対応しているため、

本遺跡の一応の基準となる。また、個々の遺構の切り合いや重なりからさらに後者の２時期をそれぞれ２分割でき、合計４時期が設定できる。このため、中世の遺構は大きく５時期に区分して変遷をたどることができる。

この５時期を古いほうからそれぞれ第Ⅰ～Ⅴ期と呼称する。以下、時期設定とその詳細を追ってみることとする。

中世Ⅰ期

９世紀に衰退した当遺跡が再び勃興する時期で、調査区全体に建物が点在して建てられる時期である。建物群を概観すると、全体的に並立して建物が分布する状況が観察される。また、それぞれの建物が小群を作りやや距離を置いて立地することから、古代と違って屋敷単位に建物群が形勢されていることがわかる。小群は南端からＳＢ24・26を中心とするもの、ＳＢ62・102を中心とするもの、ＳＢ18・19の周辺、ＳＢ１の周辺を中心とするもの。ＳＢ１周辺などのグループに分けられる。このうち、ＳＢ１や47は１棟のみで付属屋を伴わない。それぞれが屋敷地を形成していると思われるが、そのなかでも複数の建物を有するものともたないものの差がみられ階層差のあることが理解できる。また、ＳＤ15・68など区画や排水のためと思われる溝がいくつか認められるが、いずれも不完全で屋敷の敷地境を明確に示すものは存在しない。

ただし、屋敷地のなかでＳＢ18・19は大型の建物で２棟の面積を足すと228㎡となる。従って、並立しているといいながらも当期の集落内ではＳＢ18・19のように有力な屋敷地と規模の小さい屋敷地が混在することがわかる。ただし、建物構造や付属施設を詳細に検討すると、個々には大小があるが絶対的に優位な屋敷構えを有するものは存在しないのがこの時期である。

この他、この時期では池３を伴うが、この池は山裾の谷地形の湧水を流末で溜めるための用水池と考えられ、前代と同じ取水をおこなっていることがわかる。（ただし、遺構はＳＢ18・19に先行して機能し、2棟が存在する時期には廃絶していたと考えられる。）

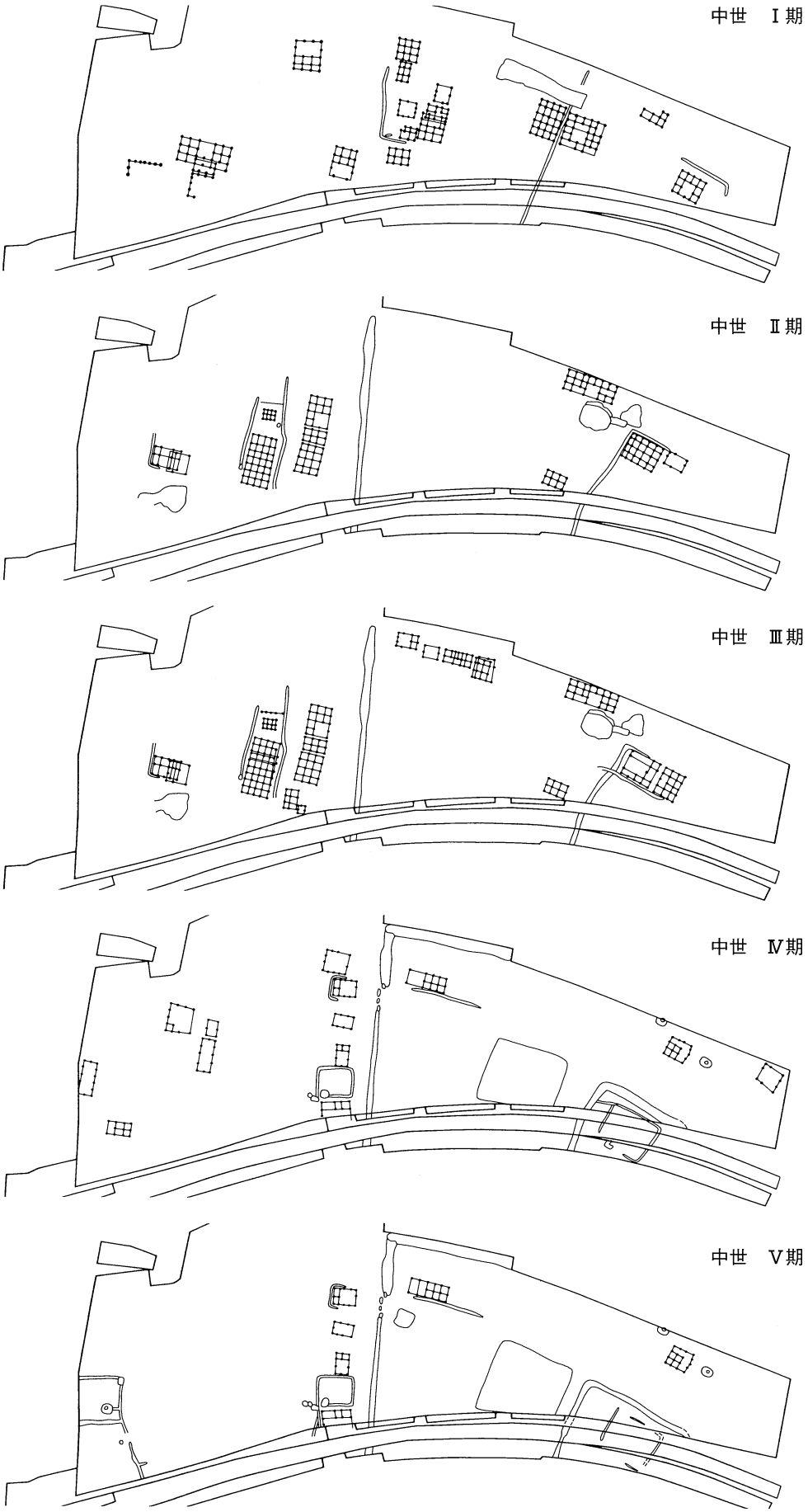
中世Ⅱ・Ⅲ期

有力な屋敷が２箇所に成立する時期である。ＳＢ２～５を中心に構成される屋敷とＳＢ28・29を中心とする屋敷がそれである。屋敷の中心建物である、ＳＢ27とＳＢ２・５の時期をⅡ期、ＳＢ28とＳＢ３・４の時期をⅢ期とする。さらに、両者の屋敷の間にはＳＤ65が掘削される。この溝によって２者は区画されるが、北側の屋敷は建物が北端の一角に限定され南側に広い空閑地を持つ。そして、方１町を越える大きい範囲を屋敷地として専有することとなる。このことから、専有面積の広さと、屋敷地を区画する施設の存在、さらに園池１を敷設する事実からこの屋敷地を本稿では居館と評価したい。

また、居館は占有面積だけではなく、立地からみても第17図でもわかるとおり、他の場所に比べてより平坦な地形がえられ、水を溜めるのにも有利な場所であるなど、遺跡の中心部分に位置していることがわかる。

居館の南側は建物がなくなり空閑地となるが、Ⅲ期には小型の建物が南西隅に並んで建つ。遺跡南側の中央は相変わらず空閑地で、やはり南側を居住以外の目的に使っていたことが理解される。

ＳＢ２～６周辺は今回２時期の建物のみを復元したが柱穴の重複が顕著で、さらに何時期かの変遷が推測される。これにたいしてＳＢ28・29周辺はさらに一回程度の建て替えの可能性があり、最大３回の建て替えが考えられるが、前者ほどの建て替えは考えられない。このことから、Ⅱ・Ⅲ期の全期間に渡ってＳＢ28・29が存続したのではなく、Ⅱ～Ⅲ期のある時期により早く廃絶の時期を迎えたとも考えら



第16図　中世の変遷

れる。

中世Ⅳ・Ⅴ期

南側のＳＢ28・29を中心とする屋敷が廃絶し、遺跡内は居館の独占状態になる時期である。この時期になると居館の居住域はやや東に場所を移動し、周囲を大型の堀１が区画する。建物は明確に検出できなかったが、おそらくこの内部に母屋に相当する建物が存在したと思われる。また、ＳＢ11・12のように部分的には礎石建物も登場しているようで、居住景観に変化が認められる。この時期には、区画施設の大型化がはかられ、幅３ｍを越す堀が登場する。具体的には堀１による中心部の区画の明確化と、外郭線にあたる堀２の拡充である。なお、堀２はＳＤ65よりやや北に場所を移し、さらに西辺も掘削される。この堀２については西辺の規模が大きく水溜としても利用されている。また、堀２の南辺には入口が設けられ、門構えを有していたことが確認された。

このような居住域とさらにその外周を囲む区画を有した居館は中世前期の居館にいくつか事例が認められ、この時期としては一般的な構造を有していると考えられる。

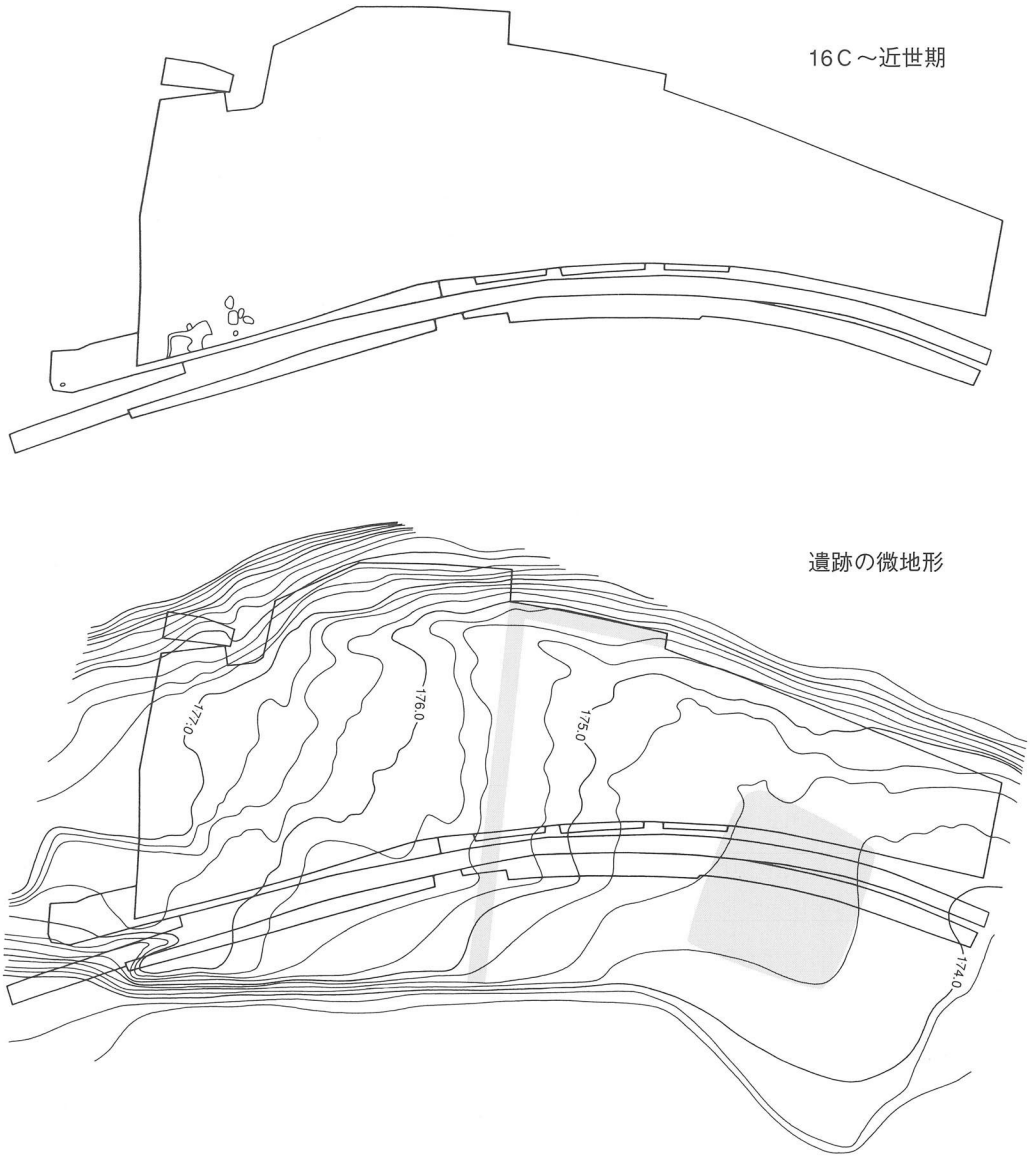
また、堀2の南側には小型の建物群が、堀に接するように並んで建っている。これらの建物は状況から居館に隷属すると考えられる。Ⅳ期ではこの南側に散在して小型の建物が認められるが、Ⅴ期では南東端に区画溝を伴う小規模な屋敷が登場している。

16世紀～近世期

居館や集落は他の場所に移動し、遺跡内は耕作地となった時期である。この時期には遺跡南東端にわずかに遺構が検出されるが、建物や屋敷地は確認されていない。

各期の時期

中世の各期は遺物などの検討から、おおむね次のような時期になる。中世Ⅰ期が12世紀末～13世紀前半、中世Ⅱ・Ⅲ期が13世紀中頃～後半、中世Ⅳ・Ⅴ期が14世紀～15世紀前半である。



第17図　遺跡の変遷と微地形

第４節　遺跡の検討

１．中世居館

遺構の変遷について分析してきたが、ここでは居館について検討をおこなう。二郎宮ノ前遺跡で検出された居館は第Ⅱ期に至って登場し、第Ⅴ期まで存続している。この間、第Ⅱ期～第Ⅲ期までは中心居住域に園池が敷設され、第Ⅳ期以降は区画施設が堀となり中心居住域が東に移動する。このように、内部の構造には大きな変化が認められる。居館のそれぞれの時期をここで再確認すると第Ⅱ・Ⅲ期が13世紀後半～14世紀前半頃、Ⅳ期は14世紀中頃～後半、Ⅴ期が14世紀末～15世紀中頃で、内部の構造に変遷が認められるものの居館そのものは約200年間存続していたことになる。

次に、遺跡と居館の関係を時期ごとに追ってみたい。第Ⅰ期は並立的な屋敷が距離を置いて並ぶ段階で、居館は登場していない。Ⅱ期に入ると遺跡の半分を占める範囲がＳＤ65によって区画されて、立地の点でも良好な場所を専有する居館が登場する。この時期には居館南部は空閑地となり、中小の建物は排除されている。また、居館南外側にはＳＤ65を跨いでＳＢ28・29を中心とする屋敷が形成され、居館と対峙するかたちで立地している。Ⅰ期で広がっていた屋敷群はこの居館と南部の屋敷によって排除され遺跡の様相は一変してしまう。さらに、このⅡ・Ⅲ期の居館は主の威勢を誇示するように中心居住域に園池を敷設している。

また、居館の区画施設について要約すると、Ⅱ・Ⅲ期については区画施設（ＳＤ65）が脆弱な段階で、Ⅳ期に至って（堀２）完全な区画施設が成立したといえる。しかし当遺跡の居館で一貫していることは中心居住域と、周辺に広がる居館域が２重に形成され、外郭の区画ラインもやや場所をかえるものの、専有する範囲に大きな変化がなく、中心居住域も大きくは場所を変えないことである。

このような構造は中世前半に検出される事例では一般的な居館の構造として知られ、近年類例が増加している。例えば阿保境の館跡(7)（埼玉県児玉郡神川町）・和気遺跡(8)（大阪府和泉市）などである。これらの館はほぼ１町規模の土地を独占的に専有し、内郭部分が居住域となる。阿保境の館跡は外郭が１町規模で内部の中央にやはり主の居住域をもつ構造となる。さらに居住域の周囲には墓地や職能集落などを隷属させており、居館の外郭部分を自信の所有空間として独占したことがわかる好例である。

和気遺跡でもこのような２重構造がとられ、中心に園池を伴う居住域をもっている。周囲は隷属集落と思われる小規模な建物群が密集して建てられるが、当遺跡と同じく堀外にも、居館の軸方位を同じくする建物が立ち並び、居館外にも隷属集落を集住させたことがわかる。そして、２者の事例を検討すると、中世前期の居館では、居館域を比較的ゆったりと使う事例と、稠密に使う事例のあることがわかる。

二郎宮ノ前遺跡は外郭の区画施設が一部背後の山に頼っていることを除けば、この２者の事例に構造的に近いといえる。なお、この居館の墓域については西側丘陵の西斜面に立地する大橋墳墓群(9)が考えられている。つまり、Ⅳ期以降の二郎宮ノ前遺跡は居館域を中心に隣接の丘陵も含めて、すべてを居館の主が独占していったようである。しかし、15世紀中頃を境にして居館は突然姿を消し、遺跡内は広く耕作地になっている。

2．園池の評価

今回、中世Ⅱ・Ⅲ期で検出された池は、屋敷に伴う鑑賞用の池と考えて、園池と呼称した。このような屋敷・館に伴う中世前半の園池の遺構は、近年兵庫県内で事例が増えつつある。本遺跡の他では玉津田中遺跡(10)（神戸市西区）・二ッ屋遺跡(11)（神戸市西区）・祇園遺跡(12)（神戸市兵庫区）などがあげられ、当遺跡例を除けば六甲山南麓の大阪湾に面した場所に集中している。これは、この地域が平氏政権末期、遷都が行われた福原京が置かれた地であり、京都を起点とする瀬戸内の海路に面していることなど、“都”に近い地理的条件と大きく関係していると思われる。

玉津田中遺跡の園池は辻ケ内地区で検出された居館の内部に検出された。この居館は12世紀末～13世紀前半頃に機能しており、周囲を幅５ｍ、深さ1.4ｍ規模の堀で囲まれている。堀の規模や選地が西側に広がる条里地割を無視したものであることから、明らかに領主的な人物の居館と評価されている。また、内部からは鍛冶炉が検出され一部に生産活動も行っていたようである。

園池はＳＧ85002部分とＳＧ85004部分の２箇所に分かれて検出されたが、状況から一連のものとされ、全体で居館中央に寝殿造りの前庭にあたるような大規模な園池の存在が想定されている。また、園池内には多量の土師器皿・杯が投棄されていた。また、周囲からは多量の瓦も出土している。この瓦の量から、居館内部には瓦葺建物の存在が推測された。

特にＳＧ85004では池底に多量の土師器杯が敷きつめられ、北端には滝口施設から遣り水が延びる状況が検出された。

祇園遺跡は平清盛によって行われた福原遷都によって、雪御所が築かれた伝承地の周辺に立地する。園池は幅８ｍほどの道路拡幅に伴う縦長の調査で検出された。池の全景を知ることはできないが、やはり池底に土師器皿を敷きつめた状態が検出されている。この遺跡から出土した遺物の状況は周辺の一般集落に比べるとかなり異質である。特に土師器皿――京都系を中心とする――の比率が高く、陶磁器に高級品が混じるなどの特徴がある。この点は県内の同時期の居館遺構に比べても異質であるため、報告書では福原宮関連の遺構である可能性を指摘している。

二屋遺跡は12世紀後半頃の居館遺構で母屋（大型建物）に面した素掘りの土坑状の遺構である。規模は１辺10ｍ程で、居館を囲む外郭の区画遺構は明確ではないが――軽微なものにとどまる可能性もある――検出された遺構は居館の屋敷部分と評価される。

また、県外であるが和気遺跡（大阪府和泉市）の事例も13～14世紀の土豪居館の事例として重要である。ここでも、母屋に面した場所に方形の土坑状の園池が検出された。

こうしてみてくると、中世前半12世紀から14世紀頃までの園池には２種のものが存在することを指摘できる。①は園池本体が方形・小型のもの。池自体は素掘りで土坑状の遺構として検出される。②は大型で、検出状況から推定すると不定型である。また、居館の中に占める占有率が非常に高く、池底に土師器皿などを敷きつめるなどの特徴がある。

この２種は検出された遺構からすると前者が中小の土豪居館、後者がやや上層の居住者のための居館と考えられそうで、事例を検討するかぎり居館の規模と池の規模は対応していると考えられる。

また、県内での園池の出現は祇園遺跡と二ツ屋遺跡が古く12世紀末である。このため12世紀末頃に県内に園池が受容され、上層・下層を問わず居館内に導入されたと考えられる。

しかし、このような園池遺構は京都の貴族邸宅では必ず検出されるようであるが、地方や武家居館では必ずしも一般的ではなかったのではないだろうか。県内でも居館遺構として評価される対中遺跡(13)

（三田市）・見蔵岡遺跡 (14)（城崎郡竹野町）・垂水日向遺跡 (15)（神戸市垂水区）などでは園池は検出されていない。見蔵岡遺跡は但馬の竹野川流域を抑える領主層の館である、また垂水日向遺跡も福田川河口に立地する居館と考えられるが園池は伴っていない。おそらく、県内では土豪クラスの居館の園池は選択的に採用されており、必ずしも不可欠の構成要素でなかったと理解される。

一方、15世紀以降の居館園池では、初田館 (16)（篠山市）・加茂遺跡 (17)（姫路市）・野村構居 (18)（西脇市）などがある。また、居館に伴うかどうかは不明であるが、二郎宮ノ前遺跡に近い宅原遺跡宮ノ元地区 (19) に小規模な池がある。側面に護岸用の石垣を構築する本格的なものであるが、現在のところ事例がないため詳細な検討ができない。

3．大型建物の検討

当遺跡で検出された建物のうち最大のものはＳＢ28である。この建物の規模は梁行４間×桁行８間で面積は153㎡を測る。さらに、ＳＢ28に重なるＳＢ29が梁行４間×桁行７間、面積131.7㎡である。この他にはＳＢ27（梁行４間×桁行６間）、ＳＢ17（梁行３間以上×桁行７間）、ＳＢ18（梁行５間×桁行６間）、ＳＢ19（梁行５間×桁行６間）などがあり、遺跡内には比較的大型の建物が多いといえるだろう。

一方、県内の事例で大型建物を瞥見すると桁行６間構造までの建物は比較的多いが、桁行７間以上で、梁行も４間以上となる平面方形に近い大型建物は極少数に限られる。二郎宮ノ前遺跡でもこの規模の建物は確実なものではＳＢ28・ＳＢ27のみである。

一方、二郎宮ノ前遺跡のＳＢ３・４の２棟はセットと考えられ、両者を合わすと８間×４間構造の建物となる。一応、復元案では母屋・副屋のセットとしたが、状況から２棟に相当する部分は建物としては別棟となっても、内部は同一の空間として利用されたと考えられる。このうち、ＳＢ４は前述のように厨房的な機能を果している。さらに、ＳＢ17・18は軒を接するものの、軸方向から一連の建物と考えられ、やはり機能としては１棟と考えられるのではないだろうか。このように考えるとおなじような構造のものとして、垂水・日向遺跡のＳＢ03・04がある。この建物も２棟で構成されるが、内部は同一空間として利用されたと推測される。また、１棟と評価される、二郎宮ノ前遺跡のＳＢ27・28でも建屋の東側が厨房空間的な機能を果たしたことがわかっている、このことから建屋として１棟となるか別棟になるかの違いはあっても、ＳＢ３・４とＳＢ28・29は同じような規模の大型建物と評価できる。この前提に立って、県下の大型建物について少し考えてみたい。

遺跡近辺の事例から見てゆくと、神戸市北区の上小名田遺跡 (20) では10世紀後半のＳＢ３・４・16と、12世紀後半～13世紀前半頃のＳＢ01の４棟の大型建物が検出された。この遺跡は八多川上流域に位置し、西からの支流との合流点に面する川岸段丘にある。調査では、このうちＳＢ16が８間×６間・北面廂付、面積253.5㎡と県下でも最大クラスの掘立柱建物として知られている。10世紀の建物に関しては周辺から丸鞆や緑釉の香炉などが出土し、上層階層の居住したことが推測され、この遺跡の場所の重要性が指摘されている。中世の建物はこの系譜をひくものと評価され、大型建物を中心に中小の建物で集落を形成している。各大型建物には屋敷域が存在し、ある場所を占有していたとみられるが、明確な区画施設は検出されていない。

対中遺跡は12世紀後半の遺跡であるが、この遺跡で検出された建物のうち掘立柱建物４が大型建物である。この建物は報告書では西北側に延びて１棟の曲屋として復元している。規模は母屋が梁行４間×桁行８間、曲屋部分が４間×３間となる。

この遺跡は三田市の市街地にほど近い沖積地に立地する遺跡であるが、周辺他遺跡に比べ土師器の比率が高く、三田盆地のなかでも有力階層の屋敷地である可能性が大きい。ただし、この遺跡でも明確な区画施設は検出されなかった。

垂水・日向遺跡の第4次調査で見つかったＳＢ03・04のセットはＳＢ03が梁行4間×桁行5間で、南側にＳＢ04が梁行2間×桁行4間で軒を連ねる構造となる。建物は12世紀後半頃のもので、やはり周囲には区画施設は伴わない。この遺跡は神戸市垂水区を流れる福田川の河口付近に立地し、出土遺物の様相から陶磁器の比率が高く、付近の有力豪族の居館と考えられている。

見蔵岡遺跡では多数の大型建物が検出され、2棟が軒を連ねる別棟がセットになるものも合わせると4棟（うちＳＢ01・02、ＳＢ04・06の2棟が別棟型）が大型建物の範疇に入る。

この遺跡の中世遺構は11期の変遷が辿れ、このうち大型建物が存在するのはⅠ～Ⅳ期、12世紀中頃～13世紀中頃である。この時期は建物構成も大型建物を中心に多数の建物が付属する様相を呈しており、一般集落とは全く異なる。

大型建物のうちＳＢ03は母屋が4間×7間で4面に廂を持つ構造である。この建物は見蔵岡遺跡のⅠ期に建設されたもので、この地に入った領主クラスの住居あるいは荘園の政所の中心建物に比定されるような建物である。また、構造から観察するとⅤ期以降は一般集落となり、徐々に遺跡の構造が変質しているようである。しかし、これらの全期間を通して、本遺跡では明確な区画施設は存在しない。

東有年・沖田遺跡(21)では91Ｂ調査区（8間×7間）・92Ｄ調査区（8間×7間）の平面方形の建物が検出された。両者とも200㎡をこえる大型建物で、県下で最大の掘立柱建物である。建物の時期は14世紀頃と考えられている。しかし、周囲に付属屋や区画施設などは全く検出されず、出土遺物からも遺跡の様相に居館を暗示するものは認められなかった。

久留美門前遺跡(22)は平成3年に調査が行われた。12世紀～13世紀の集落遺跡で、この内のＳＢ03は梁行4間×桁行7間の規模の建物である。周囲の状況からすると建物周囲には区画施設はなく、居館と呼べるような構造は持たない。

玉津田中遺跡では前述の辻ケ内地区西側の沖積地に大規模な集落が存在するが、この集落の建物群のうち二ノ郷地区のＳＢ80046が7間×6間、徳政地区のＳＢ80016が7間×4間の規模を有している。2棟とも全域を調査していないため規模にはやや不安も残るが、少なくとも桁行の1辺が7間であることは確実である。この集落では多数の建物が検出され、これらに次ぐ桁行6間の建物も多く検出された。そのなかでこの2棟は位置や専有範囲の規模からすると、集落内で有位に立っていることは疑いがないものの、西側の辻ケ内地区の居住者に匹敵するものではないことも明らかである。

以上、県下の大型建物を概観したが、これらの大型建物が登場するのは上小名田遺跡の10世紀中頃を初見とし、その後13世紀代に多数出現し、東有年の14世紀代が検出事例の最後となる。いずれにしても時期的には12世紀末～13世紀頃にピークが存在し、この時期、建物が大型化する機運が盛り上がったことは疑いがない。しかも、これらの建物の場所は、集落内の有力階層や土豪居館などに多いようである。

大型建物と周囲の屋敷地・居館域の構造を検討してみると、3つのグループに分類できる。まず、特に特殊なものとして、見蔵岡遺跡のⅠ～Ⅳ期がある。この各時期には大型建物を中核として、軸方位を同じくする中小の建物を配置し、遺跡の平坦地の立地条件の良好な場所に広く屋敷地を展開している。南側には一般集落が検出され明らかに、遺跡中心部とは様相が異なる。まさに中心部は居館と呼べる内容をもっている。そして構造は“左右対称形でない寝殿造り”という表現のとおり京風の様相をもって

いる。次に、母屋に廂は付かないが、周囲に付属建物が配置され、主の居住空間を補完する中心居住域が形成される遺構がある。二ツ屋遺跡がこのグループに属する。明確ではないが二郎宮ノ前遺跡の中心居住域ＳＢ２～５や対中遺跡などもこのような構造になっている可能性が大きい。さらに園池で検討した和気遺跡もこのグループに入る。

一方、二郎宮ノ前遺跡でもＳＢ28・29が大型建物となるが、周囲に母屋の居住空間を補完するような建物は存在しない。ＳＢ57～60は隷属する人々の住居であろうが、居館の中心居住域を構成する要素ではない点で、大きく異なる。玉津田中遺跡徳政・二の郷地区・東有年遺跡・二郎宮ノ前遺跡などがこのグループに入る。

この３つのグループのうちで、最初のものは確実に領主クラスの居館と理解される。あえて、グループをつくるなら、居館内の構成を明らかにできないが、玉津田中遺跡の辻ケ内地区・祇園遺跡などもこれと同じような構造をとるのではないかと思われる。

また、二ツ屋遺跡のような構造を取る遺構は和気遺跡などの検討からすると土豪層の居館といわれている。このクラスでも二ツ屋遺跡で持仏堂を付設する点や各遺跡でやや陶磁器の比率が高く、土師器が豊富である点など、上層階層の居住を裏付ける材料が多い。

これに比して最後のグループは建物が単独で存在し、周囲に屋敷地の広がりが別のグループのように望めない。また、14世紀に入っても東有年遺跡のように区画施設を伴わないことから、有力農民層の屋敷地ないしその中心建物ではないかと推測される。

従って、13世紀には地域の領主層から有力農民の屋敷まで各階層の屋敷・居館に大型建物が出現しており、建物が大型であることのみでその階層を明らかにすることは出来ないことがわかった。もちろん、大型建物の住人が一般階層でないことは明らかであるが、大型建物は地域の有力者全般に受容されていた事が明らかになった点が重要であろう。

次に、大型建物の出現する原因について少し考えたい。通常一般集落の住居を中心とする屋敷構成は母屋と副屋で構成される。例えば、中世前半の住居である大阪府高槻市の宮田遺跡でわかるように母屋と副屋さらに井戸、区画施設などによって屋敷が構成されている事例が多い。これに対して先に見た土豪や有力農民層の大型建物では副屋に相当するものがないものや、母屋に並んで同一建物となって合体している事例が多い。つまり、二郎宮ノ前遺跡のＳＢ28・29は一体型となったもので東側を厨房空間とするもの。同遺跡のＳＢ２～５が分離タイプである。このように大型建物の内容は見蔵岡遺跡のように京風の構造を持った住居を除くと、近世以降に一般化的な農村家屋の原型を持つような構造が、この時期に登場している感をもつ。しかし、13世紀のこの一時期を除くと、大型建物は寺・神社などの例外は別として集落内から姿を消す。その後、これに匹敵する住居が登場するのは、近世中期以降の有力農民層の住居までまたなければならない。おそらく当時の住居構造は火煙の処理など種々の理由で、機能を合体した大型建物は必ずしも便利ではなかったためと思われる。

つまり、13世紀に入って、一般集落のなかでも財力がある層は、機能を合体することでの利便性や住居を大型化して自己の屋敷を誇示するために住居を大型化させたが、その後の住居構造の変化や、火煙の処理から大型建物が必ずしも必要とされなくなったのではないかと考えられる。また、別に土豪クラスの居館では区画施設の充実が進んだことが大型建物を必要としなくなった原因とも考えられる。

14世紀以降、東有年遺跡など１部に大型建物の存在は認められるが、全体としては大型建物は集落内から姿を消すようである。

註）

1．森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開―神出古窯此群を中心に―」
『神戸市立博物館研究紀要　第3号』神戸市立博物館　1986年刊行

2．「三田市　北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ―有鼻遺跡(1)―」兵庫県教育委員会　1999年刊行

3．「中尾城跡」兵庫県教育委員会　1989年刊行

4．「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」兵庫県教育委員会　1983年刊行

5．「内場山城跡」兵庫県教育委員会　1993年刊行

6．木戸雅寿「石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社　1995年刊行

7．「季刊　自然と文化　中世居館」日本ナショナルトラスト編　1990年刊行

8．「和気」和気遺跡調査会　1979年刊行

9．「平成7年度　神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会　1998年刊行

10.「玉津田中遺跡　第4・6冊」兵庫県教育委員会　1995・1996年刊行

11.「二ツ屋遺跡現地説明会資料」神戸市教育委員会　1992年刊行

12.「祇園遺跡」神戸市教育委員会　2000年刊行

13.「対中」兵庫県教育委員会　1988年刊行

14.「見蔵岡遺跡」竹野町教育委員会　1996年刊行

15.「神戸市垂水区　垂水・日向遺跡第1・3・4・次調査」神戸市教育委員会　1992年刊行

16.「初田館跡」兵庫県教育委員会　1992年刊行

17.「加茂遺跡」姫路市教育委員会　1975年刊行

18.「野村構居遺跡Ⅱ」西脇市教育委員会　1997年刊行

19.「神戸市北区宅原遺跡宮之元地区の調査」妙見山麓遺跡調査団　1986年刊行

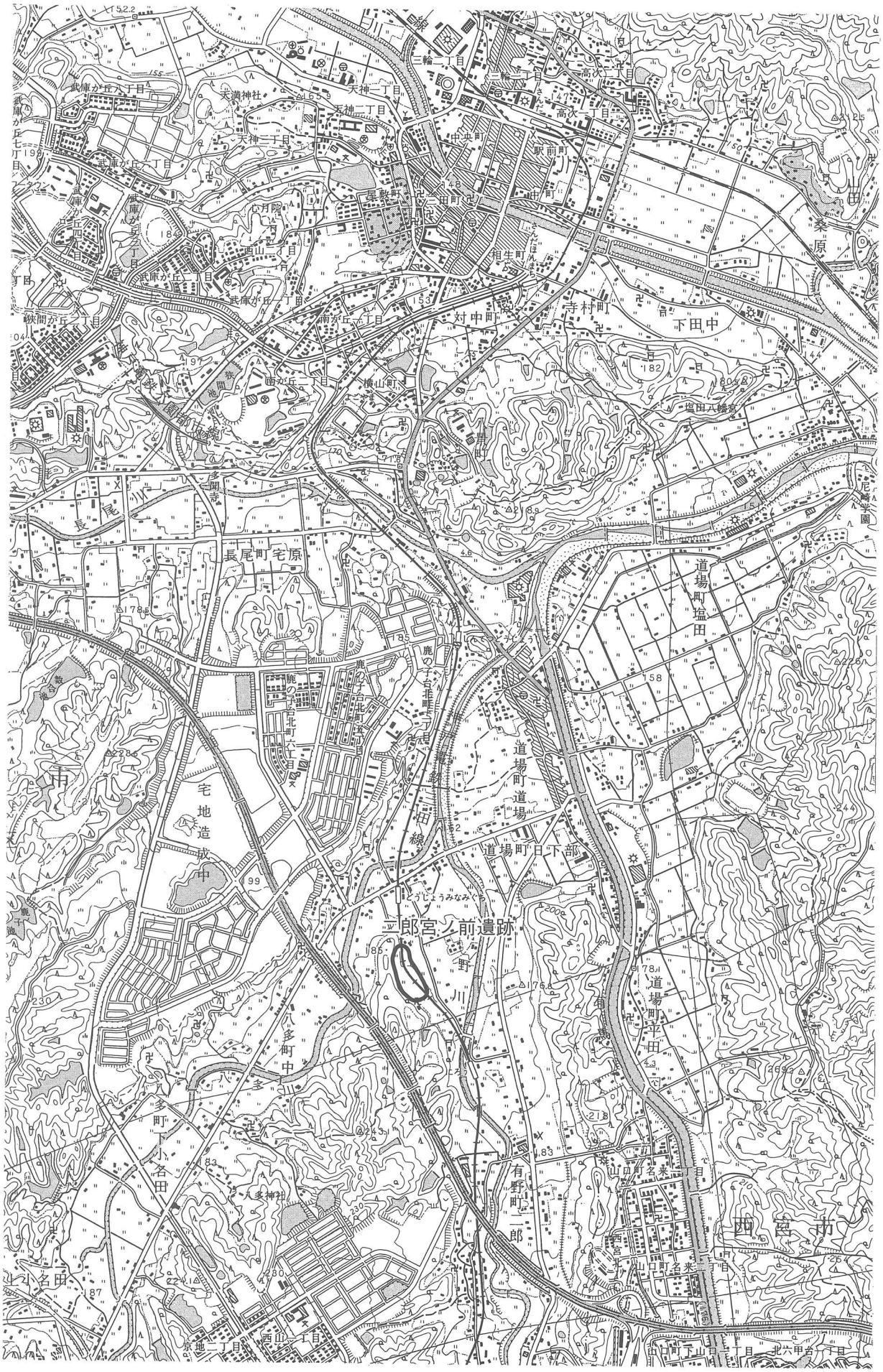
20.「平成7年度　神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会　1998年刊行

21.「東有年・沖田遺跡の風景」赤穂市教育委員会　1999年刊行

22.「三木市埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅱ　昭和60年～平成6年度」三木市教育委員会　2001年刊行

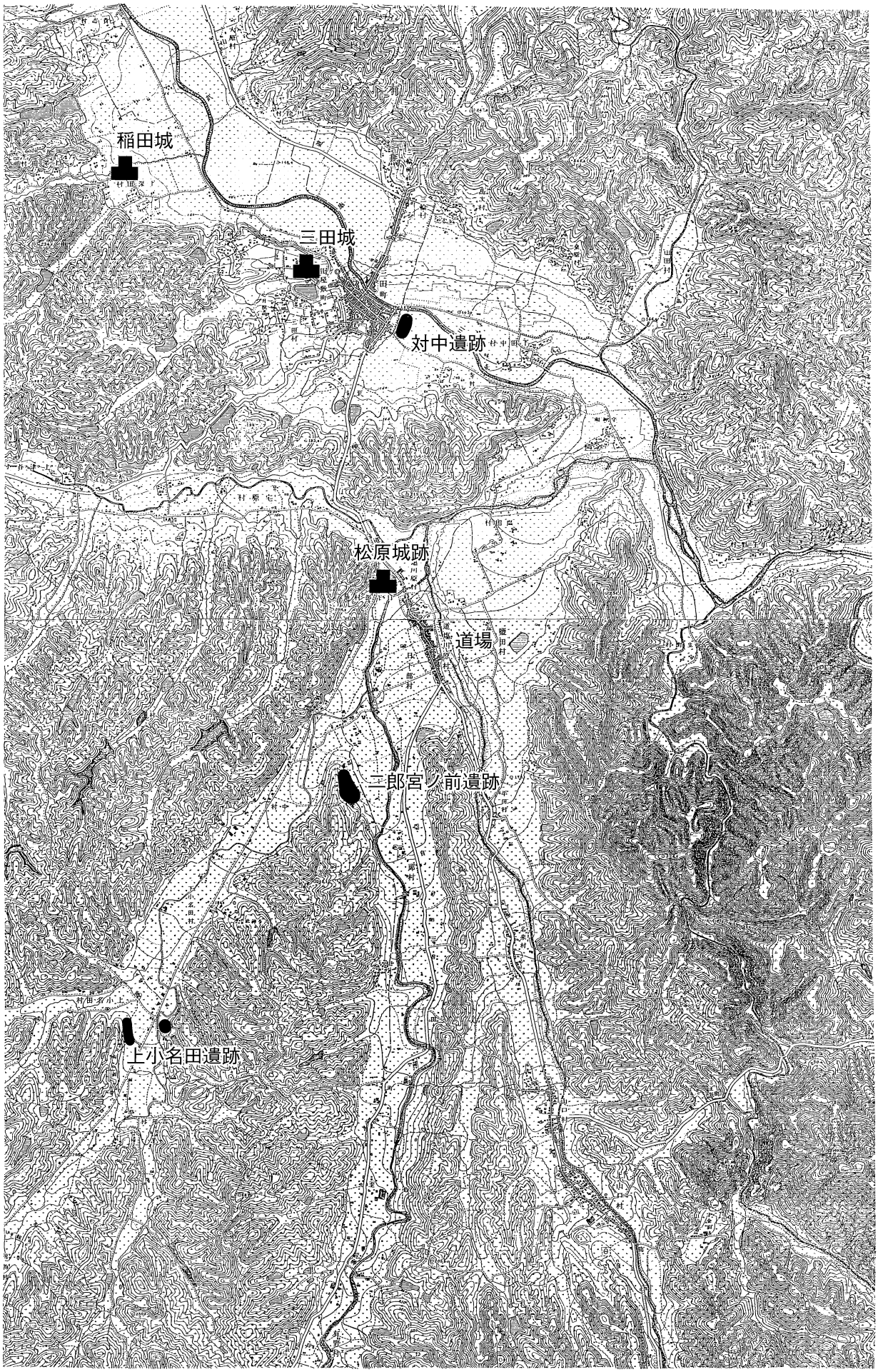
図　　版

図版一　遺跡の位置

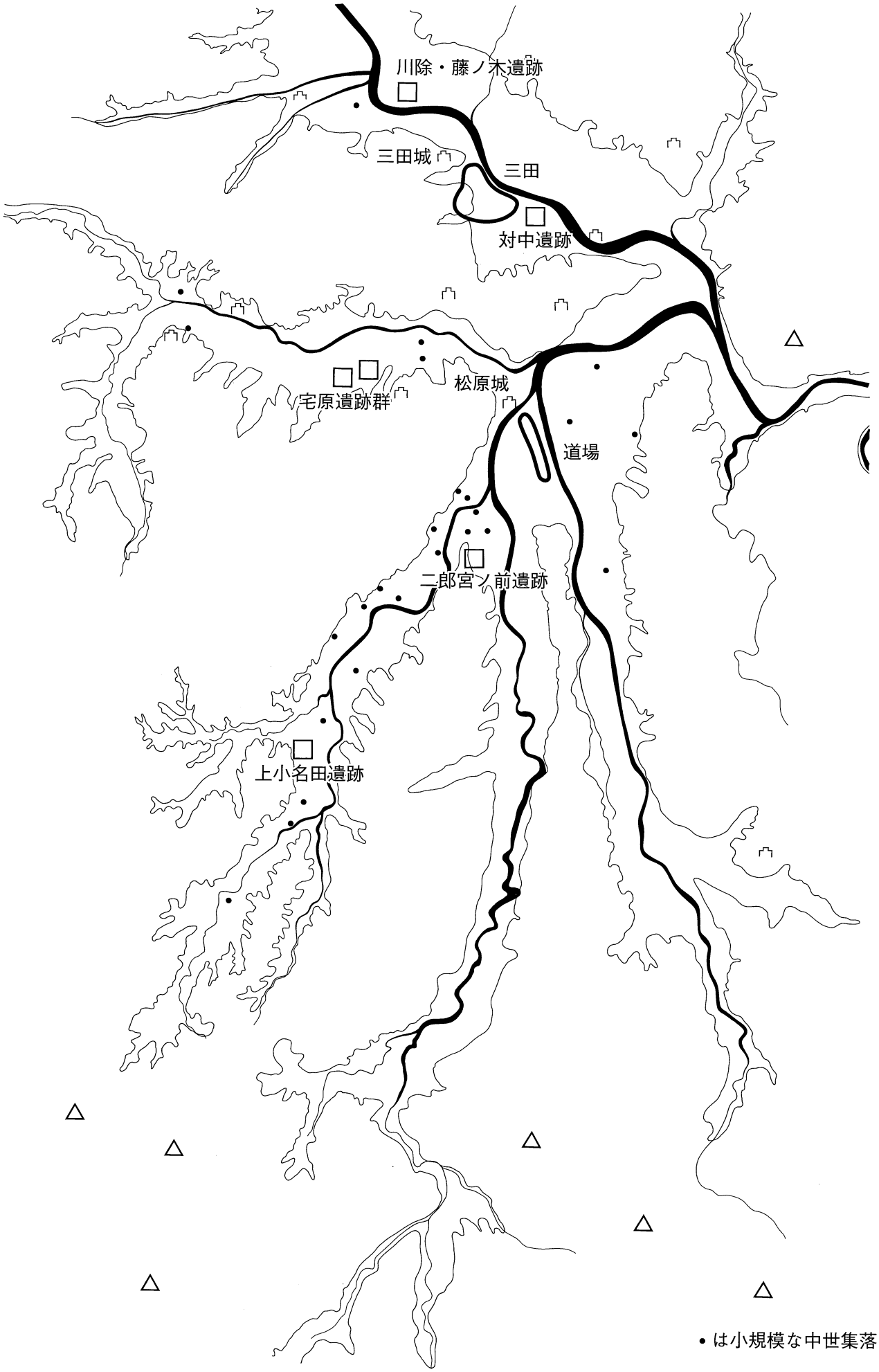


武庫が丘八丁目
天満神社
天神一丁目
天神二丁目
三輪二丁目
高次一丁目
中央町
駅前町
中町
屋敷町
二田町
心月院
西山二丁目
相生町
桑原
武庫が丘一丁目
南が丘二丁目
対中町
寺村町
下田中
横山町
塩田八幡宮
多聞寺
長尾町宅原
尼崎学園
道場町塩田
鹿の子台北町六丁目
宅地造成中
道場町道場
道場町日下部
二郎宮ノ前遺跡
野川
道場町平田
八多町中
八多町下小名田
八多神社
有野町二郎
山口町名来二丁目
西宮市
西山一丁目
京地二丁目
山口町下山口二丁目
北六甲台一丁目

図版二　有馬郡中心部の旧地形



図版三　有馬郡周辺の地理景観



図版四　遺跡周辺の旧地形

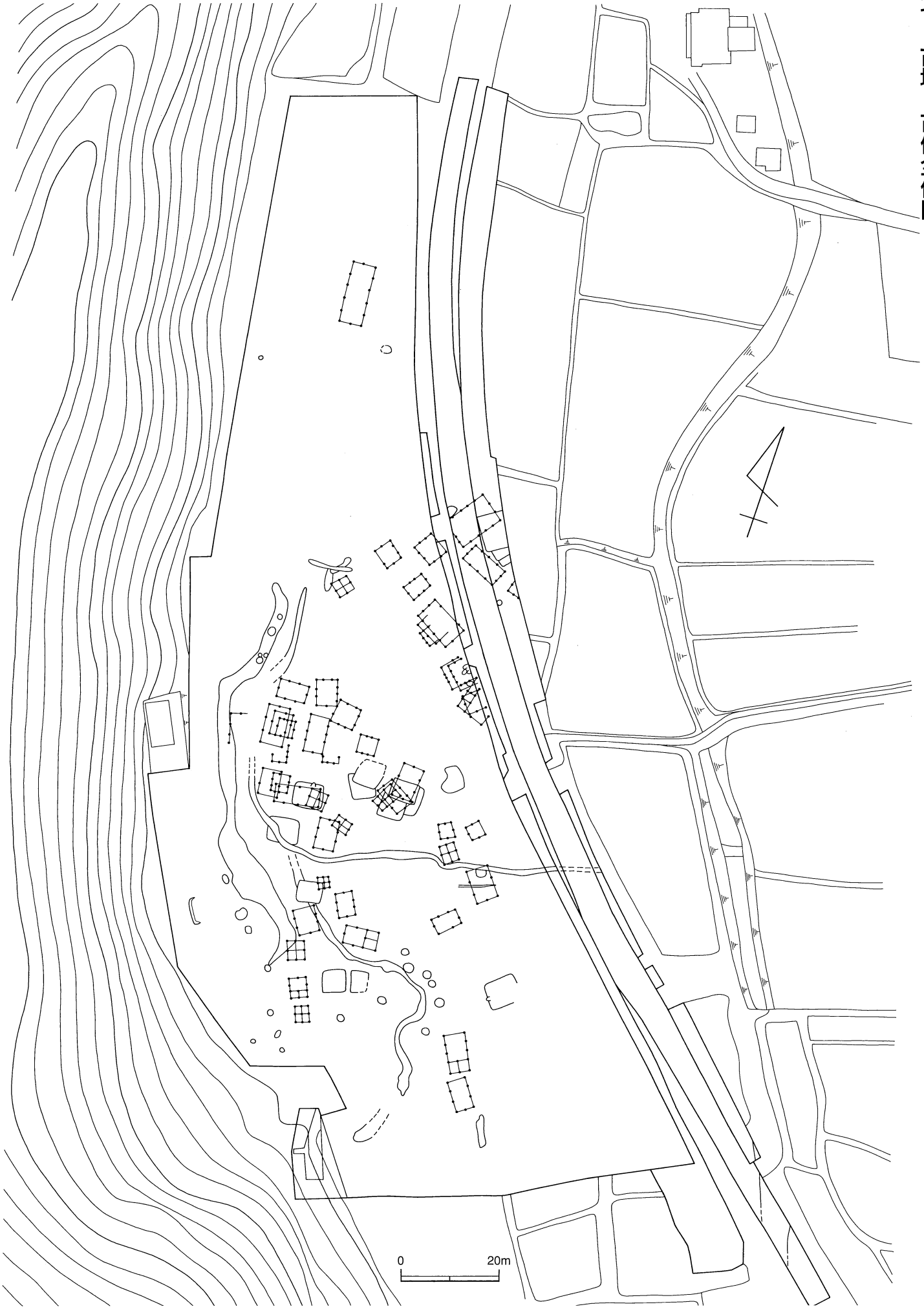
図版五　調査区全体図1

堀2
SD65
SD118
池2
池1
第1次調査
堀1
第2次調査
SD65
堀2
第3次調査
SD1・4
第4次調査
X=-127.250
X=-127.200
X=-127.150
Y=+81.640
Y=+81.700
0
10
20m

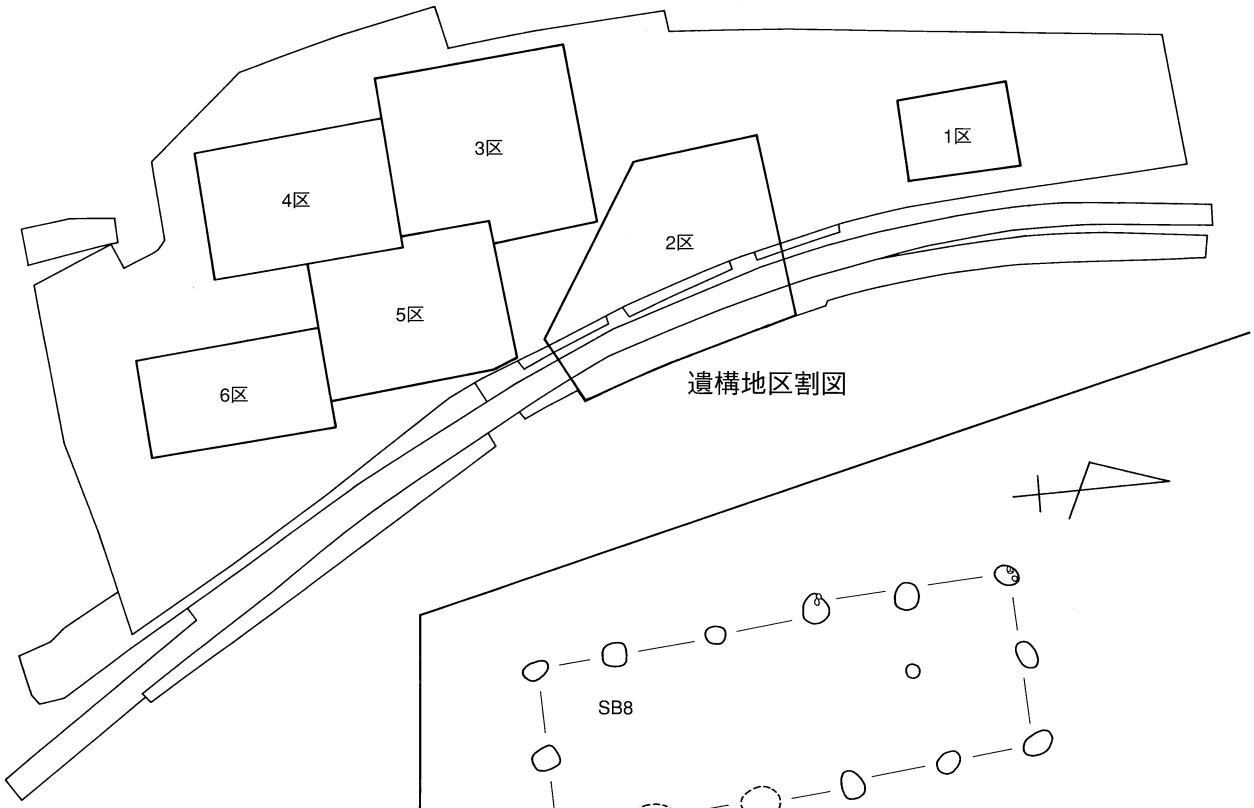
図版六　調査区全体図2

X=-127,350
Y=+81,640
Y=+81,700
小坂遺跡
SD118
SD65
SB28・29
SD93
Y=+81,760
第2次調査
第3次調査
第4次調査
X=-127,300
0
10
20m

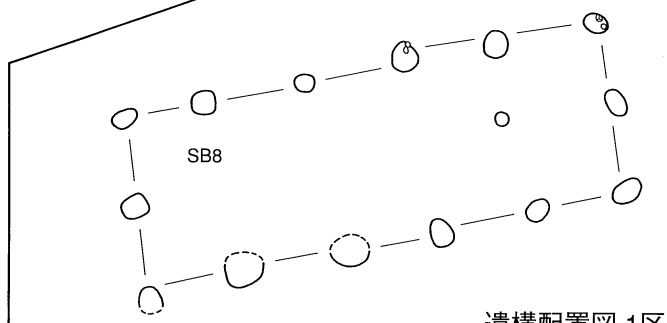
図版七　古墳・古代全体図



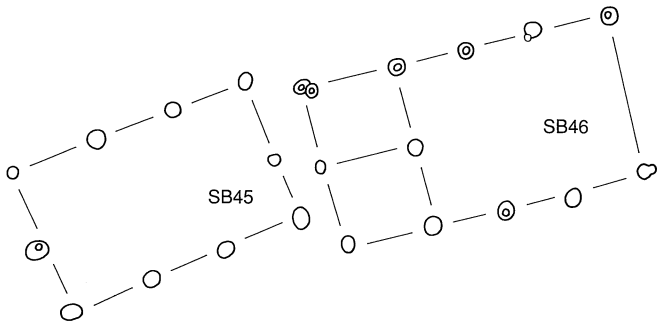
図版八　古墳・古代　遺構配置図1・6区



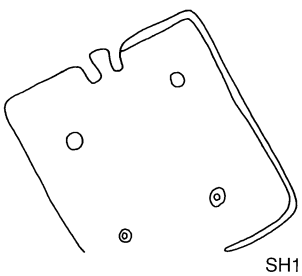
遺構地区割図



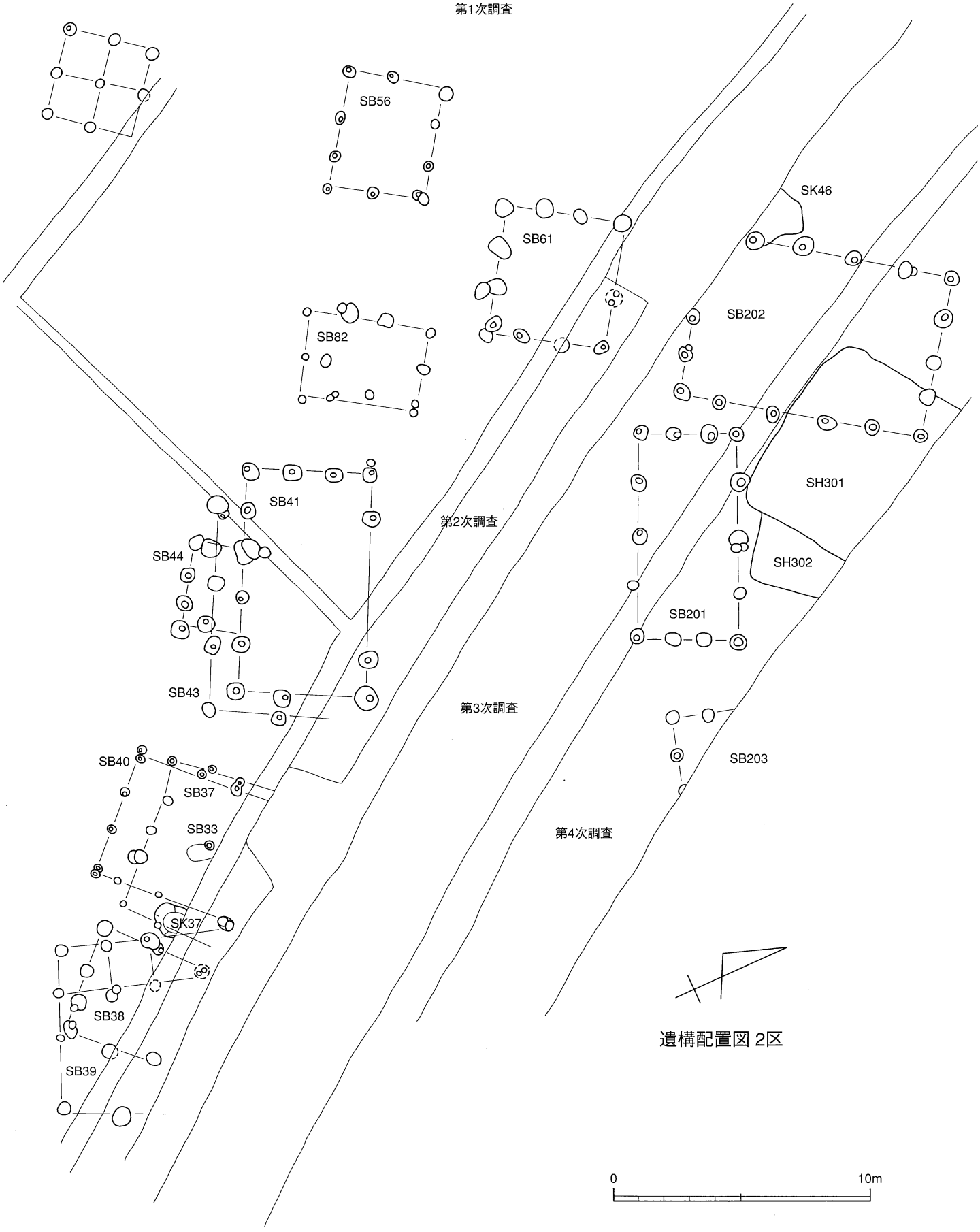
遺構配置図 1区



遺構配置図 6区



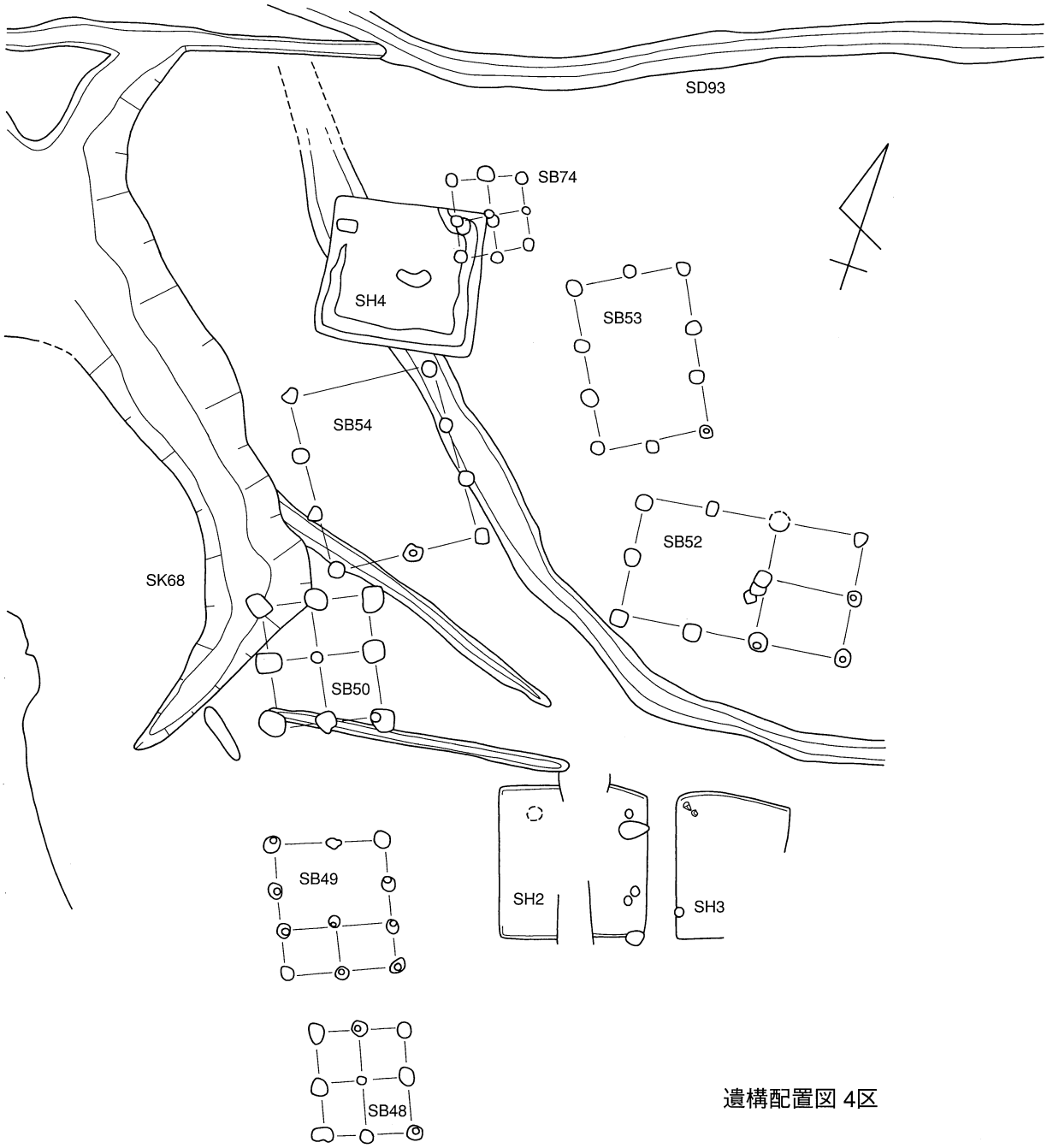
図版九　古墳・古代　遺構配置図2区



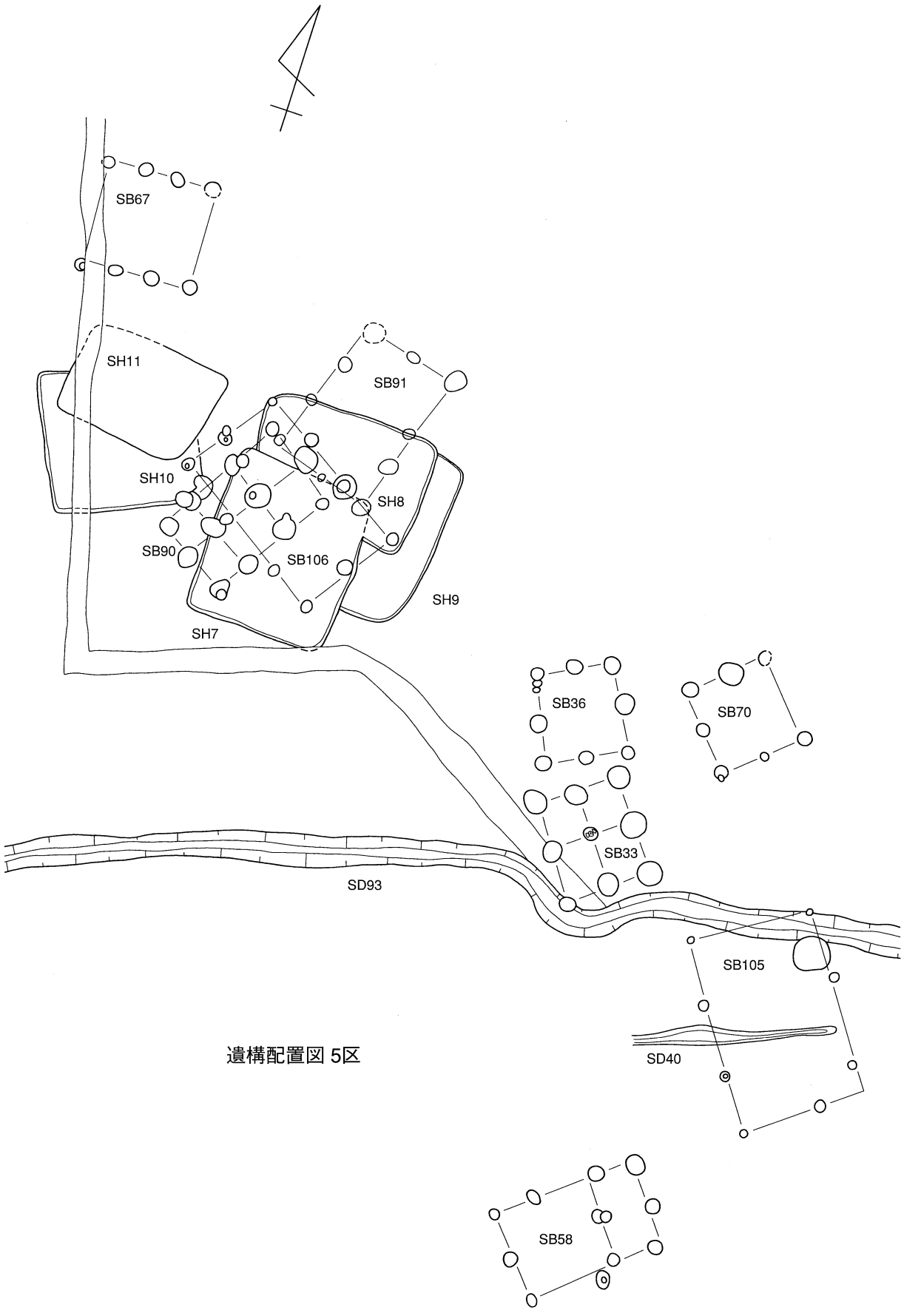
遺構配置図 2区

SB103
SB84
SB100
SB83
SB99
SB71
SB98
SB79
SB67
SB97
SB97
SB75
SB96
SB89
SB80
SH5
SB86
SH6
SB76
SB77
SD93
0
10m

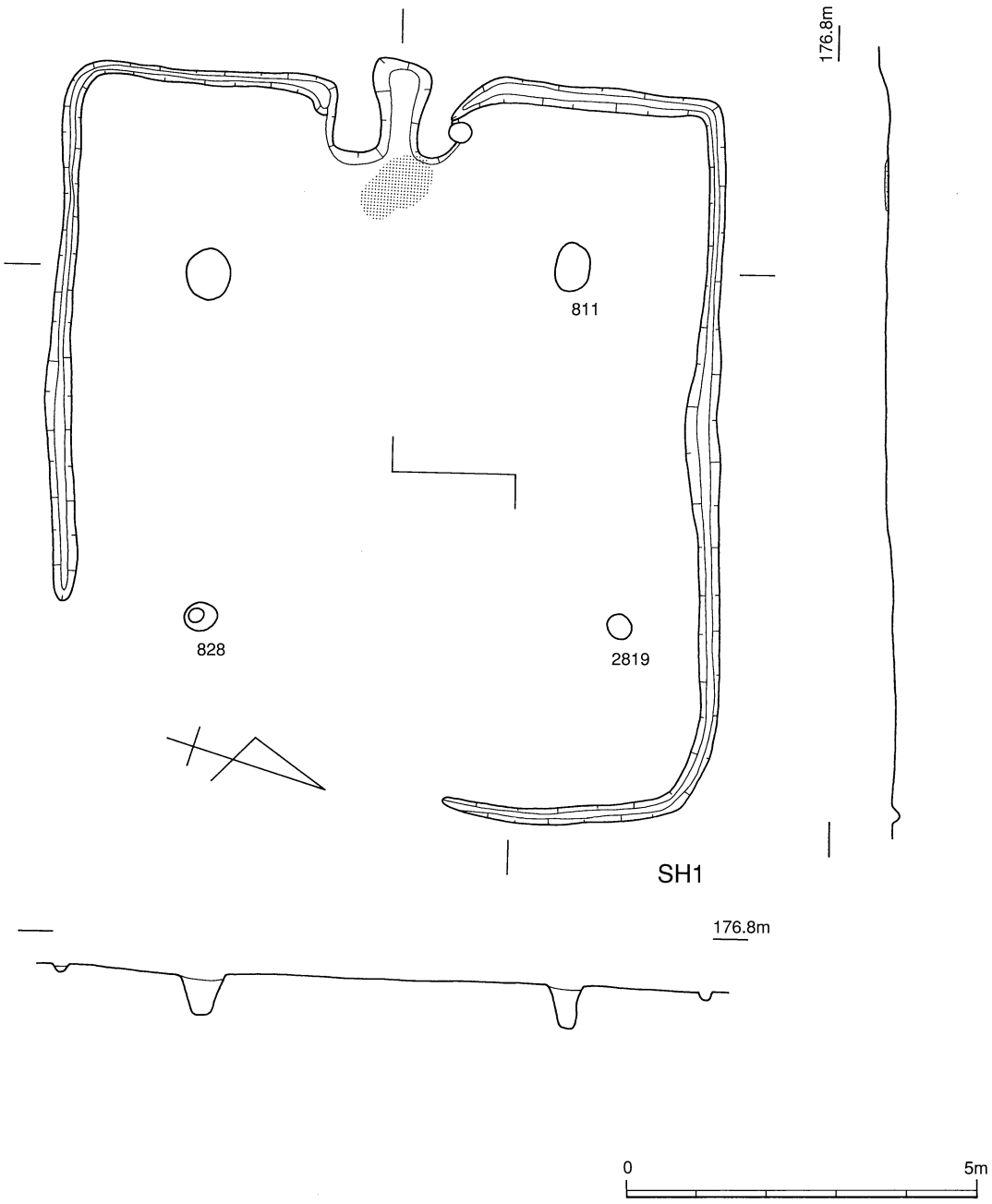
遺構配置図 3区



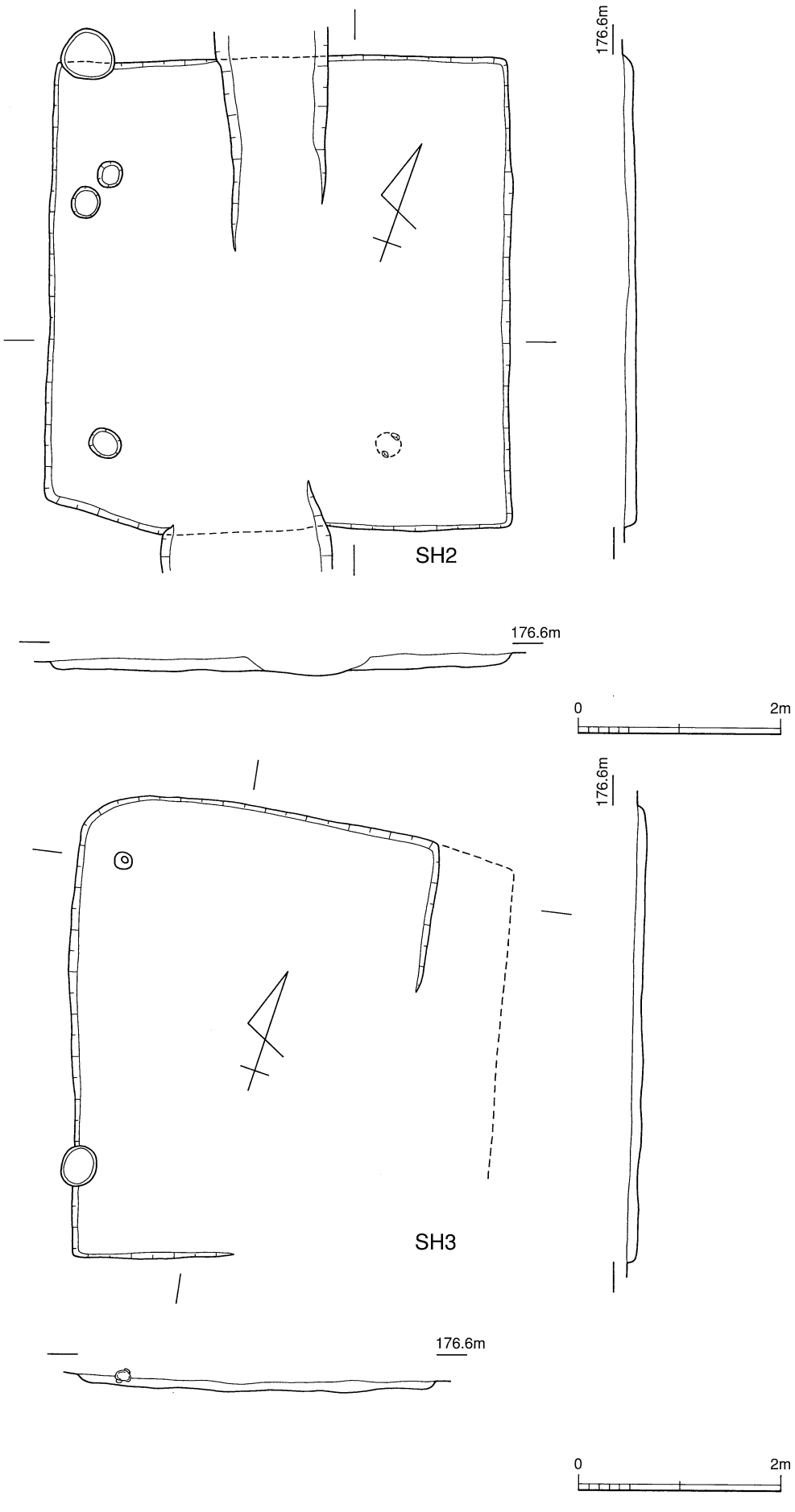
遺構配置図 4区


SB67
SH11
SB91
SH10
SH8
SB90
SB106
SH9
SH7
SB36
SB70
SB33
SD93
SB105
SD40
SB58
0
10m

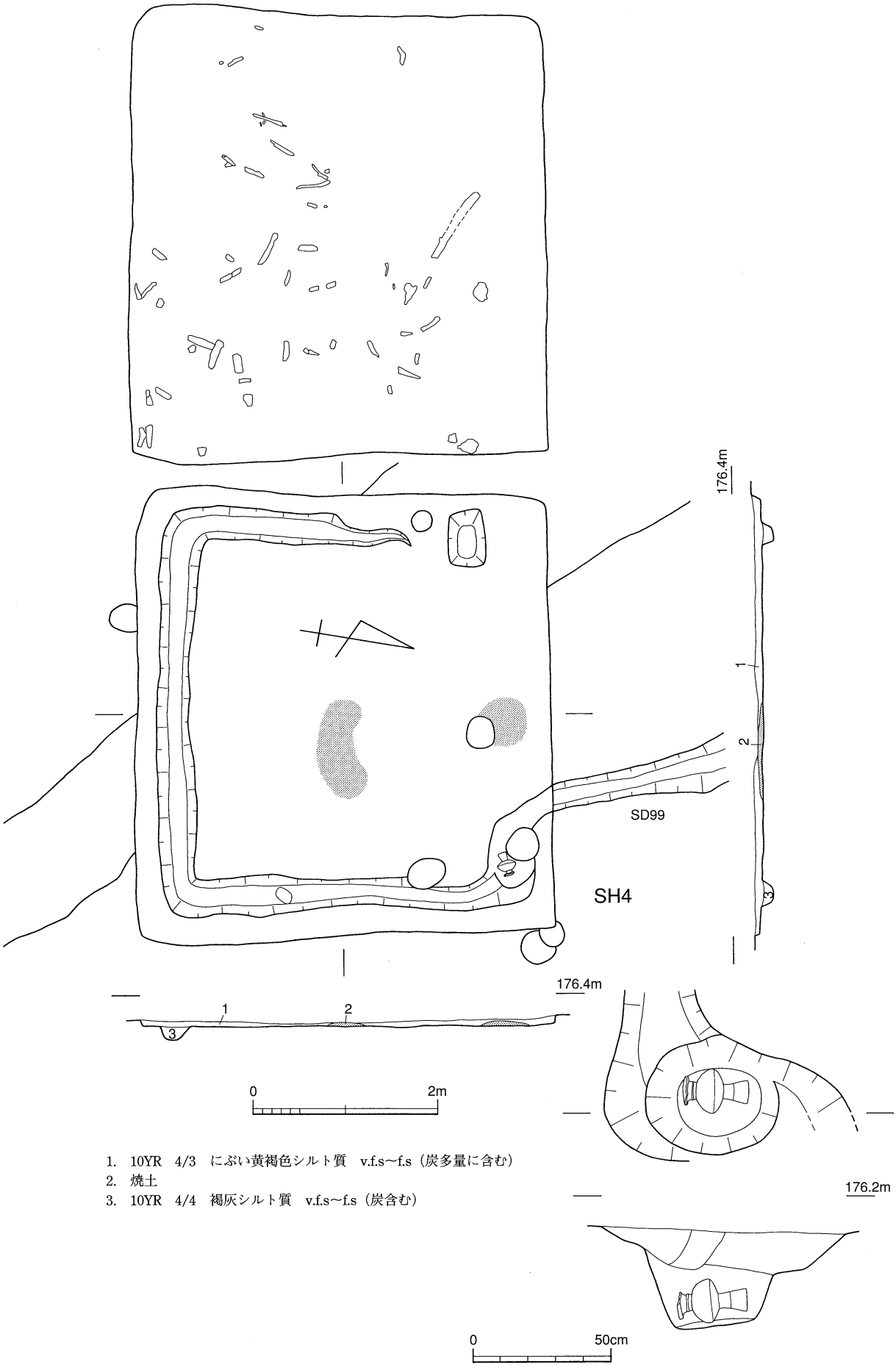
遺構配置図 5区



SH1　平・断面図

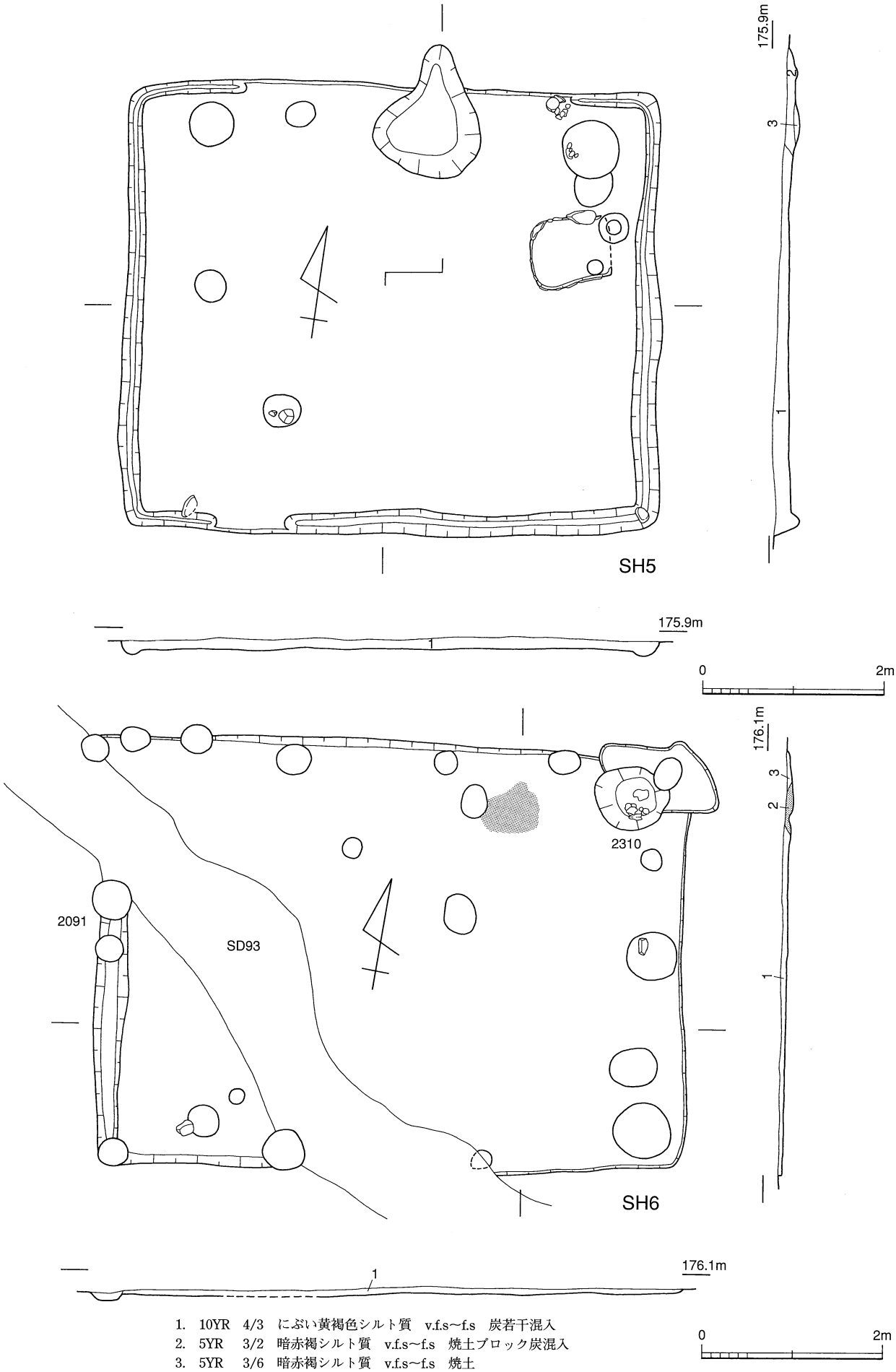


SH2・3　平・断面図



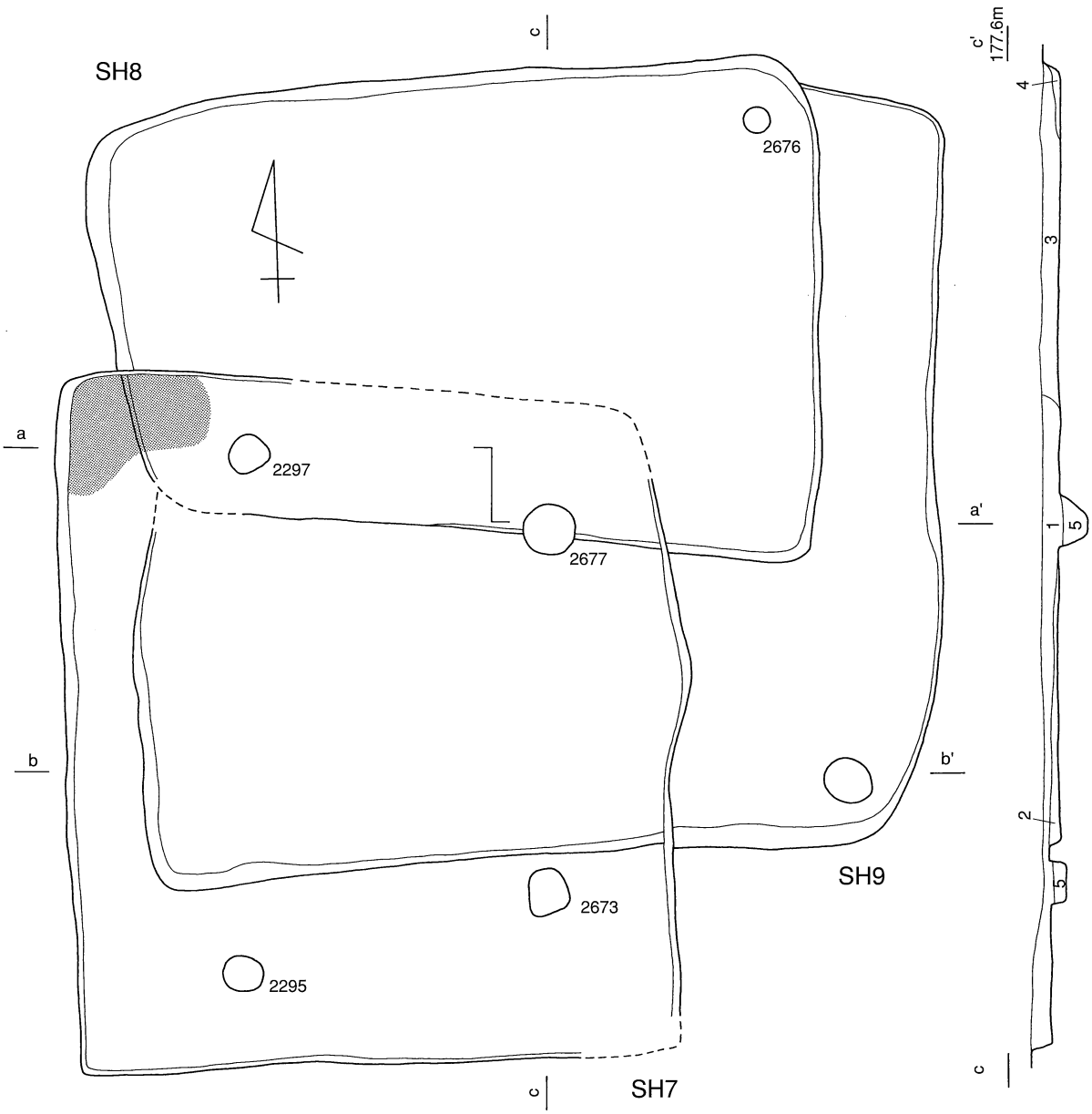
1. 10YR　4/3　にぶい黄褐色シルト質　v.f.s～f.s（炭多量に含む）
2. 焼土
3. 10YR　4/4　褐灰シルト質　v.f.s～f.s（炭含む）

SH4　平・断面図



1. 10YR　4/3　にぶい黄褐色シルト質　v.f.s～f.s　炭若干混入
2. 5YR　3/2　暗赤褐シルト質　v.f.s～f.s　焼土ブロック炭混入
3. 5YR　3/6　暗赤褐シルト質　v.f.s～f.s　焼土

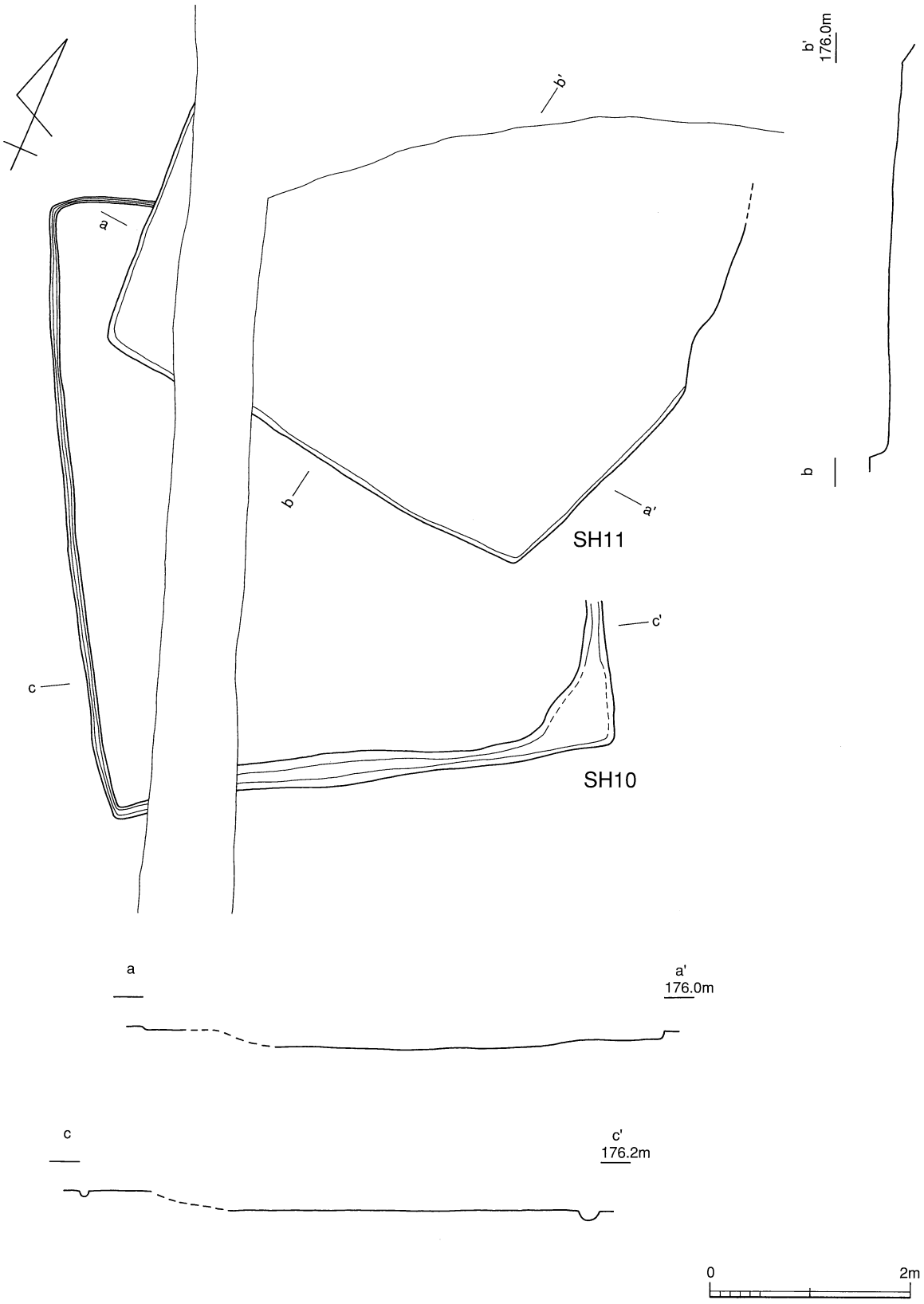
SH5・6　平・断面図



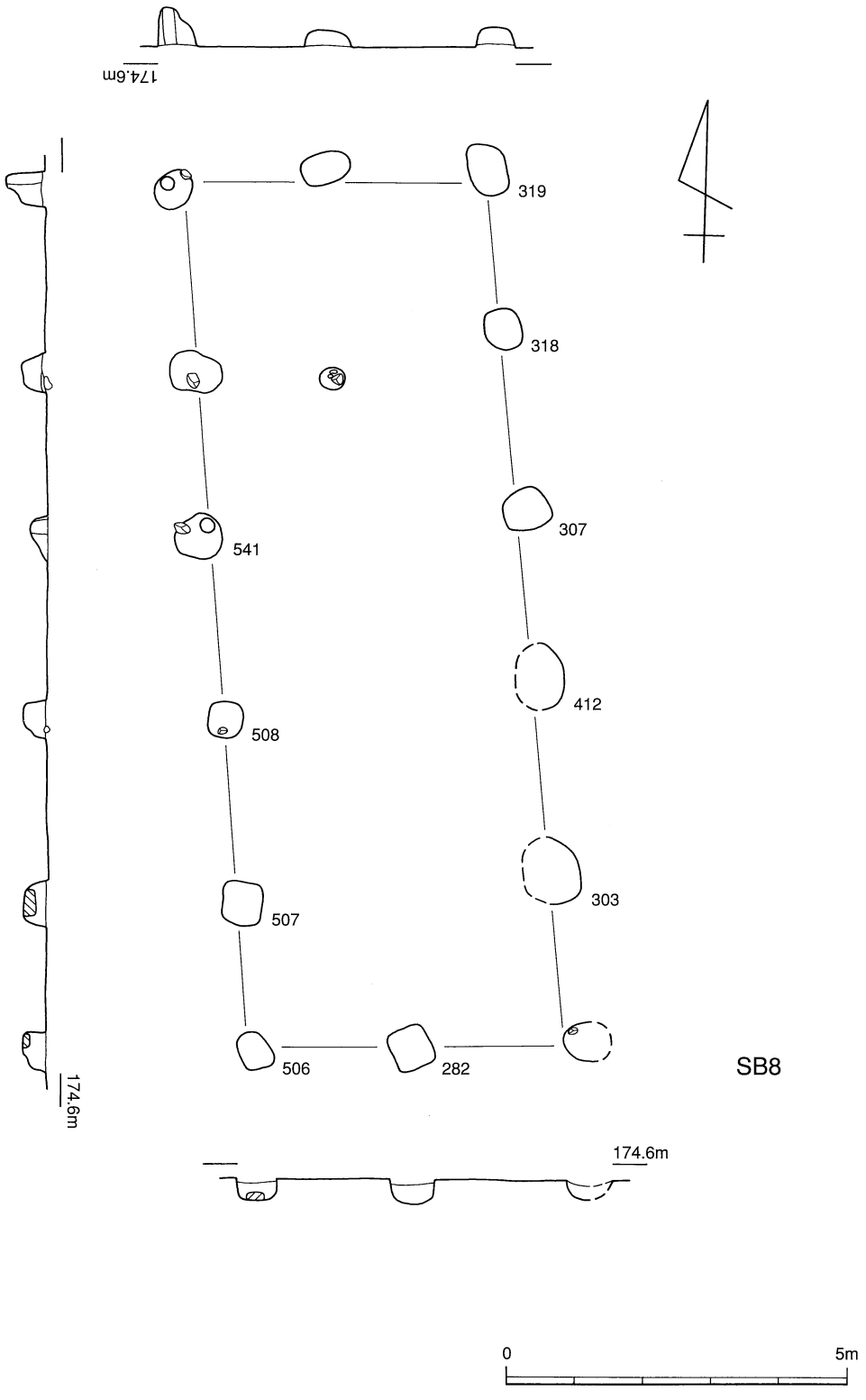
1. 5YR　4/2　灰褐色　　極細砂～細砂シルト質
2. 2.5YR　5/3　黄褐色　　極細砂～細砂シルト質
3. 10YR　5/8　黄褐色　　極細砂～細砂シルト質
4. 5YR　5/8　灰褐色　　極細砂～細砂シルト質（炭含む）
5. 2.5Y　5/8　オリーブ褐色　極細砂～細砂シルト質

0　2m

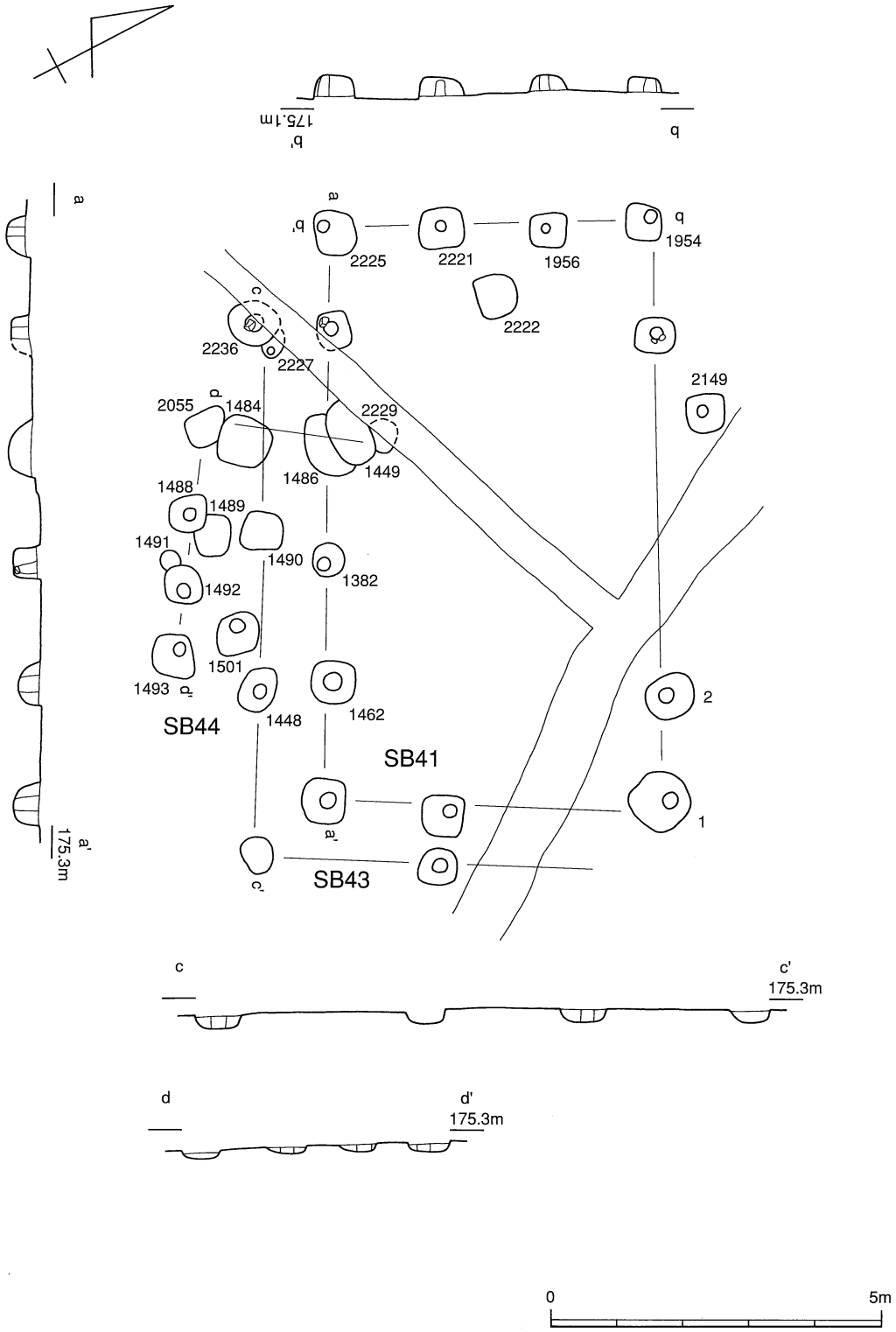
SH7～9　平・断面図



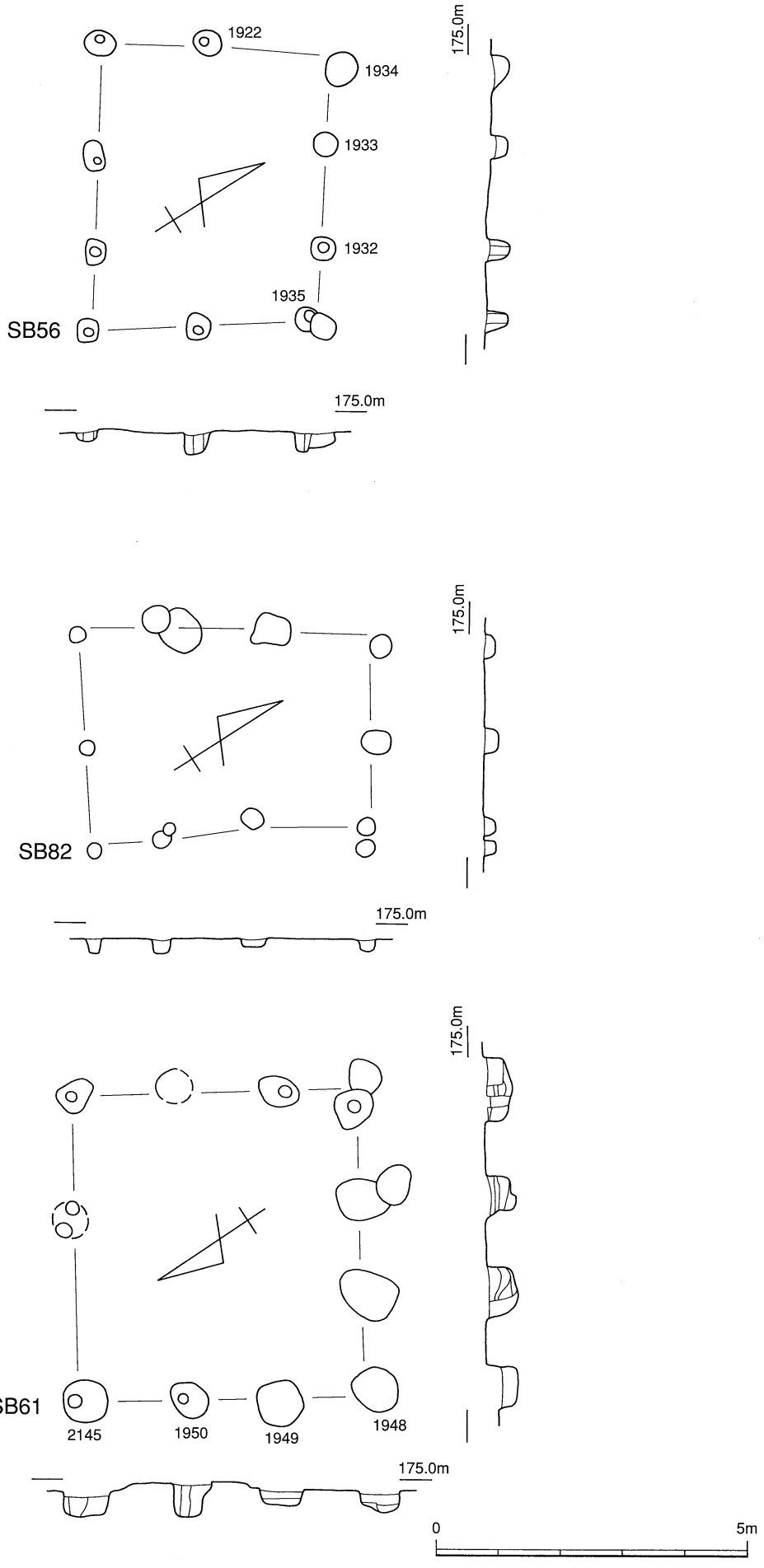
SH10・11　平・断面図


174.6m
319
318
307
541
412
508
303
507
506
282
SB8
174.6m
174.6m
0
5m

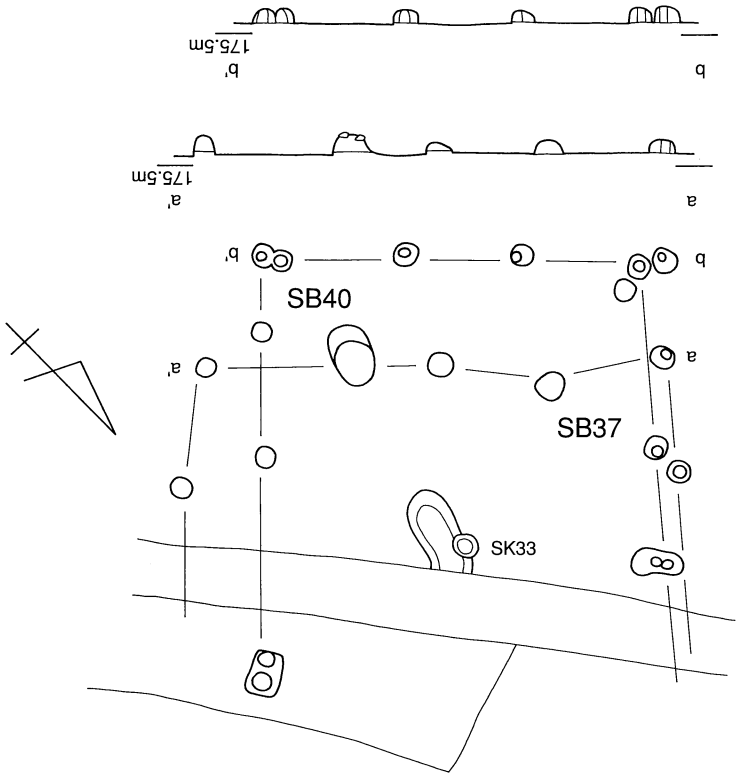
SB8　平・断面図

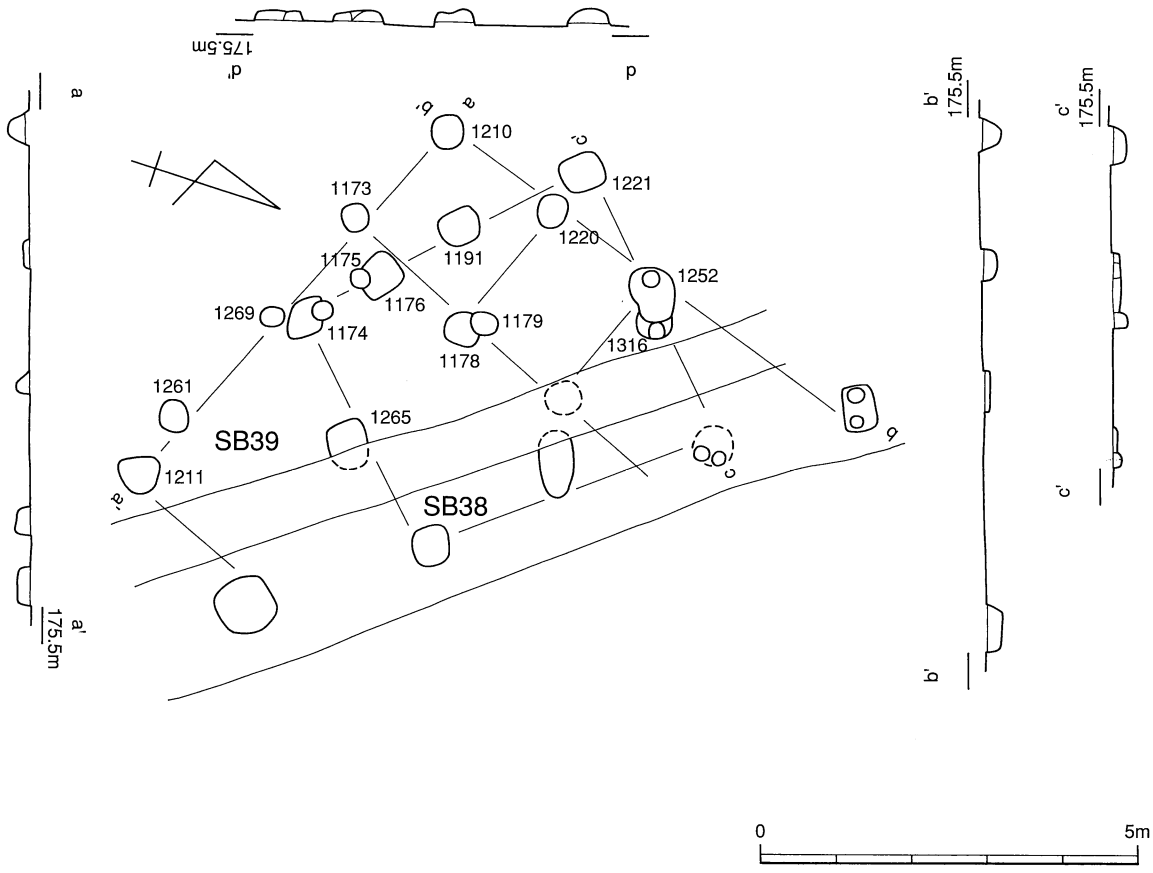


SB41・43・44　平・断面図

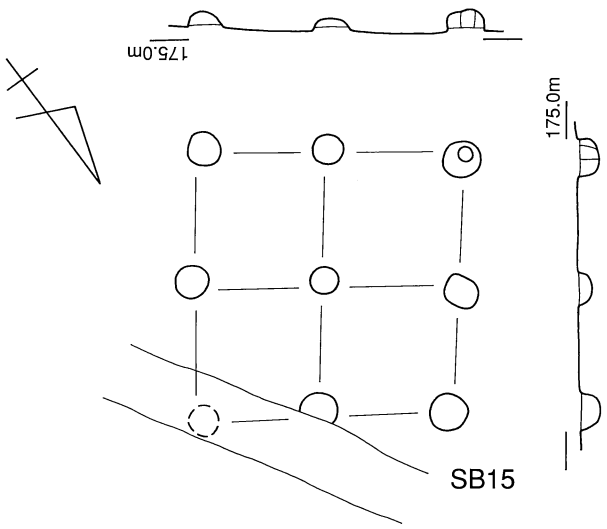


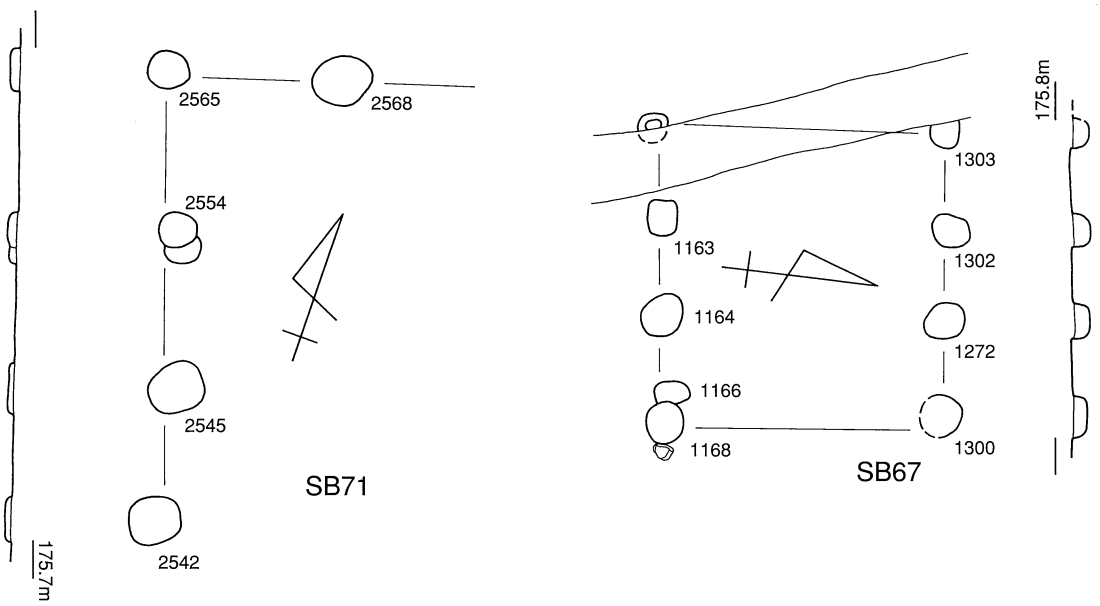
SB56・61・82　平・断面図

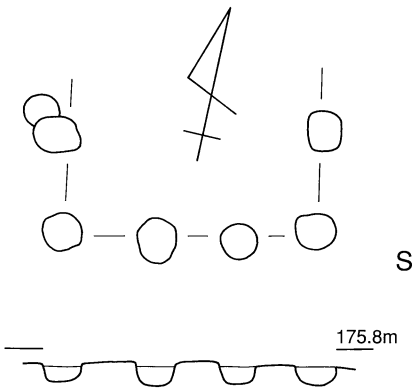

b'
175.5m
b
a'
175.5m
a
b'
b
SB40
a'
a
SB37
SK33


d'
175.5m
d
a
a'
175.5m
b'
175.5m
c'
175.5m
1210
1173
1221
1220
1191
1175
1252
1176
1269
1174
1179
1316
1178
1261
1265
SB39
1211
SB38
0
5m

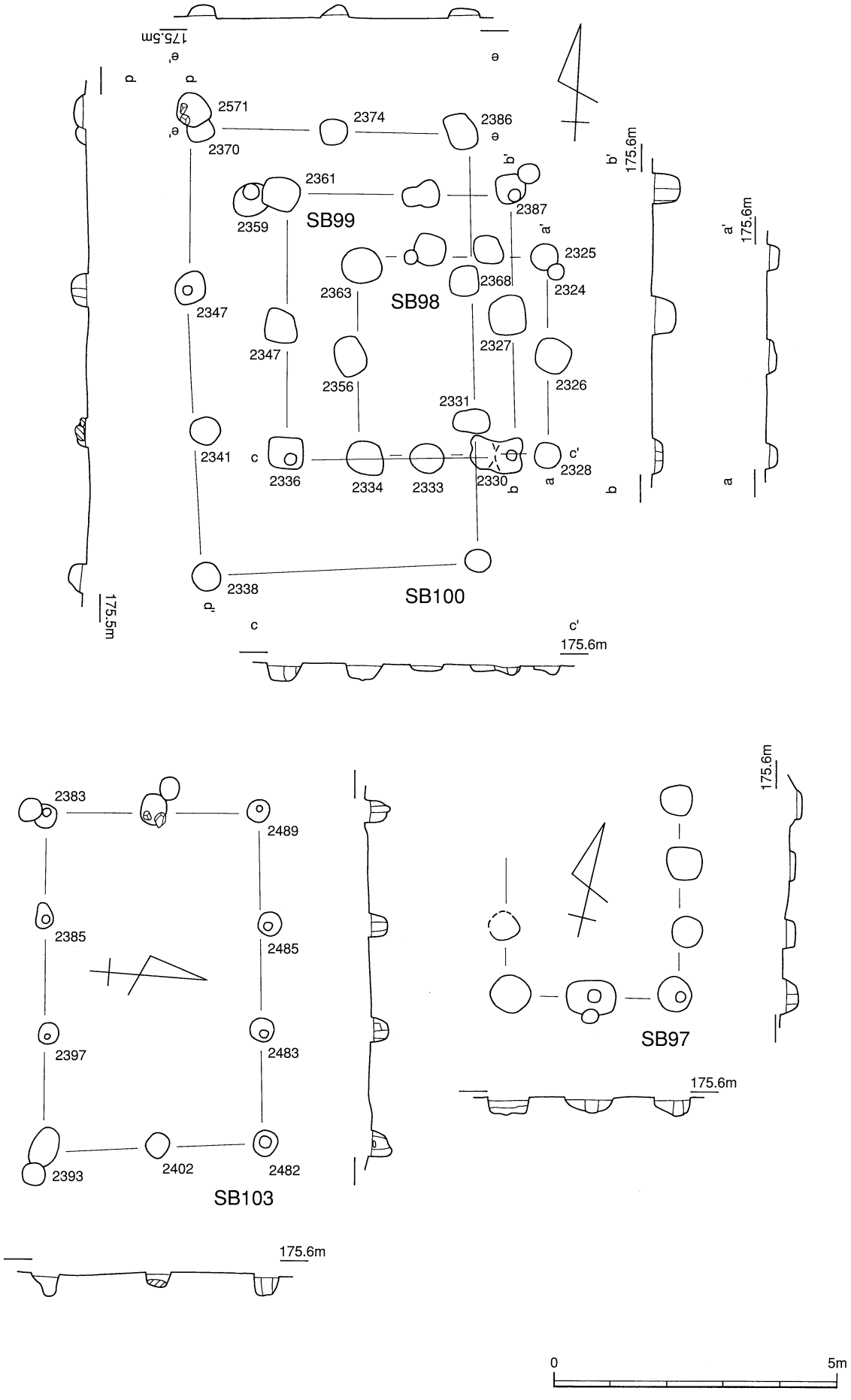
SB37～40　平・断面図



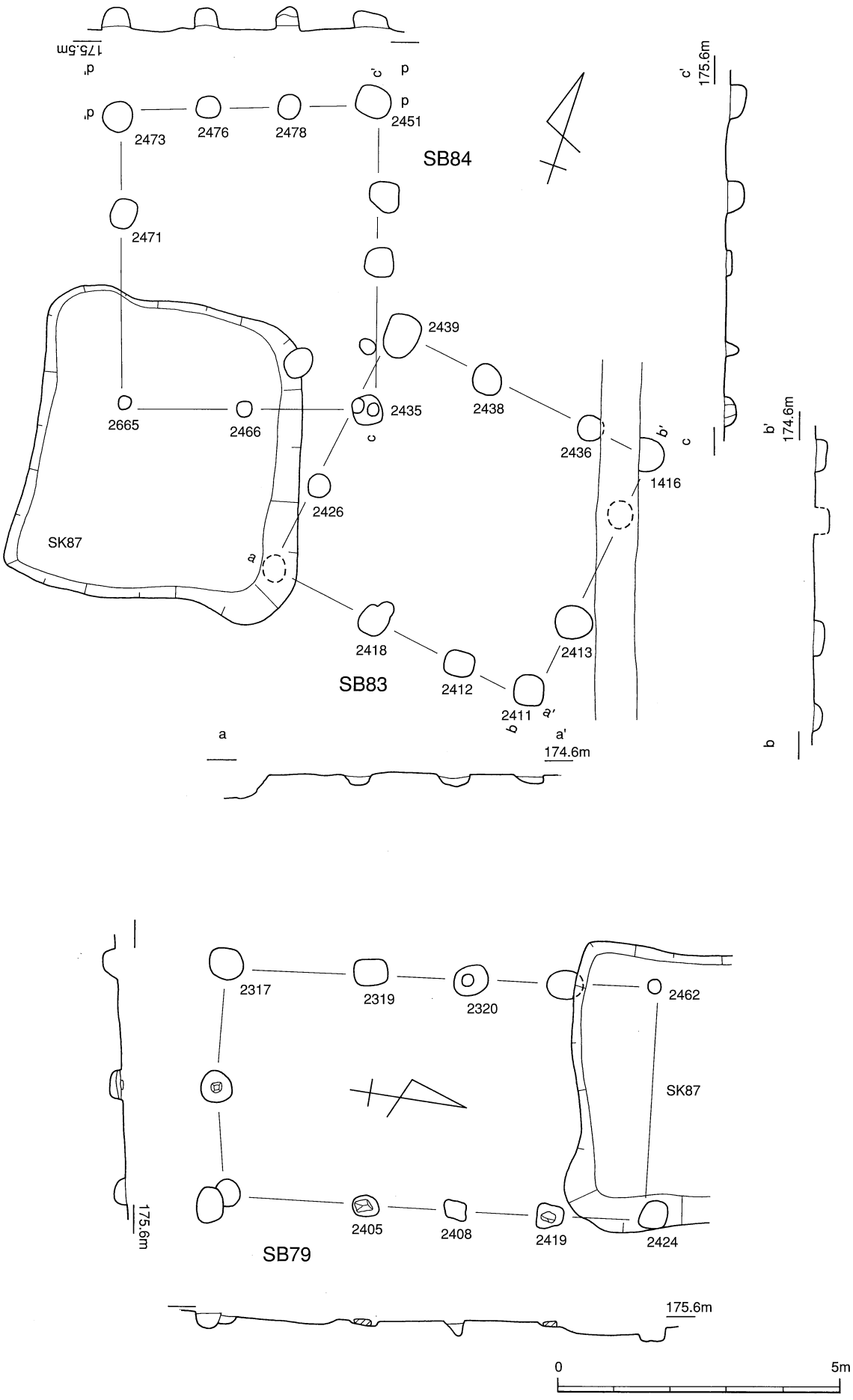




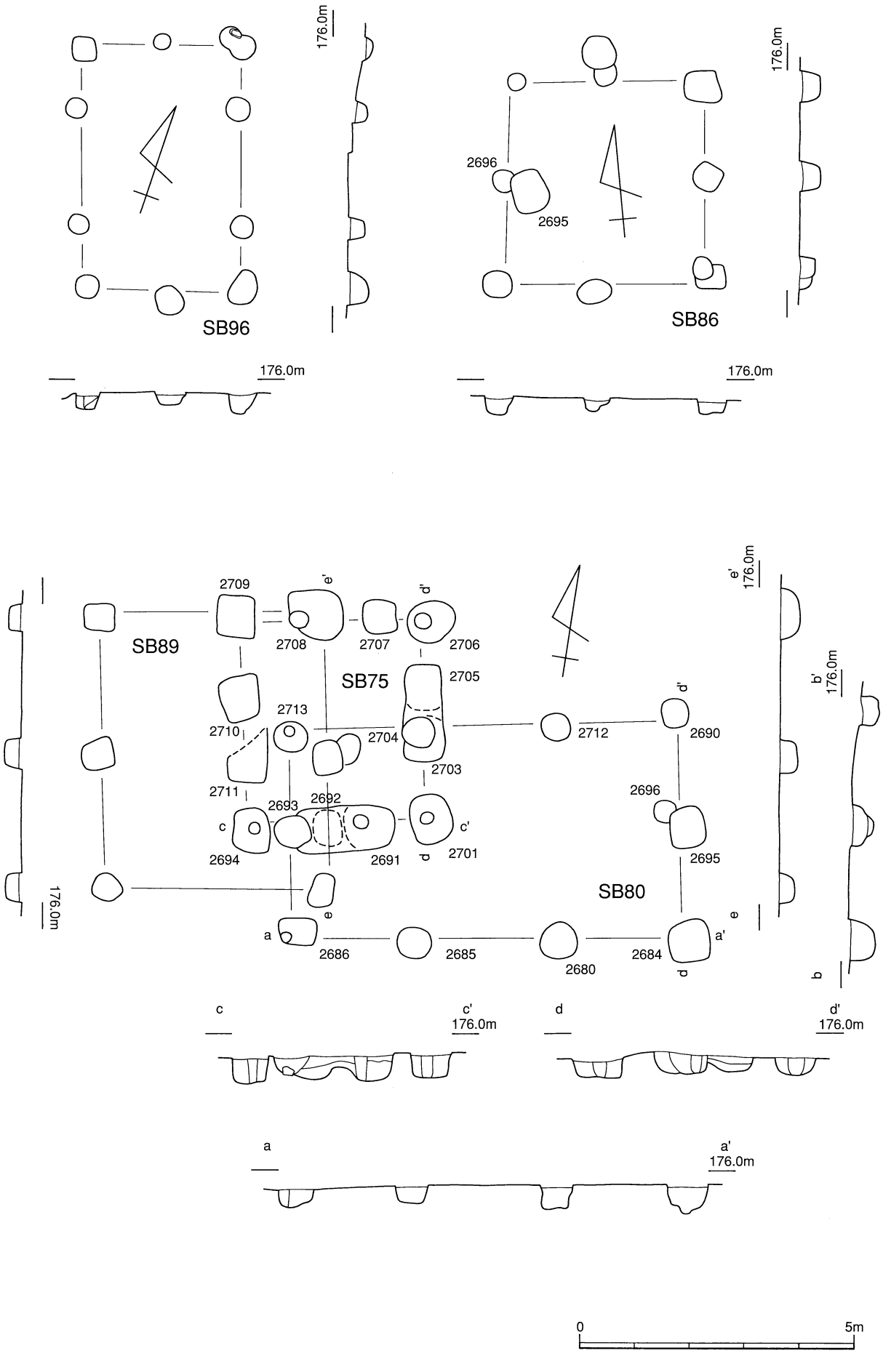
SB15・67・71・87　平・断面図



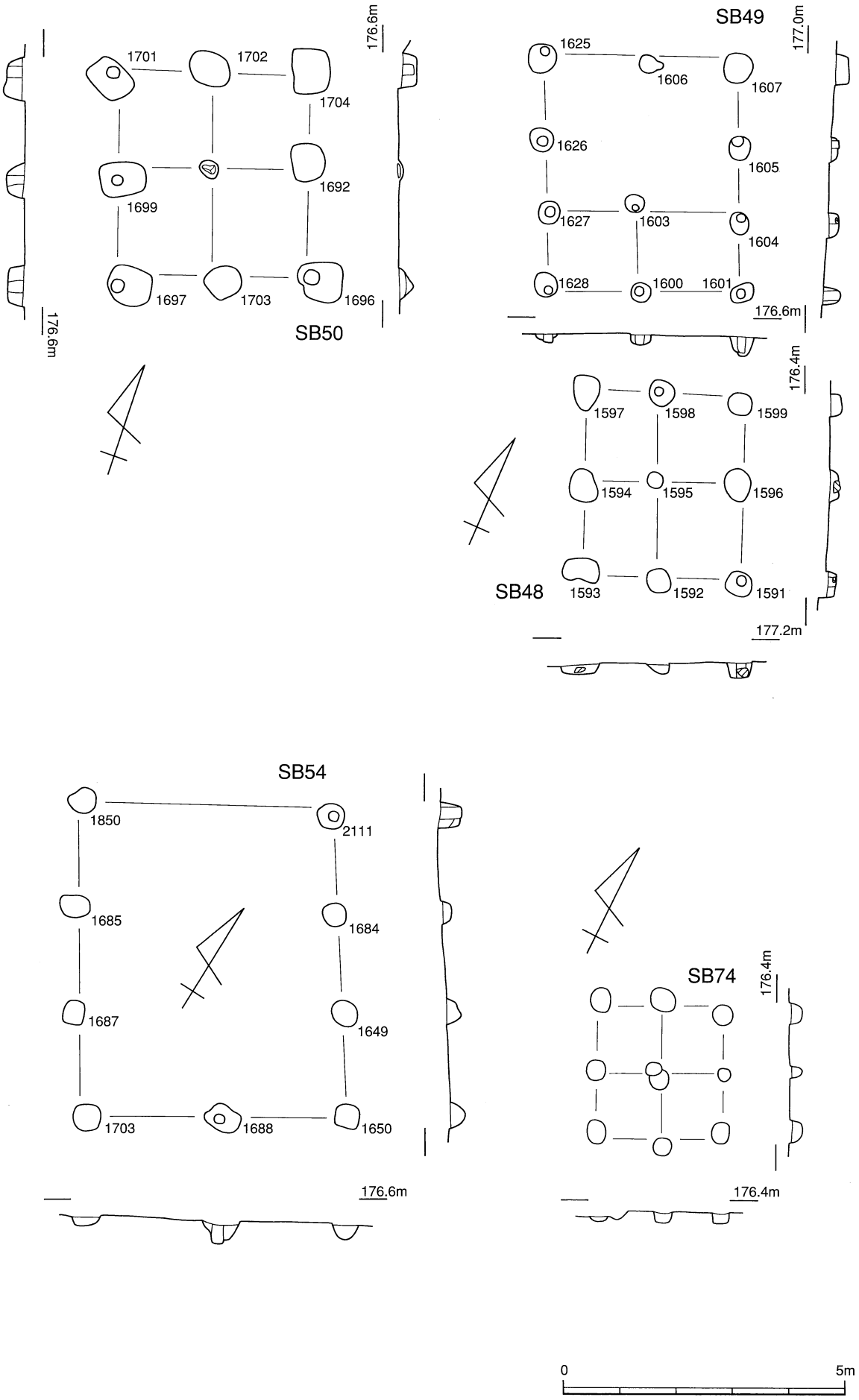
SB97～100・103　平・断面図



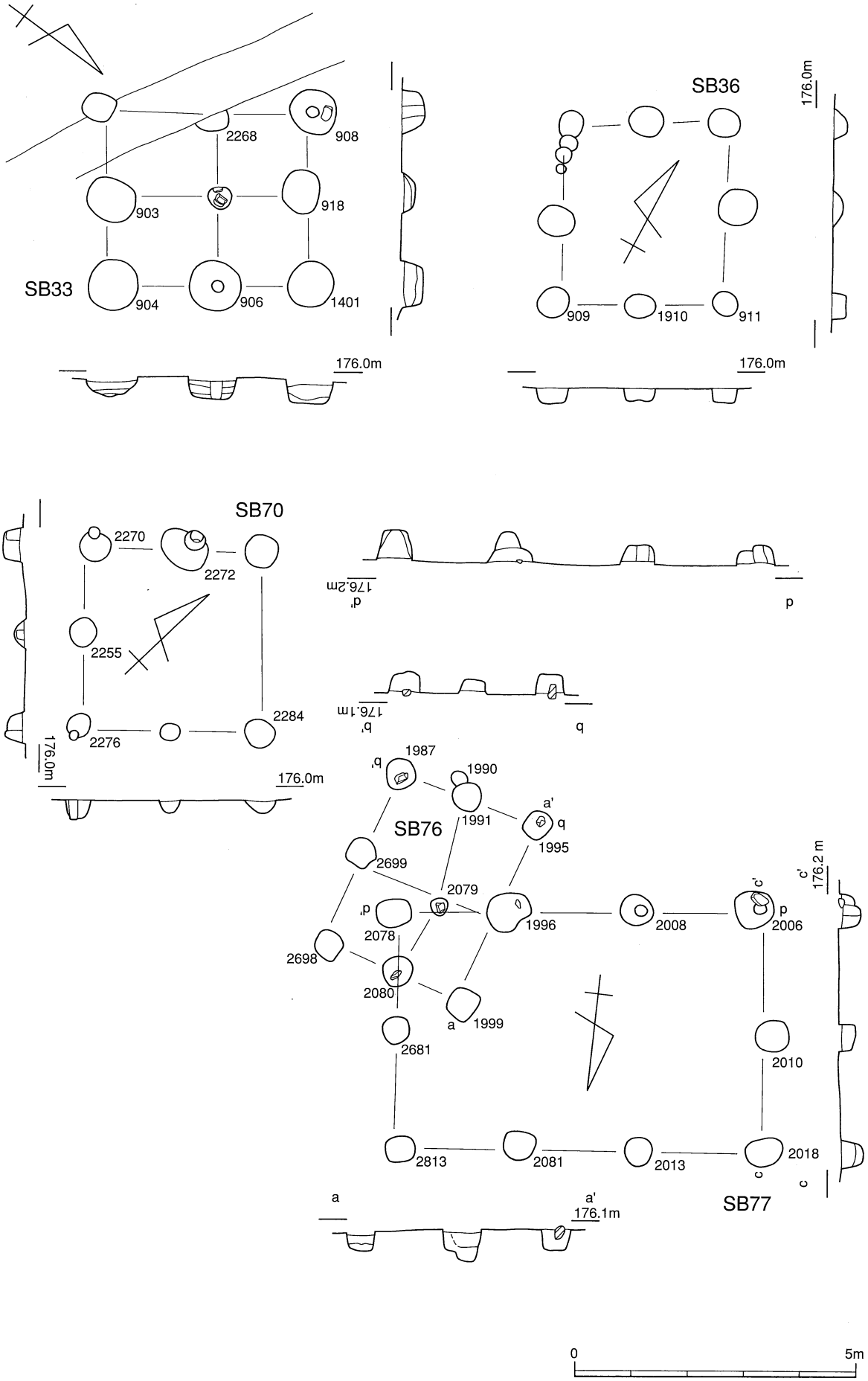
SB79・83・84　平・断面図



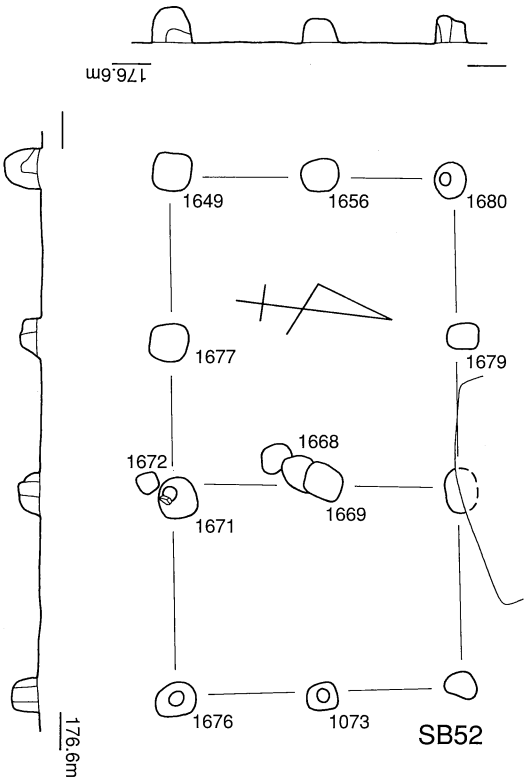
SB75・80・86・89・96　平・断面図

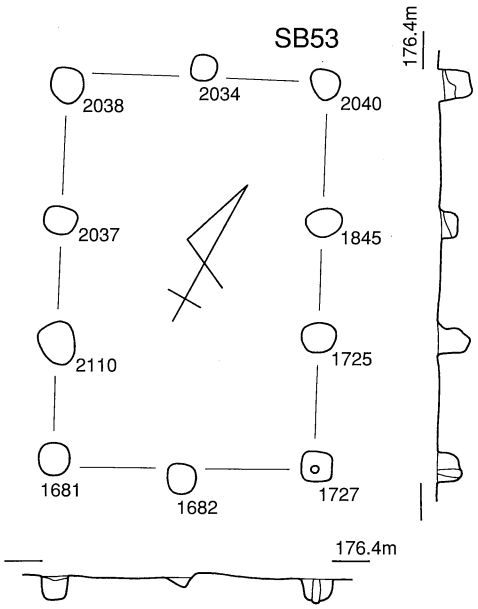


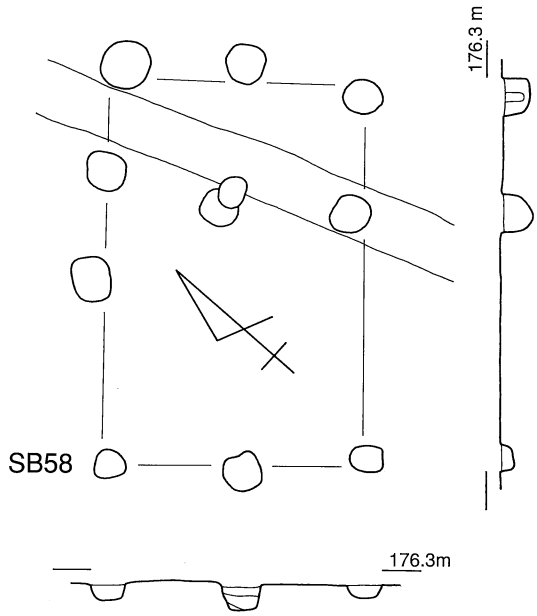
SB48～50・54・74　平・断面図

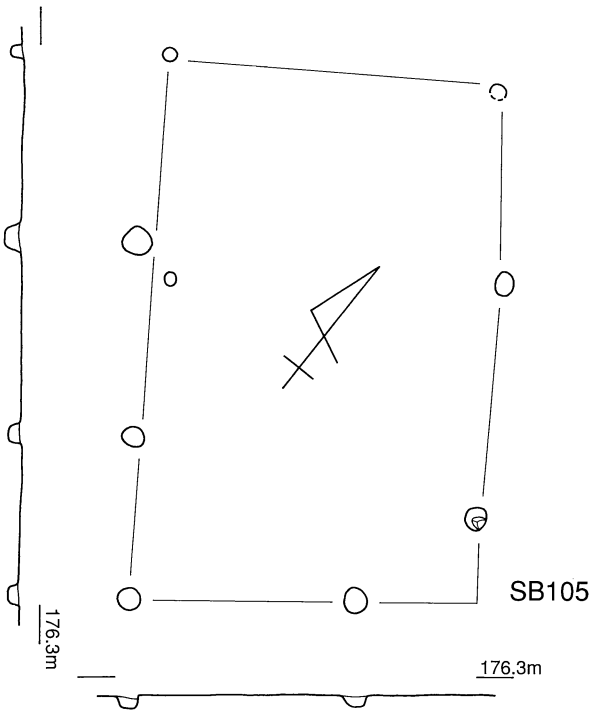


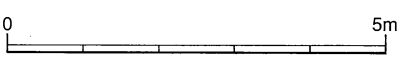
SB33・36・70・76・77　平・断面図



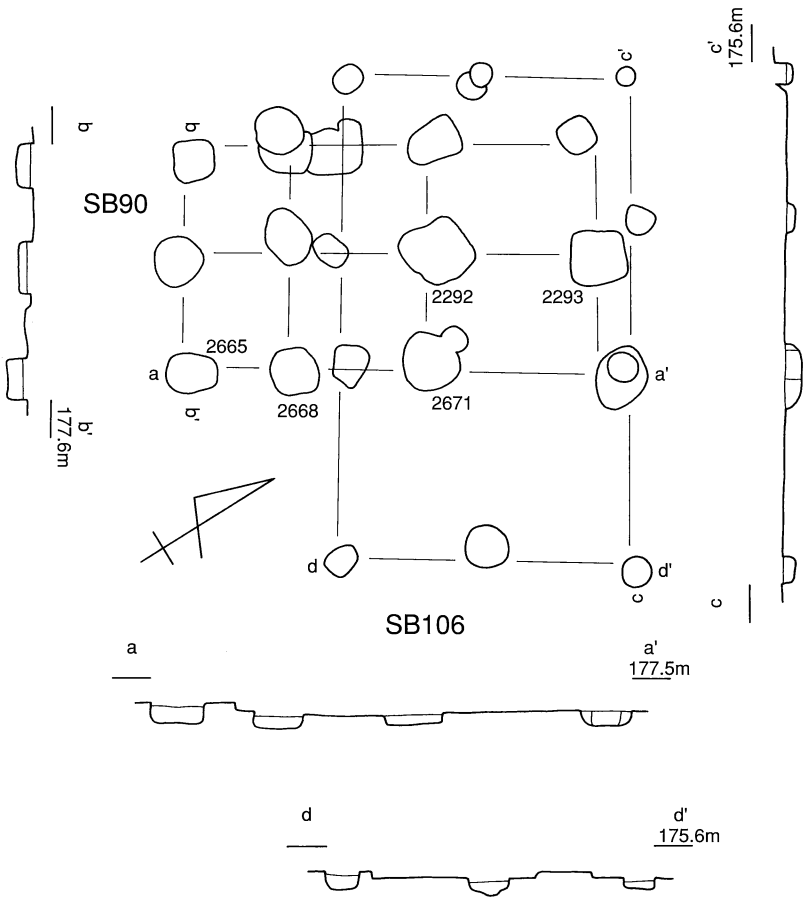


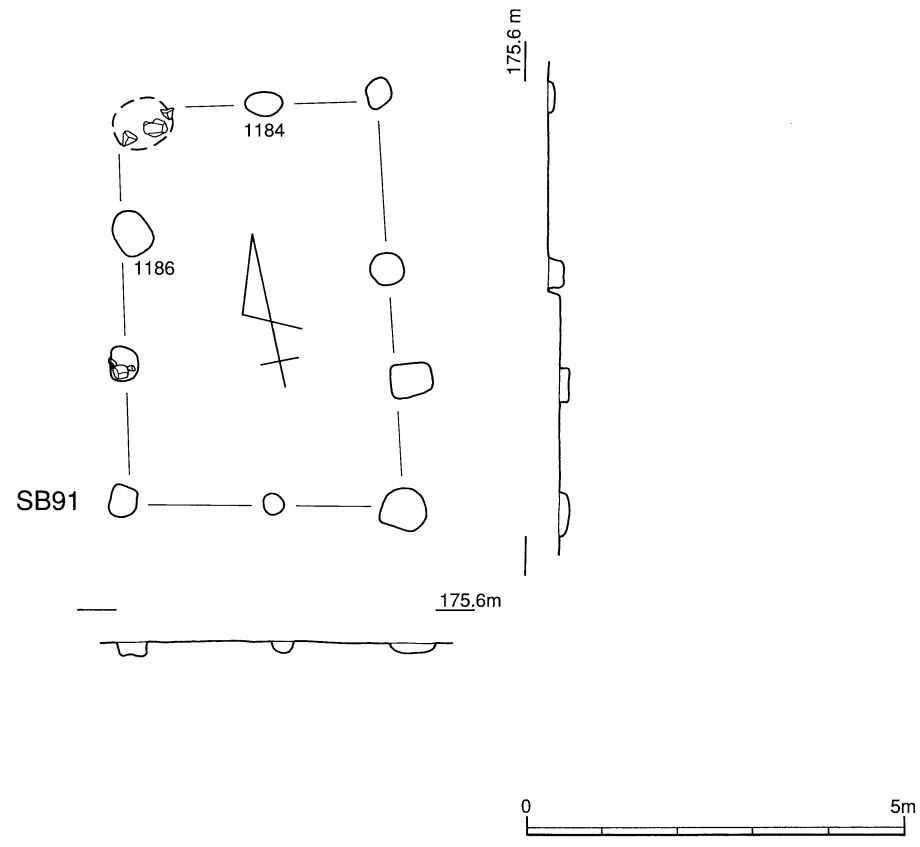




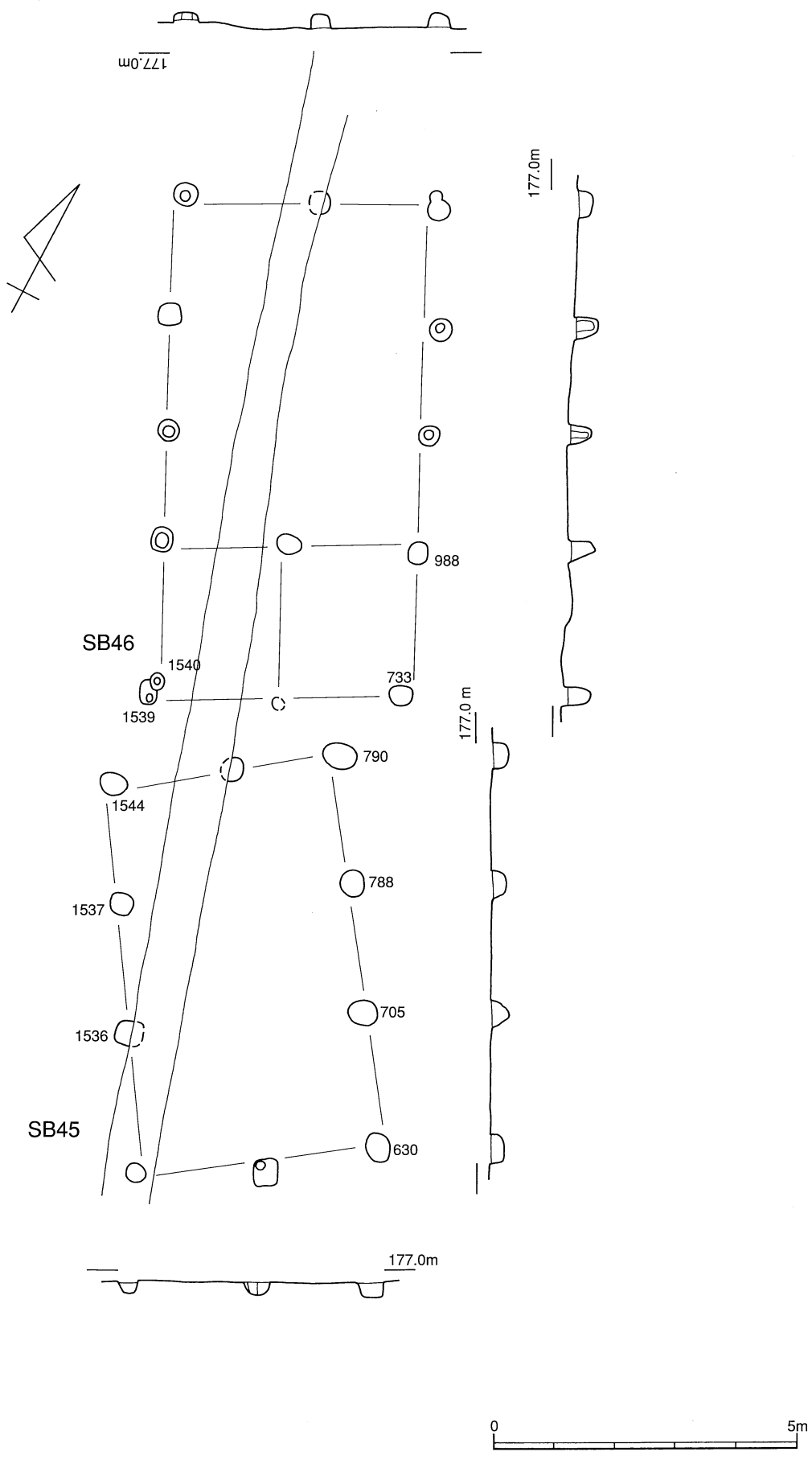


SB52・53・58・105　平・断面図

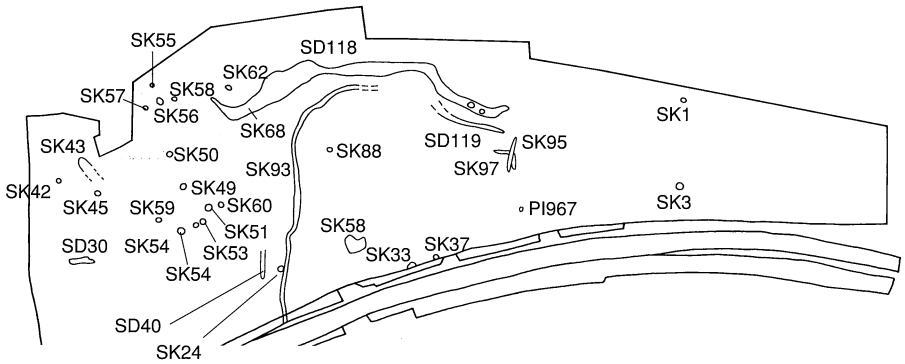


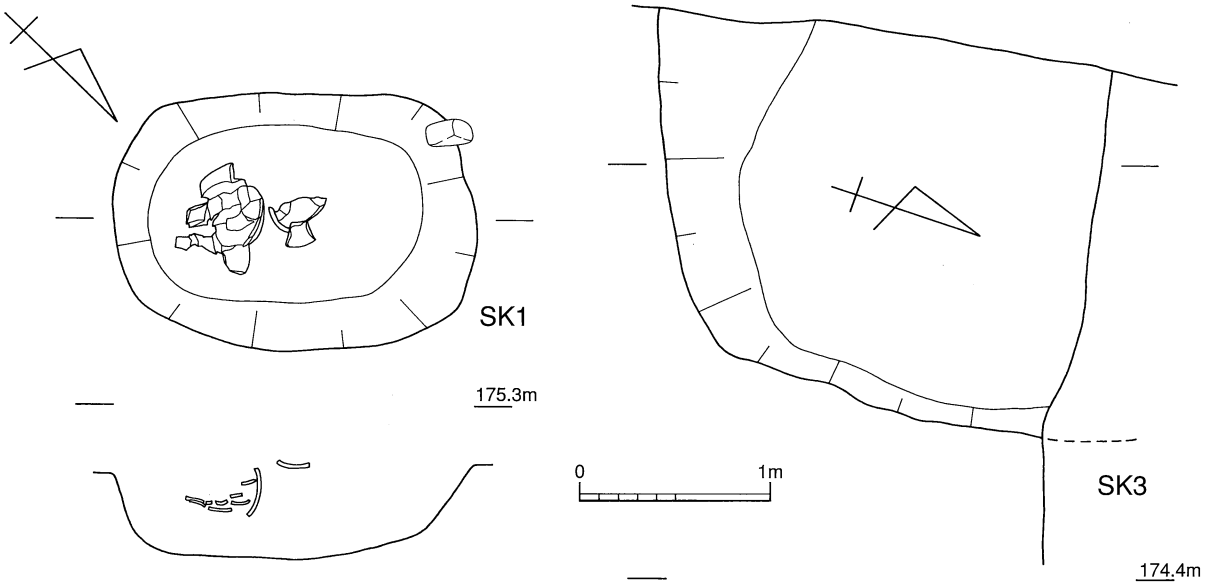


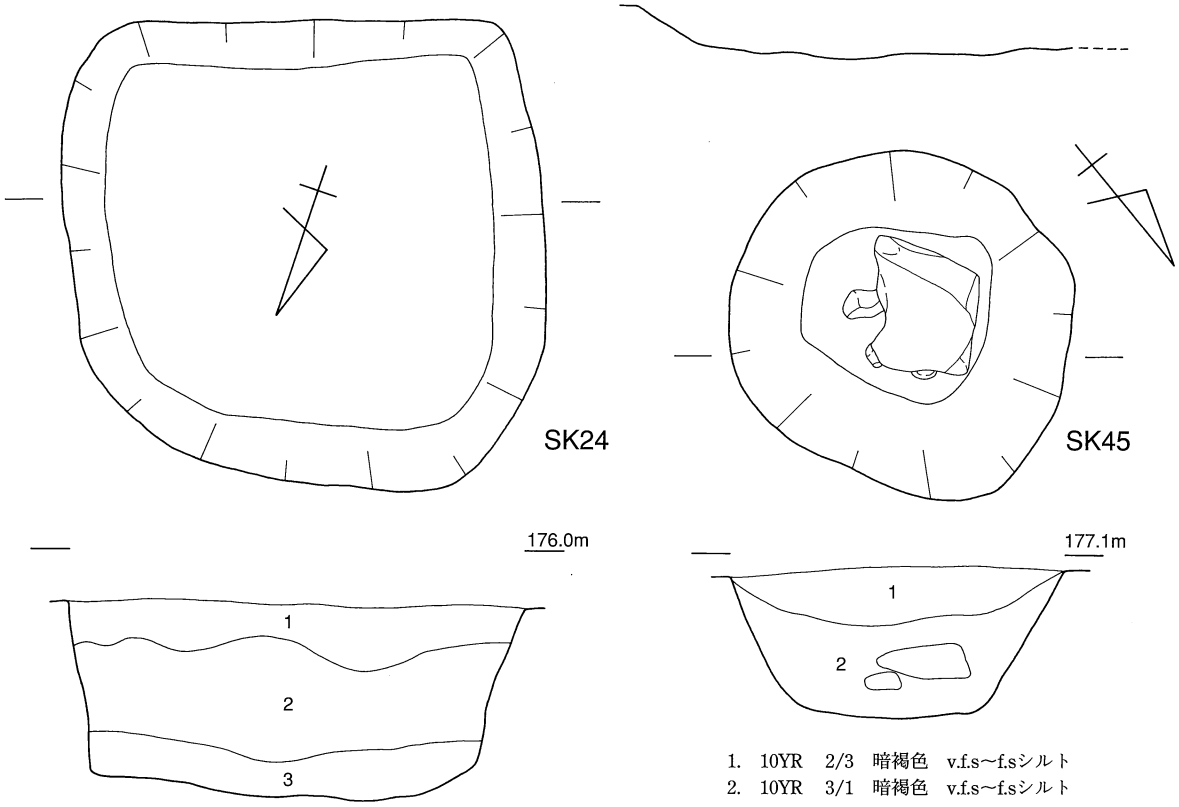
SB90・91・106　平・断面図


177.0m
177.0m
988
SB46
1540
733
1539
177.0 m
790
1544
788
1537
705
1536
SB45
630
177.0m
0
5m

SB45・46　平・断面図





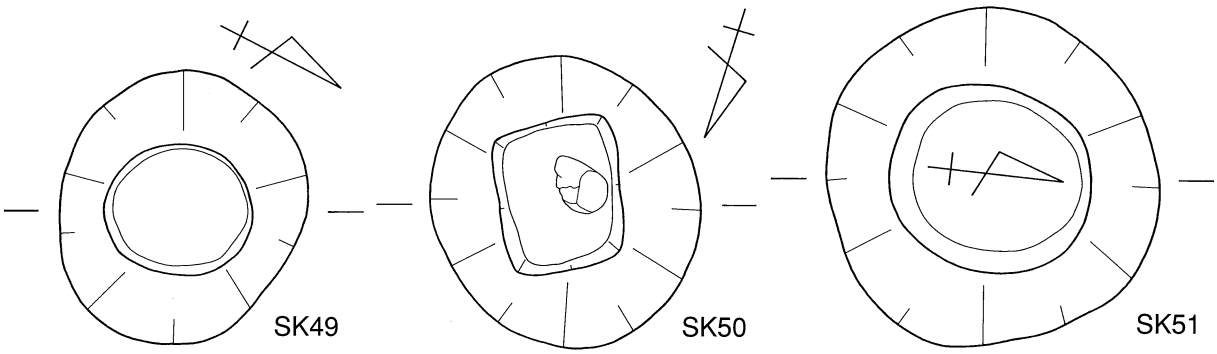


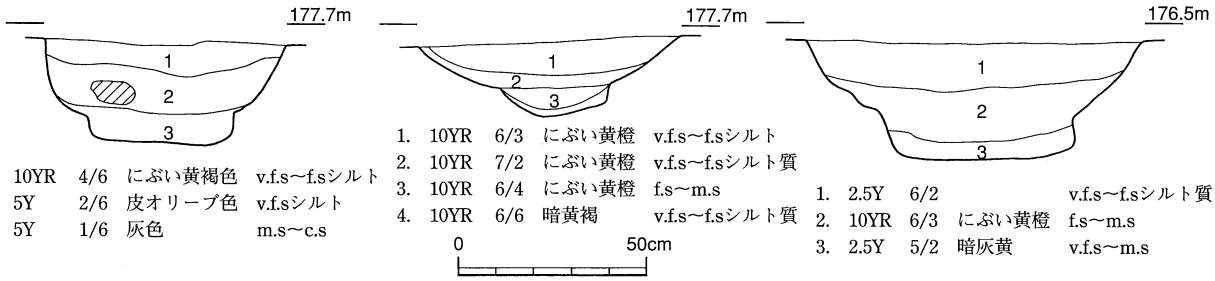
1. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～f.sシルト
2. 7.5YR　4/4　褐色　v.f.s～f.sシルト
3. 2.5YR　5/4　黄褐色　v.f.s～f.sシルト　地山土をブロック状に含む

1. 10YR　2/3　暗褐色　v.f.s～f.sシルト
2. 10YR　3/1　暗褐色　v.f.s～f.sシルト

0　2m

土坑（1）　平・断面図



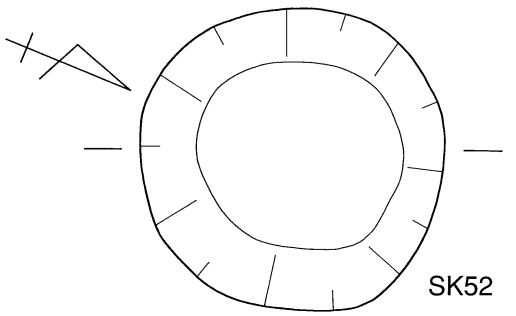


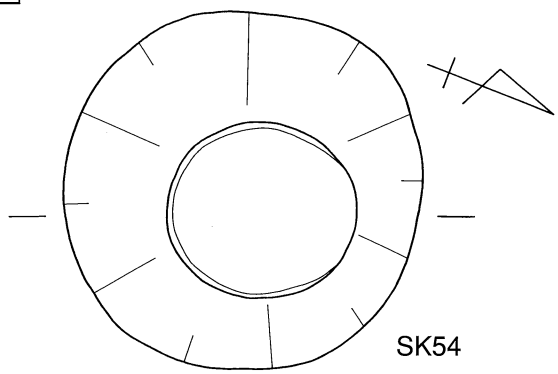
1. 10YR 4/6 にぶい黄褐色 v.f.s～f.sシルト
2. 5Y 2/6 皮オリーブ色 v.f.sシルト
3. 5Y 1/6 灰色 m.s～c.s

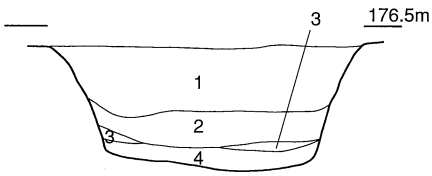
1. 10YR 6/3 にぶい黄橙 v.f.s～f.sシルト
2. 10YR 7/2 にぶい黄橙 v.f.s～f.sシルト質
3. 10YR 6/4 にぶい黄橙 f.s～m.s
4. 10YR 6/6 暗黄褐 v.f.s～f.sシルト質

1. 2.5Y 6/2 v.f.s～f.sシルト質
2. 10YR 6/3 にぶい黄橙 f.s～m.s
3. 2.5Y 5/2 暗灰黄 v.f.s～m.s

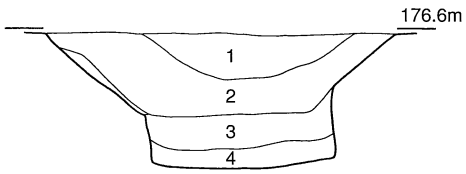
0 50cm



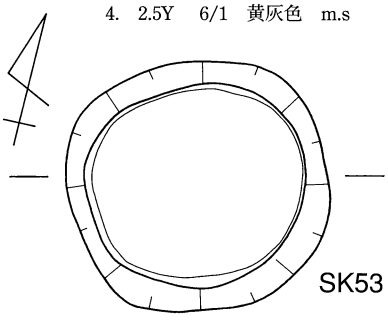




1. 2.5Y 6/1 黄灰色 v.f.s～f.sシルト質
2. 2.5Y 6/2 灰黄色 m.s
3. 2.5Y 5/6 黄褐色 v.f.s～f.sシルト質
4. 2.5Y 6/1 黄灰色 m.s

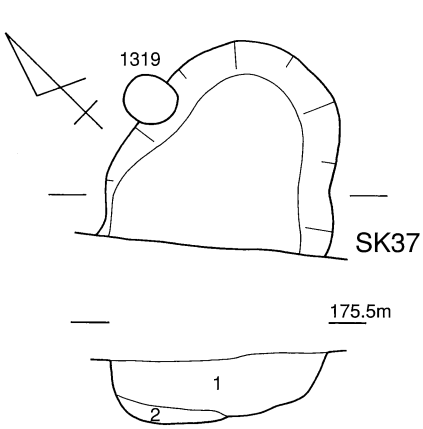


1. 2.5Y 6/3 にぶい黄色 v.f.s～f.sシルト質
2. 2.5Y 6/3 にぶい黄色 v.f.s～m.s
3. 2.5Y 5/2 にぶい黄色 v.f.sシルト
4. 2.5Y 5/3 暗褐色 f.s～c.sシルト質

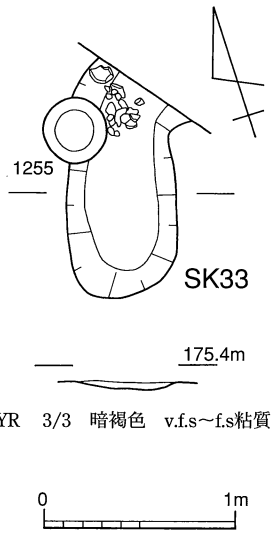


1. 10YR 6/2 暗黄褐色 v.f.s～f.sシルト質
2. 2.5YR 6/2 灰黄色 v.f.sシルト質
3. 10YR 6/1 にぶい黄橙色 v.f.sシルト質

0 50cm



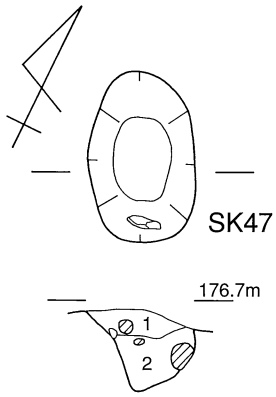
1. 7.5YR 4/4 褐色 極細砂～細砂
   φ5～10mm大の礫を少量含む
2. 2.5YR 6/8 明黄褐色 極細砂～細砂(地山)



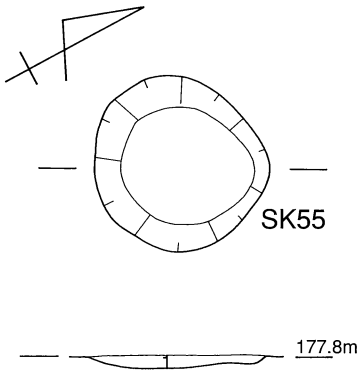
10YR 3/3 暗褐色 v.f.s～f.s粘質

0 1m

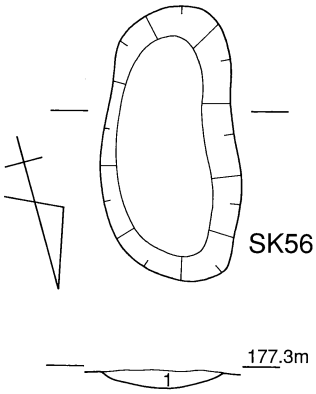
土坑（2）　平・断面図



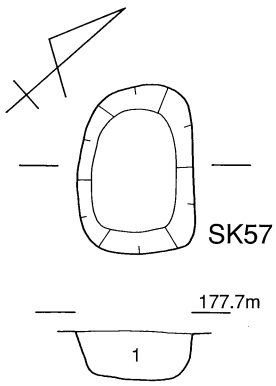
1. 10YR 3/1 黒褐色 v.f.s～f.sシルト
2. 10YR 2/1 黒 v.f.sシルト



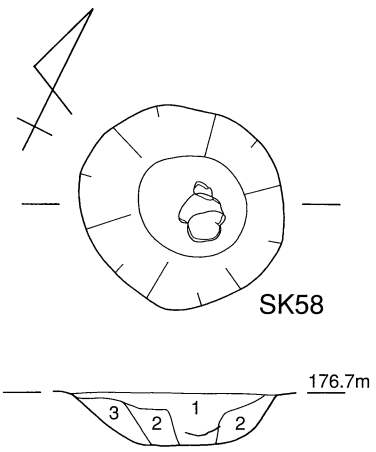
1. 7.5YR 3/4 v.f.s～f.sシルト質



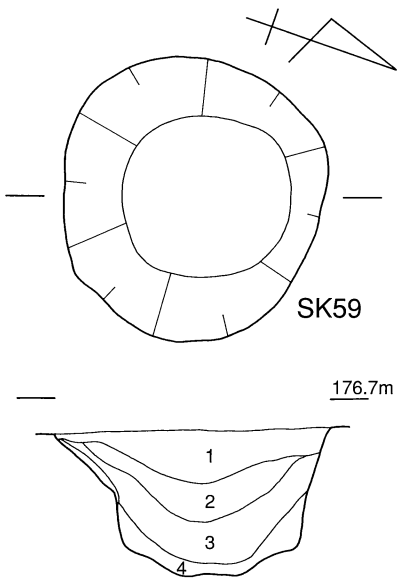
1. 7.5YR 3/4 v.f.s～f.sシルト質



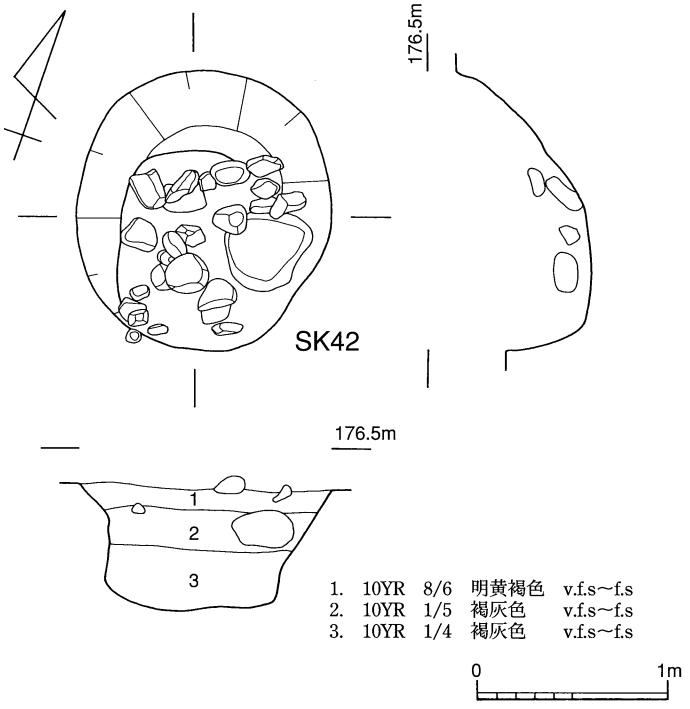
1. 7.5YR 3/4v.f.s～f.sシルト質



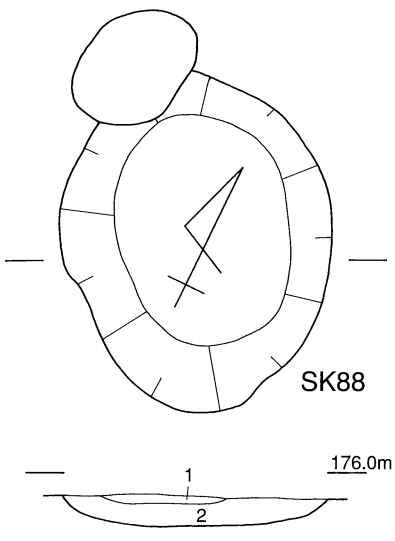
1. 10YR 5/2 灰黄褐色 シルト質 v.f.s～f.s
2. 10YR 4/3 にぶい黄褐 シルト質 v.f.s～f.s
3. 10YR 4/4 褐 シルト質 v.f.s～m.s



1. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト質 v.f.s～f.s
2. 2.5Y 6/3 にぶい黄 シルト質 v.f.s～m.s
3. 10YR 6/2 灰黄褐 シルト質 v.f.s
4. 10YR 7/2 にぶい黄橙 v.f.s～f.sシルト

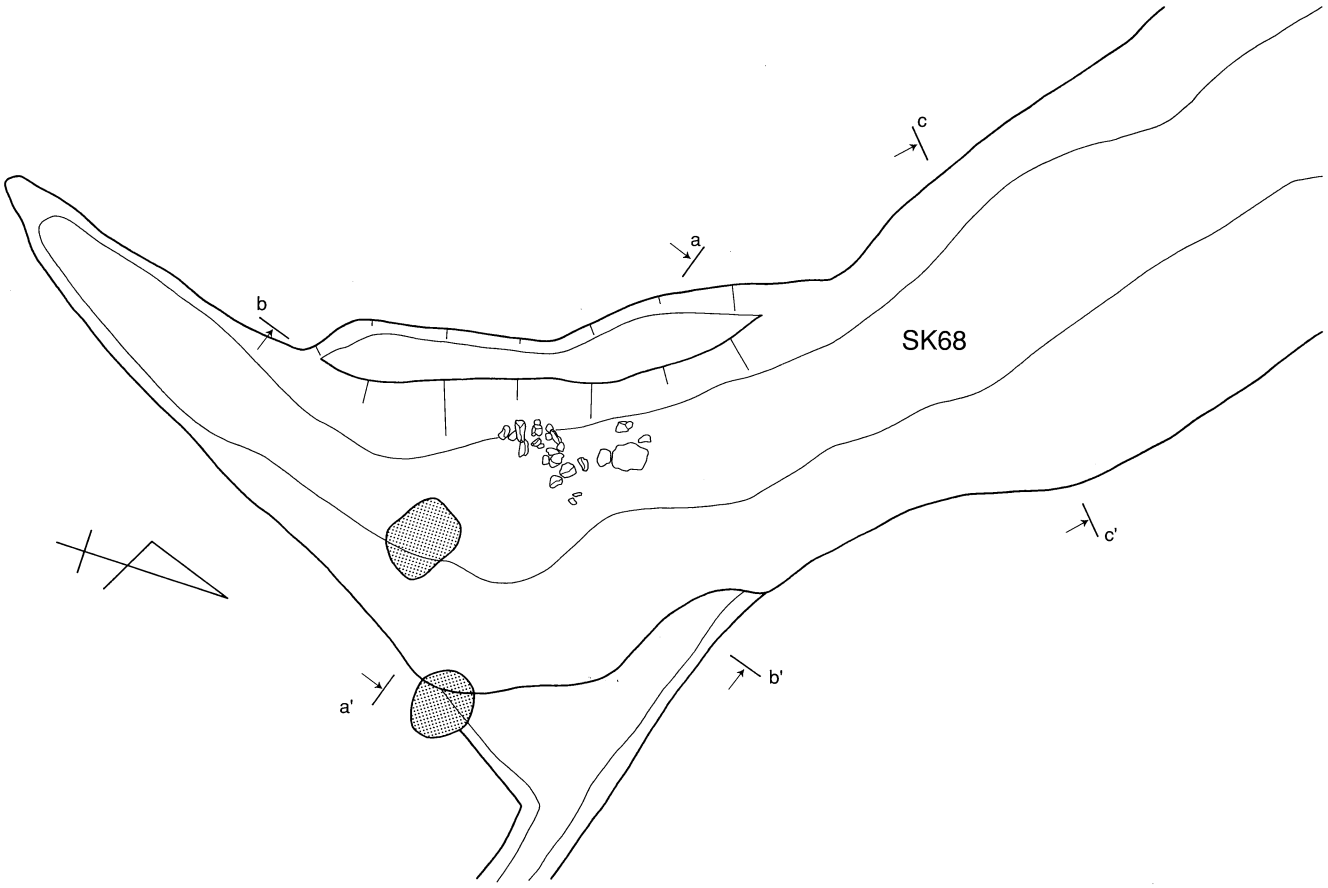


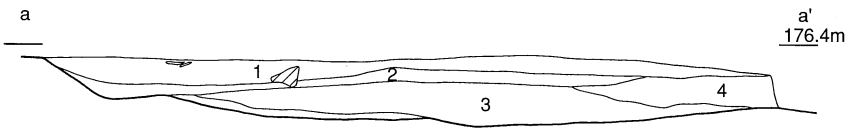
1. 10YR 8/6 明黄褐色 v.f.s～f.s
2. 10YR 1/5 褐灰色 v.f.s～f.s
3. 10YR 1/4 褐灰色 v.f.s～f.s

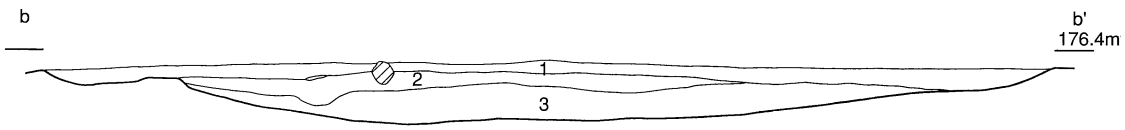


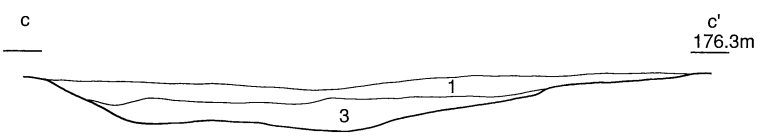
1. 10YR 2/3 黒褐シルト質 v.f.s～f.s炭混入
2. 10YR 10/1 黒(炭層) v.f.s～f.s

土坑（3）　平・断面図

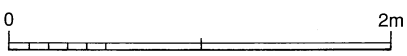




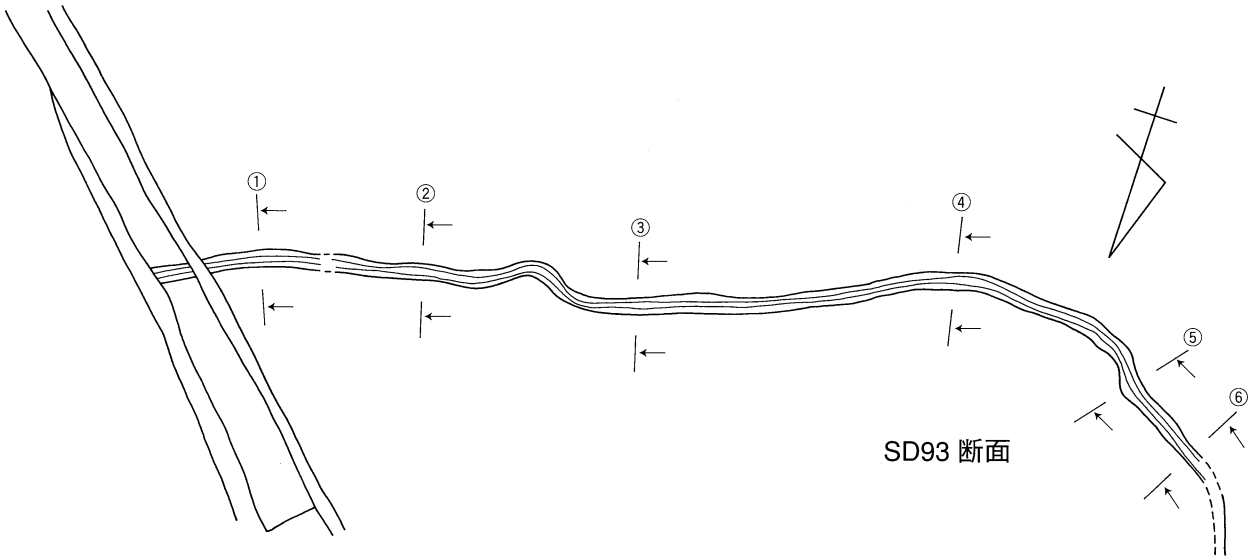


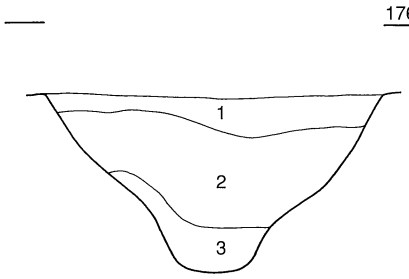


1. 2.5Y　8/6　明黄褐色　極細砂～細砂
2. 10YR　6/4　褐色　極細砂～細砂
3. 10YR　1/6　褐灰色　粗砂
4. 10YR　1/6　明黄褐色　極細砂～細砂

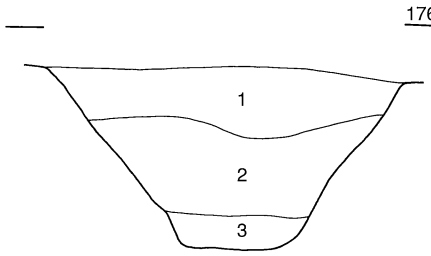


土坑（4）　平・断面図

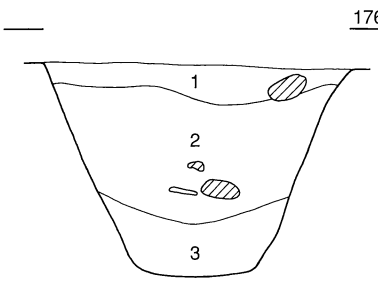




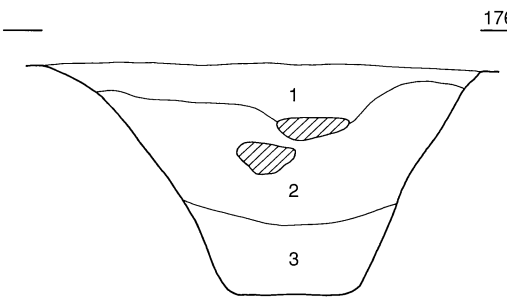
①
1. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～f.sシルト
2. 7.5YR　3/3　暗褐色　v.f.s～f.sシルト
3. 7.5YR　3/1　黒褐色　v.f.s～f.sシルト多量に炭含む



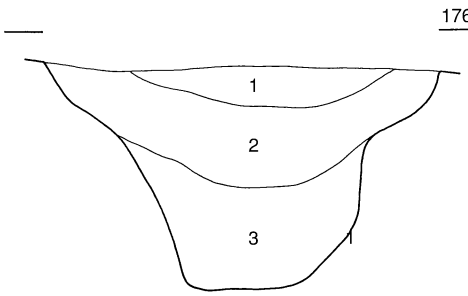
②
1. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～f.sシルト
2. 7.5YR　3/3　暗褐色　v.f.s～f.sシルト
3. 5Y　5/1　灰色　v.f.s～f.sシルト



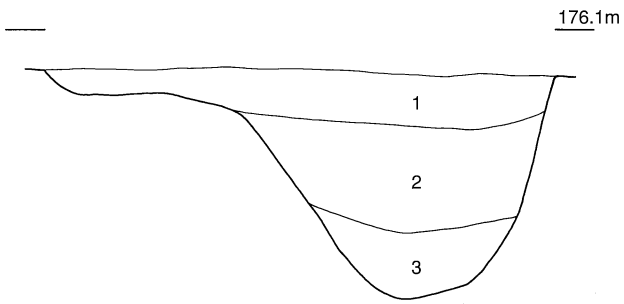
③
1. 10YR　5/6　黄褐色　v.f.s～f.sシルト質
2. 10YR　4/3　にぶい黄褐色　v.f.s～f.sシルト質　炭若干混入
3. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～f.sシルト質



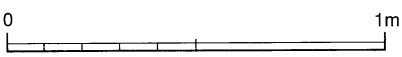
④
1. 10YR　5/6　黄褐色　v.f.s～f.sシルト質
2. 10YR　4/3　にぶい黄褐色　v.f.s～f.sシルト質(炭若干混入)
3. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～m.sシルト質



⑤
1. 炭層
2. 10YR　5/4　にぶい黄褐色　v.f.s～m.sシルト質(gran混り)
3. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～m.s



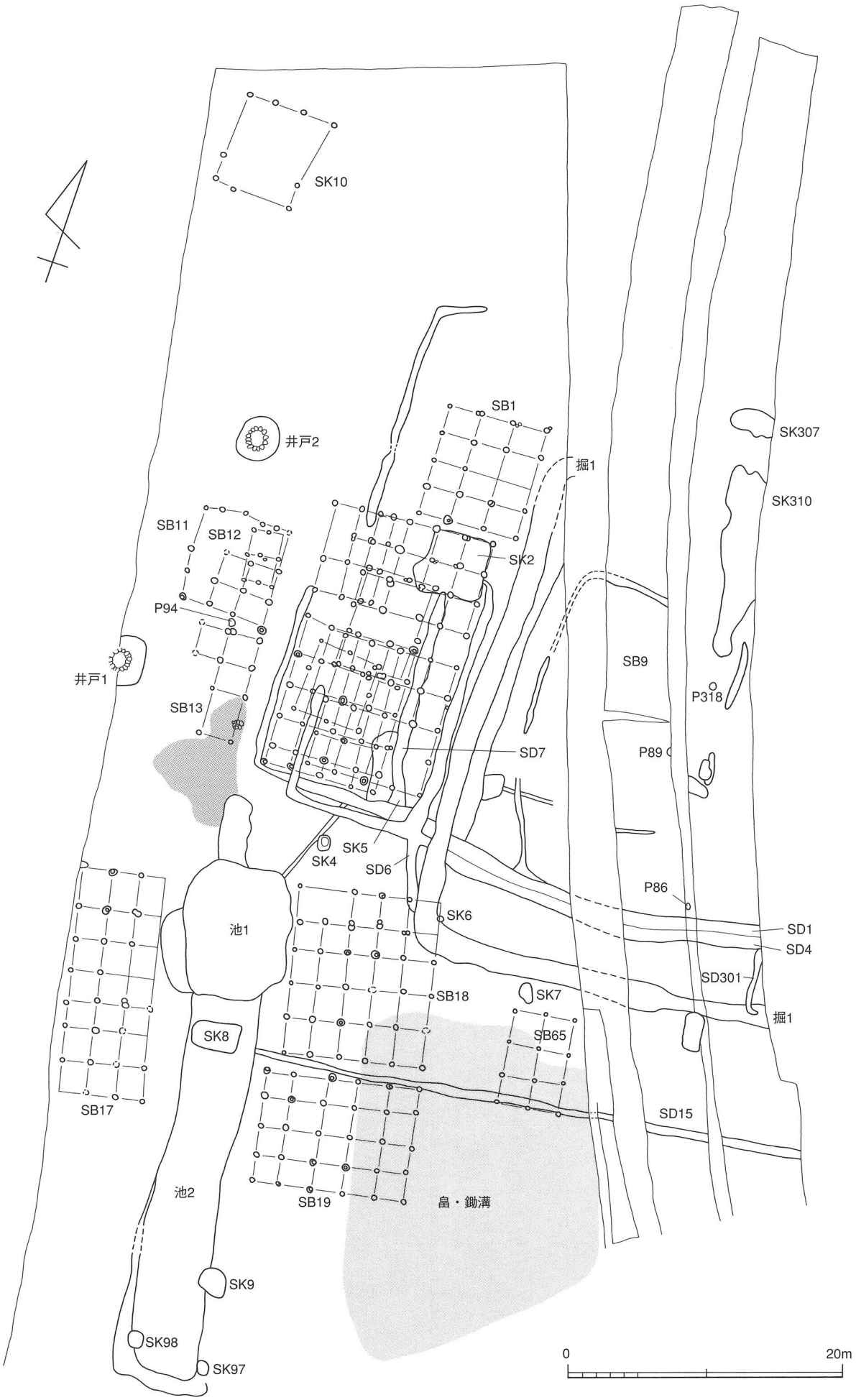
⑥
1. 10YR　5/6　黄褐色　v.f.s～f.sシルト質
2. 10YR　5/4　にぶい暗褐色　v.f.s～f.sシルト質(炭若干混入)
3. 10YR　5/8　黄褐色　v.f.s～m.sシルト質



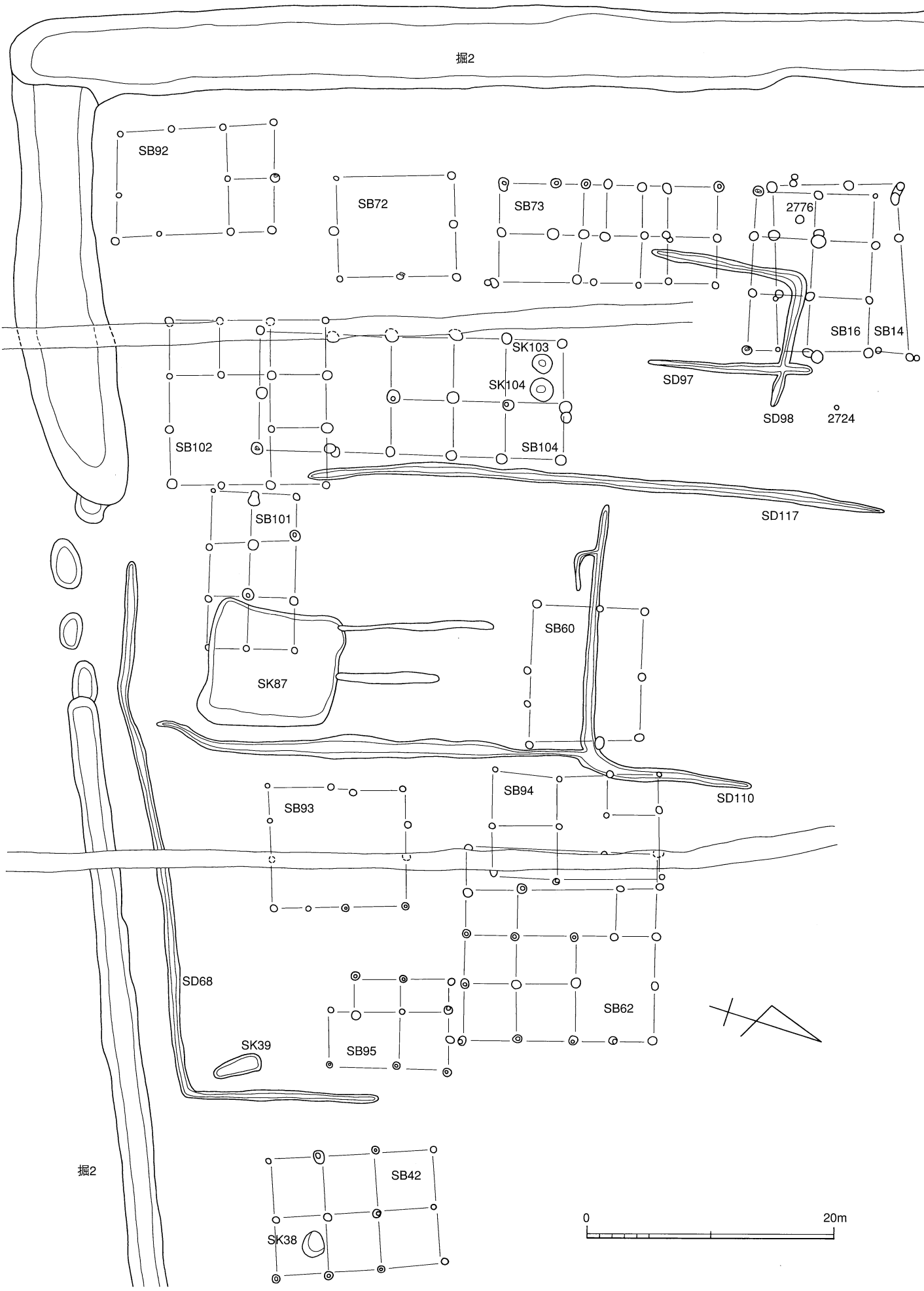
溝　平・断面図

図版三七　中世遺構全体図

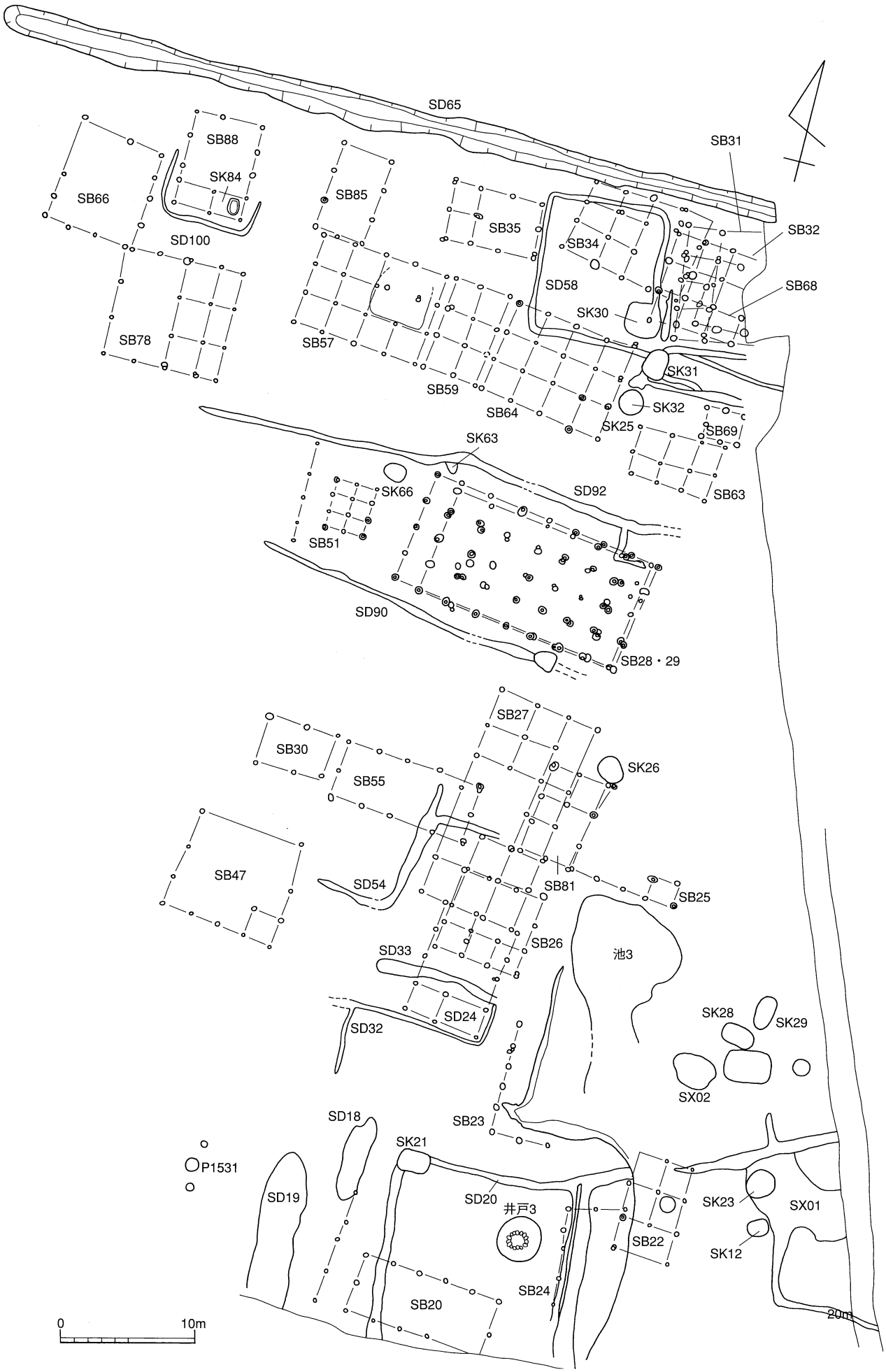
図版三八　中世Ⅰ区　遺構配置図



図版三九　中世Ⅱ区　遺構配置図

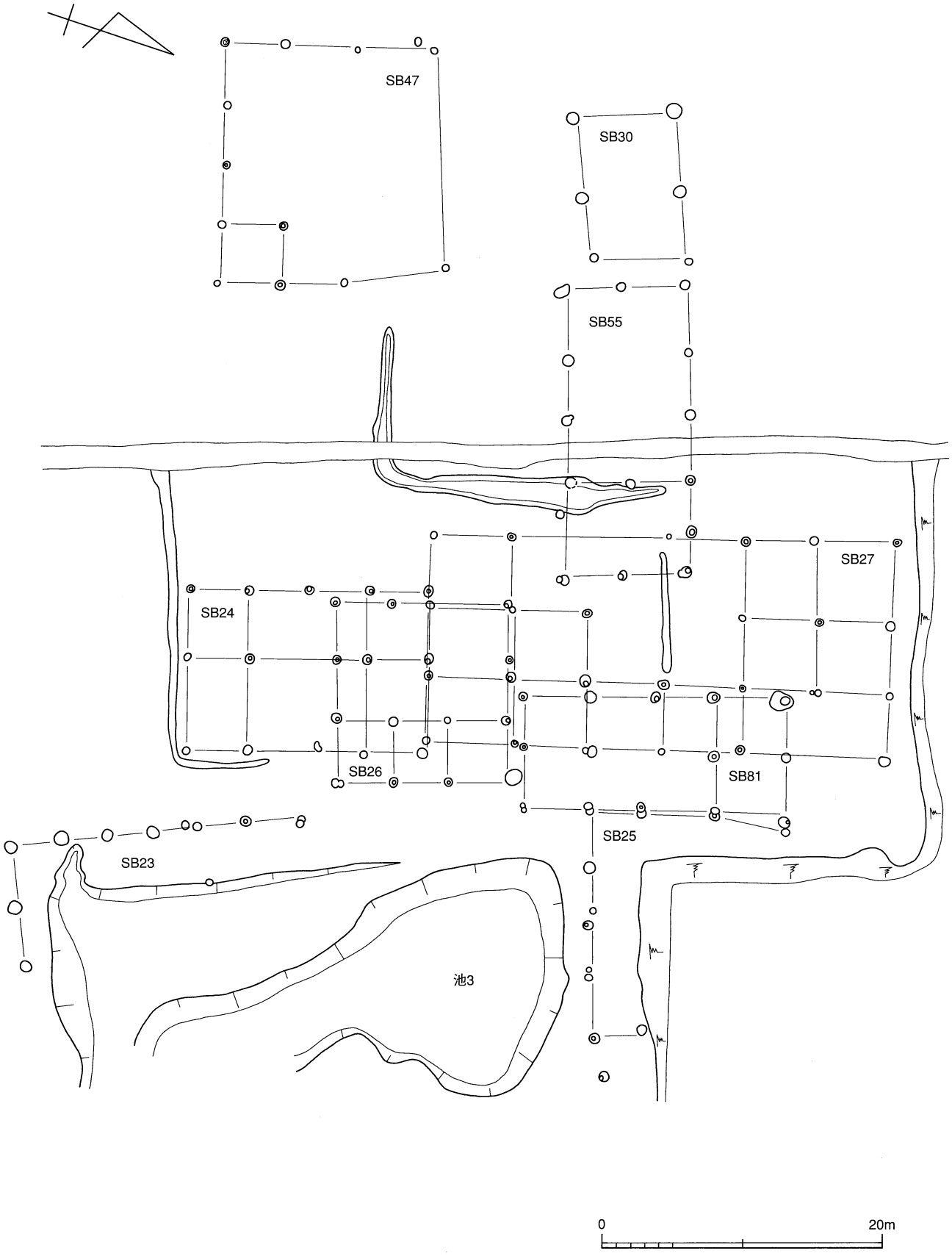


図版四〇　中世Ⅲ区　遺構配置図

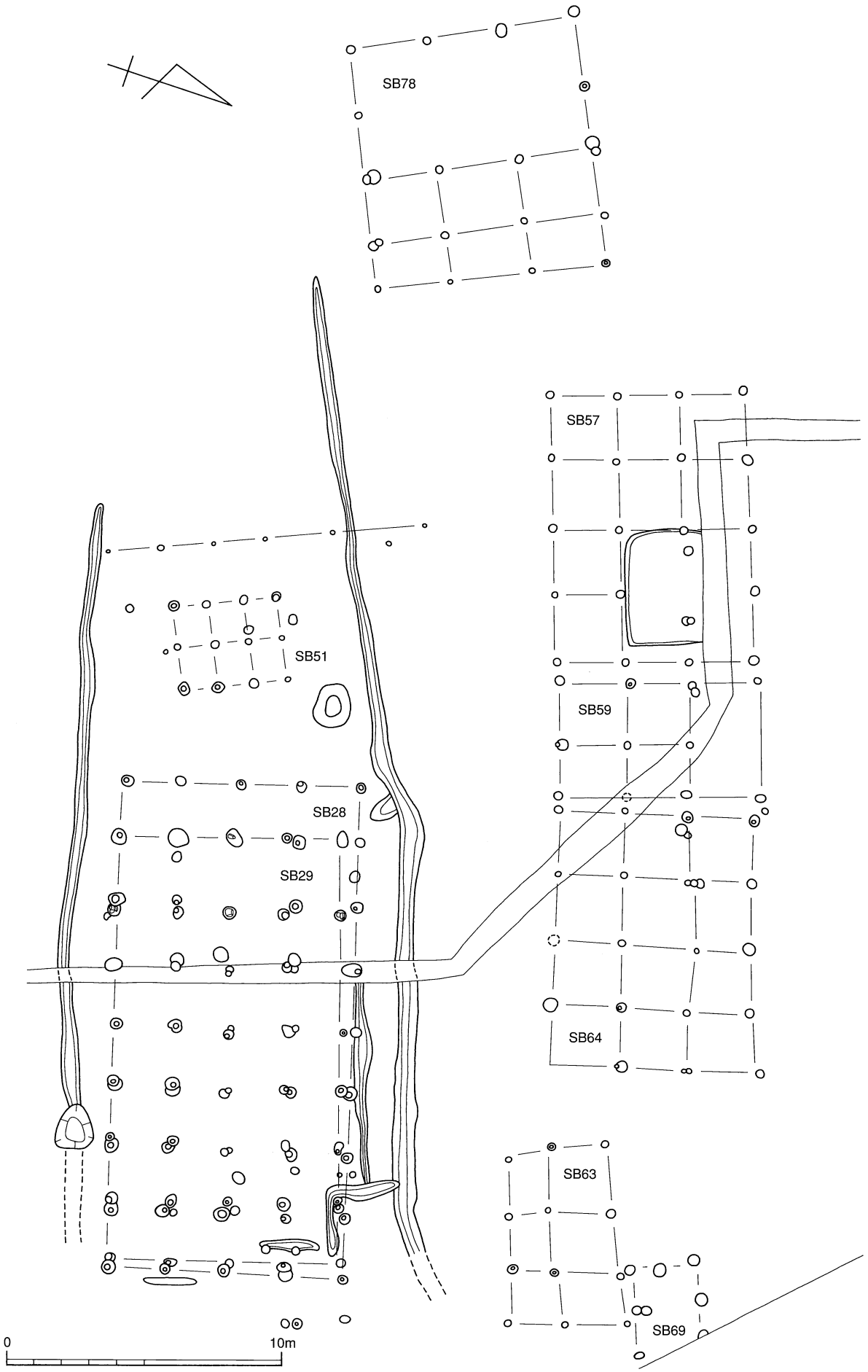


図版四一　第1次調査　中世Ⅰ区　詳細図

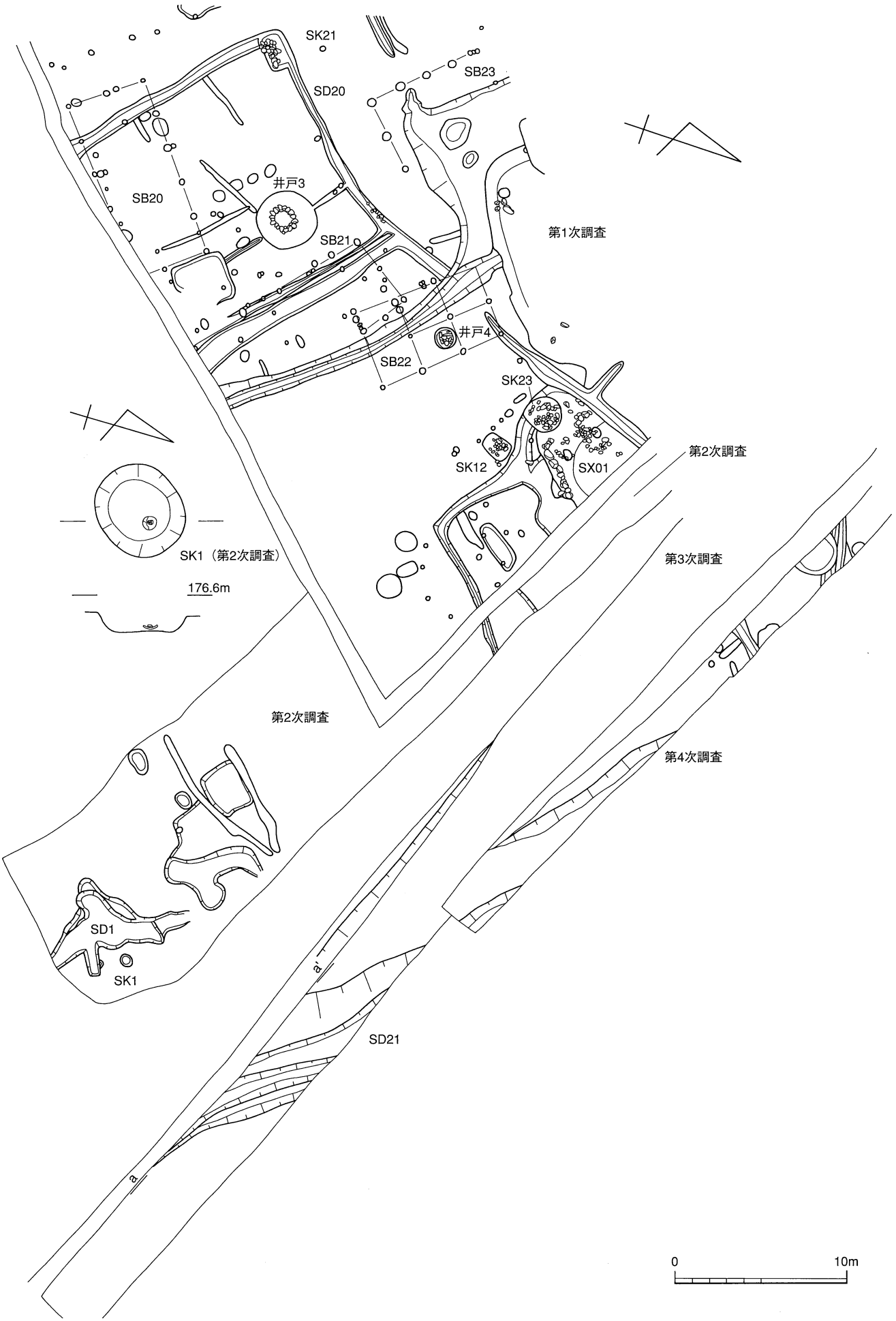
図版四二　第1次調査　中世Ⅲ区　SB27周辺図

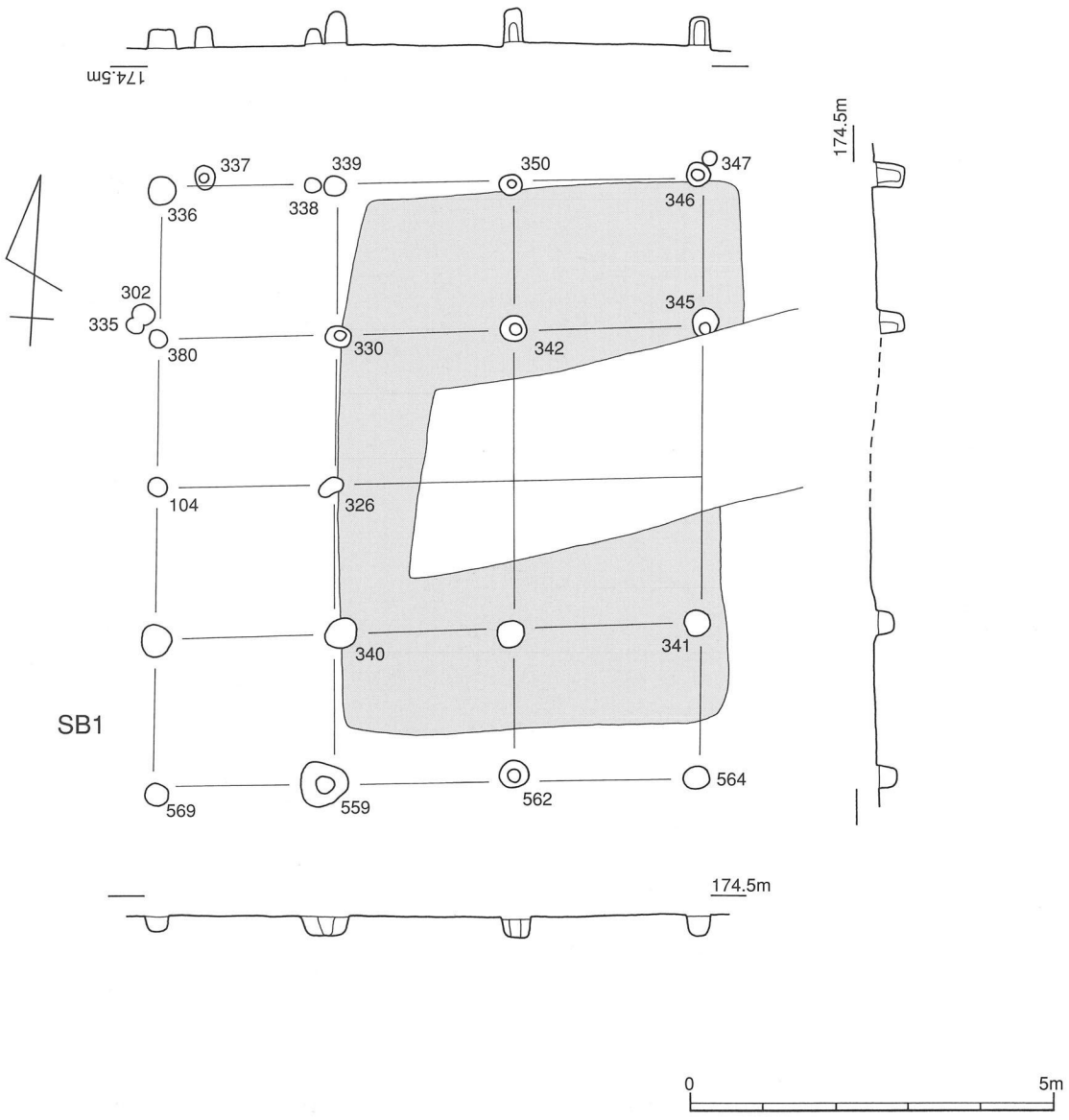


図版四三　第1次調査　中世Ⅲ区　SB28・29周辺図

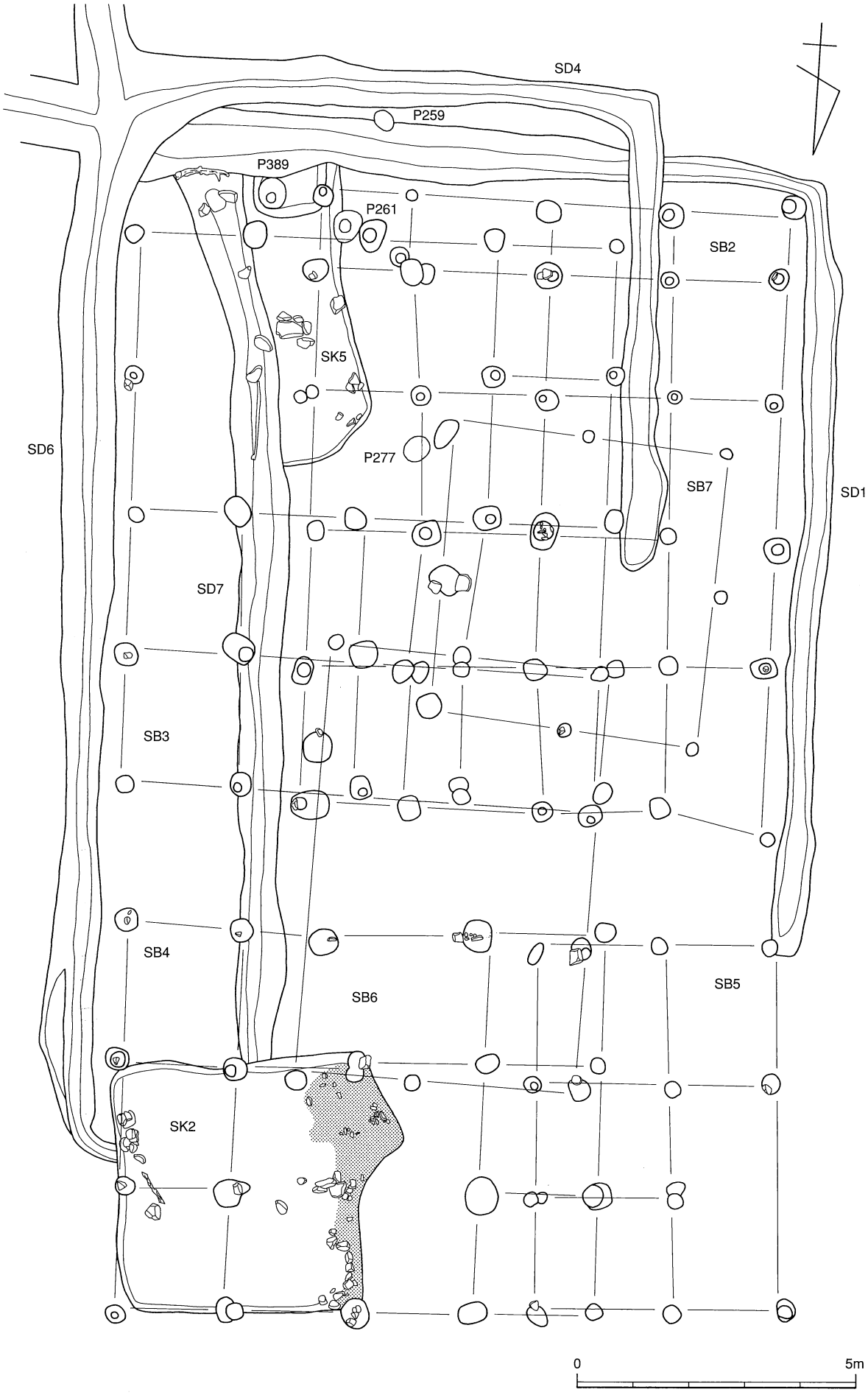


図版四四　第1次調査　中世Ⅲ区　南端・第2次調査平面図

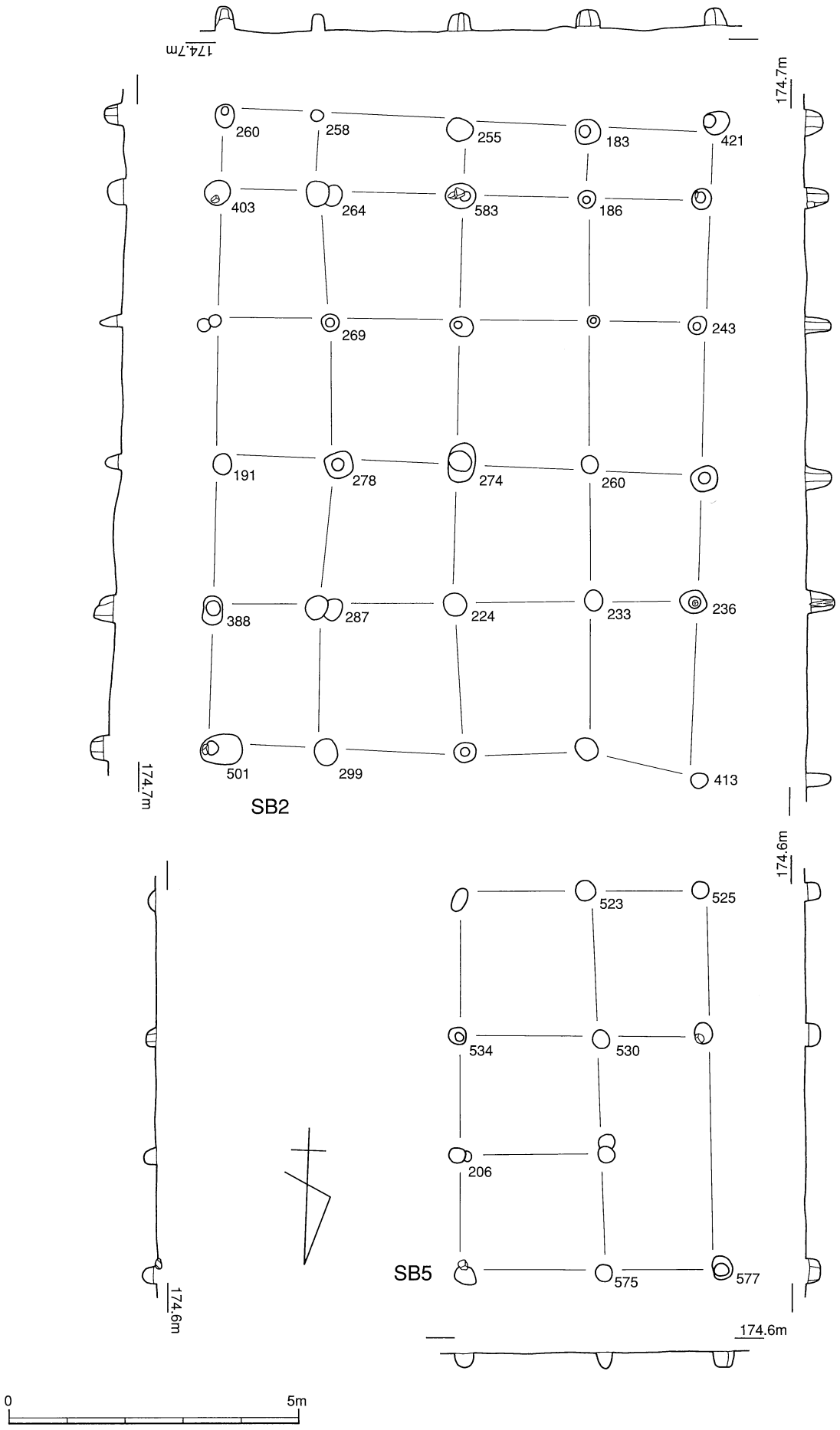



174.5m
337
339
350
347
336
338
346
302
335
345
380
330
342
104
326
340
341
SB1
564
569
559
562
174.5m
174.5m
0
5m

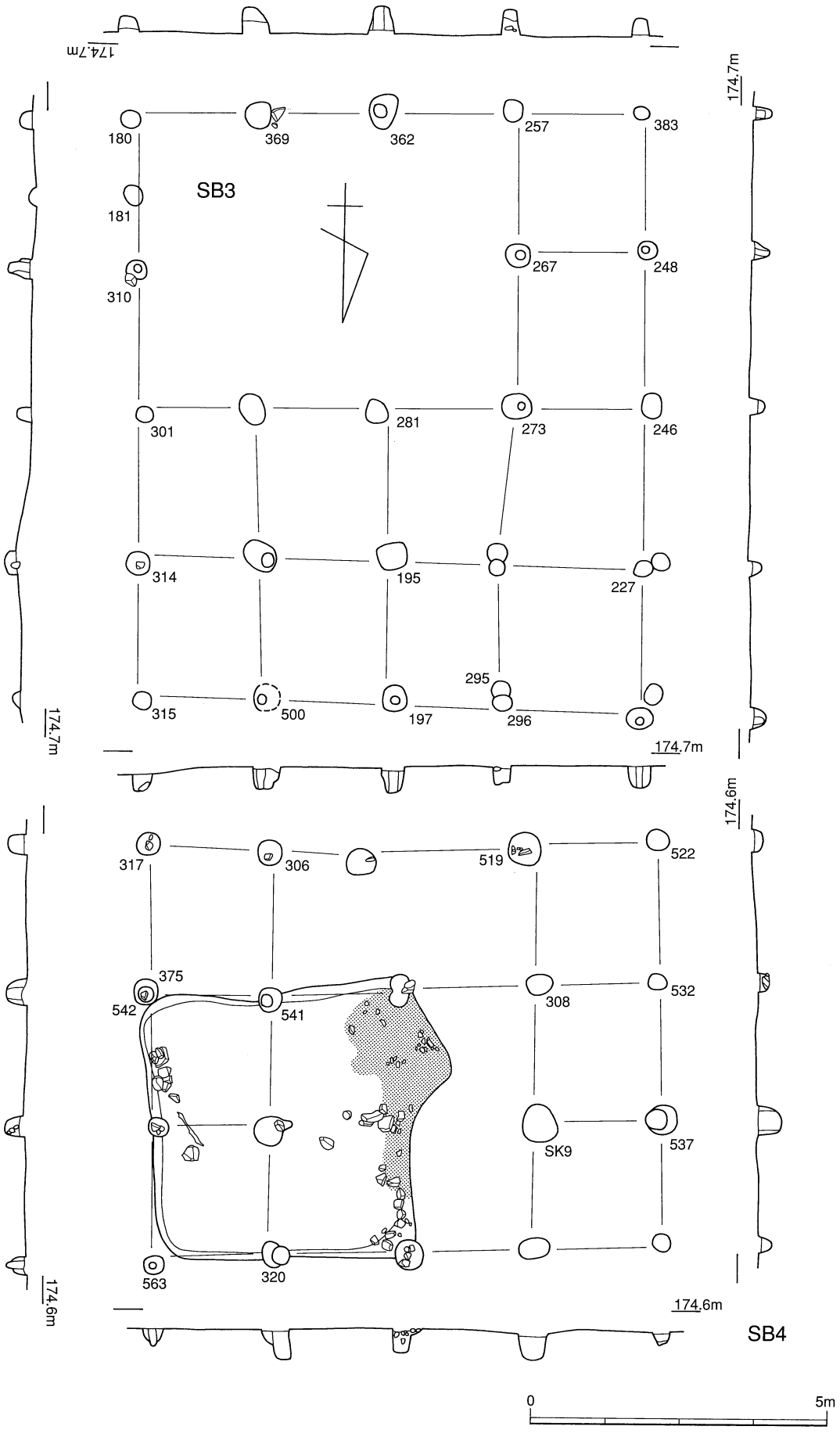
SB1　平・断面図


SD4
P259
P389
P261
SB2
SK5
SD6
P277
SB7
SD1
SD7
SB3
SB4
SB6
SB5
SK2
0
5m

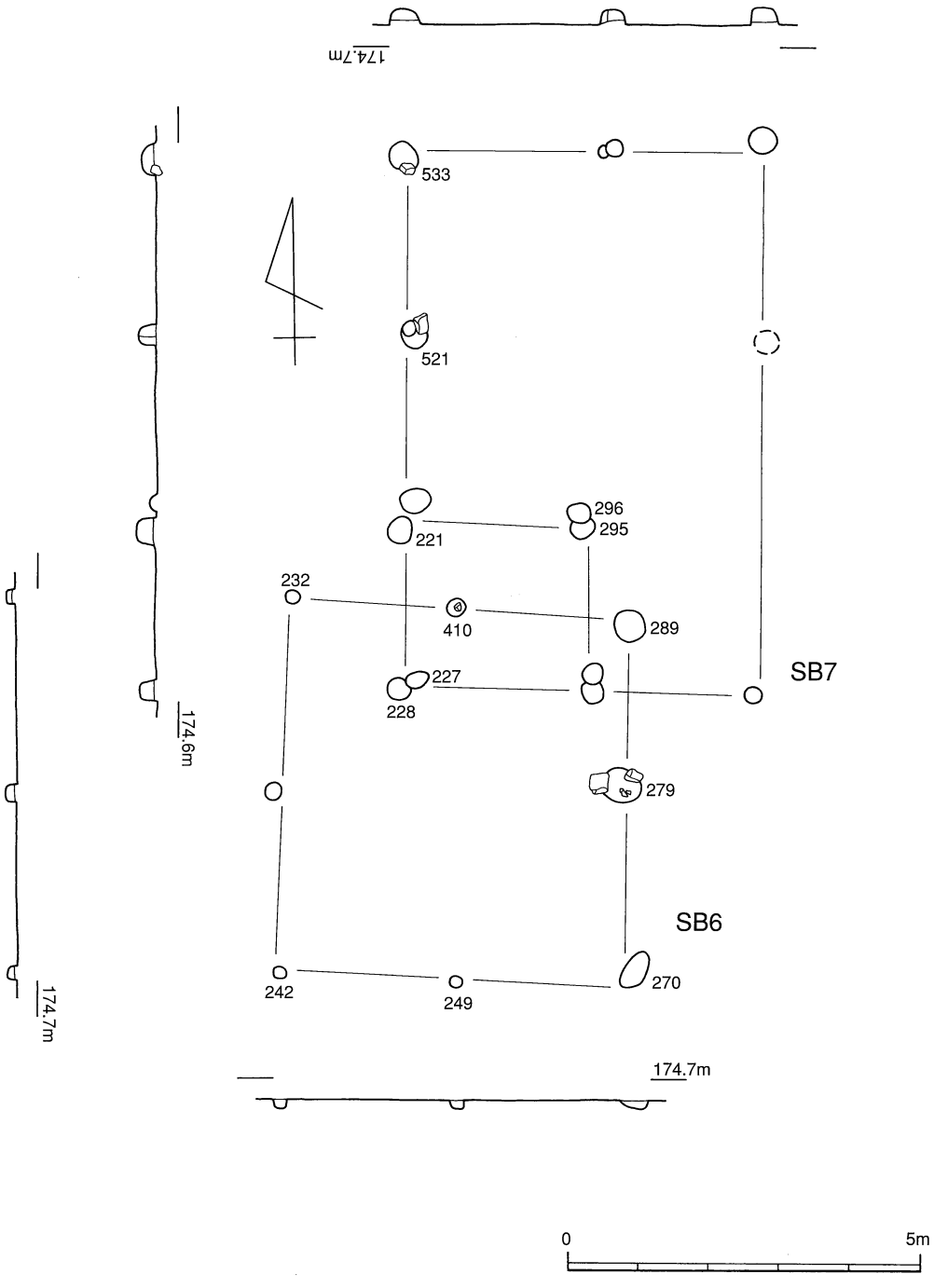
SB2～7　平面図


174.7m
260
258
255
183
421
403
264
583
186
269
243
191
278
274
260
388
287
224
233
236
501
299
413
SB2
174.7m
174.7m
523
525
534
530
206
SB5
575
577
174.6m
174.6m
0
5m

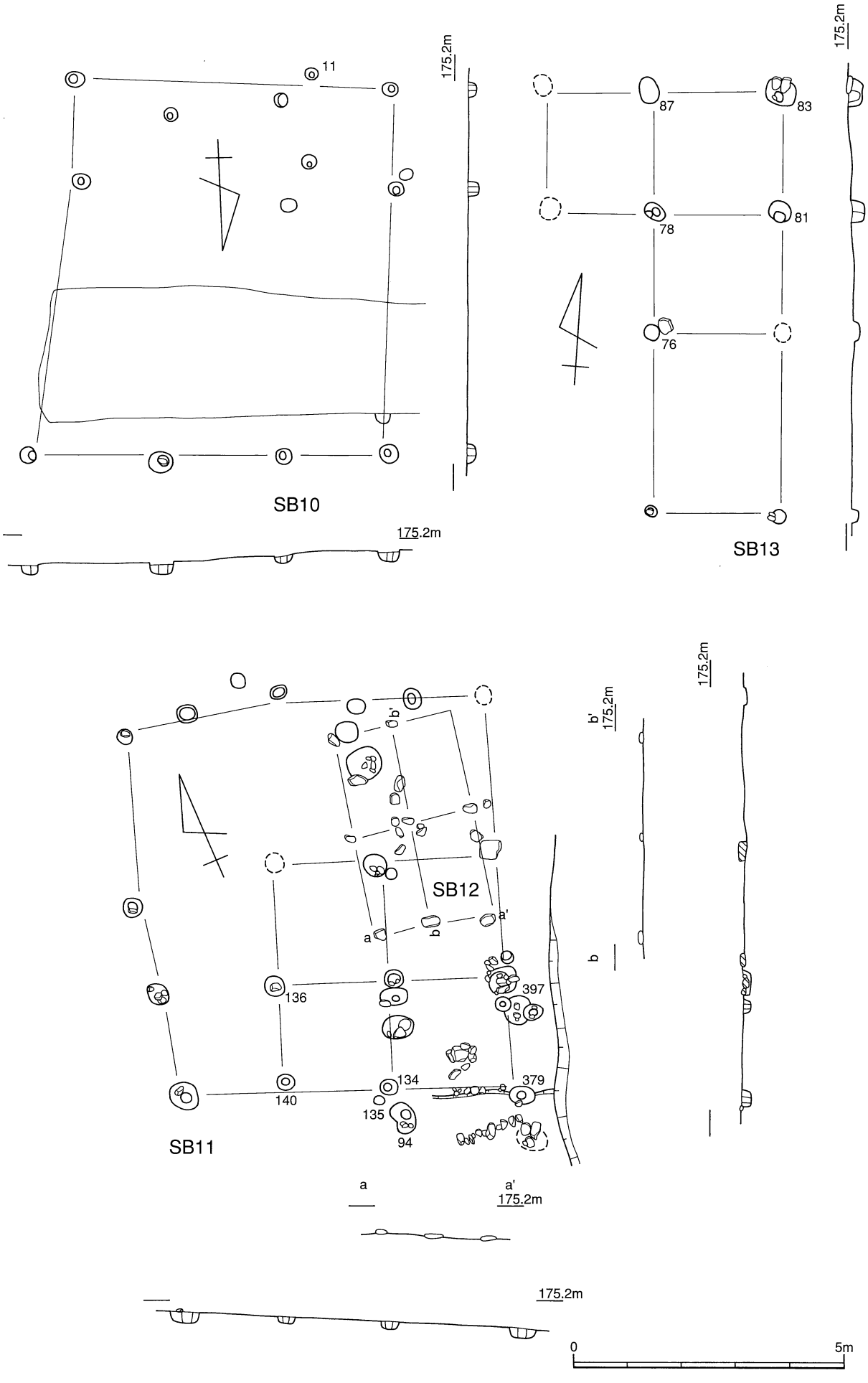
SB2・5　平・断面図


174.7m
180
369
362
257
383
SB3
181
267
248
310
301
281
273
246
314
195
227
295
315
500
197
296
174.7m
174.7m
174.6m
317
306
519
522
375
542
541
308
532
SK9
537
563
320
174.6m
SB4
0
5m

SB3・4　平・断面図

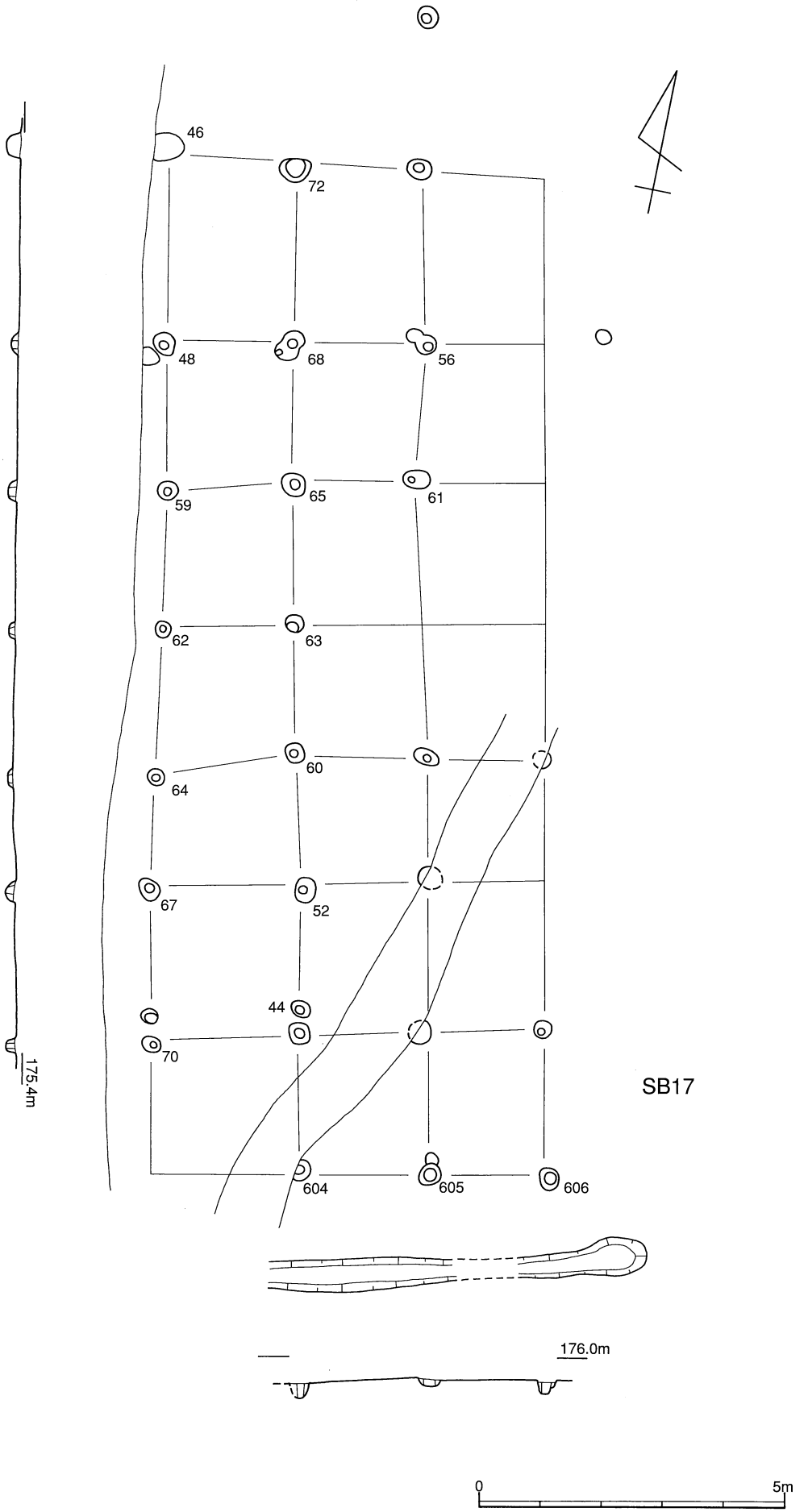

174.7m
533
521
296
295
221
232
410
289
227
228
SB7
279
SB6
242
249
270
174.6m
174.7m
174.7m
0
5m

SB6・7　平・断面図

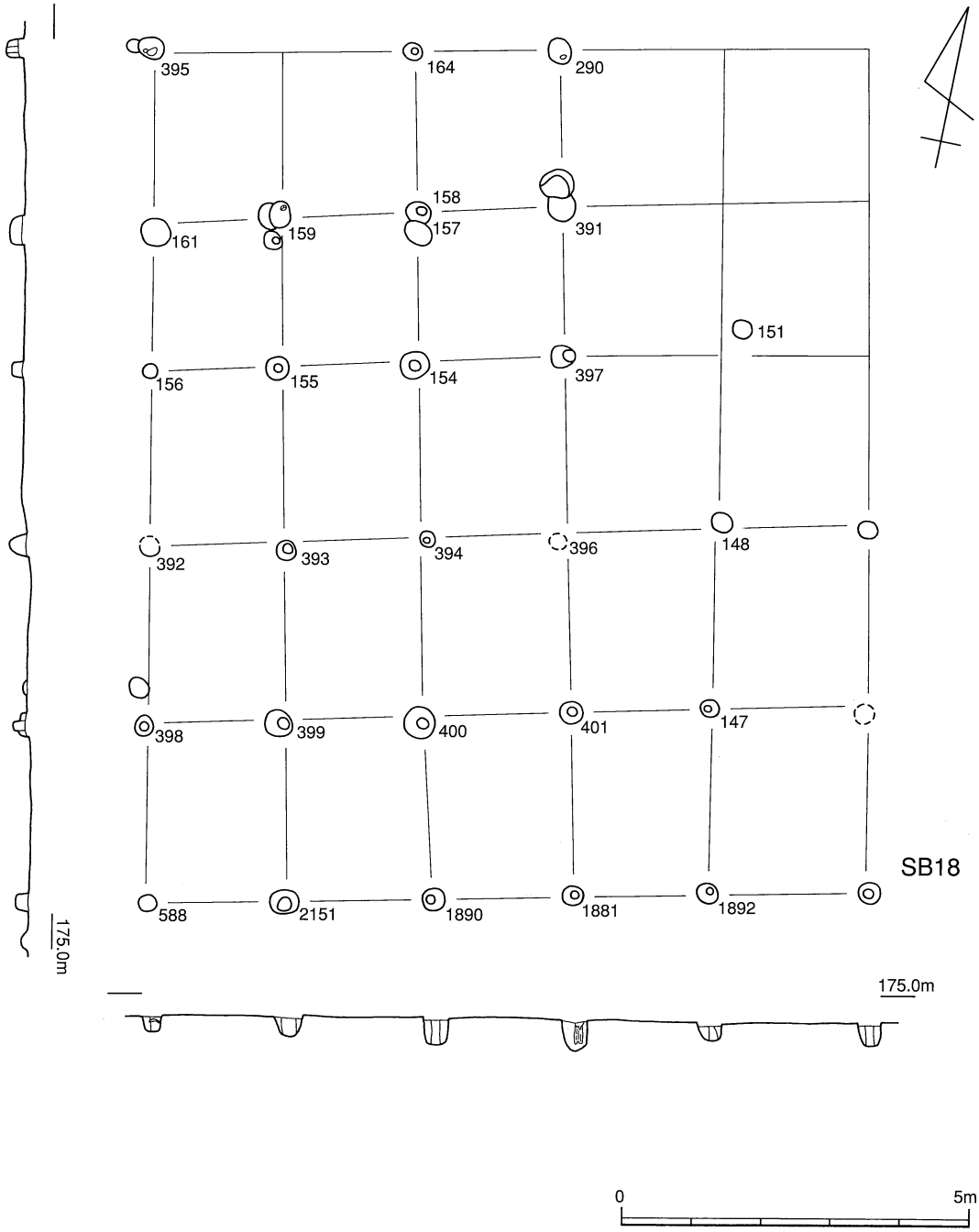


11
175.2m
SB10
175.2m
87
83
78
81
76
175.2m
SB13
b'
175.2m
b'
175.2m
SB12
a
b
a'
b
136
397
134
379
140
135
94
SB11
a
a'
175.2m
175.2m
0
5m

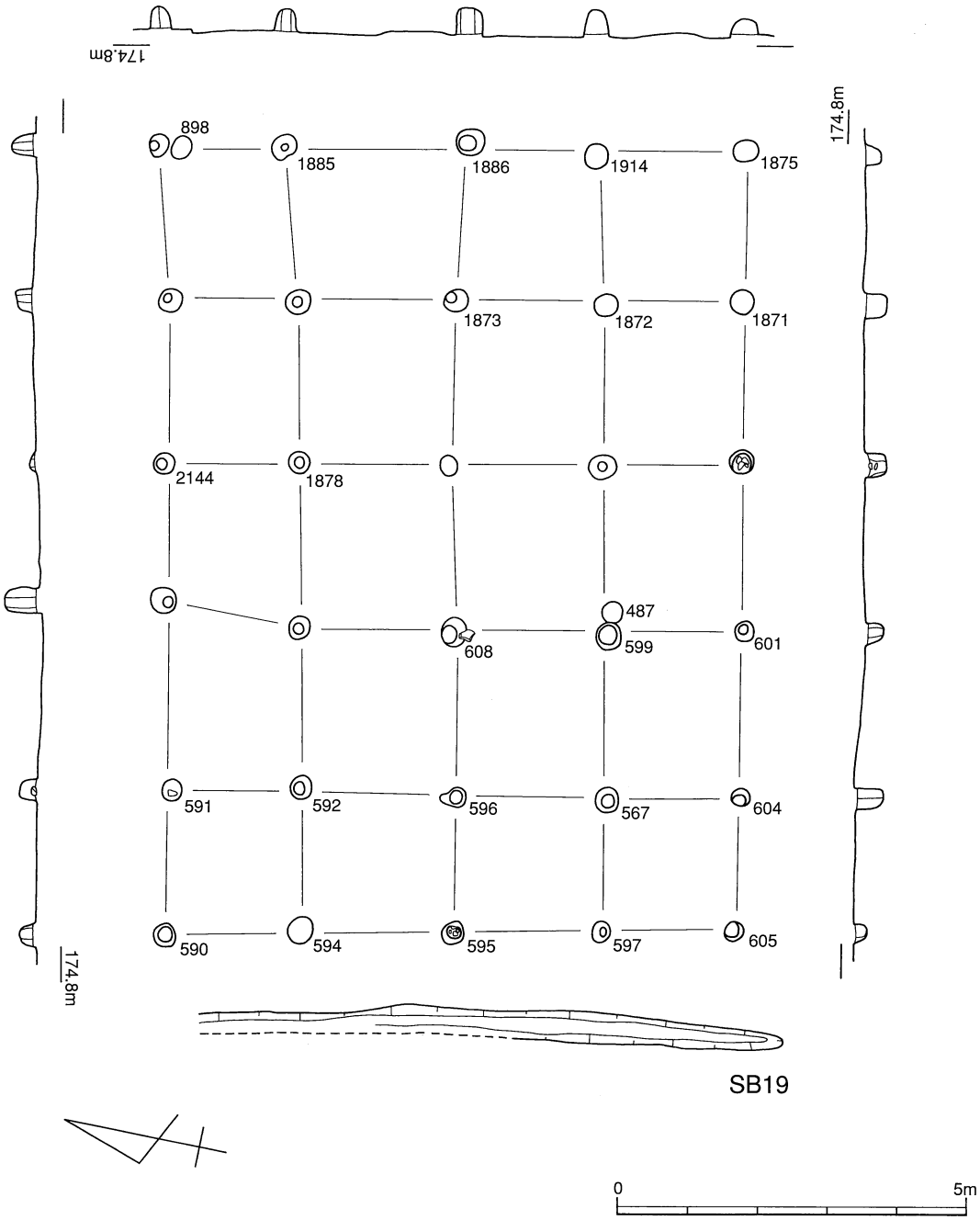
SB10～13　平・断面図


46
72
48
68
56
59
65
61
62
63
60
64
67
52
44
70
604
605
606
SB17
175.4m
176.0m
0
5m

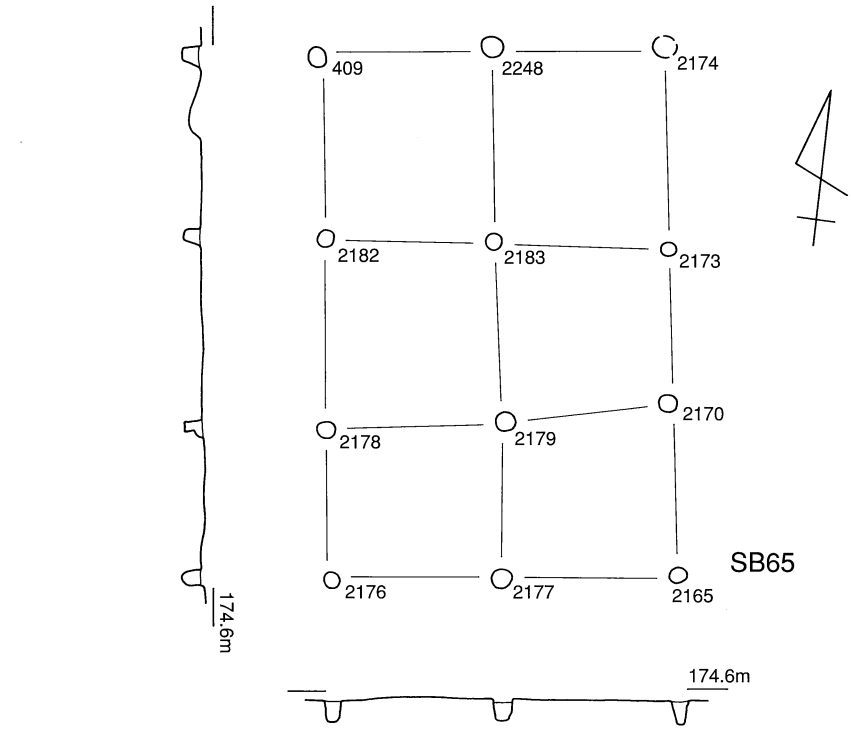
SB17　平・断面図

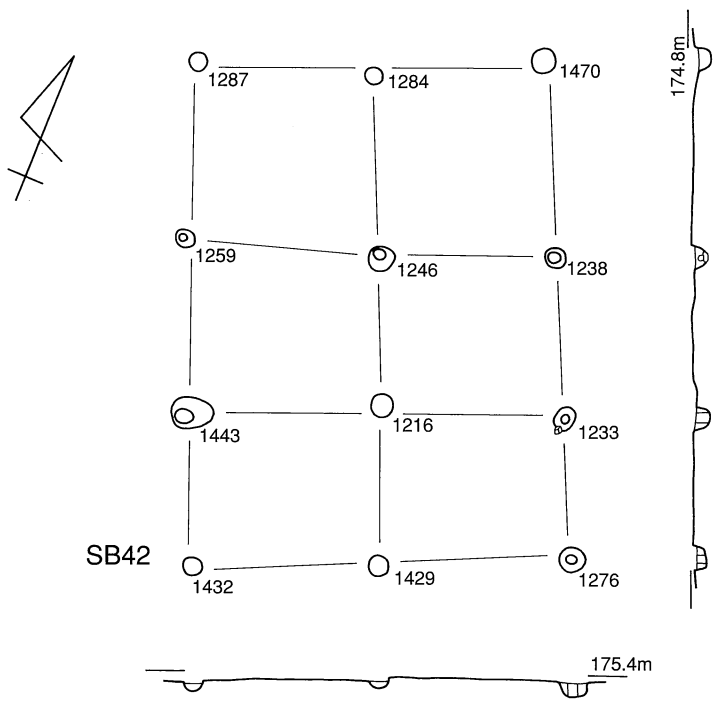

395
164
290
158
161
159
157
391
151
156
155
154
397
392
393
394
396
148
398
399
400
401
147
588
2151
1890
1881
1892
SB18
175.0m
175.0m
0
5m

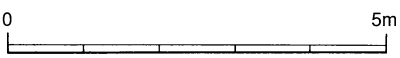
SB18　平・断面図


174.8m
898
1885
1886
1914
1875
1873
1872
1871
2144
1878
487
608
599
601
591
592
596
567
604
590
594
595
597
605
174.8m
174.8m
SB19
0
5m

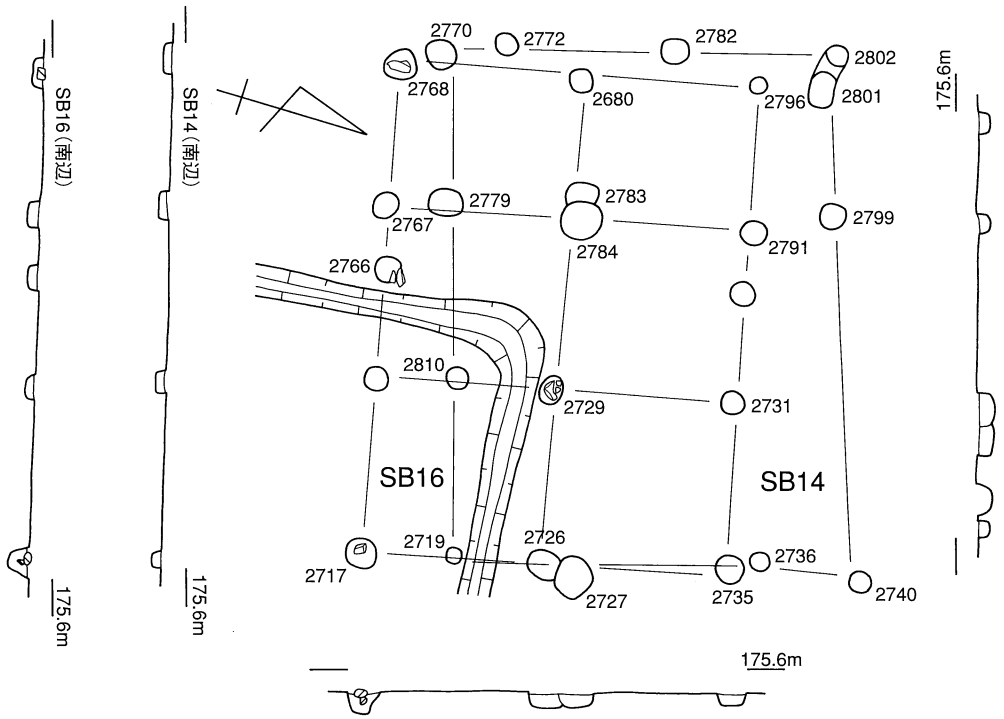
SB19　平・断面図

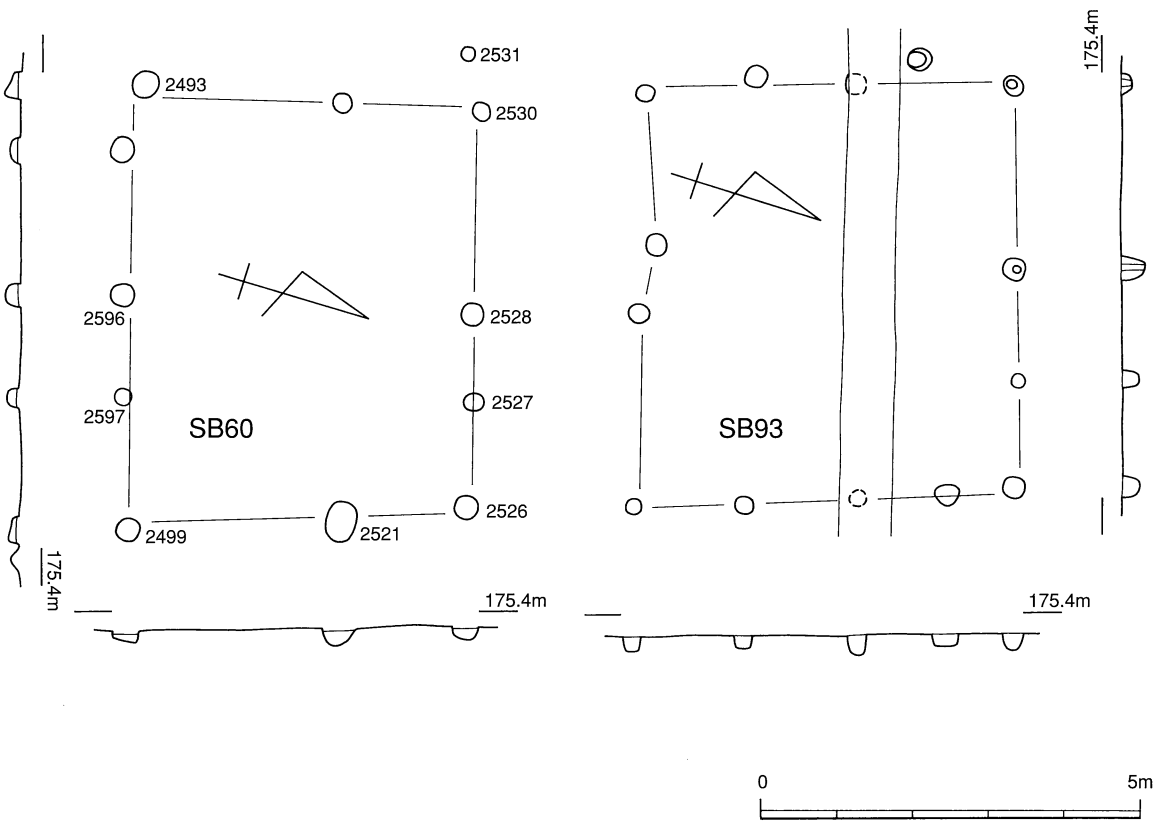

409
2248
2174
2182
2183
2173
2178
2179
2170
2176
2177
2165
SB65
174.6m
174.6m


1287
1284
1470
1259
1246
1238
1443
1216
1233
SB42
1432
1429
1276
174.8m
175.4m

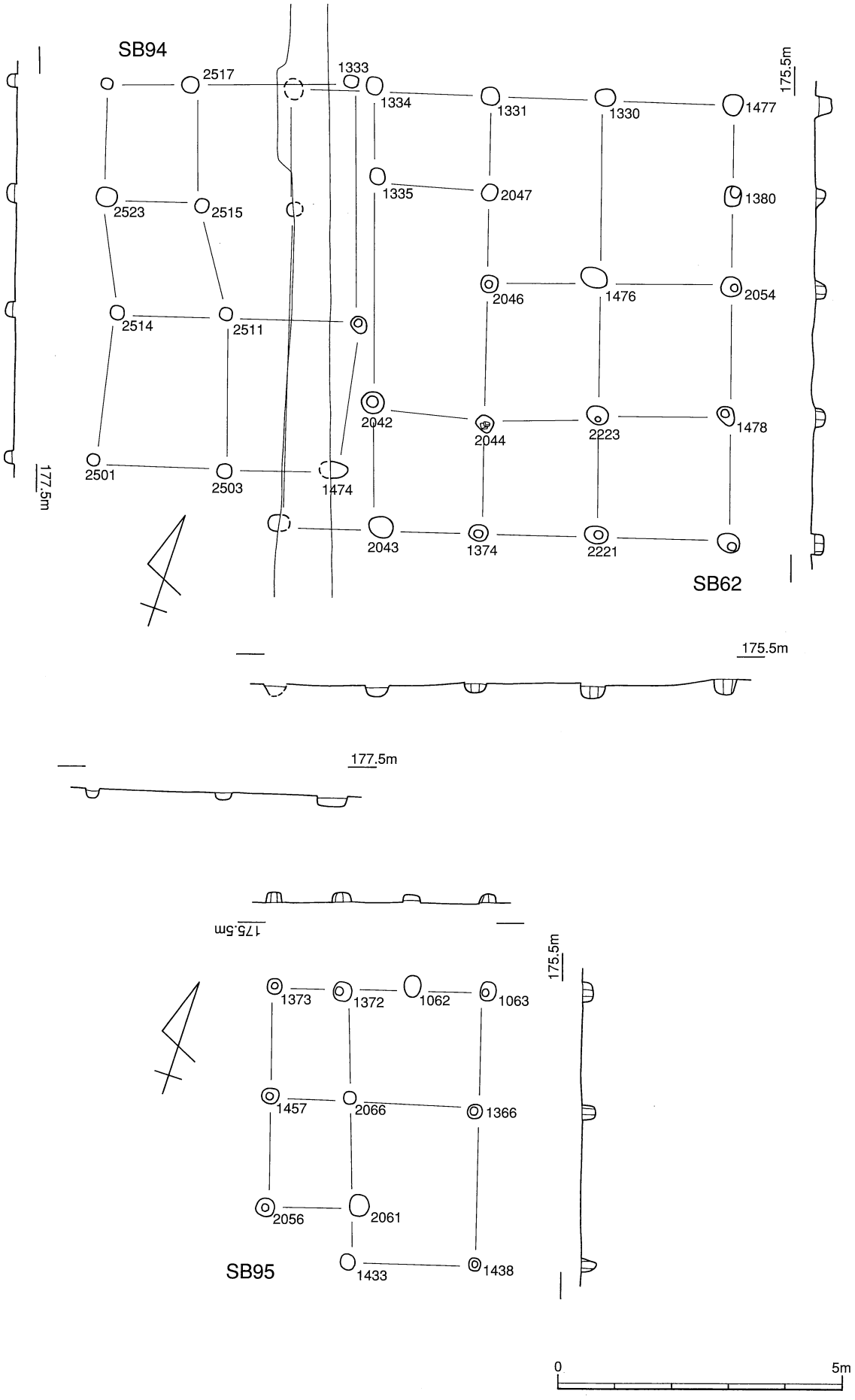

0
5m

SB65・42　平・断面図

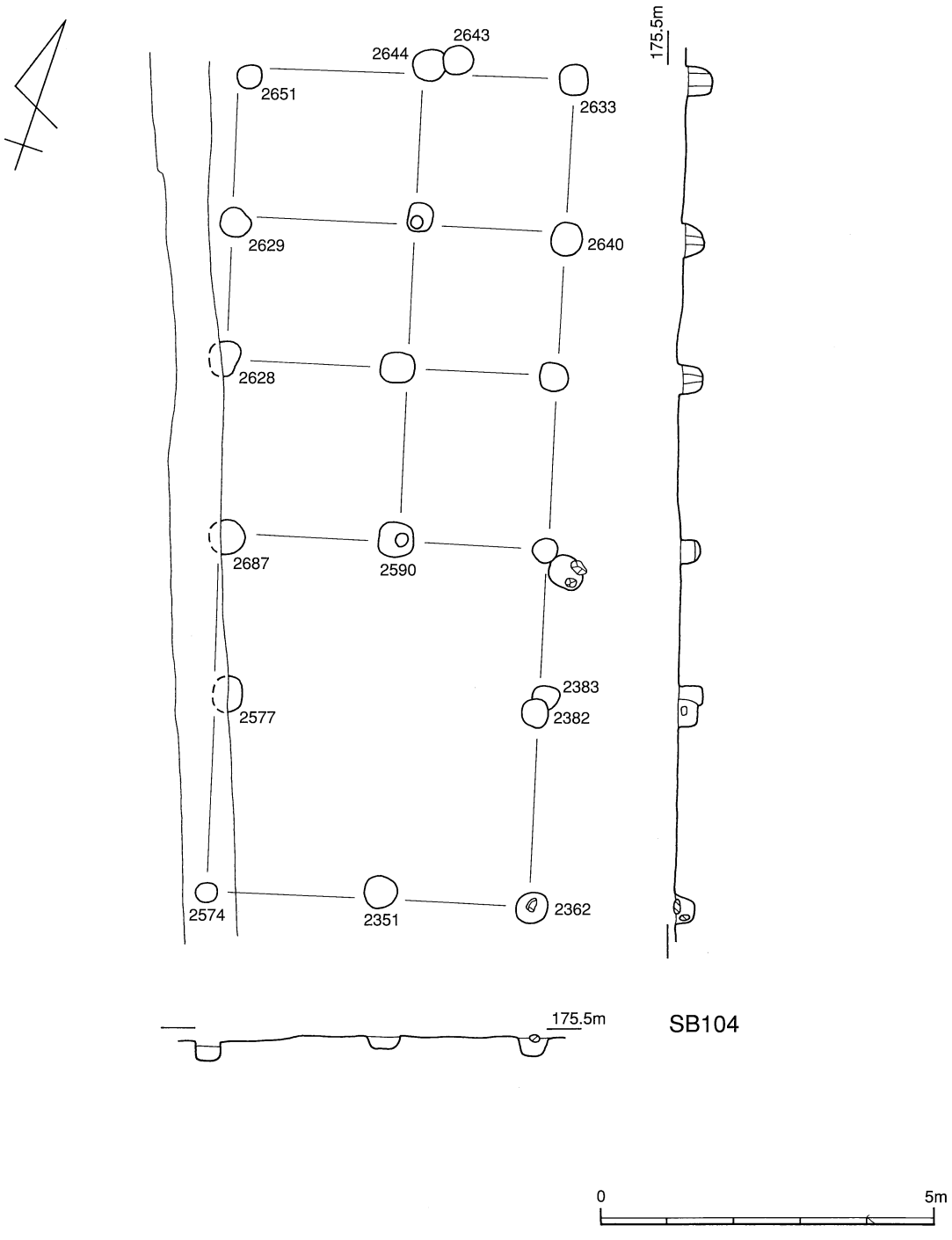




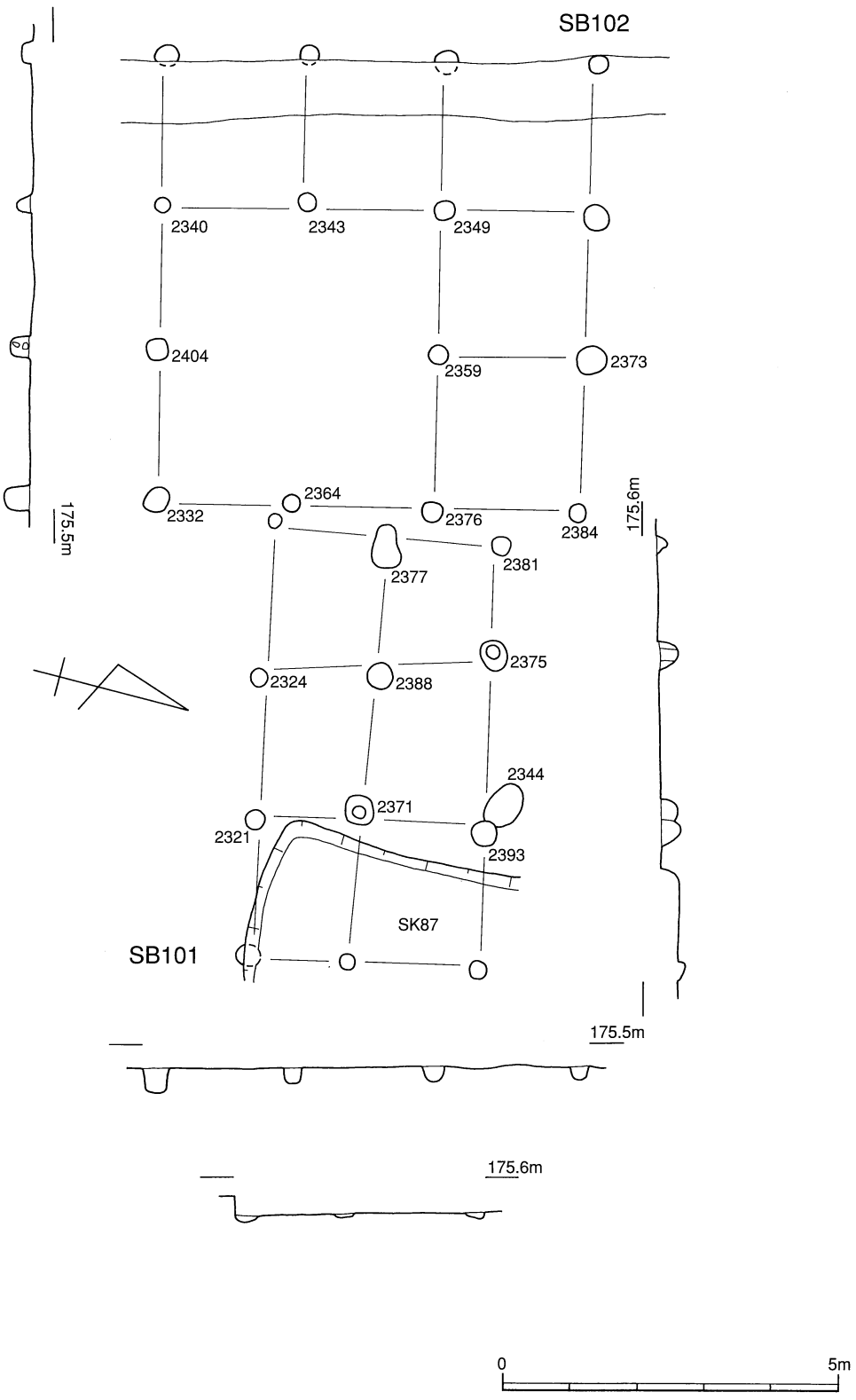
SB14・16・60・93　平・断面図



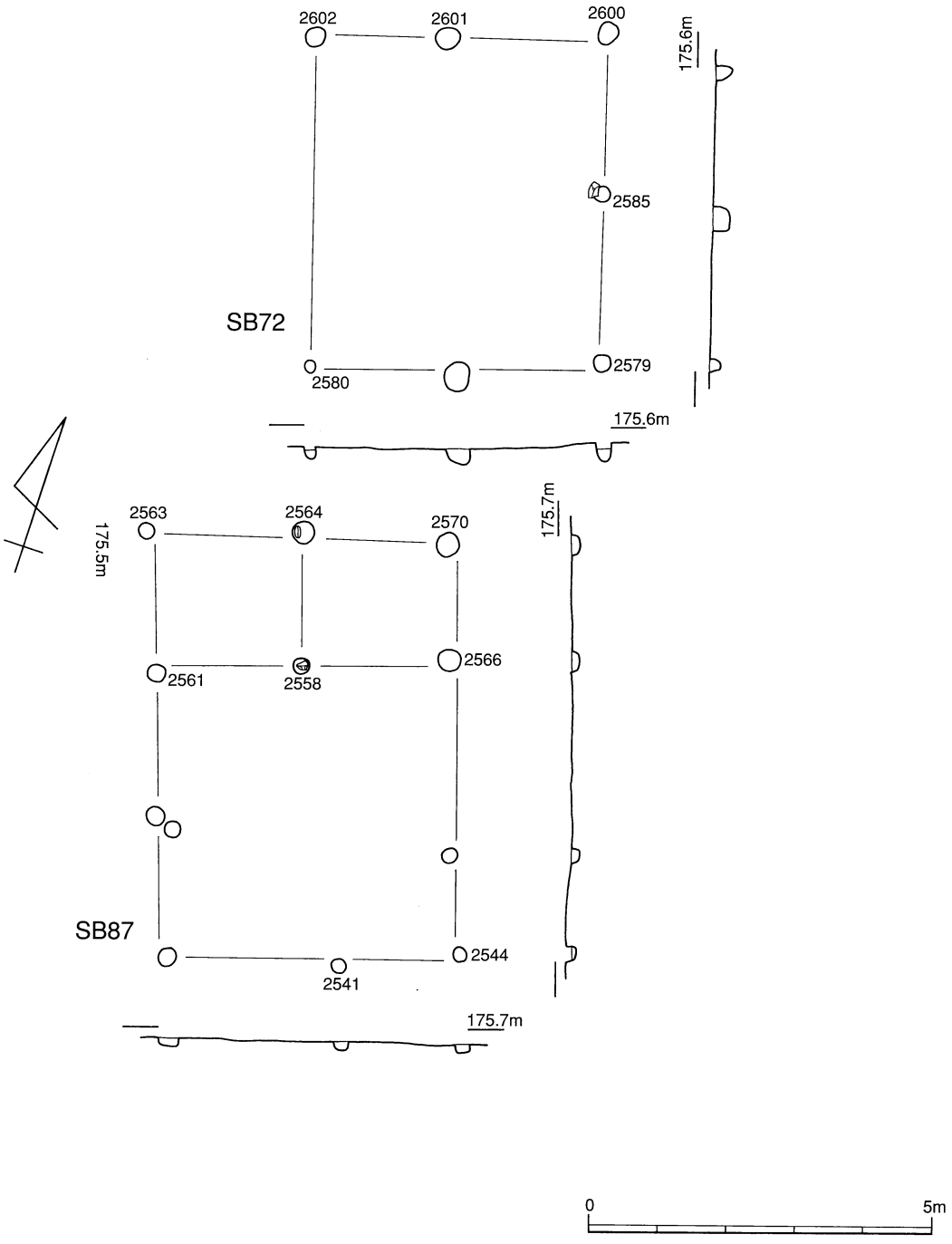
SB62・94・95　平・断面図


2643
2644
2651
2633
2629
2640
2628
2687
2590
2383
2382
2577
2574
2351
2362
175.5m
175.5m
SB104
0
5m

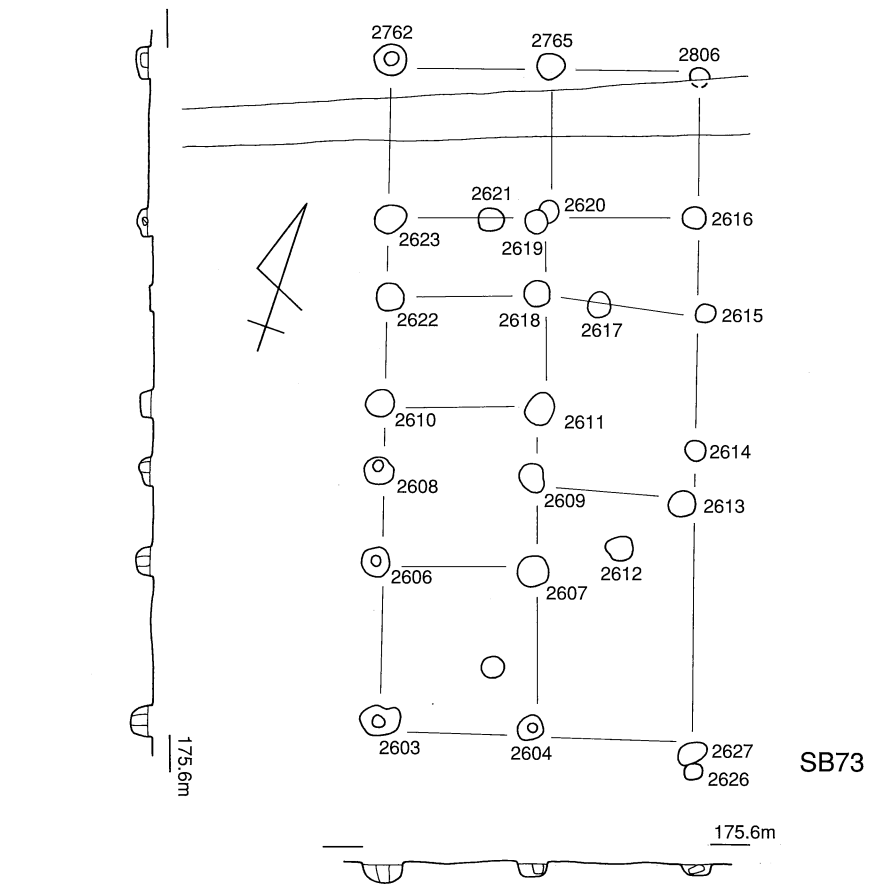
SB104　平・断面図

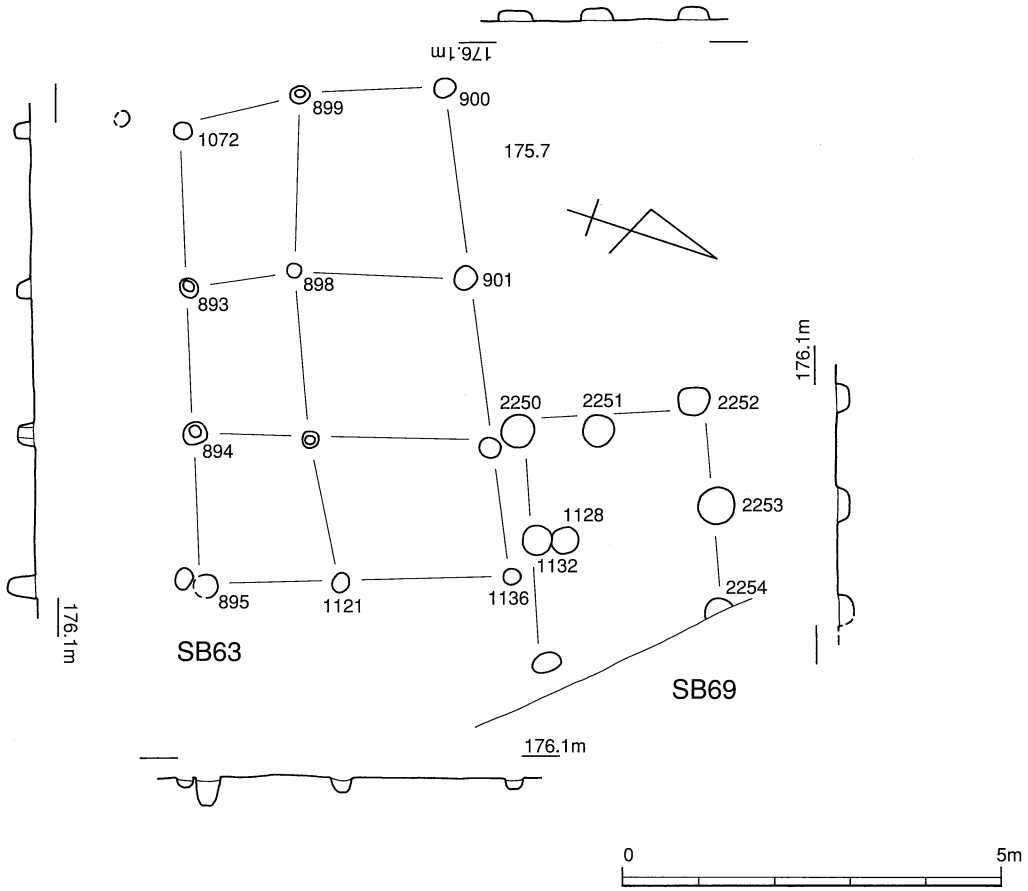


SB101・102　平・断面図

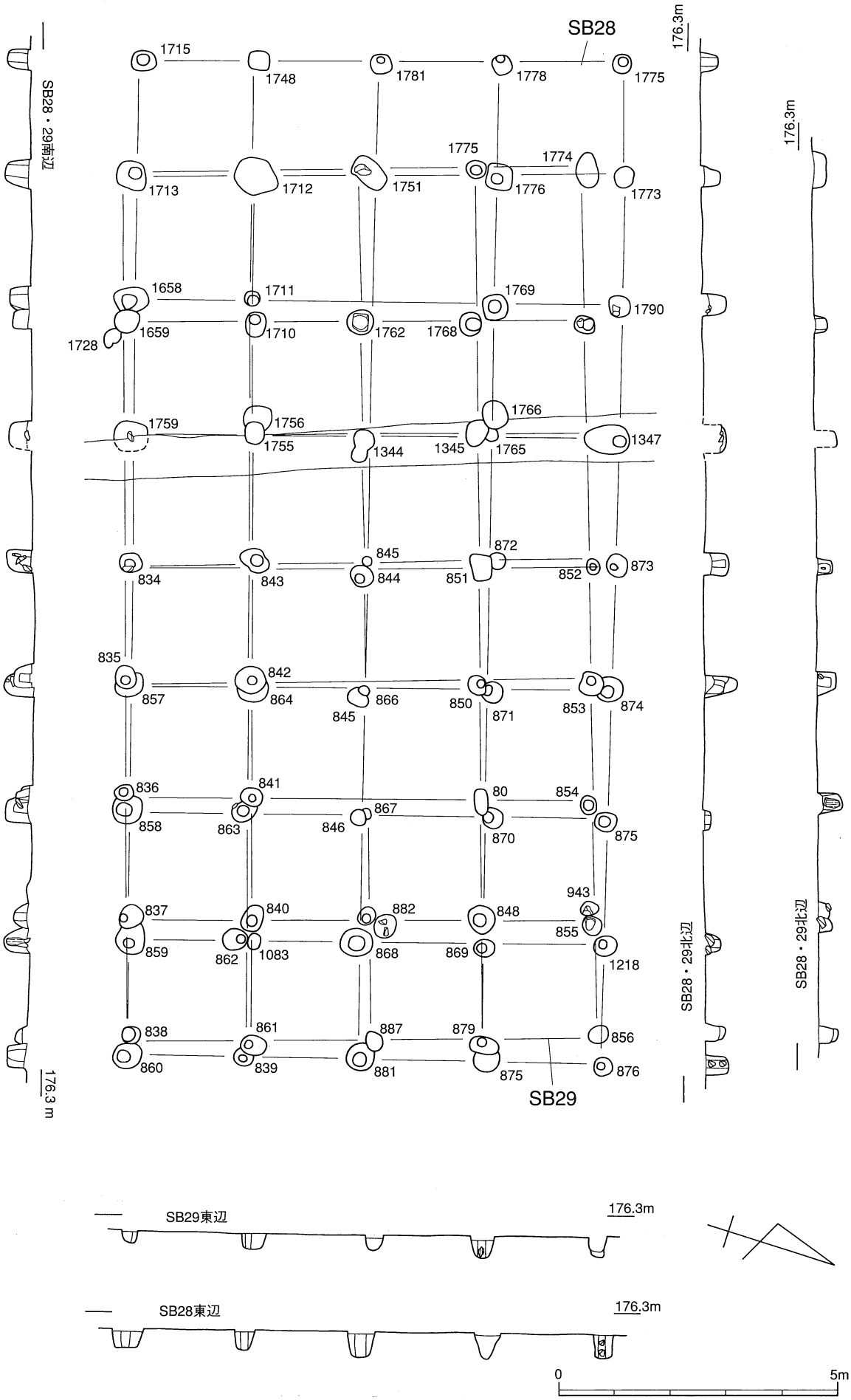

2602
2601
2600
175.6m
2585
SB72
2580
2579
175.6m
2563
2564
2570
175.7m
175.5m
2561
2558
2566
SB87
2544
2541
175.7m
0
5m

SB72・87　平・断面図

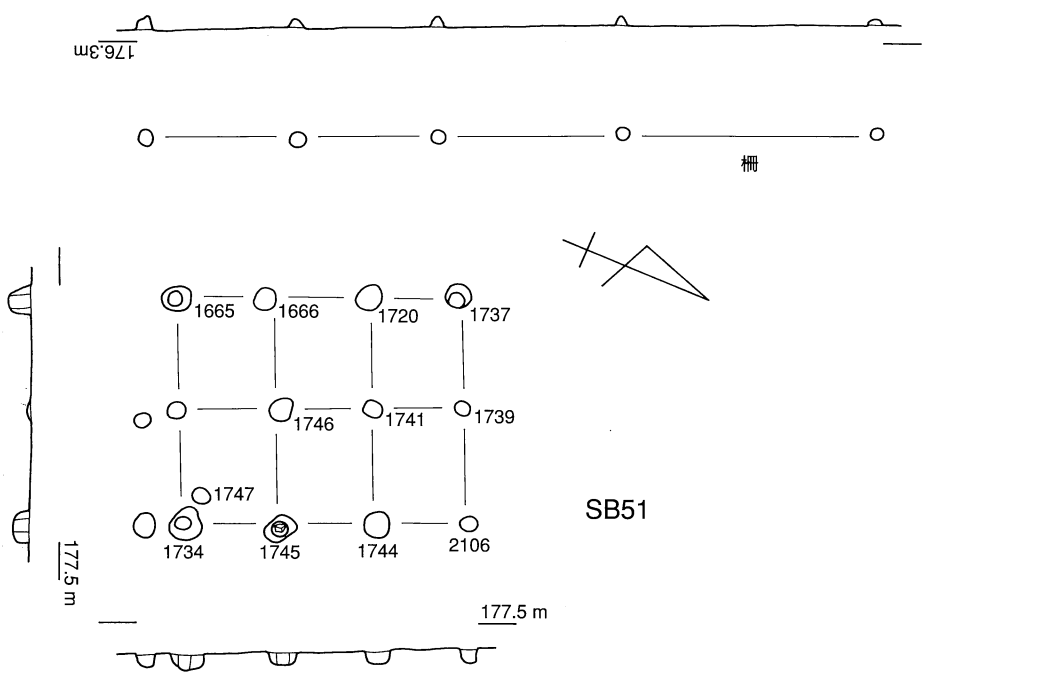


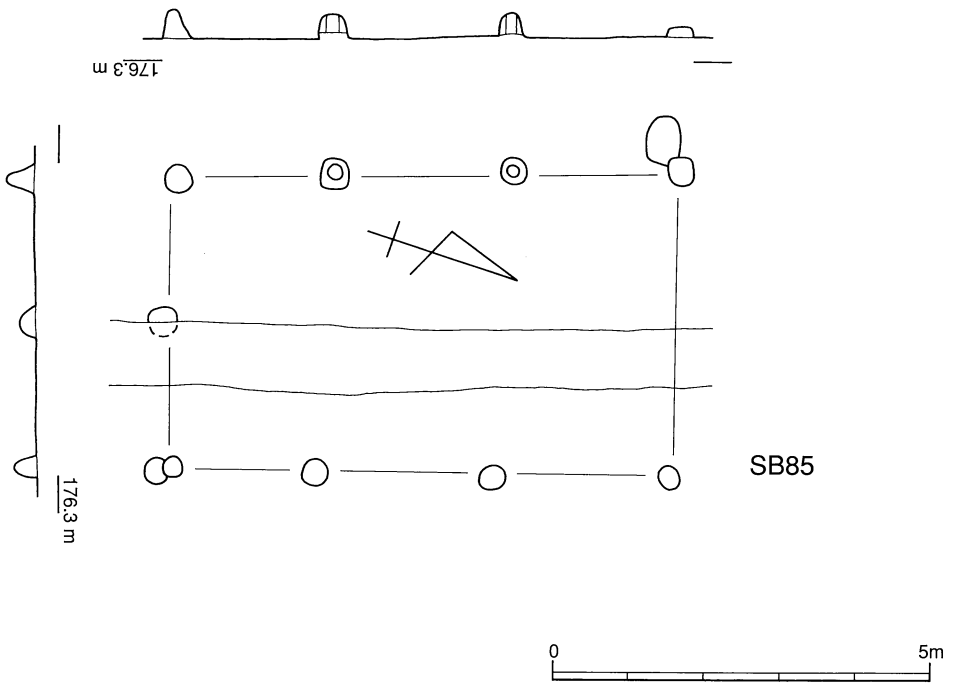


SB73・63・69　平・断面図

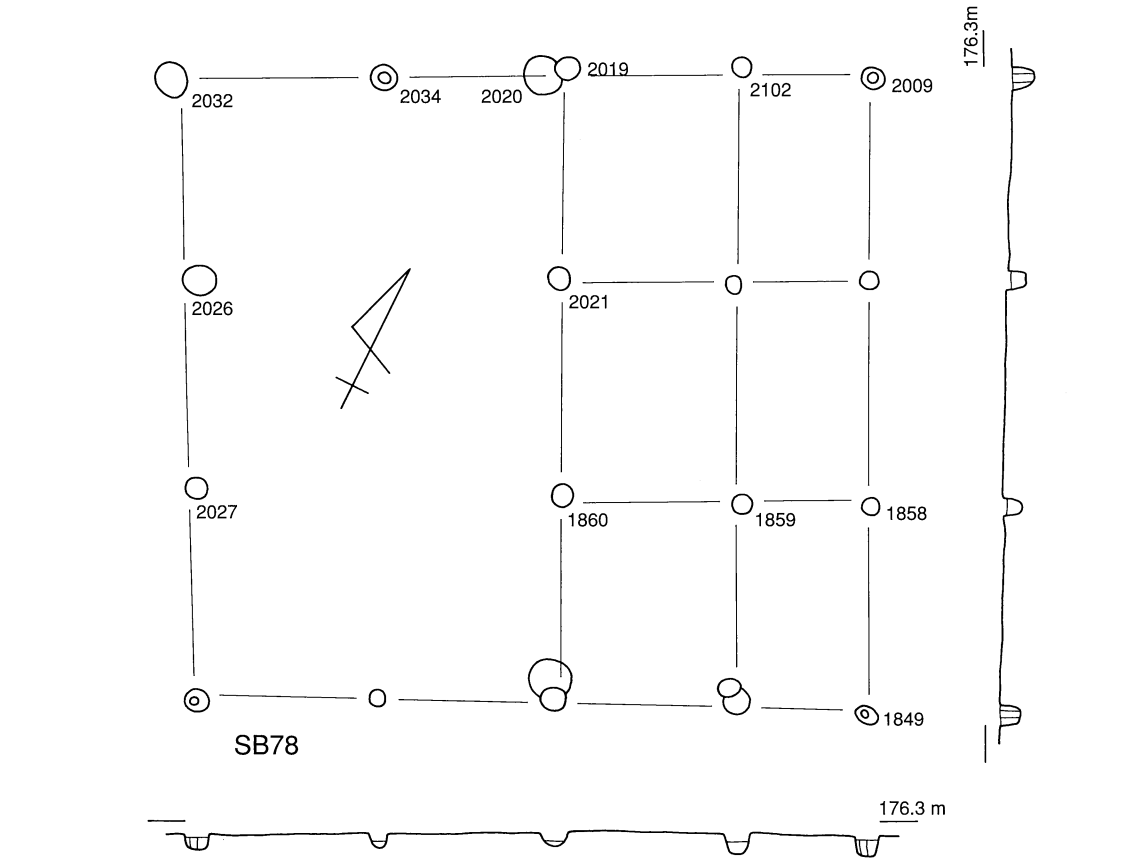


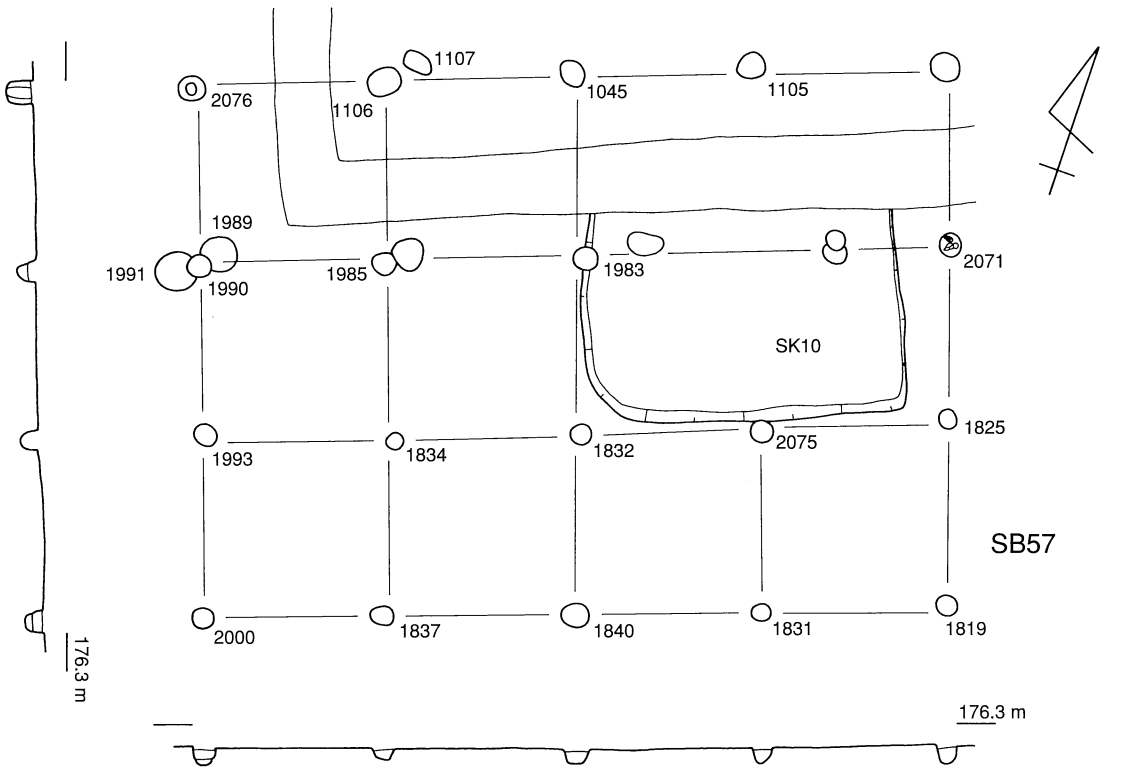
SB28・29　平・断面図


176.3m
柵
1665
1666
1720
1737
1746
1741
1739
1747
1734
1745
1744
2106
SB51
177.5 m
177.5 m


176.3 m
SB85
176.3 m
0
5m

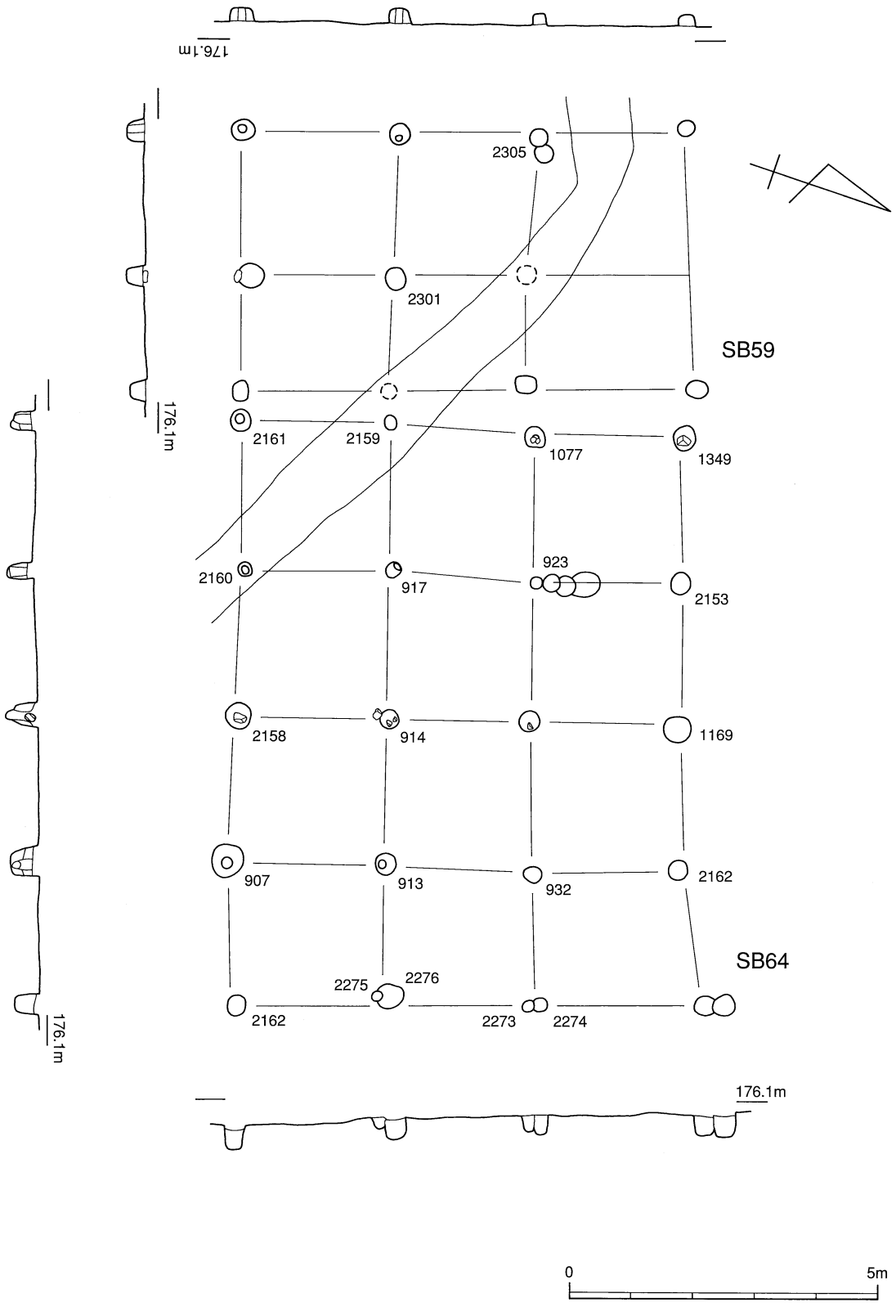
SB51・85　平・断面図



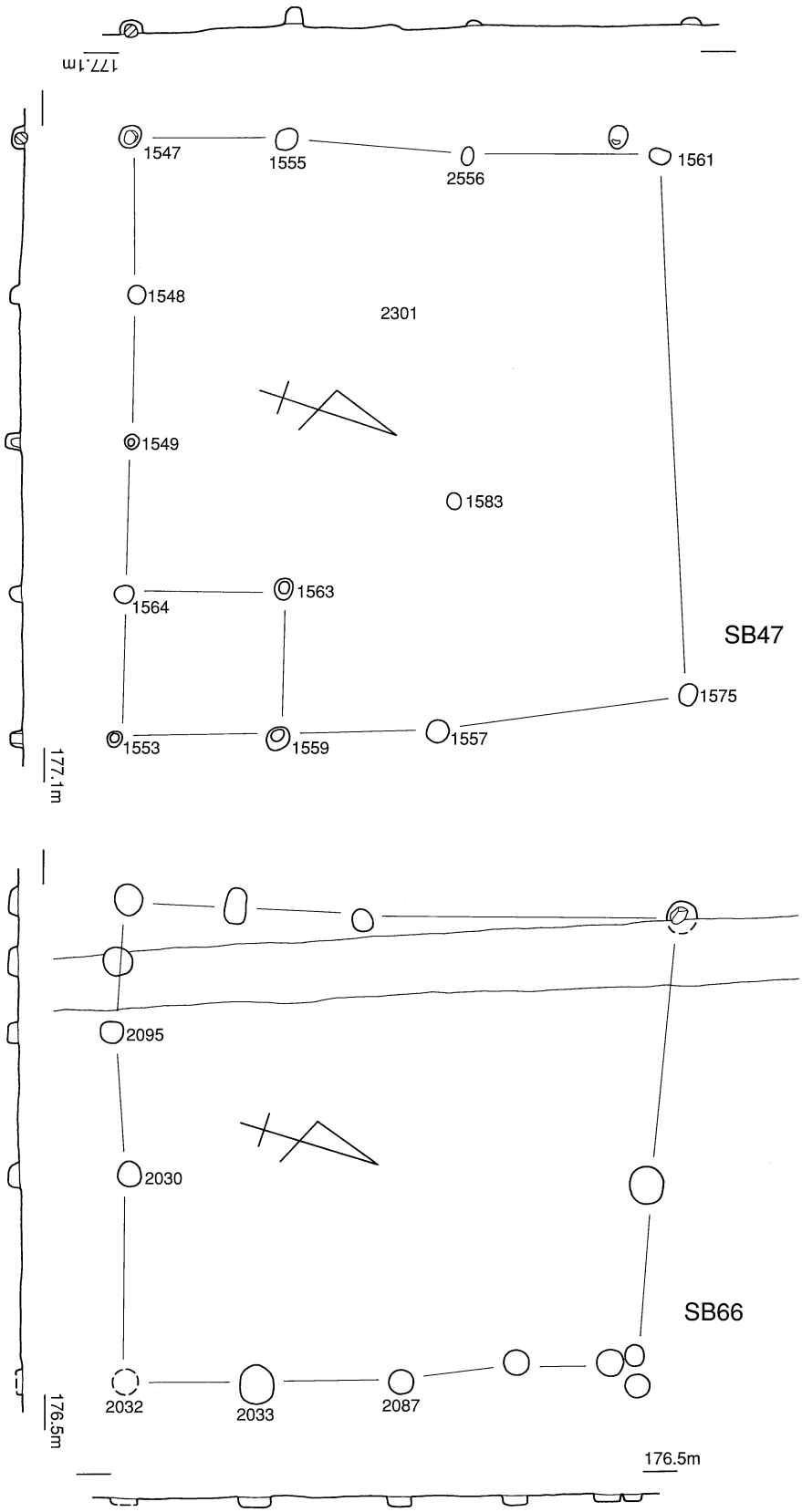


0　5m

SB57・78　平・断面図

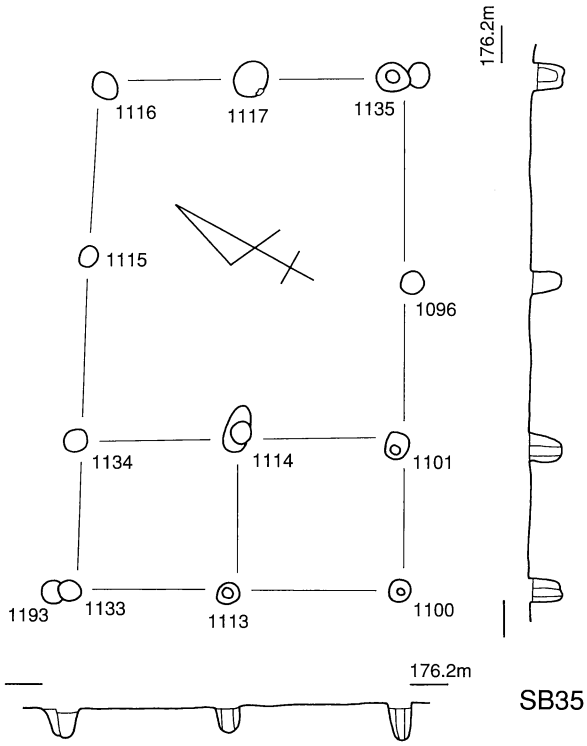

176.1m
2305
2301
SB59
176.1m
2161
2159
1077
1349
2160
917
923
2153
2158
914
1169
907
913
932
2162
SB64
2275
2276
2162
2273
2274
176.1m
176.1m
0
5m

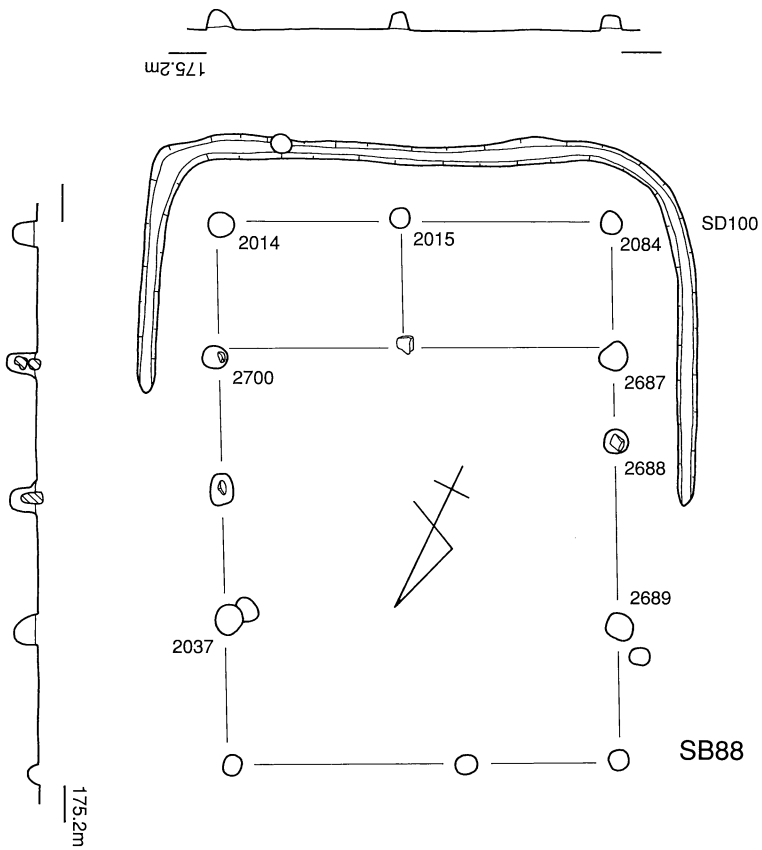
SB59・64　平・断面図



0　5m

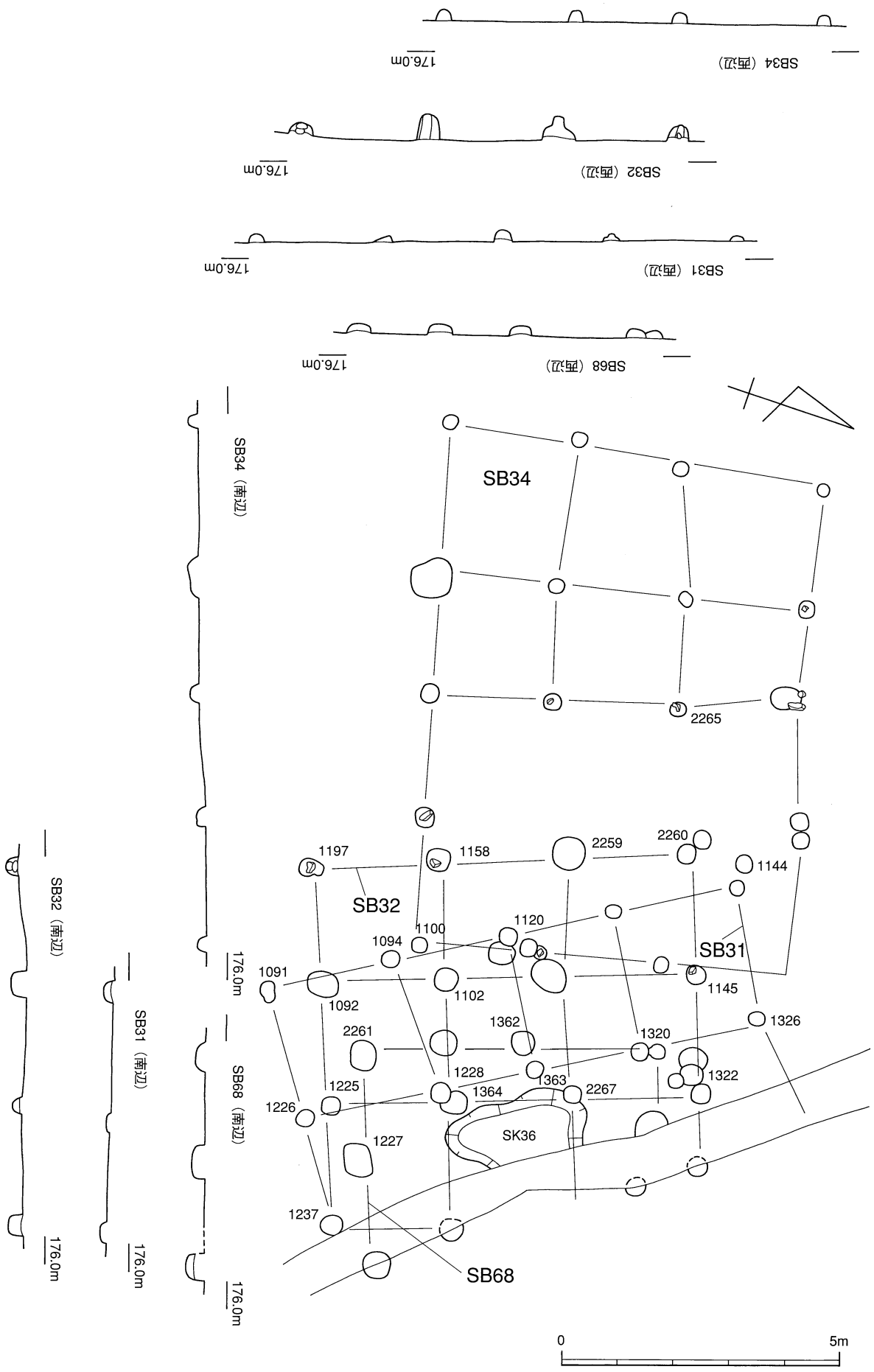
SB47・66　平・断面図


176.2m
1116
1117
1135
1115
1096
1134
1114
1101
1193
1133
1113
1100
176.2m
SB35

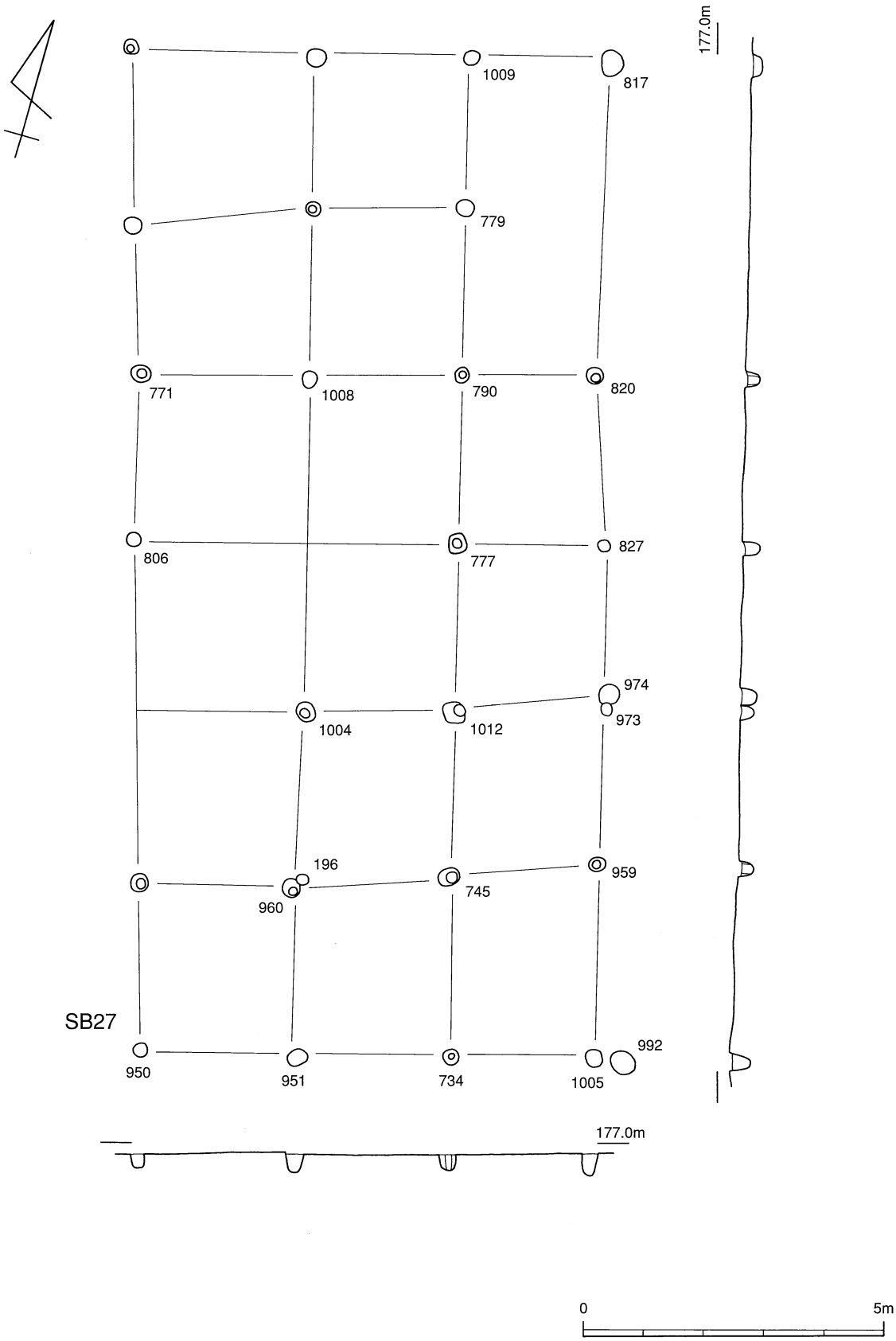

175.2m
SD100
2014
2015
2084
2700
2687
2688
2689
2037
SB88
175.2m

0
5m

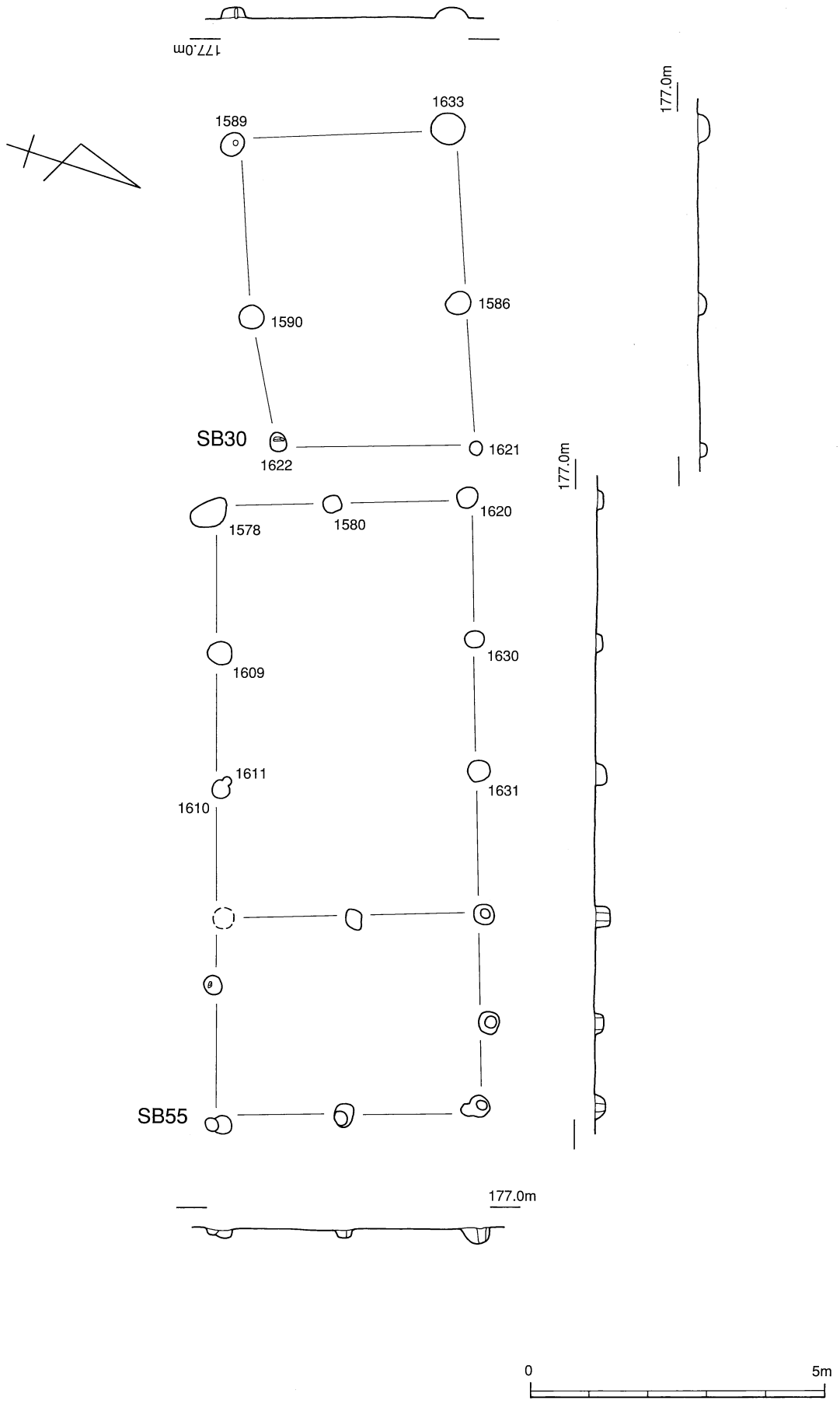
SB35・88　平・断面図



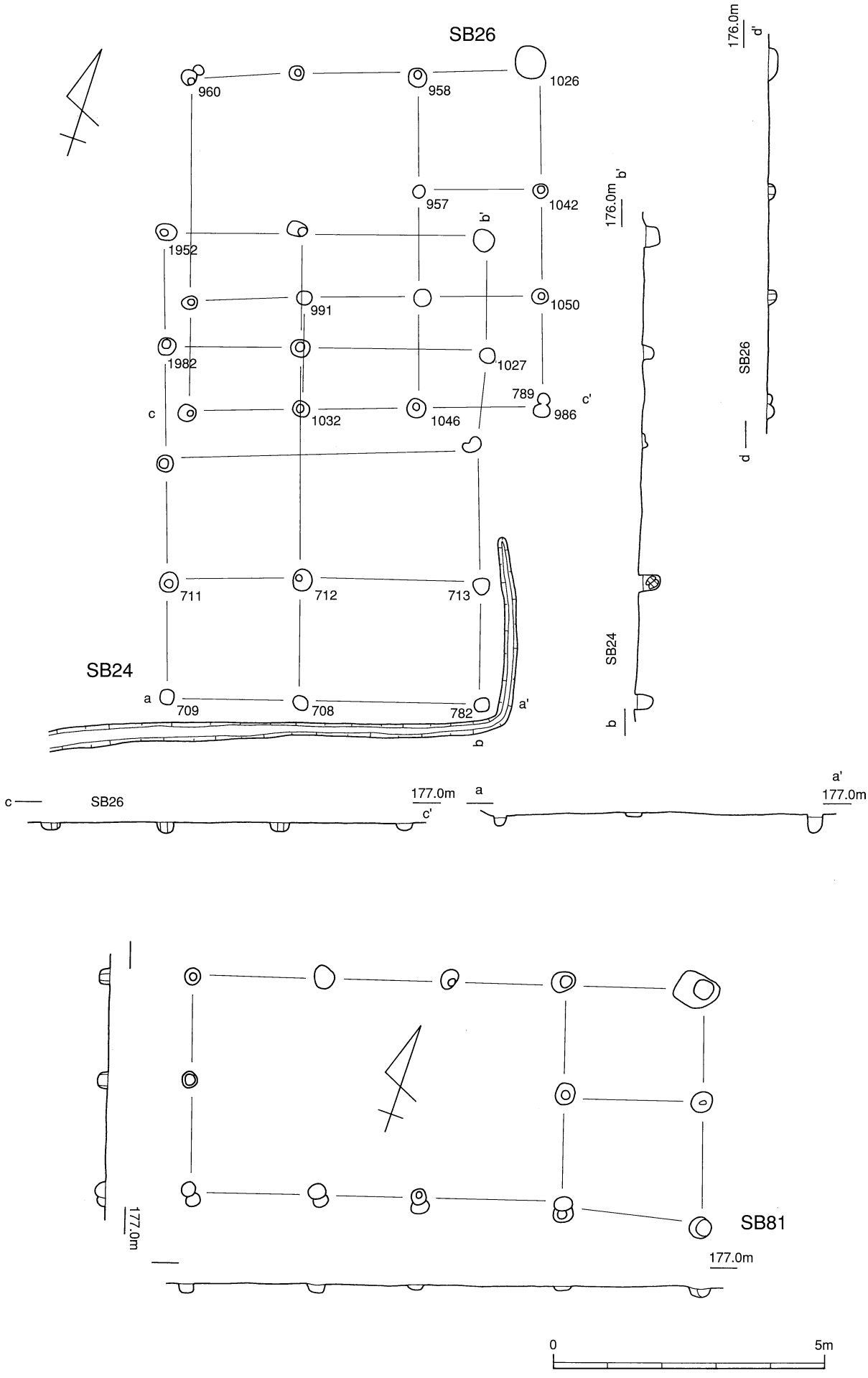
SB31・32・34・68　平・断面図


177.0m
1009
817
779
771
1008
790
820
806
777
827
974
1004
1012
973
196
959
960
745
SB27
992
950
951
734
1005
177.0m
0
5m

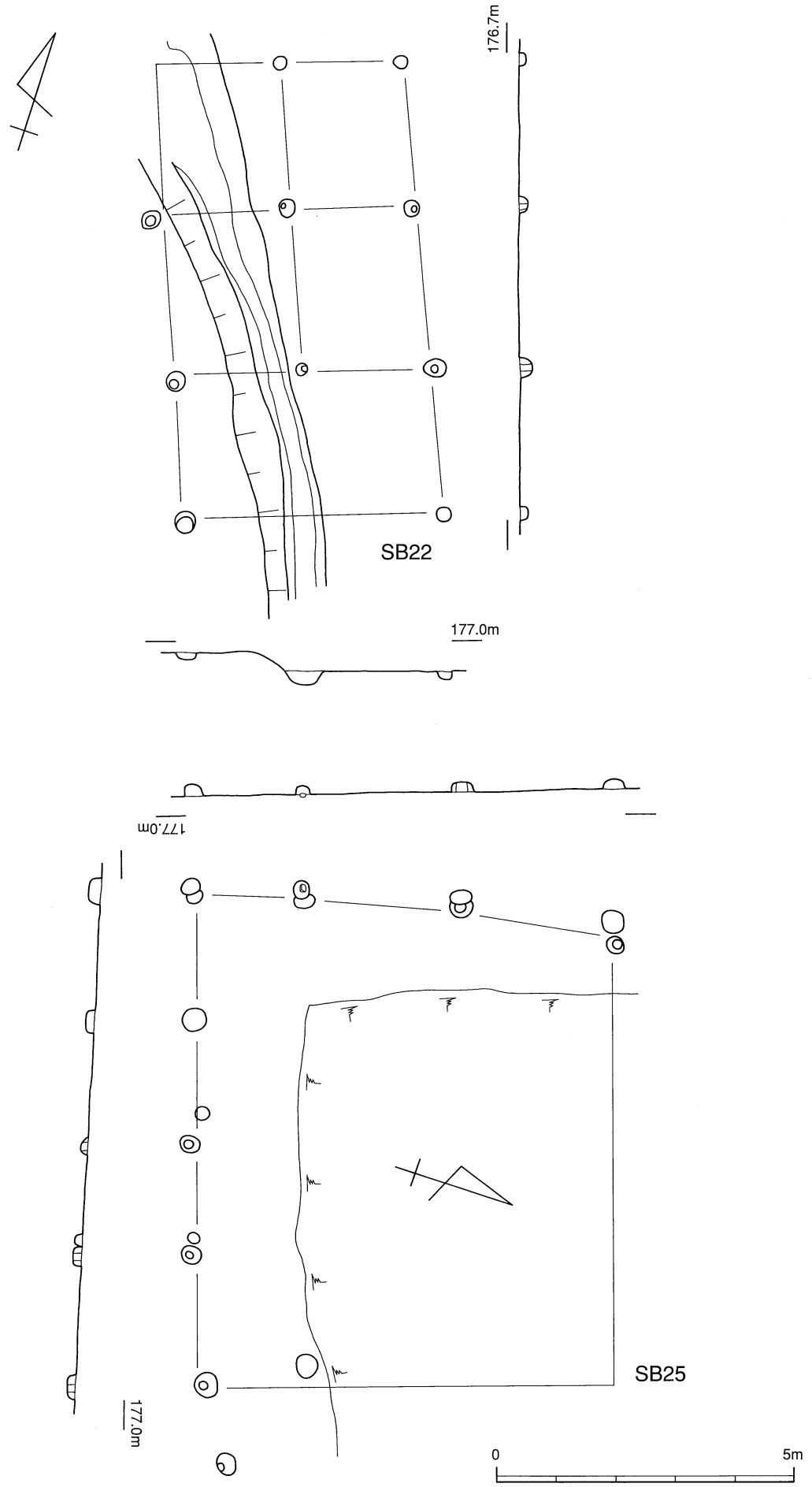
SB27　平・断面図


177.0m
1633
1589
177.0m
1586
1590
SB30
1621
1622
177.0m
1620
1578
1580
1630
1609
1611
1631
1610
SB55
177.0m
0
5m

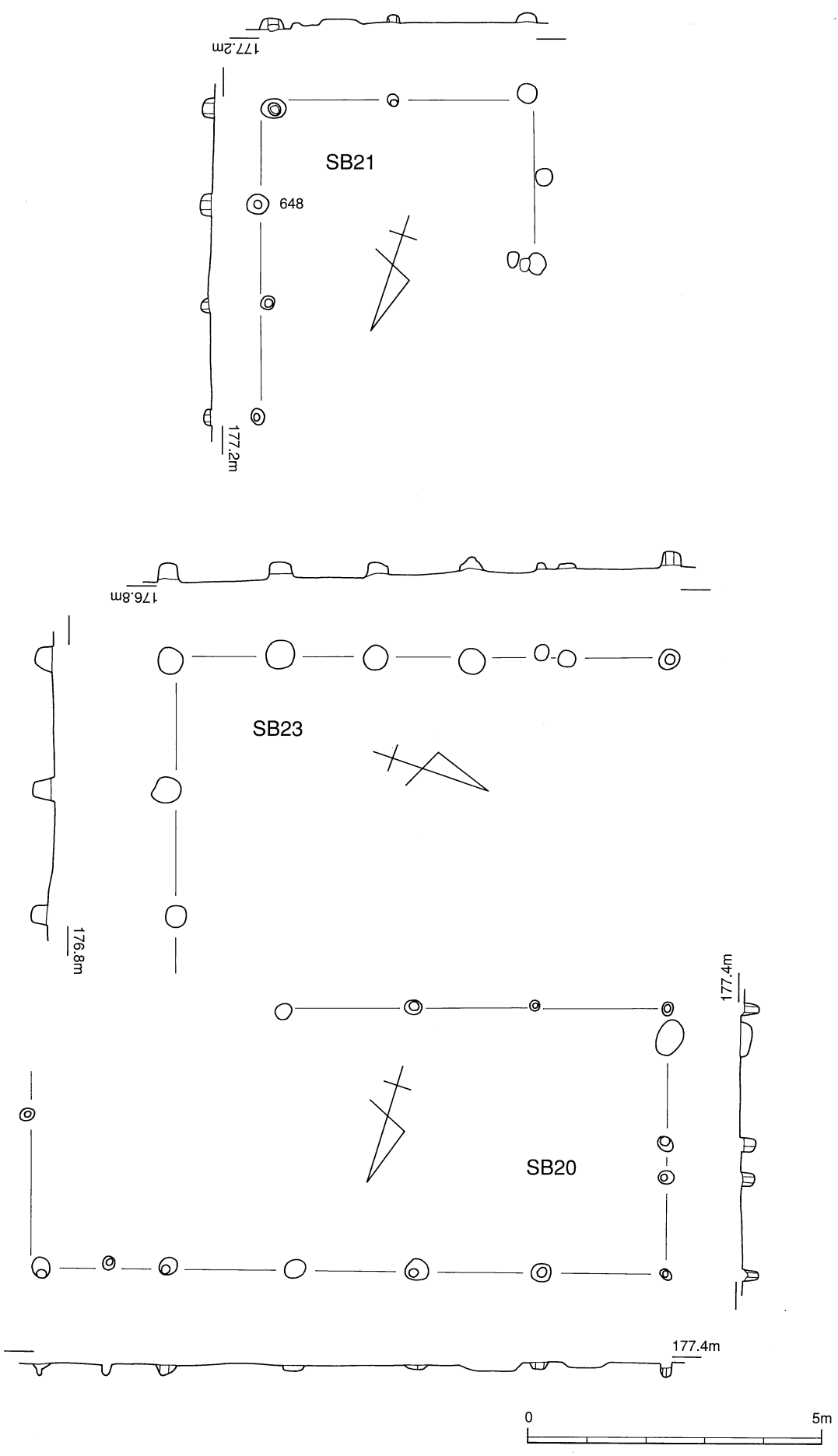
SB30・55　平・断面図



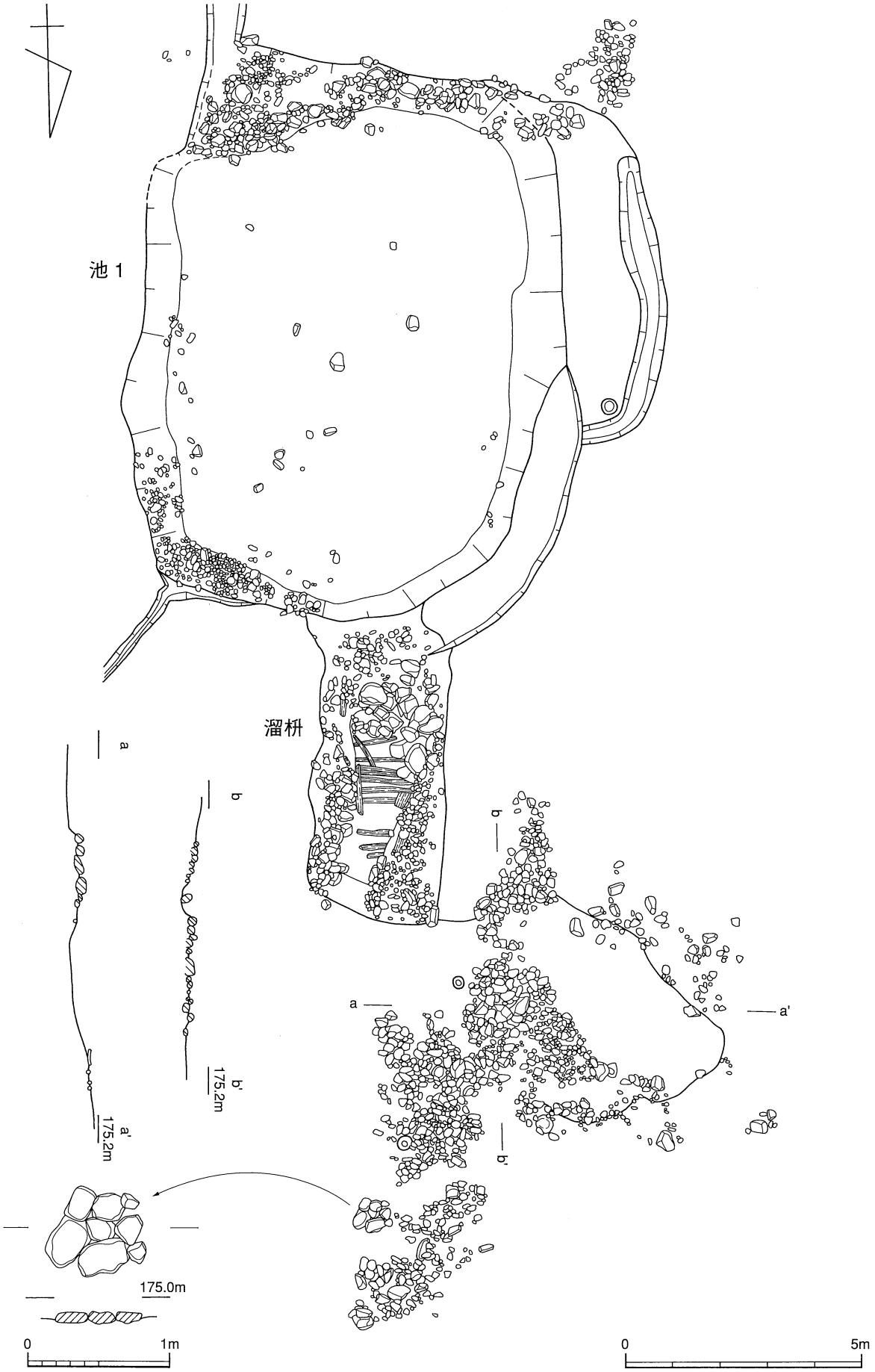
SB24・26・81　平・断面図



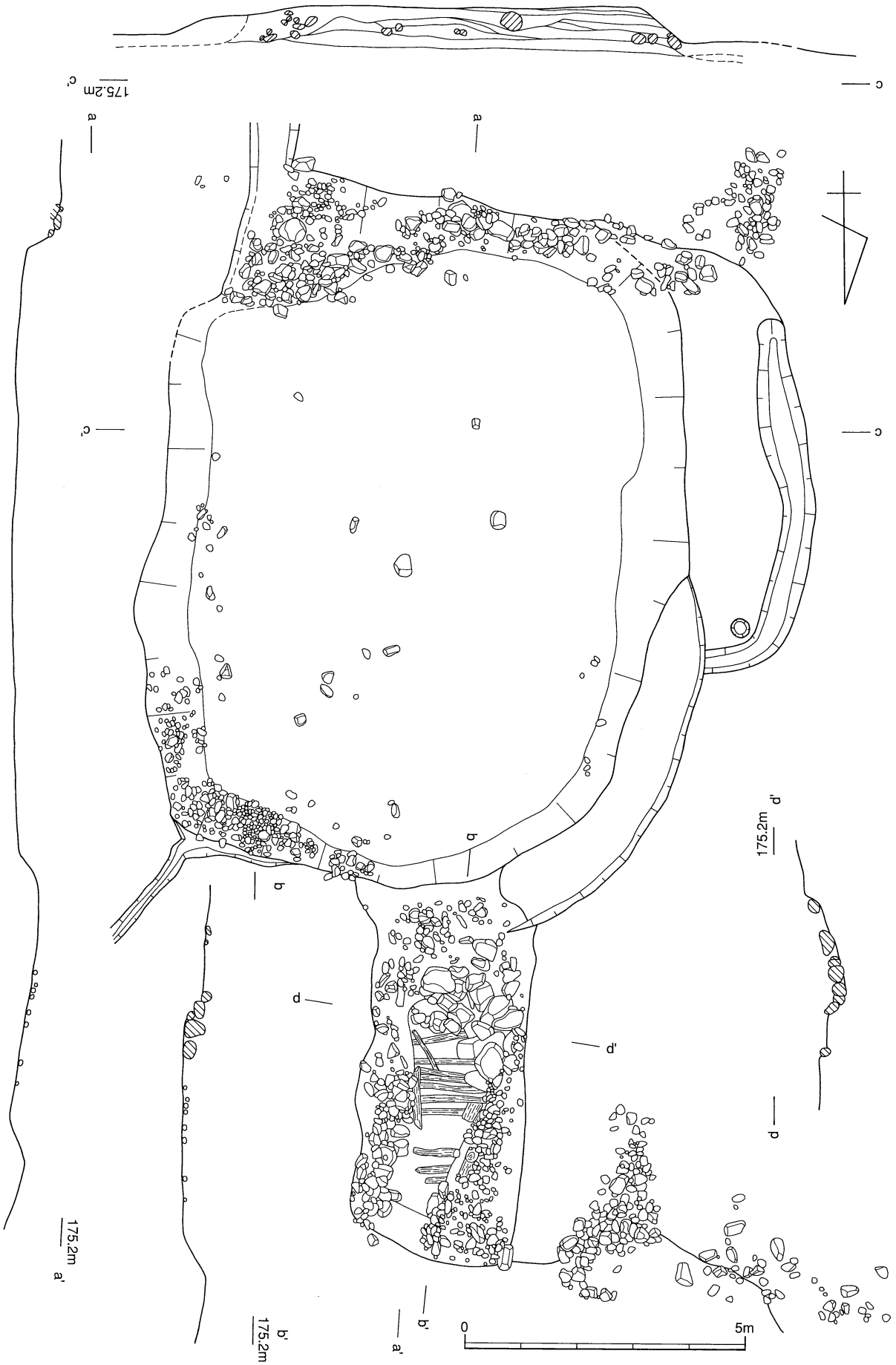
SB22・25　平・断面図



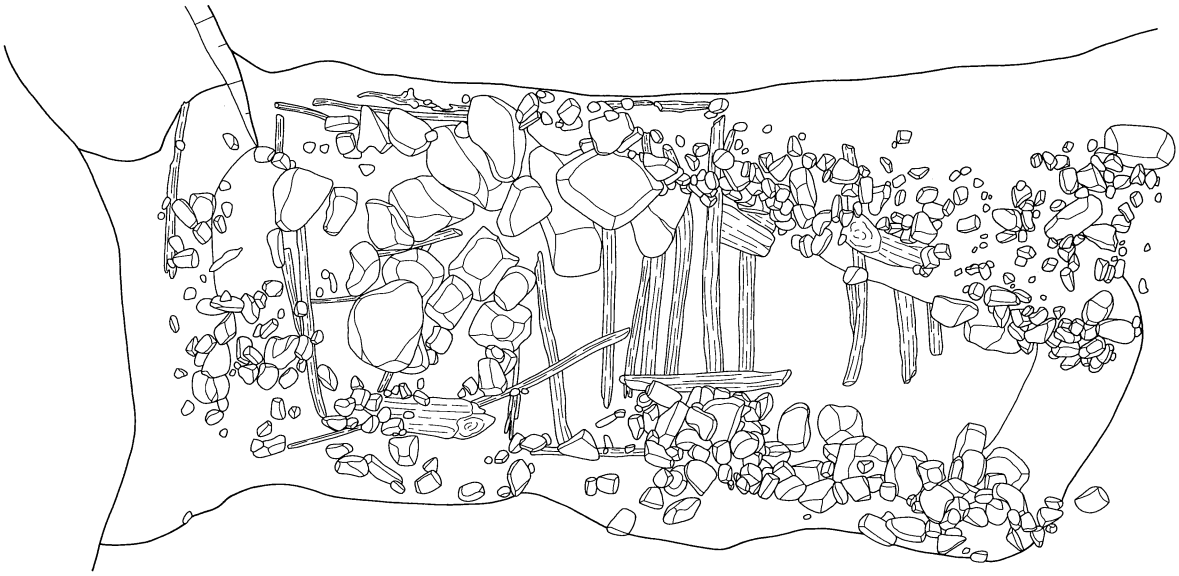
SB20・21・23　平・断面図



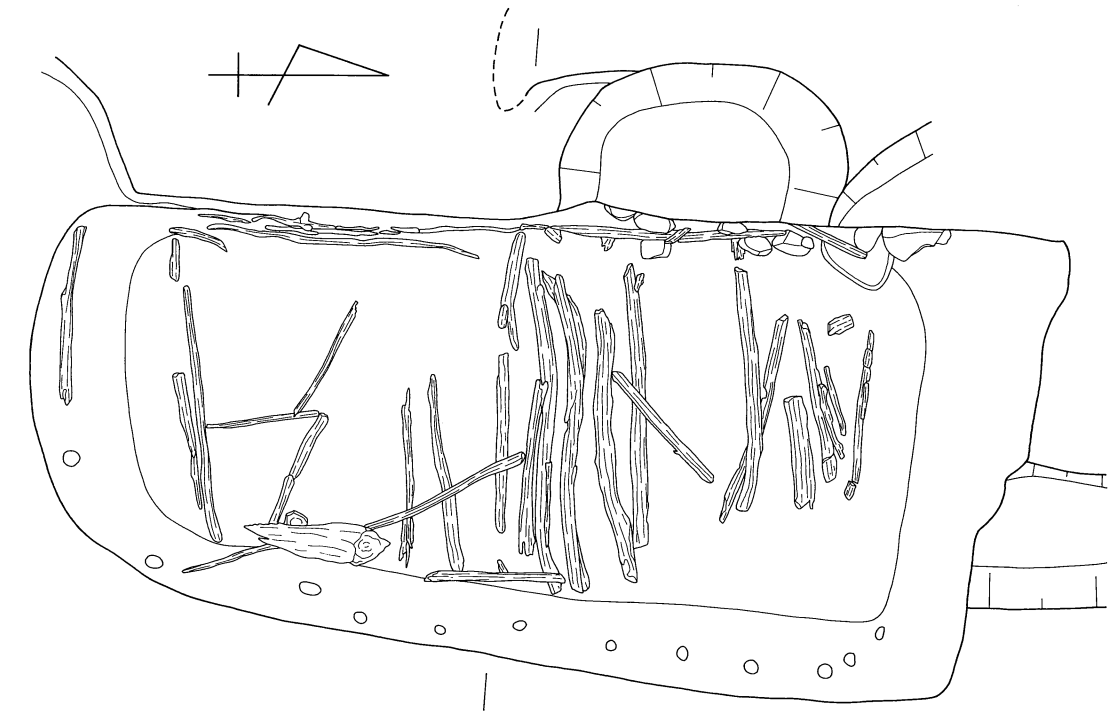
池1全体　平・断面図

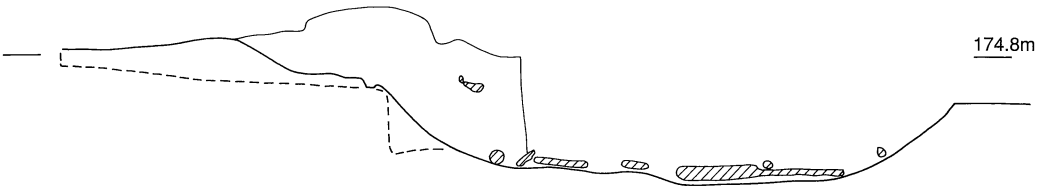


池1　平・断面図

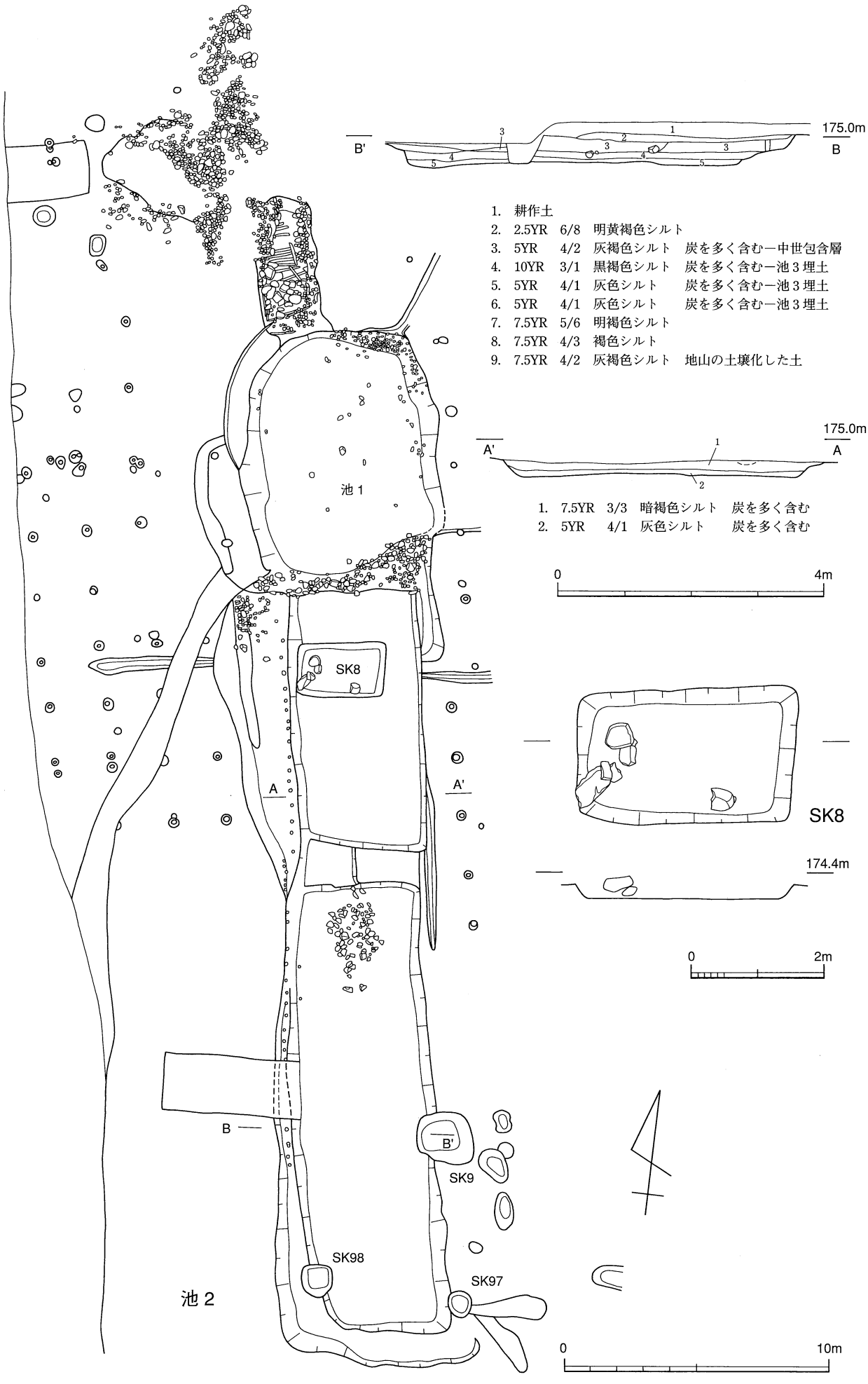


溜枡

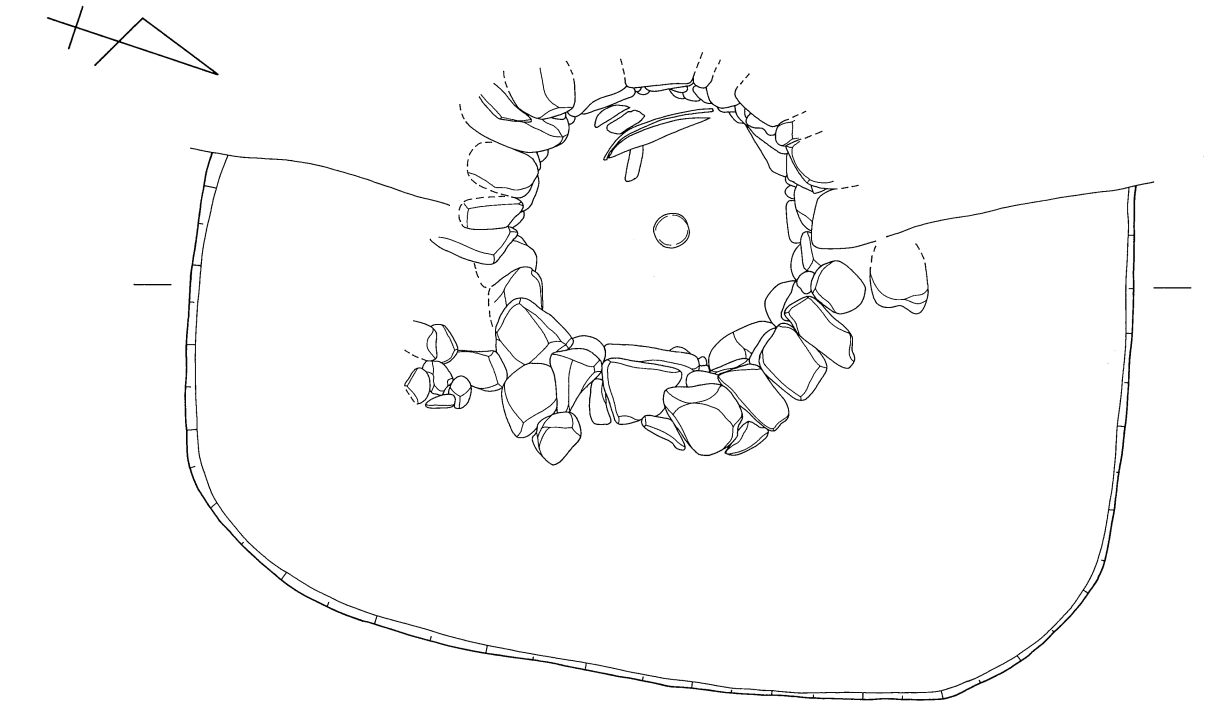


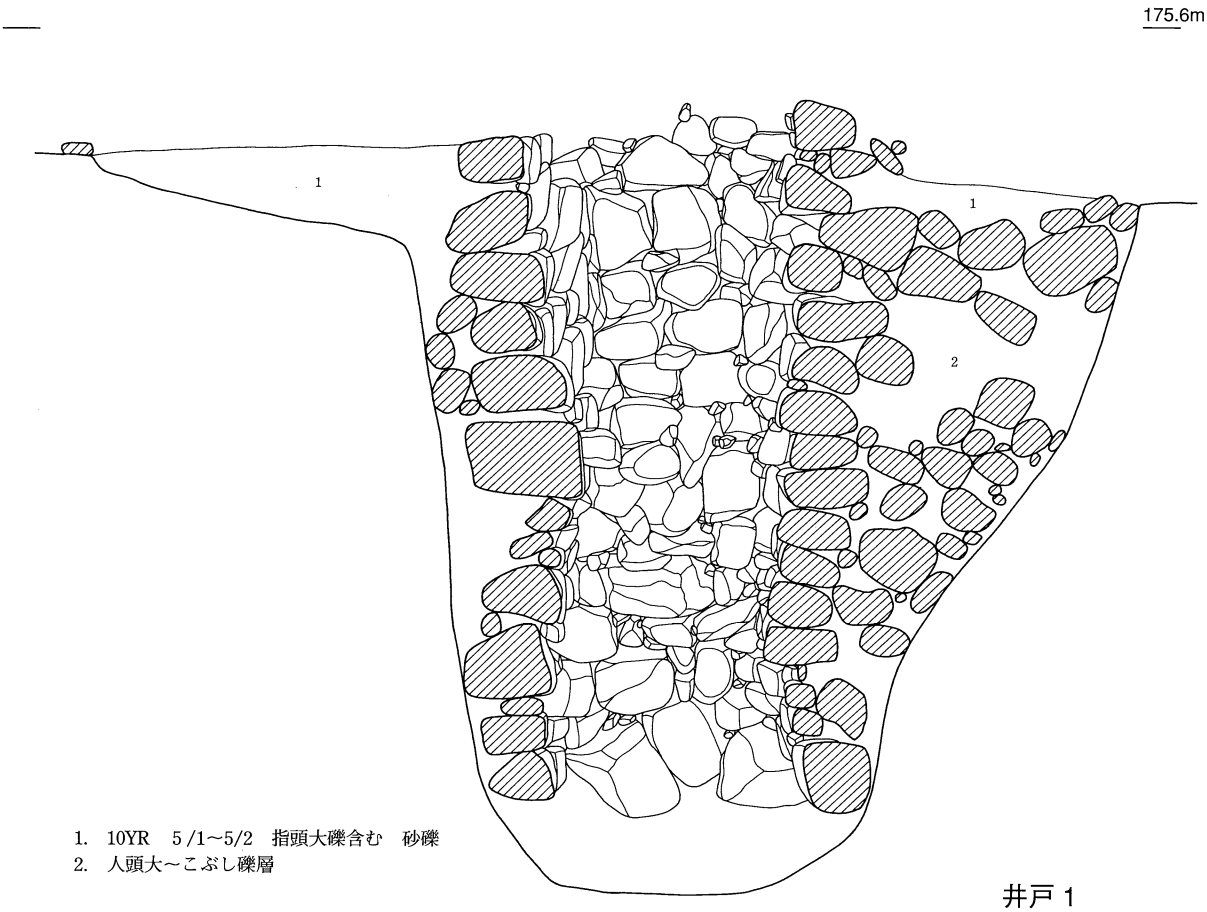


池1溜枡　平・断面図


B'
B
175.0m
1. 耕作土
2. 2.5YR 6/8 明黄褐色シルト
3. 5YR 4/2 灰褐色シルト 炭を多く含む－中世包含層
4. 10YR 3/1 黒褐色シルト 炭を多く含む－池３埋土
5. 5YR 4/1 灰色シルト 炭を多く含む－池３埋土
6. 5YR 4/1 灰色シルト 炭を多く含む－池３埋土
7. 7.5YR 5/6 明褐色シルト
8. 7.5YR 4/3 褐色シルト
9. 7.5YR 4/2 灰褐色シルト 地山の土壌化した土
A'
A
175.0m
1. 7.5YR 3/3 暗褐色シルト 炭を多く含む
2. 5YR 4/1 灰色シルト 炭を多く含む
0
4m
池１
SK8
A
A'
SK8
174.4m
0
2m
B
B'
SK9
SK98
SK97
池２
0
10m

池1・2全体　平・断面図

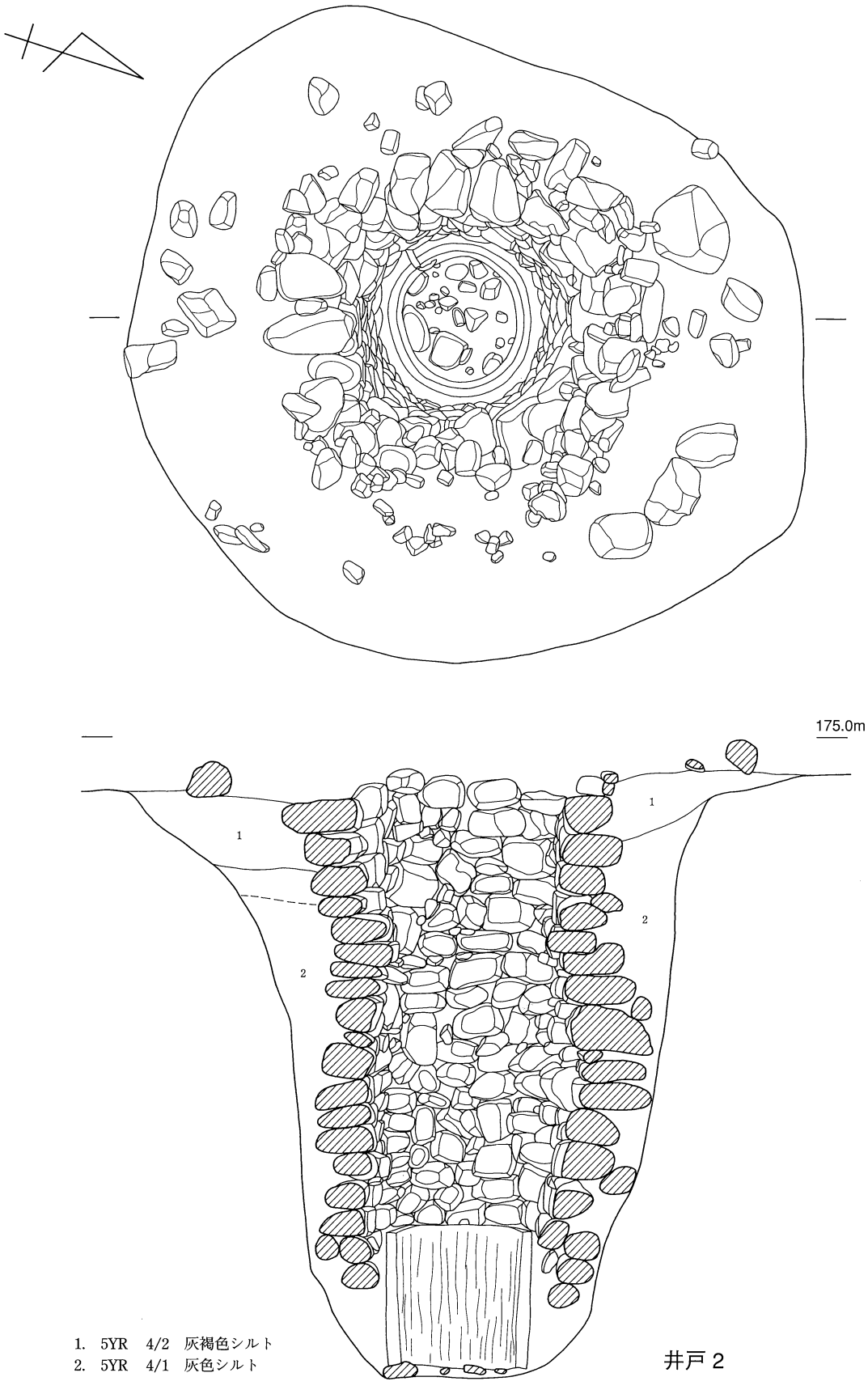




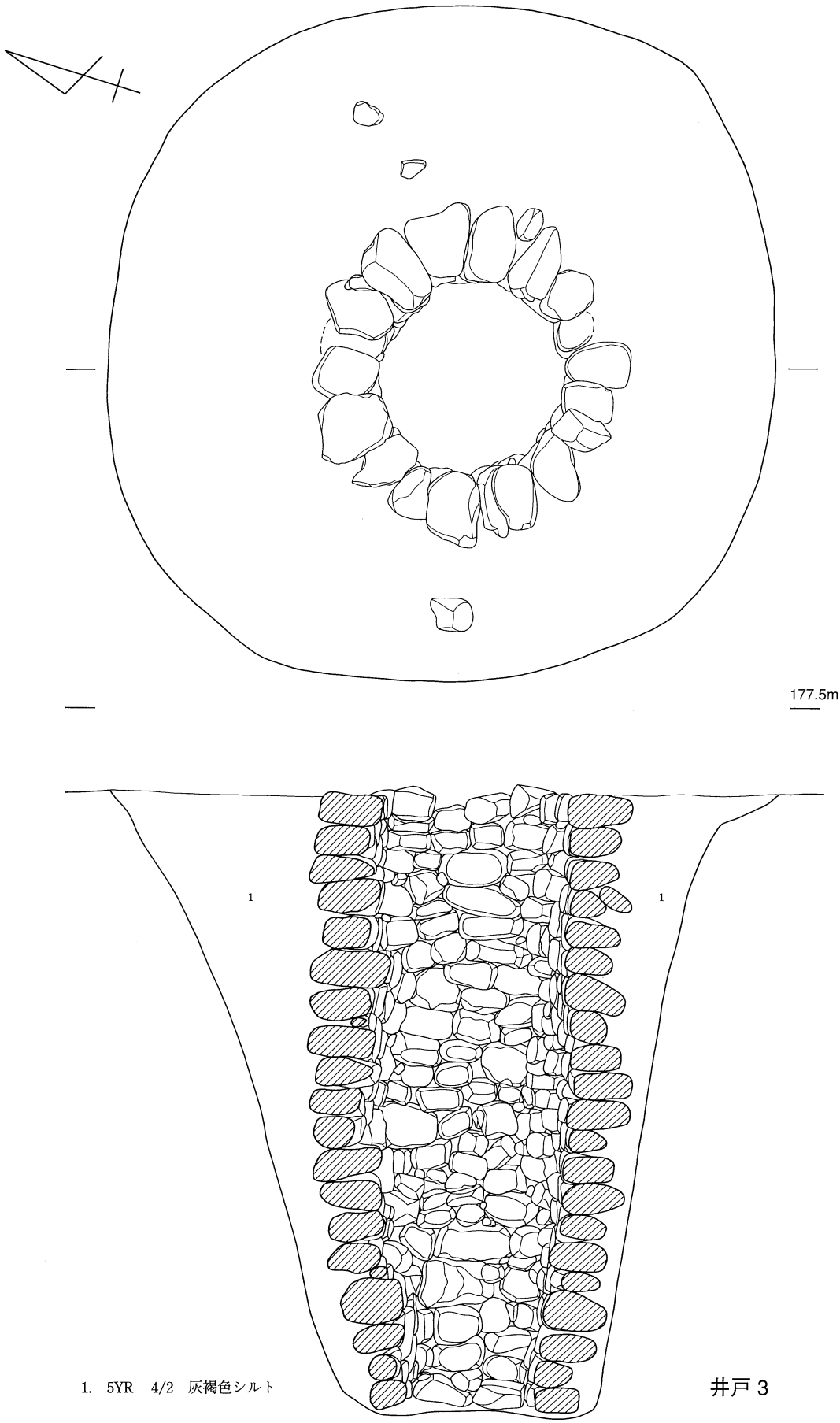
1. 10YR　5/1～5/2　指頭大礫含む　砂礫
2. 人頭大～こぶし礫層

井戸1

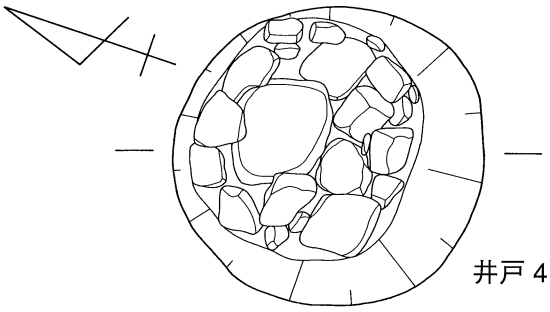
井戸1　平・断面図



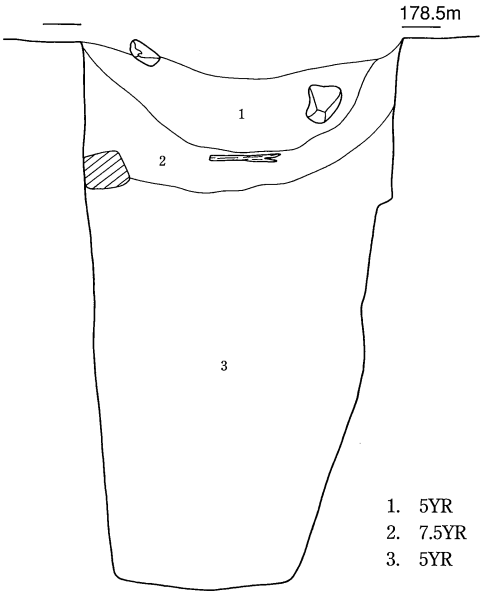
井戸2　平・断面図



井戸3　平・断面図

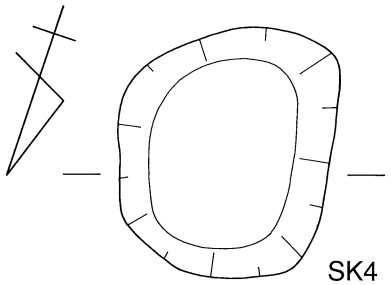


井戸 4



1. 5YR　4/2　灰褐色シルト
2. 7.5YR　4/3　褐色シルト
3. 5YR　4/1　灰色シルト

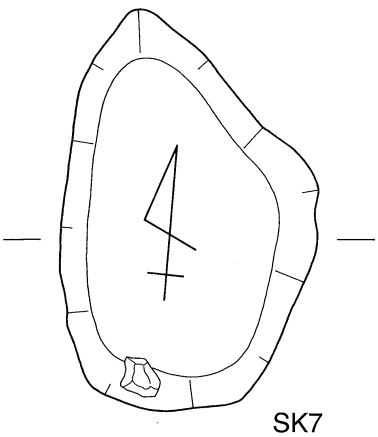
0　1m



SK4

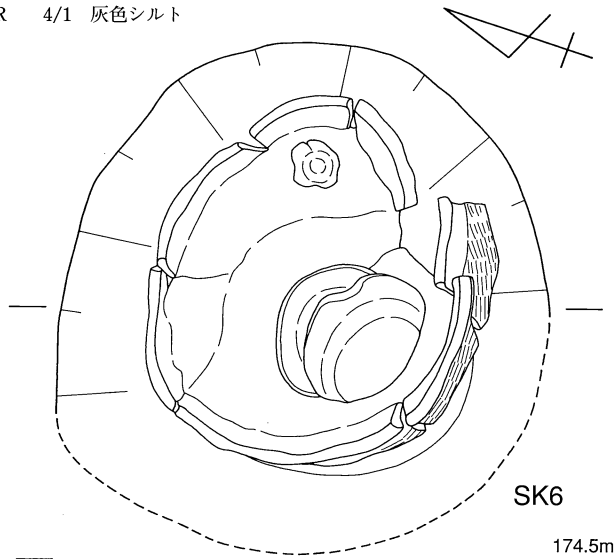
1. 7.5YR　4/6　褐色シルト

0　1m



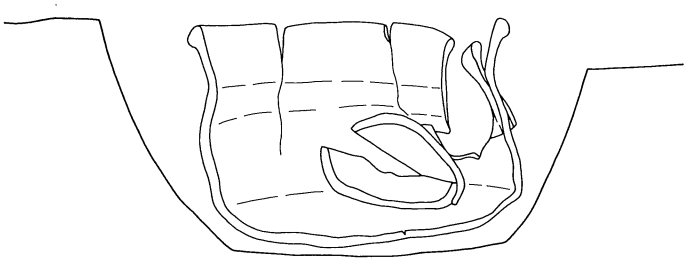
SK7

0　1m



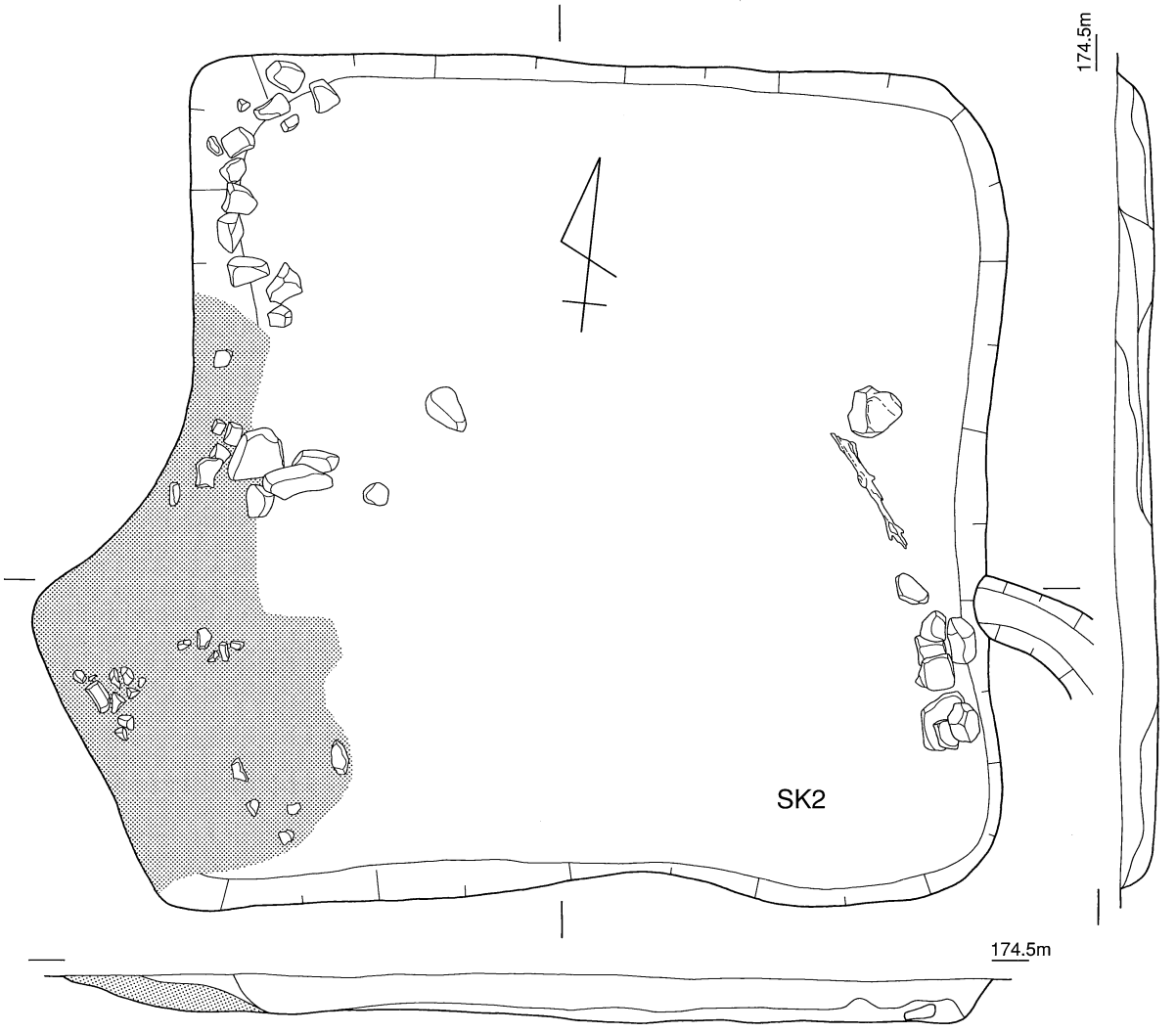
SK6

174.5m

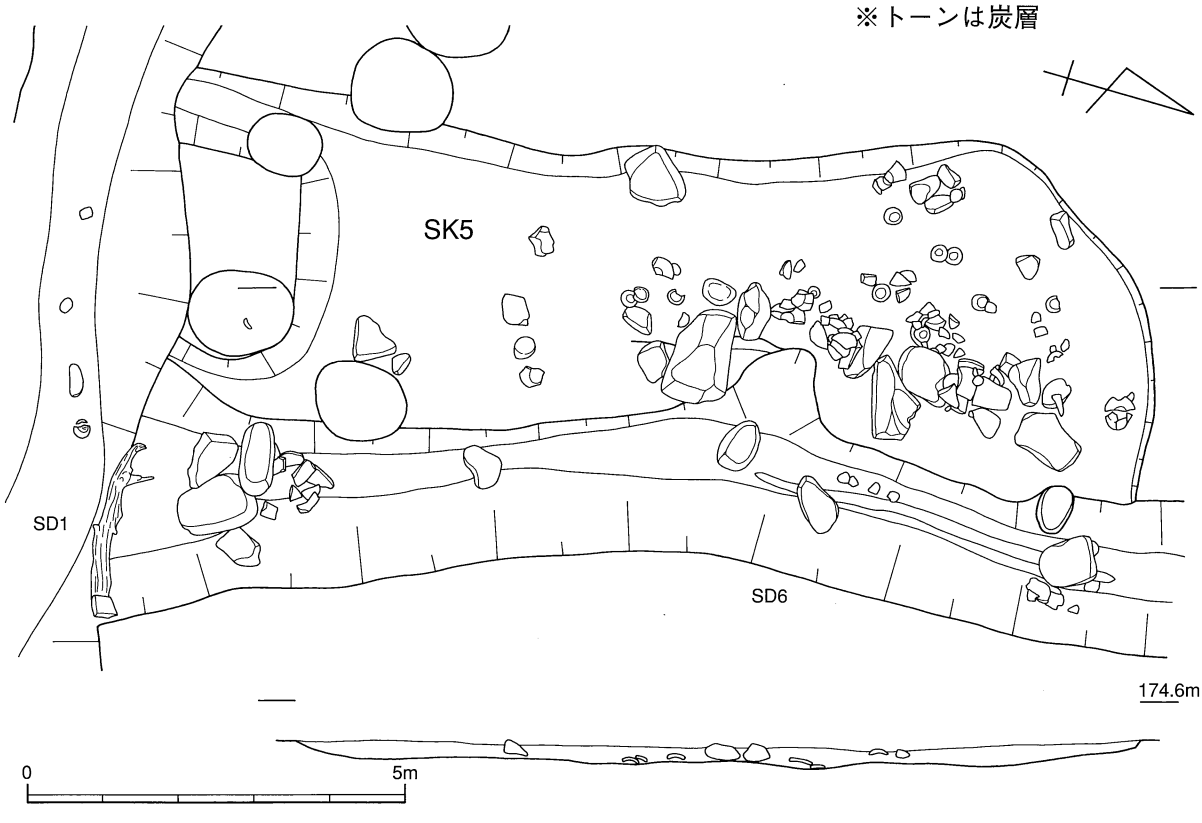


0　50cm

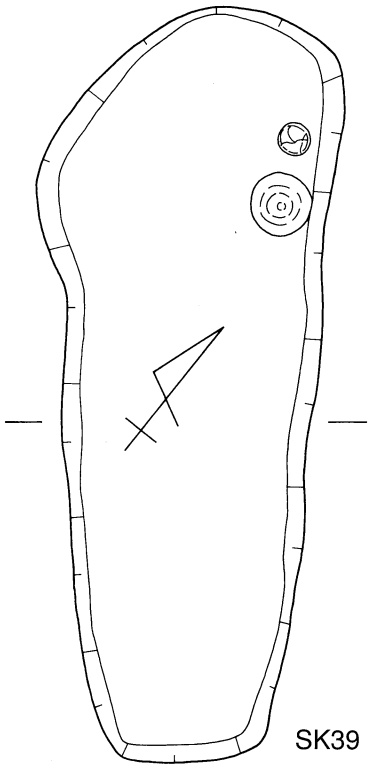
井戸4・土坑（1）　平・断面図



※トーンは炭層

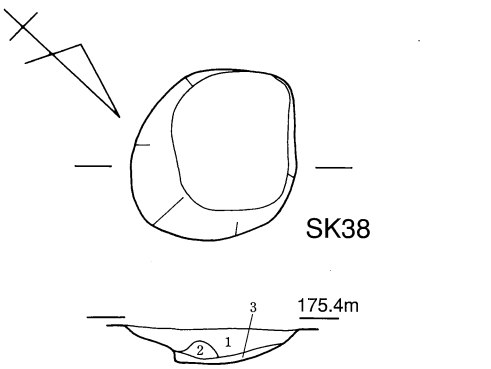


土坑（2）　平・断面図



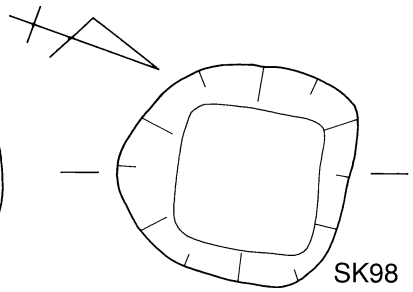
1. 7.5YR 4/6 褐色 v.f.s～f.s シルト質
2. 7.5YR 3/4 暗褐色 v.f.s～f.s シルト質

0 1m



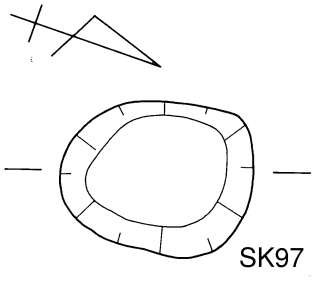
1. 7.5YR 4/6 褐色 v.f.s～f.s シルト質
2. 7.5YR 2/3 黒褐色 v.f.s～f.s シルト質
3. 7.5YR 3/4 暗褐 v.f.s～f.s シルト質

0 1m



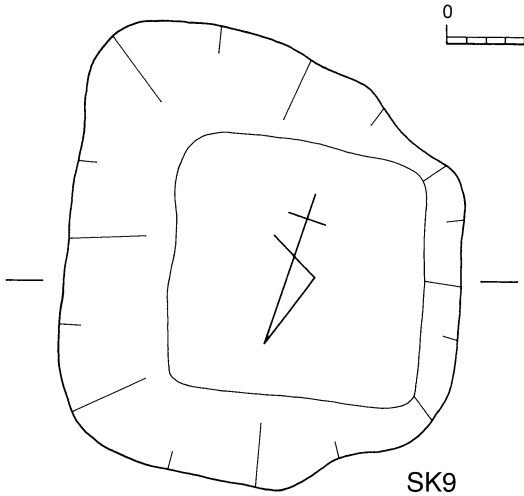
10YR 4/1 褐灰色 極細砂

0 1m



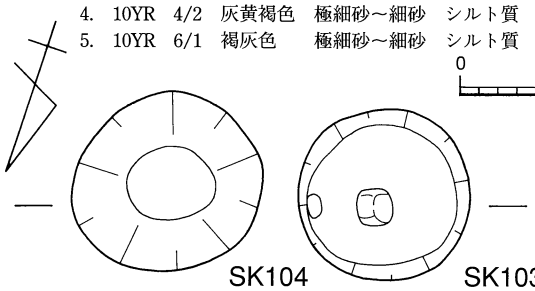
1. 10YR 6/6 明黄褐色 極細砂～細砂 シルト質
2. 10YR 4/1 褐灰色 極細砂～細砂 シルト質

0 1m



1. 10YR 3/4 暗褐色 極細砂～細砂 シルト質
2. 10YR 7/8 黄褐色 極細砂～細砂 シルト質
3. 10YR 5/1 褐灰色 極細砂～細砂 シルト質
4. 10YR 4/2 灰黄褐色 極細砂～細砂 シルト質
5. 10YR 6/1 褐灰色 極細砂～細砂 シルト質

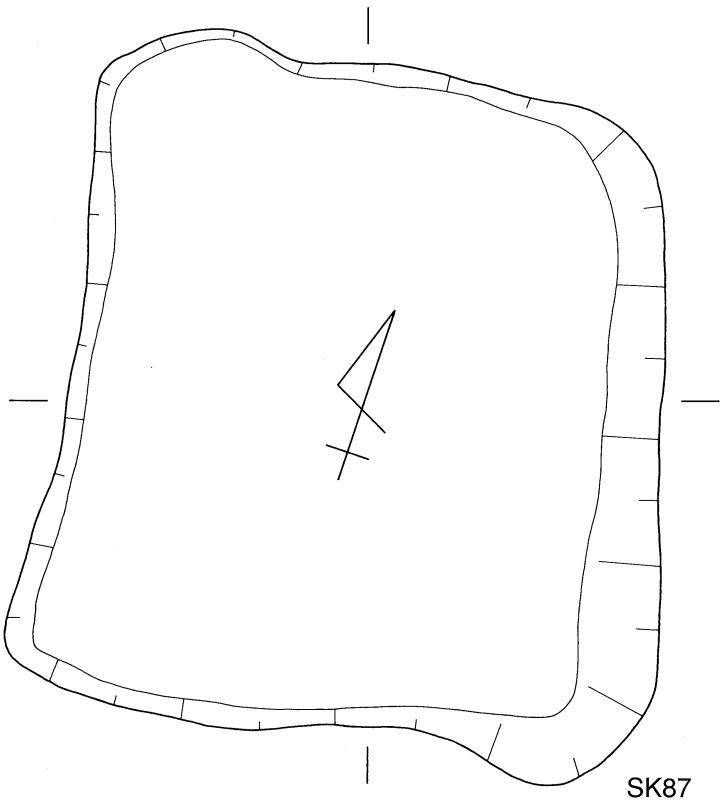
0 1m



1. 10YR 2/3 黒褐色 シルト質 v.f.s～m.s マンガン斑

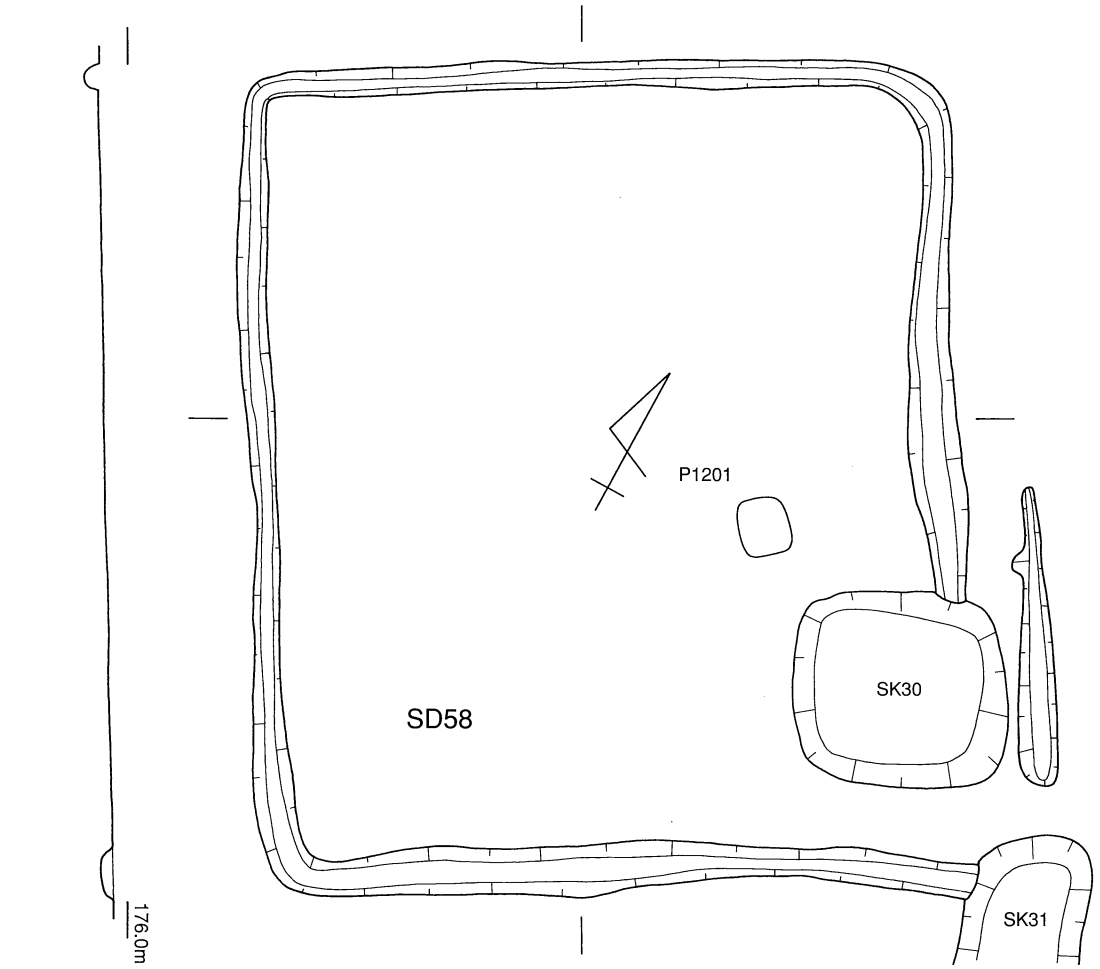
0 2m

土坑（3）　平・断面図

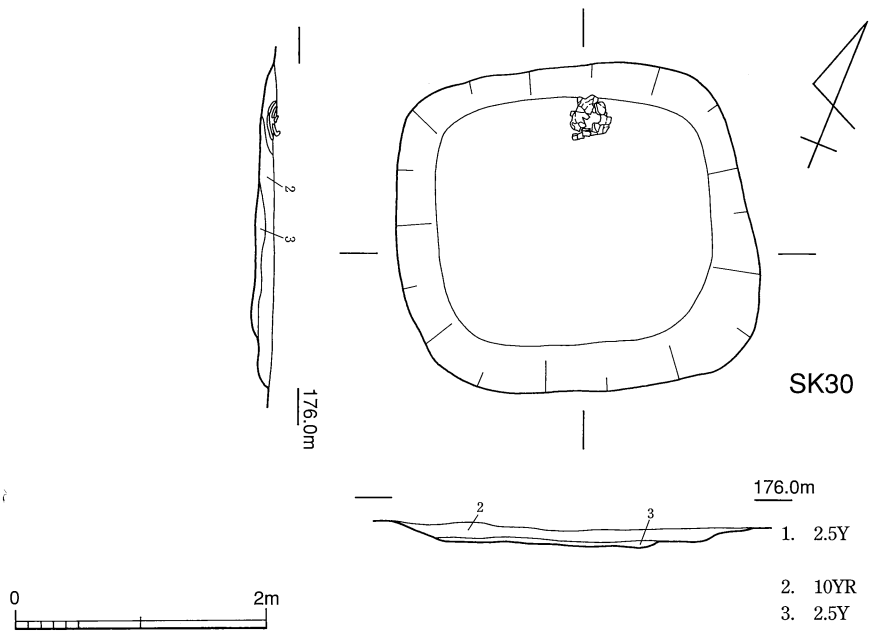


1. 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質 v.f.s～m.s 炭混入
2. 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質 v.f.s～f.s
3. 10YR 3/1 黒褐 v.f.s～f.s シルト 若干混入
4. 10YR 4/2 灰黄褐 シルト質 v.f.s～m.s 炭混入

土坑（4）　平・断面図

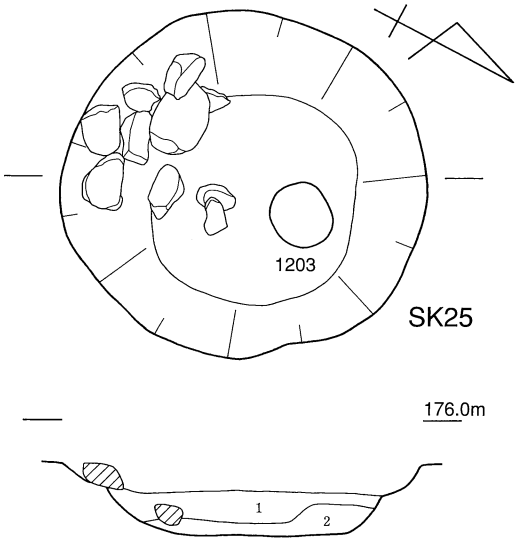


溝　埋土
10YR　4/2　灰黄褐　極細砂～細砂シルト質
（炭若干混入）

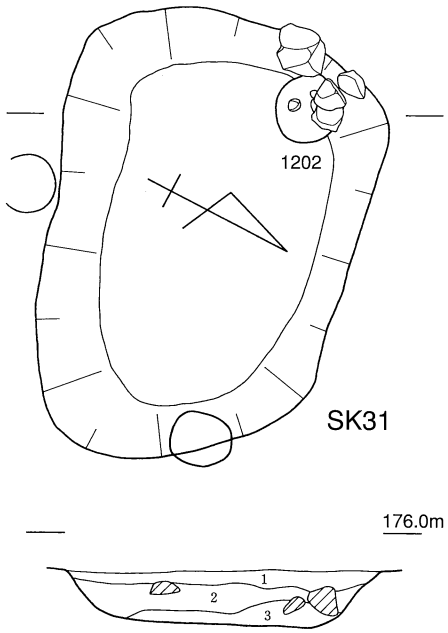


1.　2.5Y　4/1　黄褐色　極細～細砂シルト質
炭多量に含む
2.　10YR　5/1　褐灰色　極細～細砂シルト質
3.　2.5Y　7/6　明褐色　極細～細砂シルト質

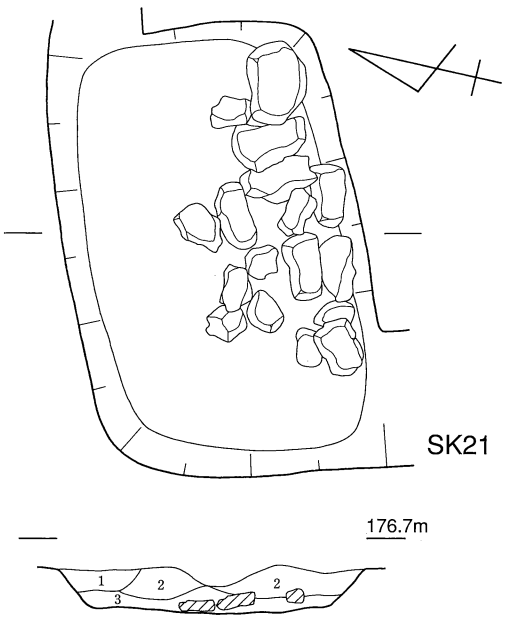
SD58　土坑（1）　平・断面図



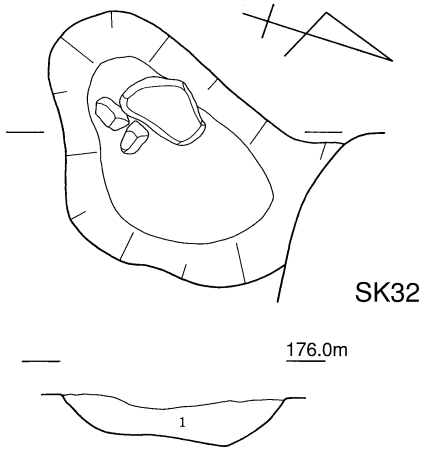
1. 7.5YR　4/2　褐灰色　極細砂～細砂　シルト質　土器・炭含む
2. 5YR　5/1　灰色　極細砂～細砂　シルト質　土器・炭含む



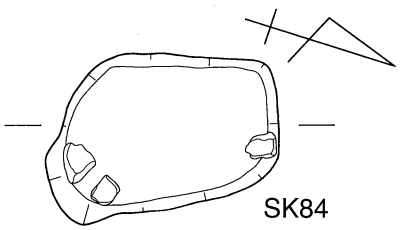
1. 10YR　5/4　にぶい黄褐色　v.f.s～f.s　粘質
2. 10YR　5/2　灰黄褐色　v.f.s～f.s　粘質（炭若干混入）
3. 10YR　5/2　灰黄褐色　v.f.s　シルト（炭若干混入）

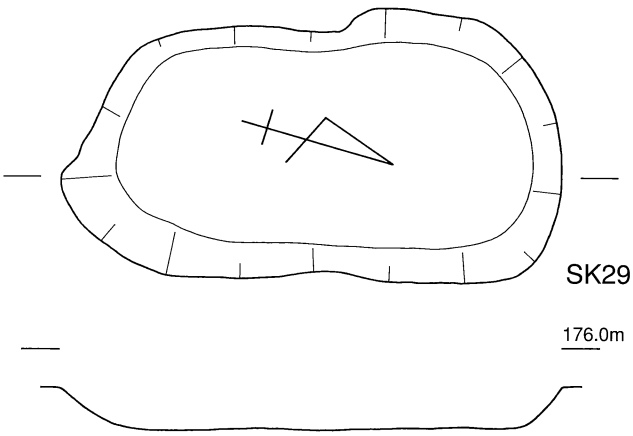


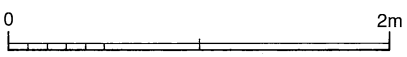
1. 2.5Y　5/6　黄褐色　f.s～v.f.s　シルト質
2. 7.5YR　4/6　褐色　v.f.s　シルト質
3. 5Y　4/1　灰色　v.f.s　シルト質



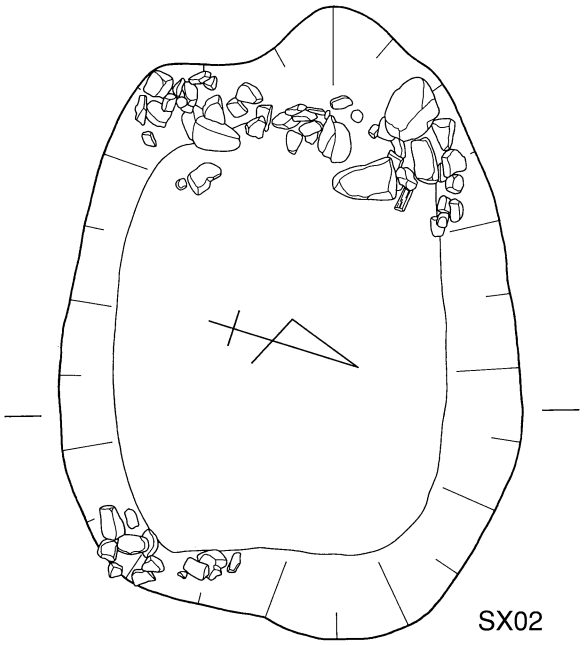
1. 10YR　5/2　灰黄褐色　v.f.s

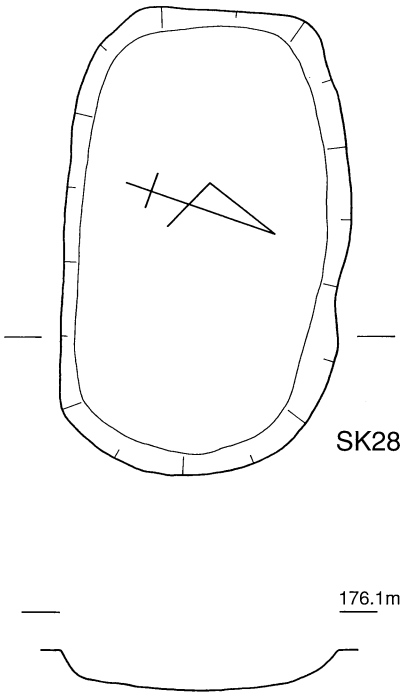


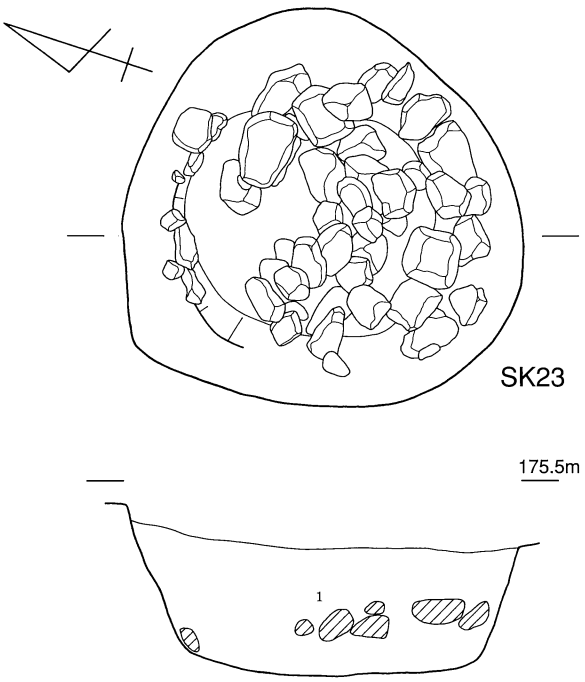




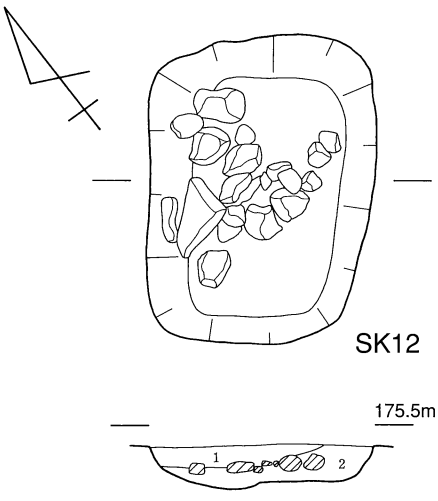
土坑（2）　平・断面図



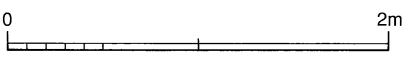




1.　5YR　5/6　明赤褐色　f.s　炭混じり

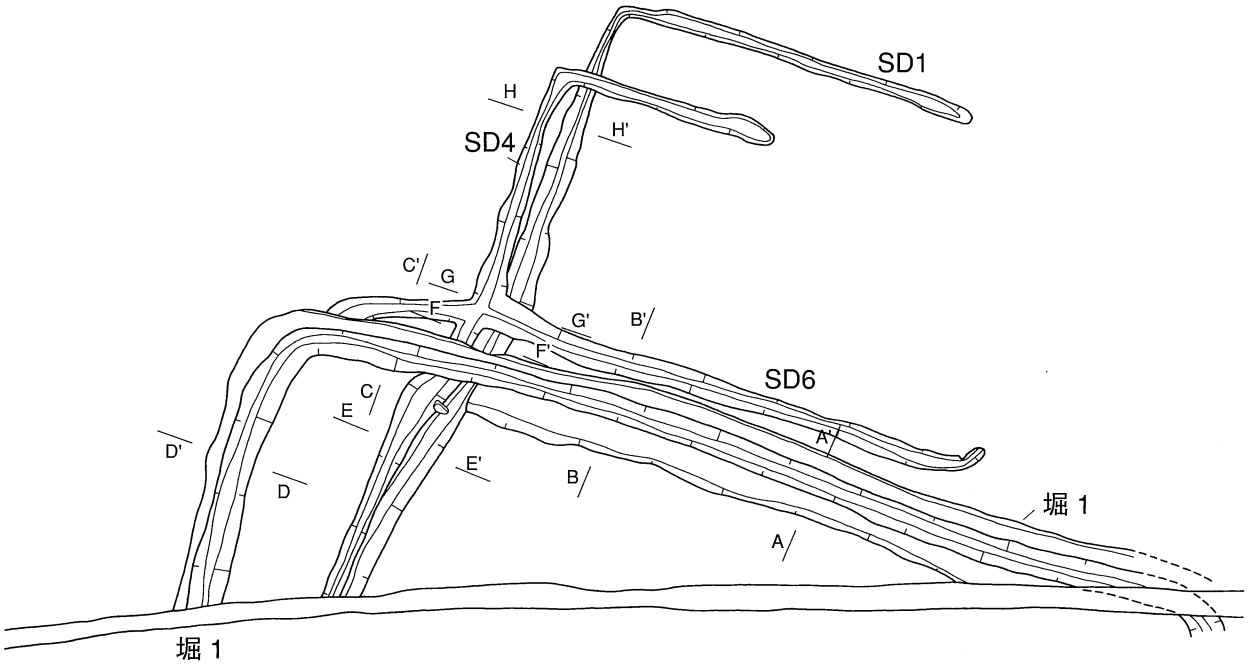


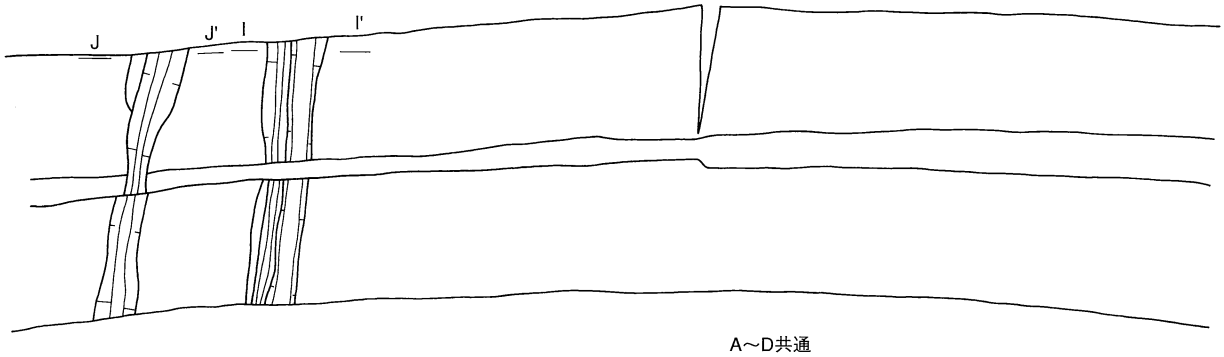
1.　2.5YR　6/8　明黄褐色　v.f.s～f.s　シルト質
2.　2.5YR　5/1　明黄褐色　v.f.s～f.s　シルト質



土坑（3）　平・断面図

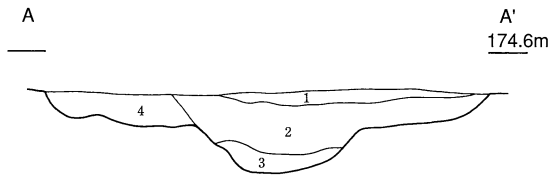
池3　平・断面図

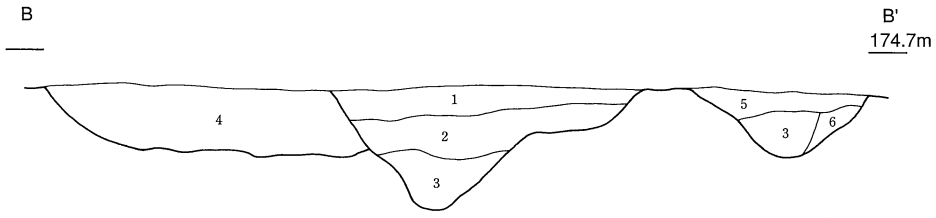


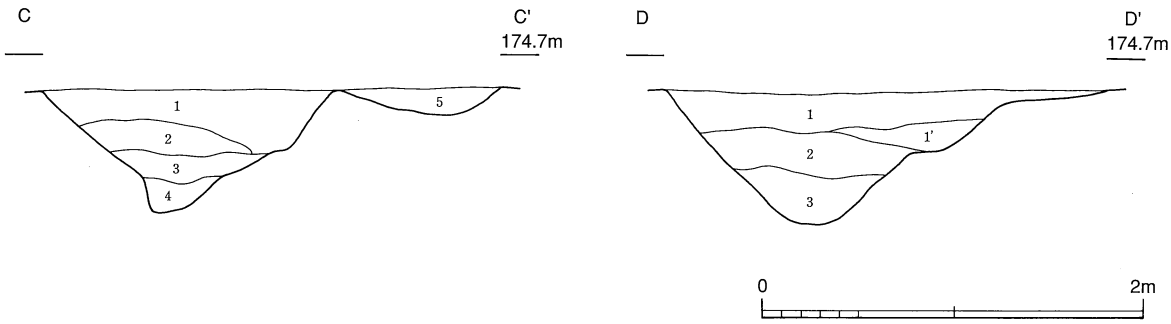


A～D共通

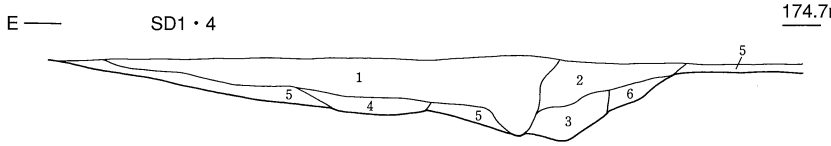
1. 7.5Y　5/1　灰色シルト（粘性がある）
2. 10Y　5/1　灰色シルト（粘性がある）
3. 7.5Y　5/1　灰色シルト
4. 7.5Y　5/1　灰色シルト
5. 7.5YR　3/4　暗褐色シルト
6. 10YR　6/8　明黄褐色シルト



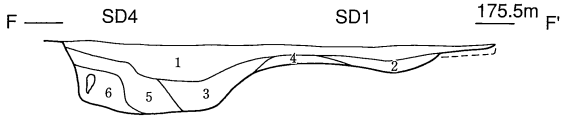




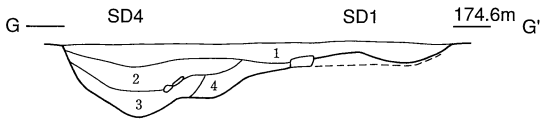
溝・堀（1）　平・断面図



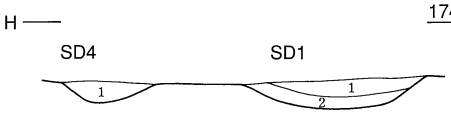
1. 7.5YR 4/3 褐色シルト
2. 7.5YR 4/6 褐色シルト
3. 5Y 4/1 灰色シルト 礫・炭混じり
4. 2.5Y 5/1 黄灰色シルト
5. 10YR 6/8 明黄褐色シルト
6. 10YR 5/8 黄褐色シルト



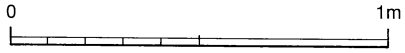
1. 10YR 4/4 褐色 v.f.s～f.s 粘質
2. 2.5Y 4/1 黄灰色 v.f.s～f.s 粘質 炭若干混入
3. 5Y 4/1 灰色 シルト質 v.f.s～f.s 炭若干混入
4. 10YR 4/2 灰黄褐色 v.f.s～f.s 粘質
5. 5Y 4/1 灰色～2.5YR 4/2 褐色ブロックで混在シルト質 v.f.s～f.s
6. 5Y 4/1 灰色 シルト質 v.f.s 炭若干混入 v.f.s～f.s 粗砂

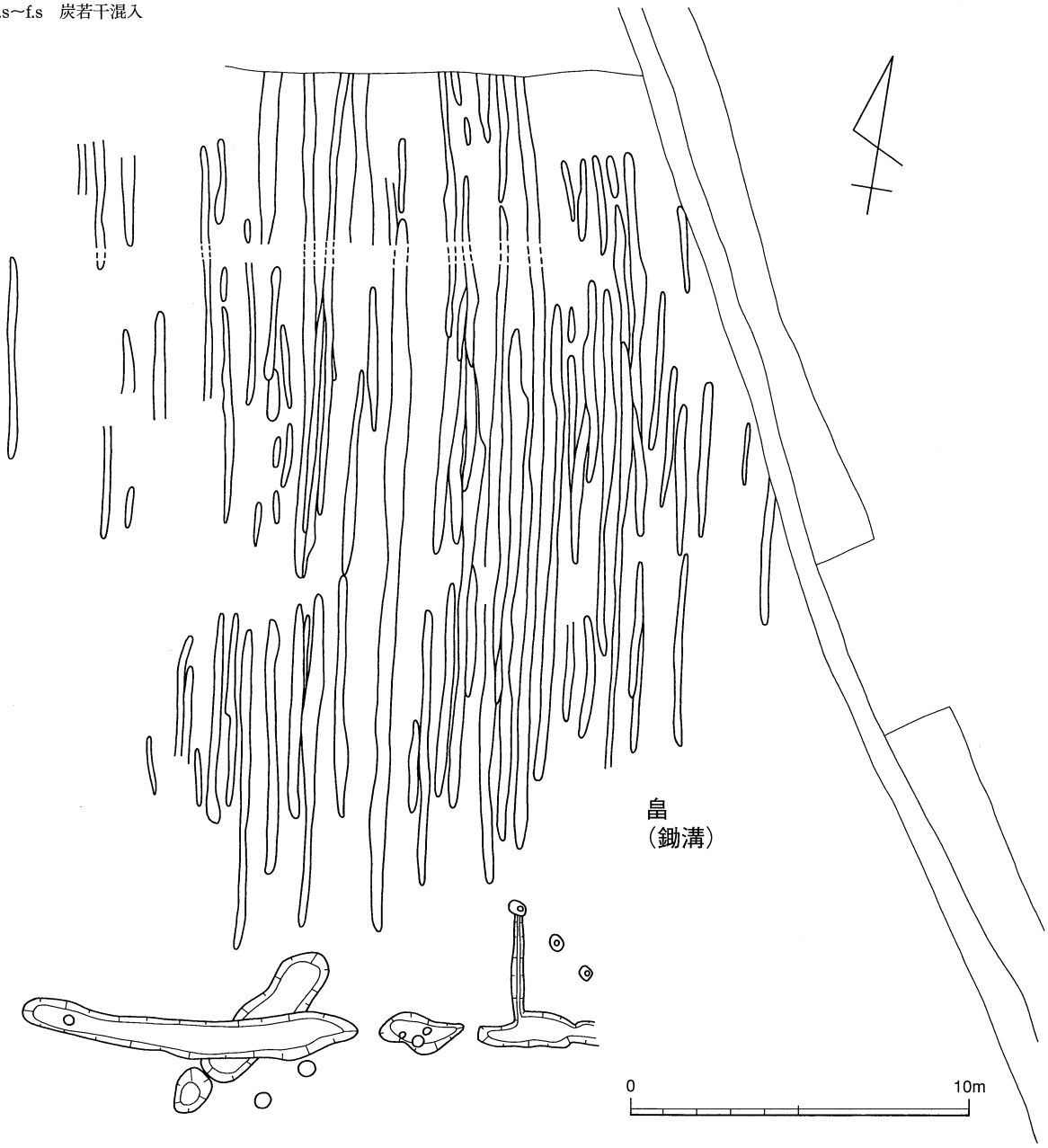


1. 7.5YR 4/3 褐色 v.f.s～f.s 粘質
2. 10YR 3/2 黒褐色 v.f.s～f.s 粘質 炭多量混入
3. 5Y 4/1 灰色 v.f.s～f.s シルト 炭若干混入
4. 10YR 4/2 灰黄褐色 v.f.s～f.s 粘質 炭若干混入

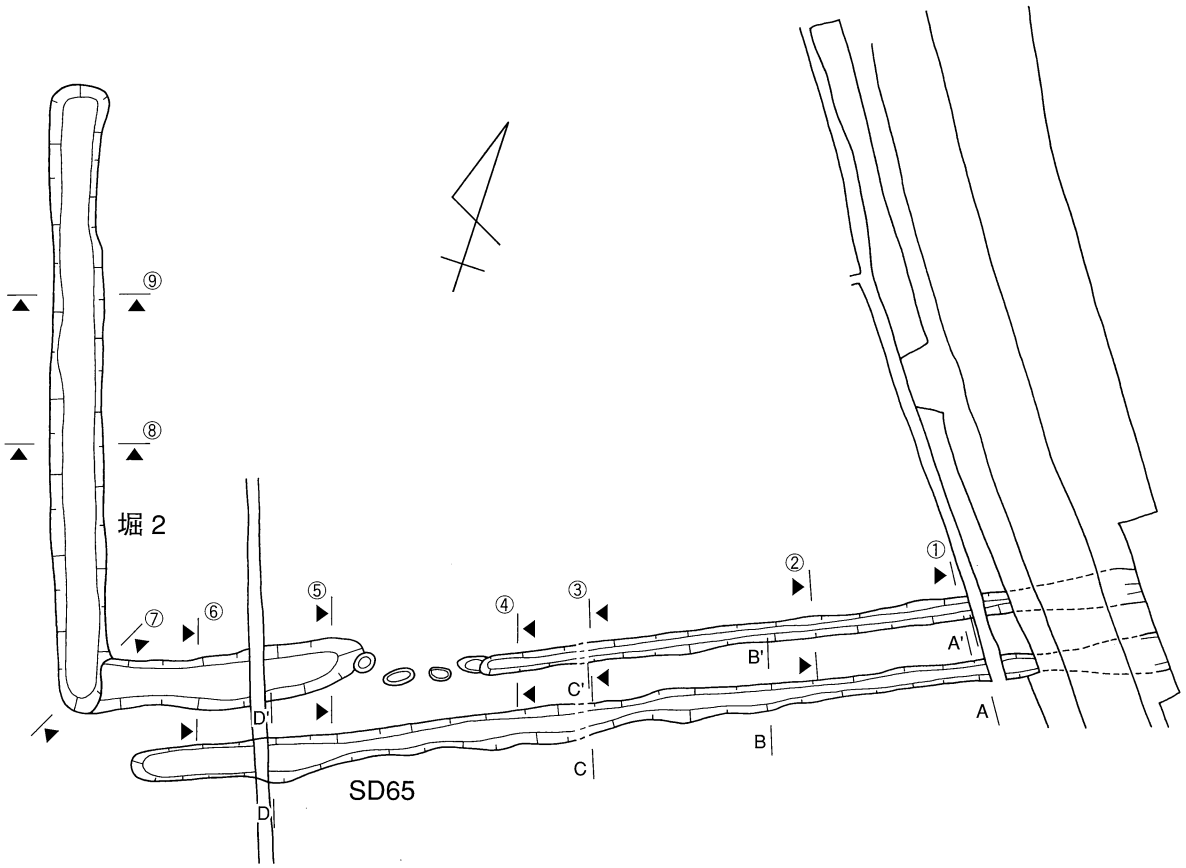


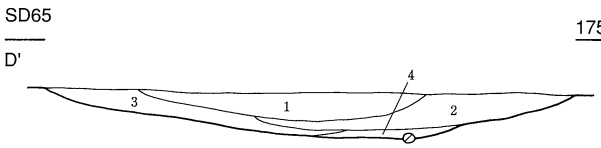
1. 2.5Y 3/1 黒褐色シルト質 v.f.s～f.s 炭若干混入
1. 10YR 4/4 褐色 v.f.s～f.s 炭若干混入
2. 2.5Y 4/1 黄灰色 シルト質 v.f.s 炭若干混入

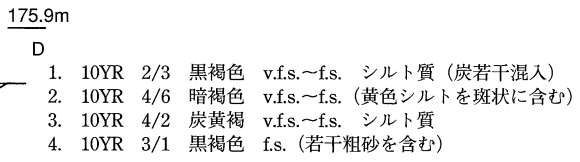




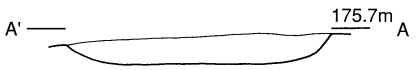
溝・堀（2）断面図・畠平面図







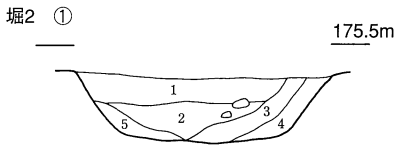
1. 10YR　2/3　黒褐色　v.f.s.～f.s.　シルト質（炭若干混入）
2. 10YR　4/6　暗褐色　v.f.s.～f.s.（黄色シルトを斑状に含む）
3. 10YR　4/2　炭黄褐　v.f.s.～f.s.　シルト質
4. 10YR　3/1　黒褐色　f.s.（若干粗砂を含む）



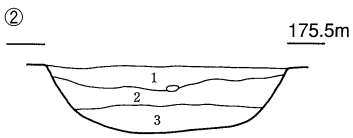
2.5YR　4/4　褐色　極細砂～細砂　シルト質

10YR　2/3　黒褐色　v.f.s～.f.s.　シルト質（炭若干混入）

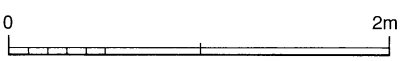
7.5YR　4/4　v.f.s～.f.s.　シルト質



1. 5Y　5/1　灰色　極細砂～中砂　シルト質　φ2～6mm大の礫含む
2. 7.5Y　5/1　灰色　極細砂～中砂　シルト質
3. N　5/　灰色　極細砂～細砂　シルト質
4. 2.5Y　5/6　黄褐色　極細砂～細砂　シルト質
5. 2.5Y　4/3　オリーブ褐色　極細砂～細砂　シルト質　地山土を含む



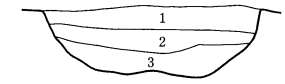
1. 5Y　5/1　灰色　極細砂～中砂　シルト質　φ2～6mm大の礫を含む
2. 7.5Y　5/1　灰色　極細砂～中砂　シルト質　φ2～6mm大の礫を含む
3. N　5/　灰色　極細砂～細砂　シルト質



溝・堀（1）　平・断面図

堀2

③

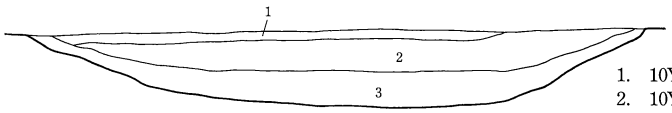


1. 5Y　5/1　灰色　極細砂～中砂　シルト質
2. 2.5Y　5/1　灰色　極細砂～中砂　シルト質
3. N　5/　灰色　極細砂～細砂

④

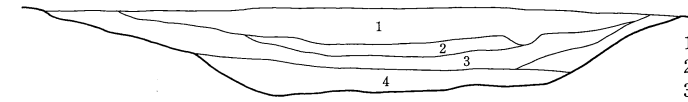
1. 10YR　3/2　シルト質　v.f.s～.f.s.　炭若干
2. 2.5Y　3/2　v.f.s～.f.s.　シルト

⑤



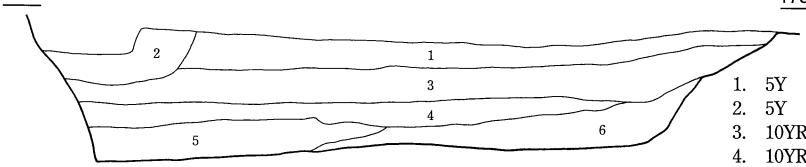
1. 10YR　5/1　褐灰色　中砂　ややシルト質
2. 10YR　6/1　褐灰色　細砂～中砂（円礫含む）シルト質
3. 10YR　4/1　極細砂　シルト質

⑥



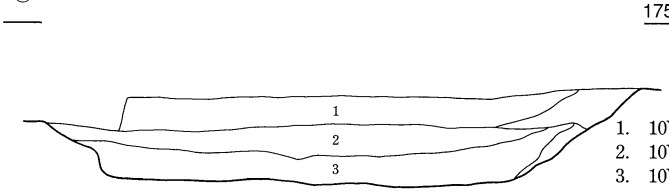
1. 7.5YR　5/1　褐灰色　細砂～中砂　シルト質
2. 10YR　6/1　褐灰色　中砂とシルト質の互層
3. 5YR　5/1　灰色　細砂～極細砂　シルト質
4. 5YR　4/1　灰色　細砂～極細砂　シルト質
   炭・湿地性の堆積物含む
5. 5YR　5/1　灰色　中砂とシルト質の互層

⑦



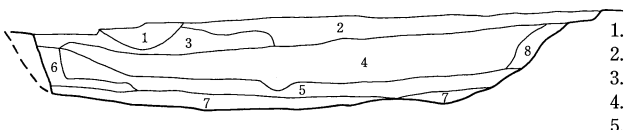
1. 5Y　5/1　灰色　細砂～極細砂
2. 5Y　5/1　褐灰色　細砂～中砂
3. 10YR　5/1　褐灰色　細砂～極細砂　シルト質
4. 10YR　3/1　黒褐色　極細砂　シルト質
   湿地性堆積物
5. 10YR　5/1　褐灰色　細砂混り極細砂　シルト質
6. 10YR　3/1　黒褐色　粗砂混り極細砂　シルト質

⑧



1. 10YR　6/1　褐灰色　極細砂～細砂　シルト質
2. 10YR　6/2　灰黄色　極細砂～細砂　シルト質
3. 10YR　3/1　黒褐色　極細砂～細砂　シルト質

⑨

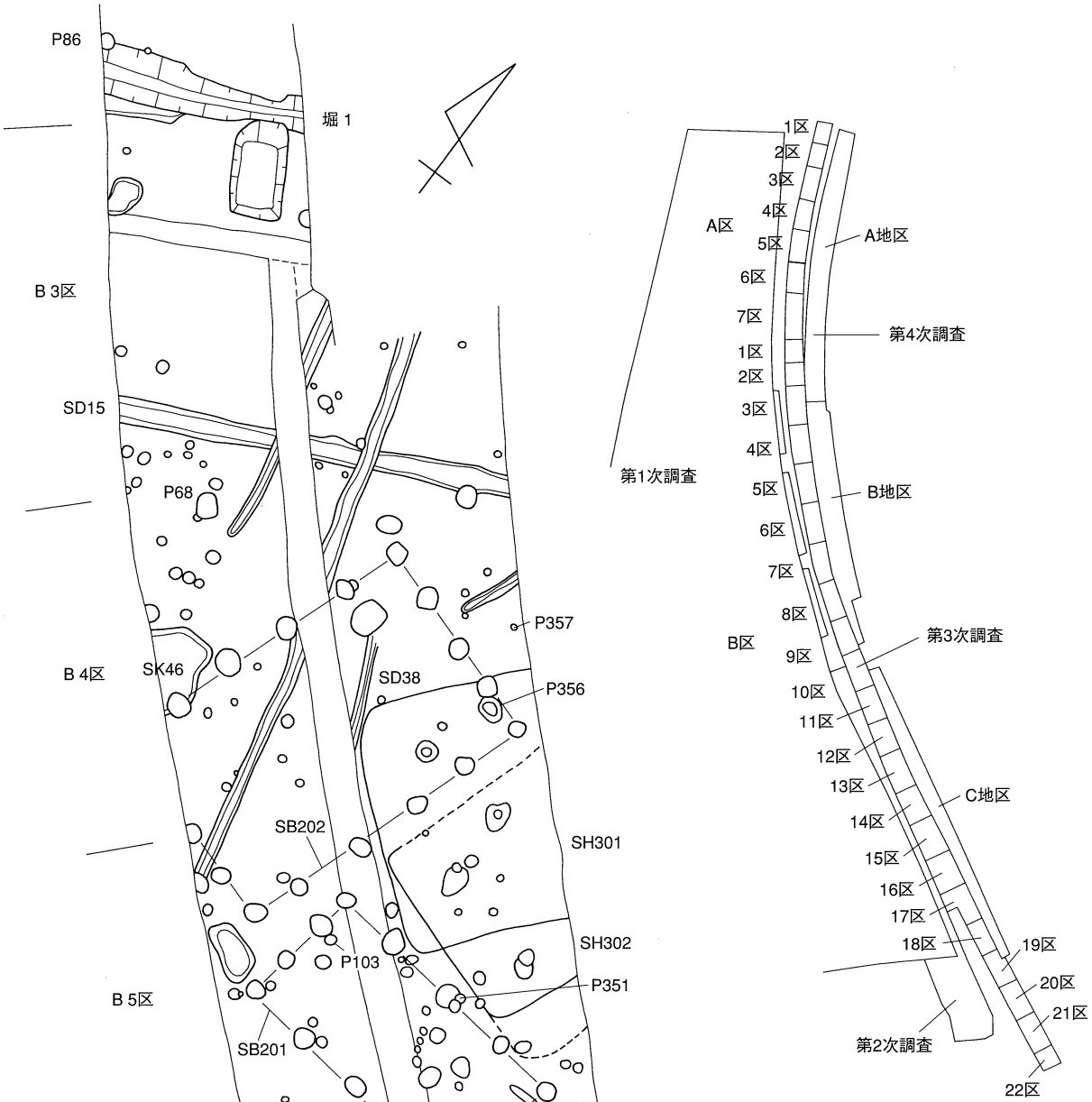


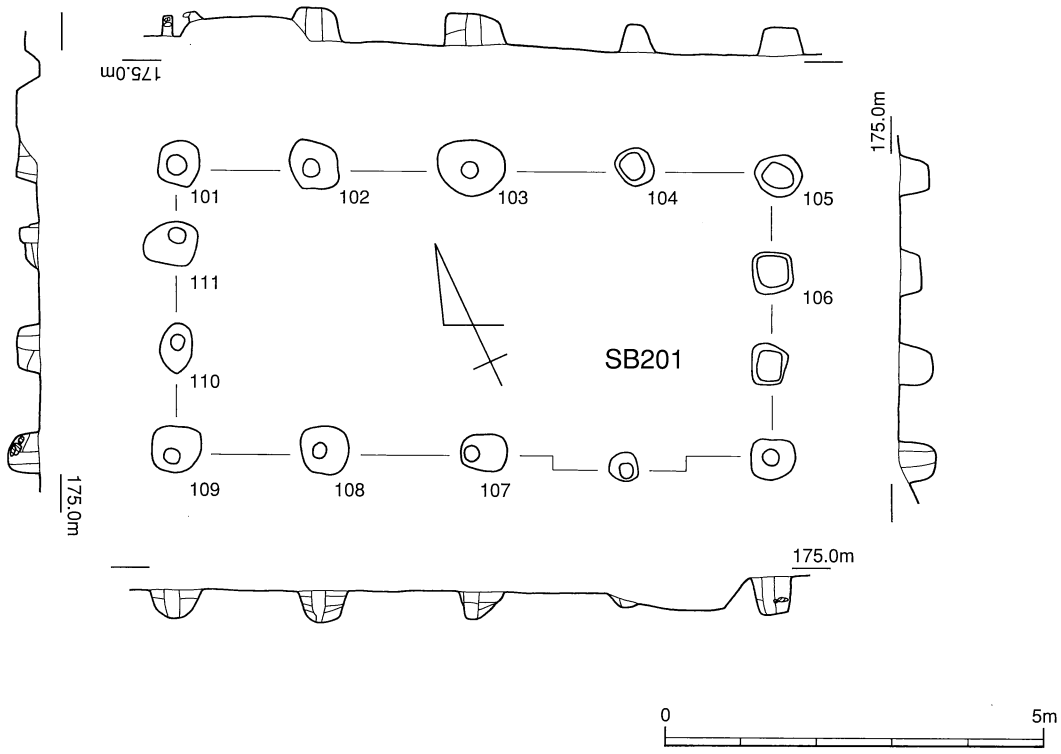
1. 10YR　6/1　褐灰色　中砂～細砂
2. 10YR　6/1　褐灰色　中砂～細砂　シルト質
3. 5Y　7/1　灰白色　中砂～細砂　シルト質（地山土）
4. 7.5YR　5/1　褐灰色　細砂　シルト質
5. 10YR　5/1　褐灰色　極細砂～細砂　シルト質
6. 5Y　7/1　灰白色　中砂～細砂　シルト質（地山土）
7. 10YR　4/1　褐灰色　極細砂～細砂　シルト質
8. 5Y　5/1　灰色　中砂

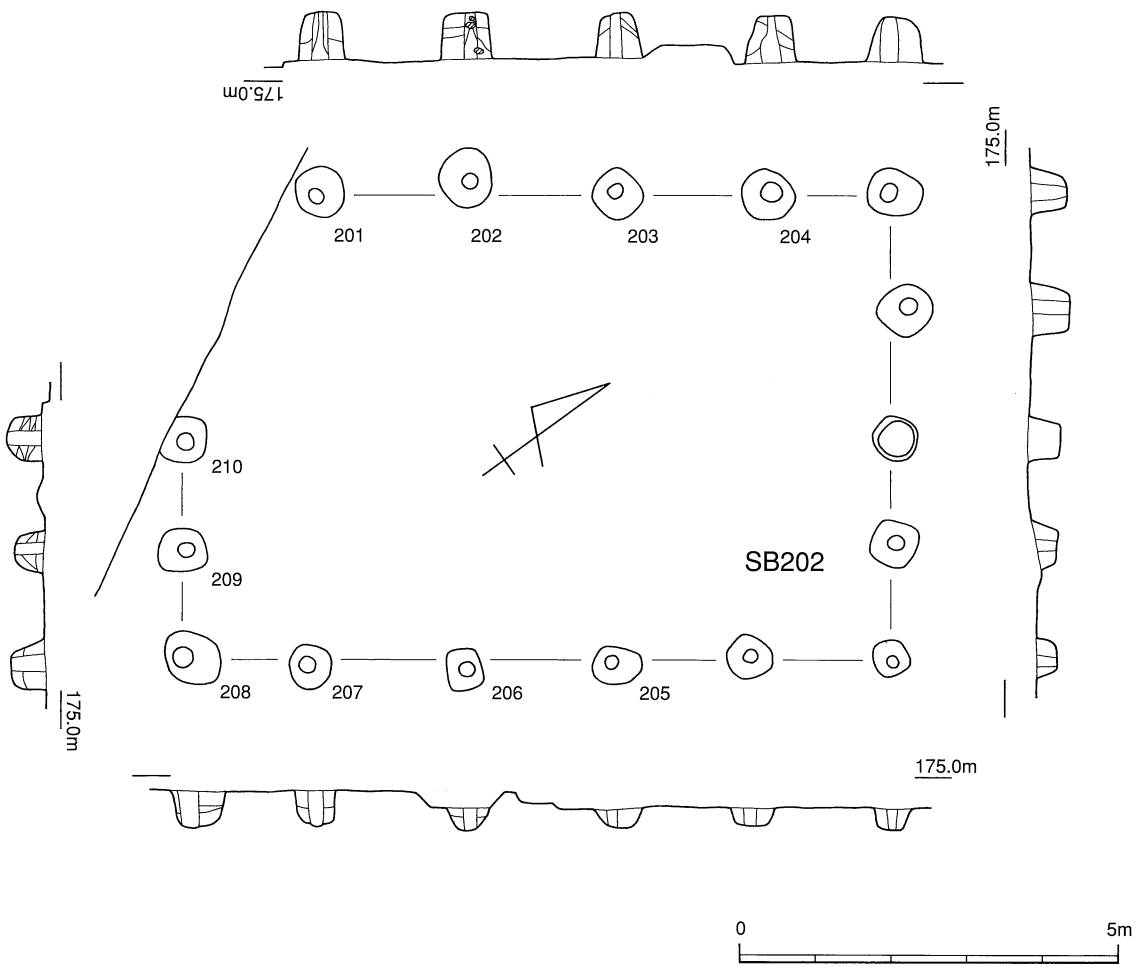
5、7に若干の湿地性堆積物
7～9には人頭大前後の礫が混じる山からの崩れ

溝・堀（2）　断面図

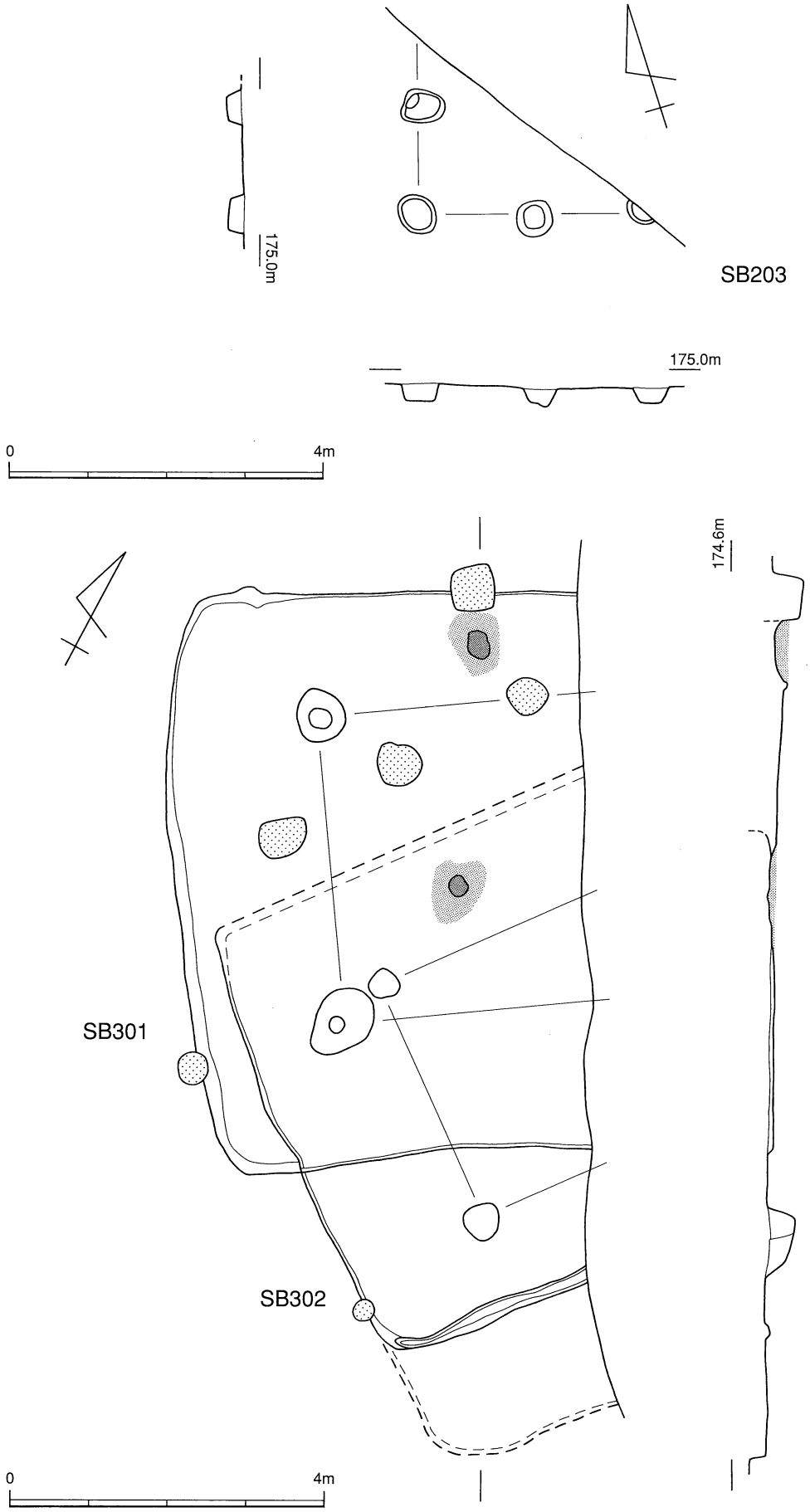
図版九二　第3・4次調査　遺構配置図



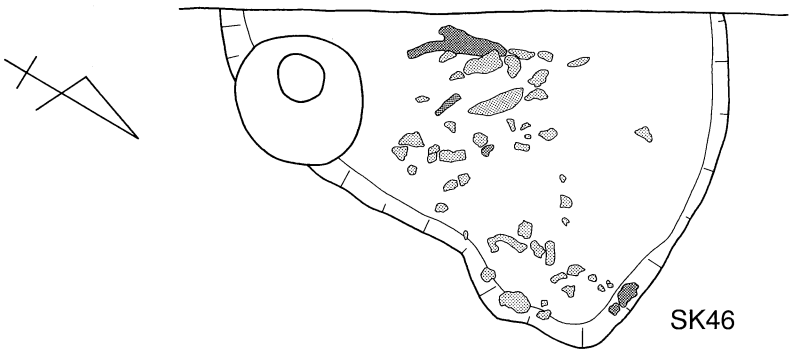


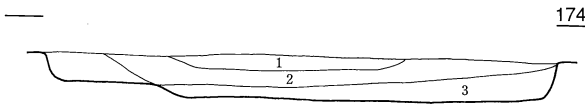


SB201・202　平・断面図

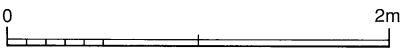


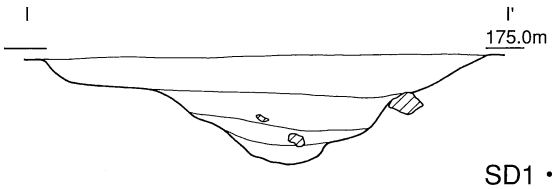
SB203・301・302　平・断面図



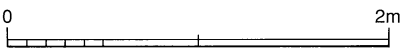


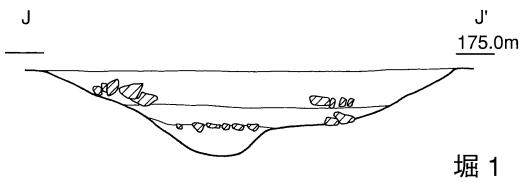
1. 10YR　4/1　褐灰色　細砂
2. 10YR　2/2　黒褐色　シルト質細砂（焼土塊混る）
3. 2.5Y　4/6　オリーブ褐色　細砂



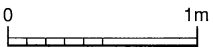


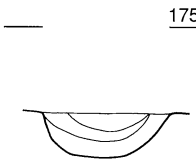
SD1・4





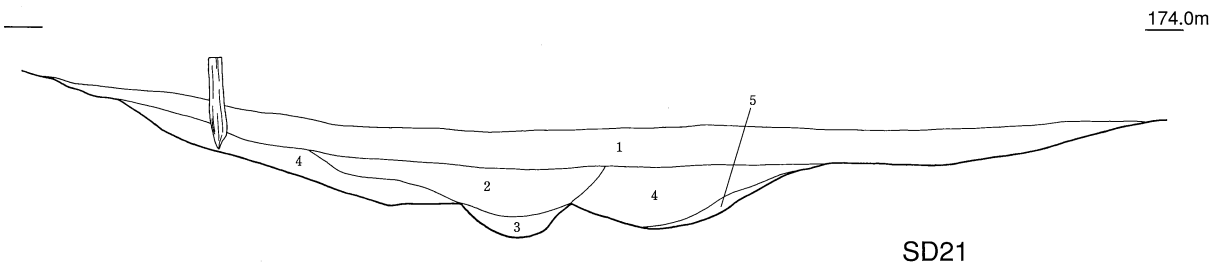
堀 1





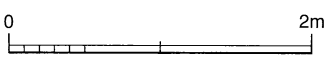
SD15

1. 10YR　3/2　黒褐色　極細砂
2. 10YR　2/2　黒褐色　極細砂（炭含）
3. 10YR　2/1　黒色　極細砂



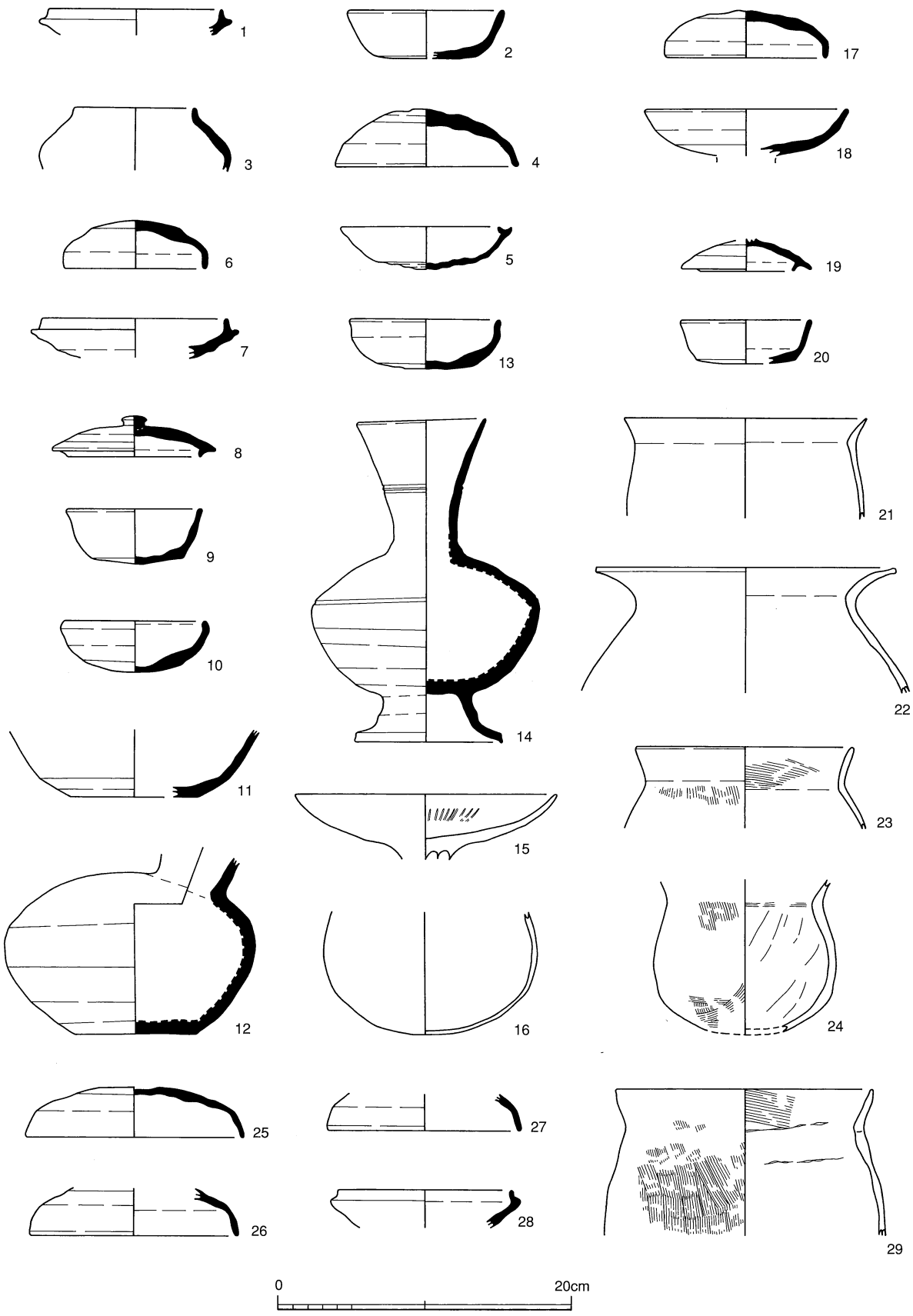
SD21

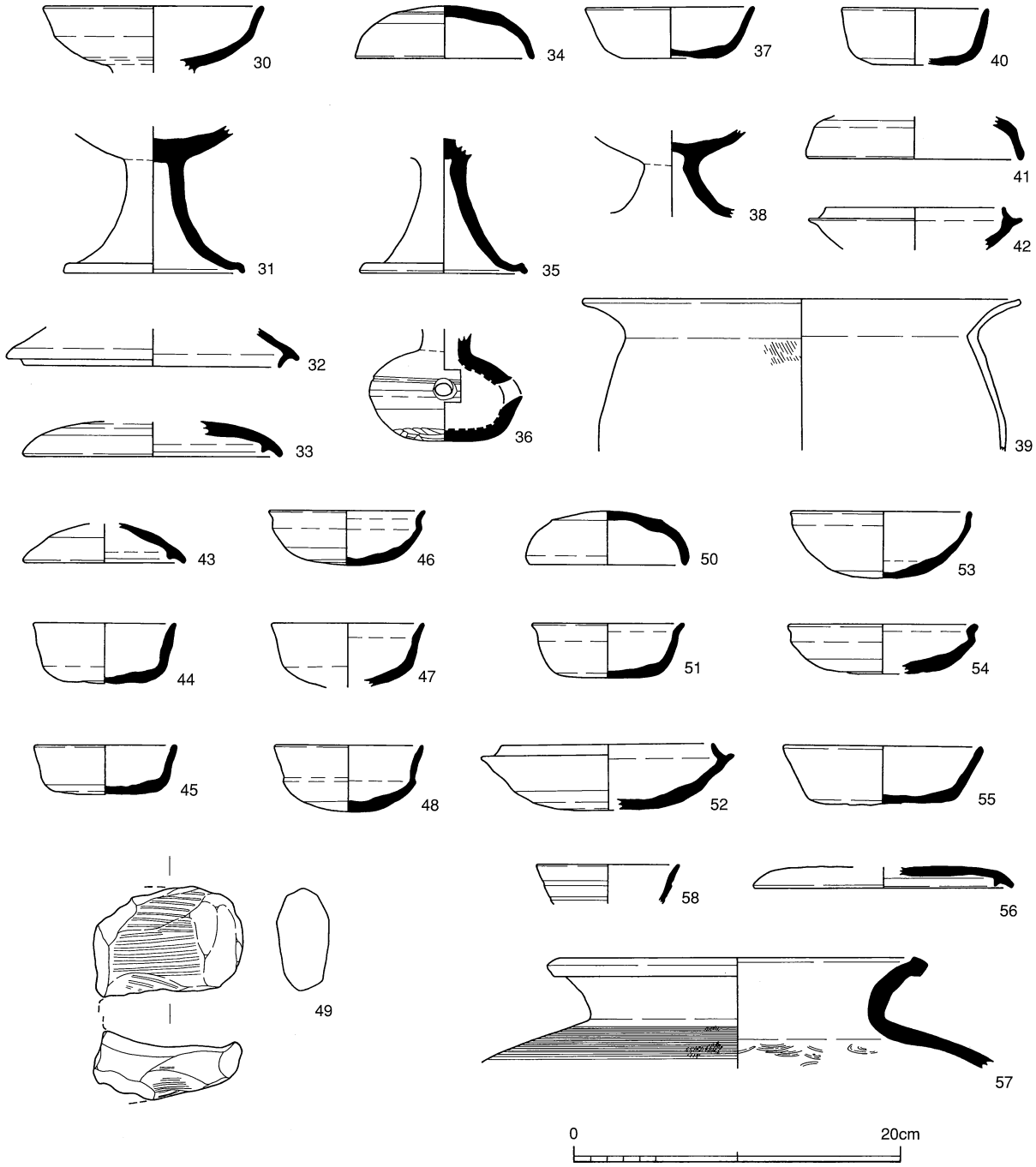
1. 細砂～中砂
2. 細砂～中礫
3. 細砂
4. シルト質　極細砂
5. シルト質　細砂～中砂



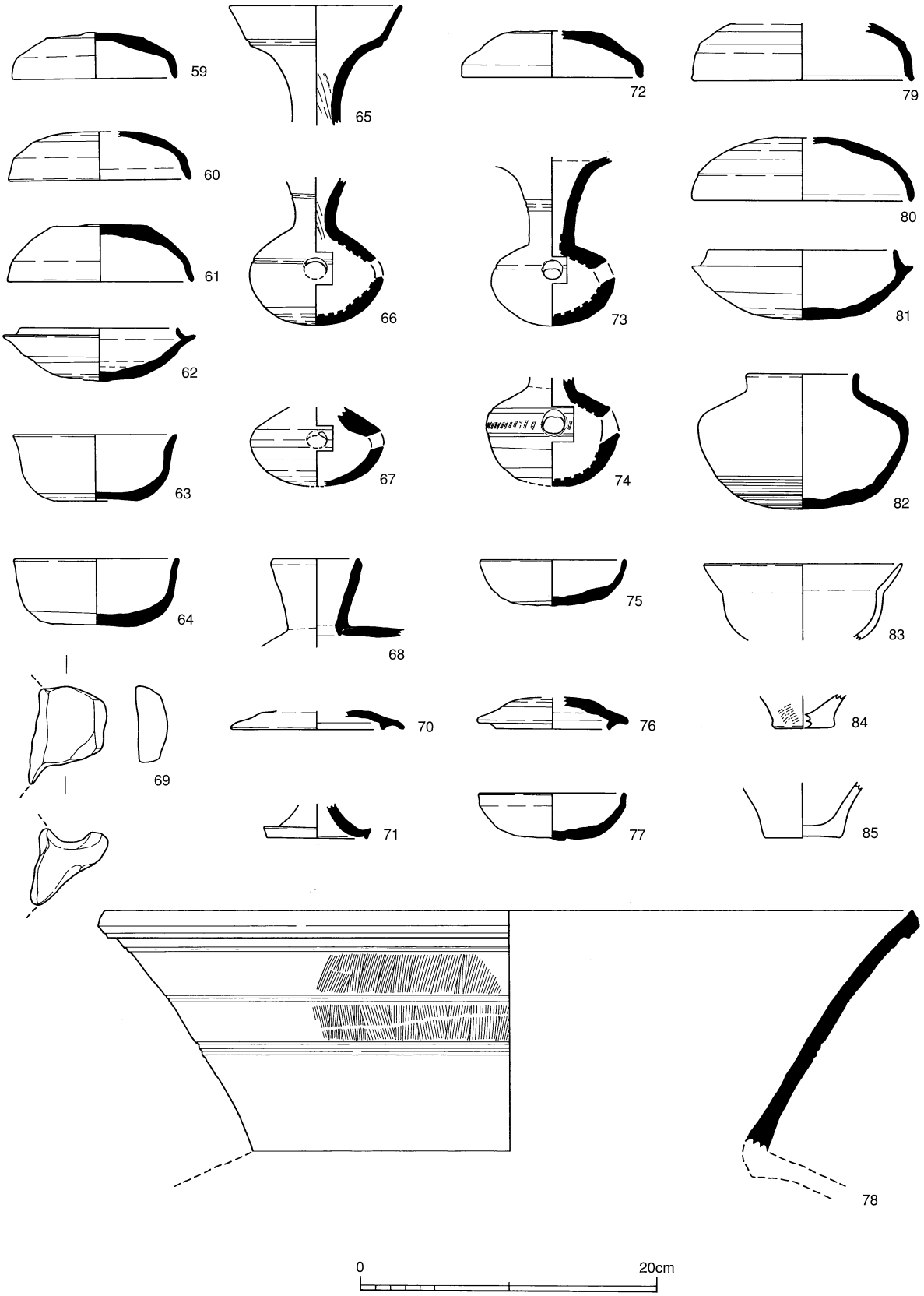
土坑・溝　平・断面図

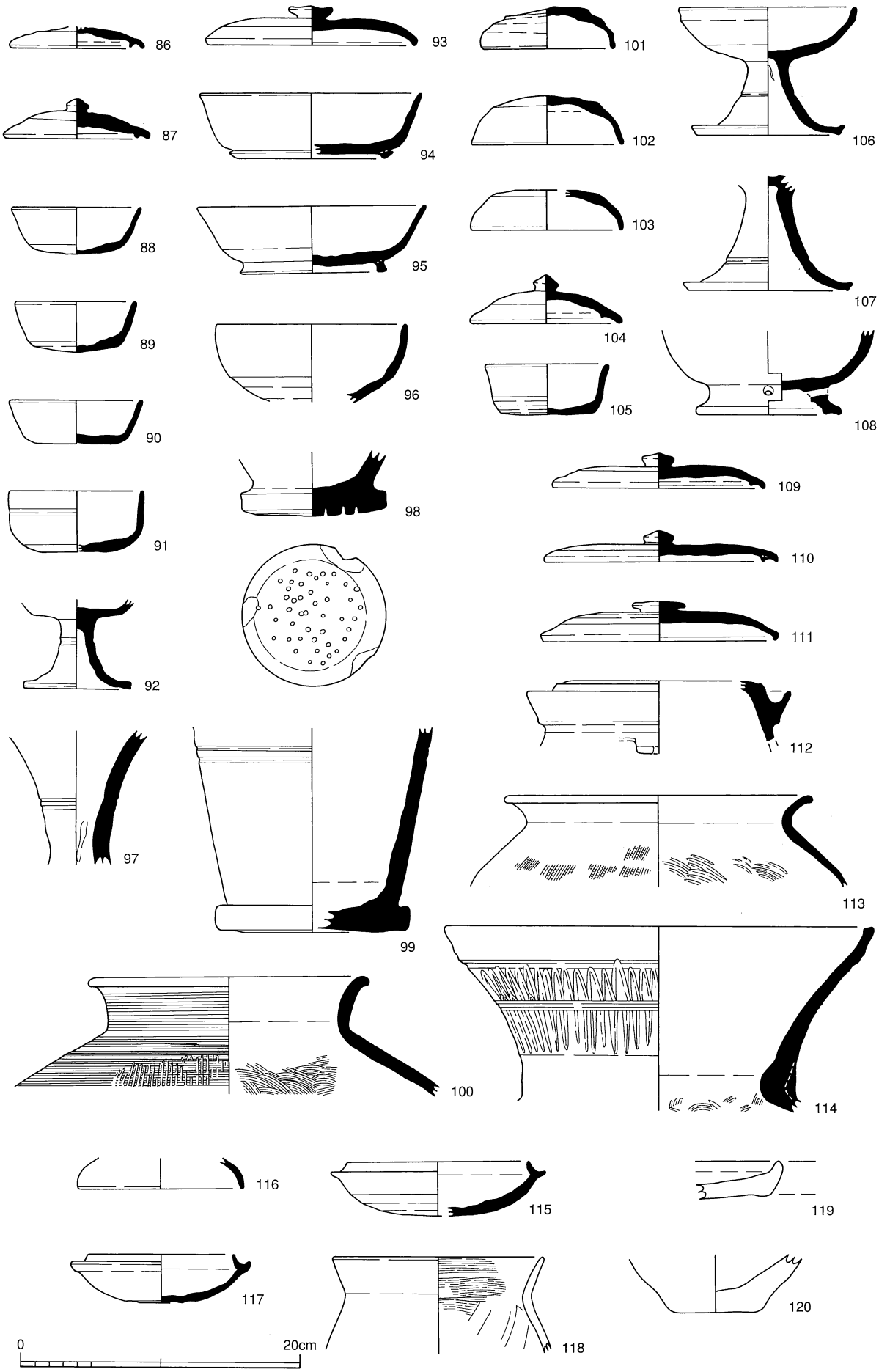
図版九六　古墳(1)出土遺物

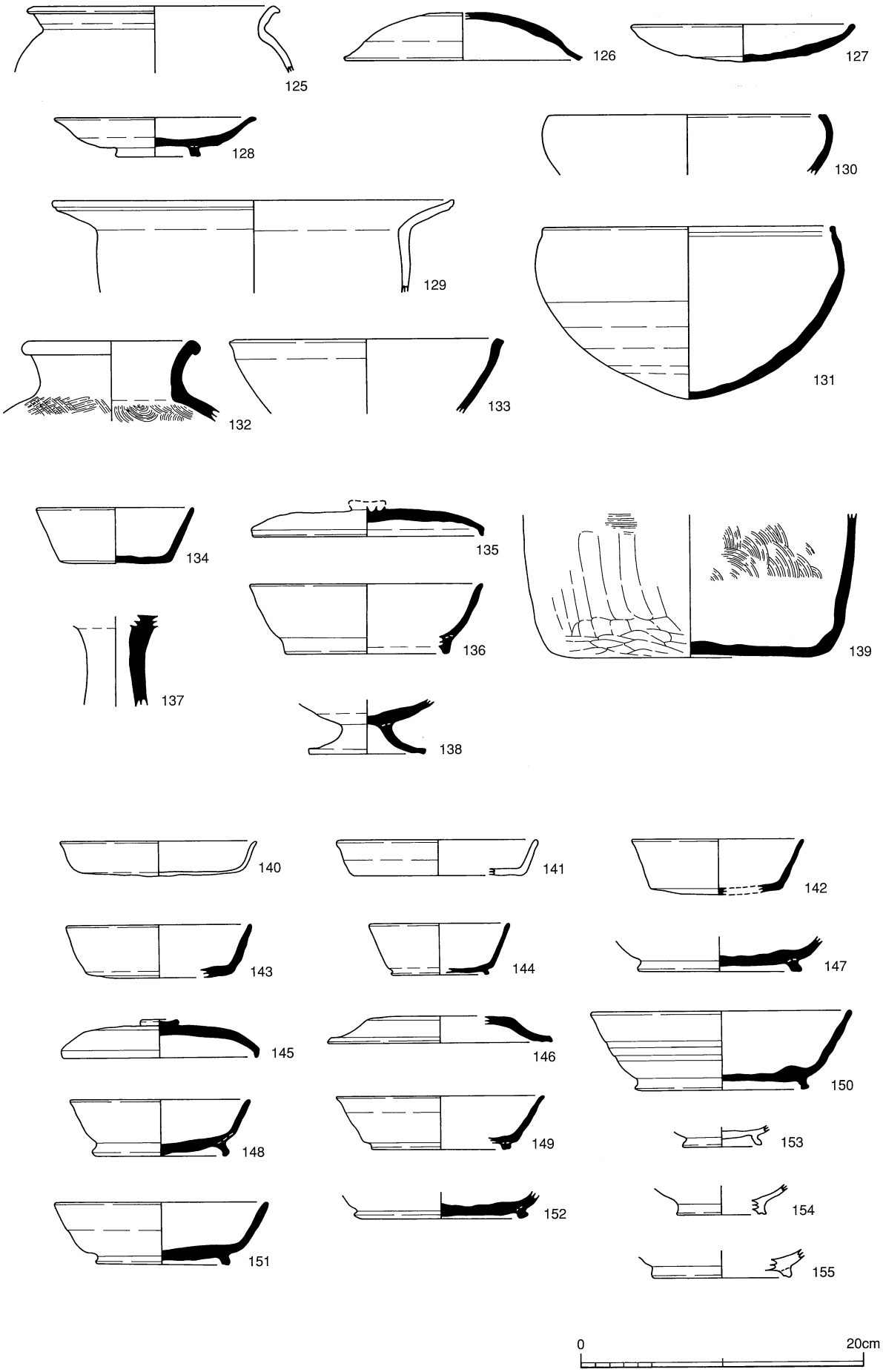


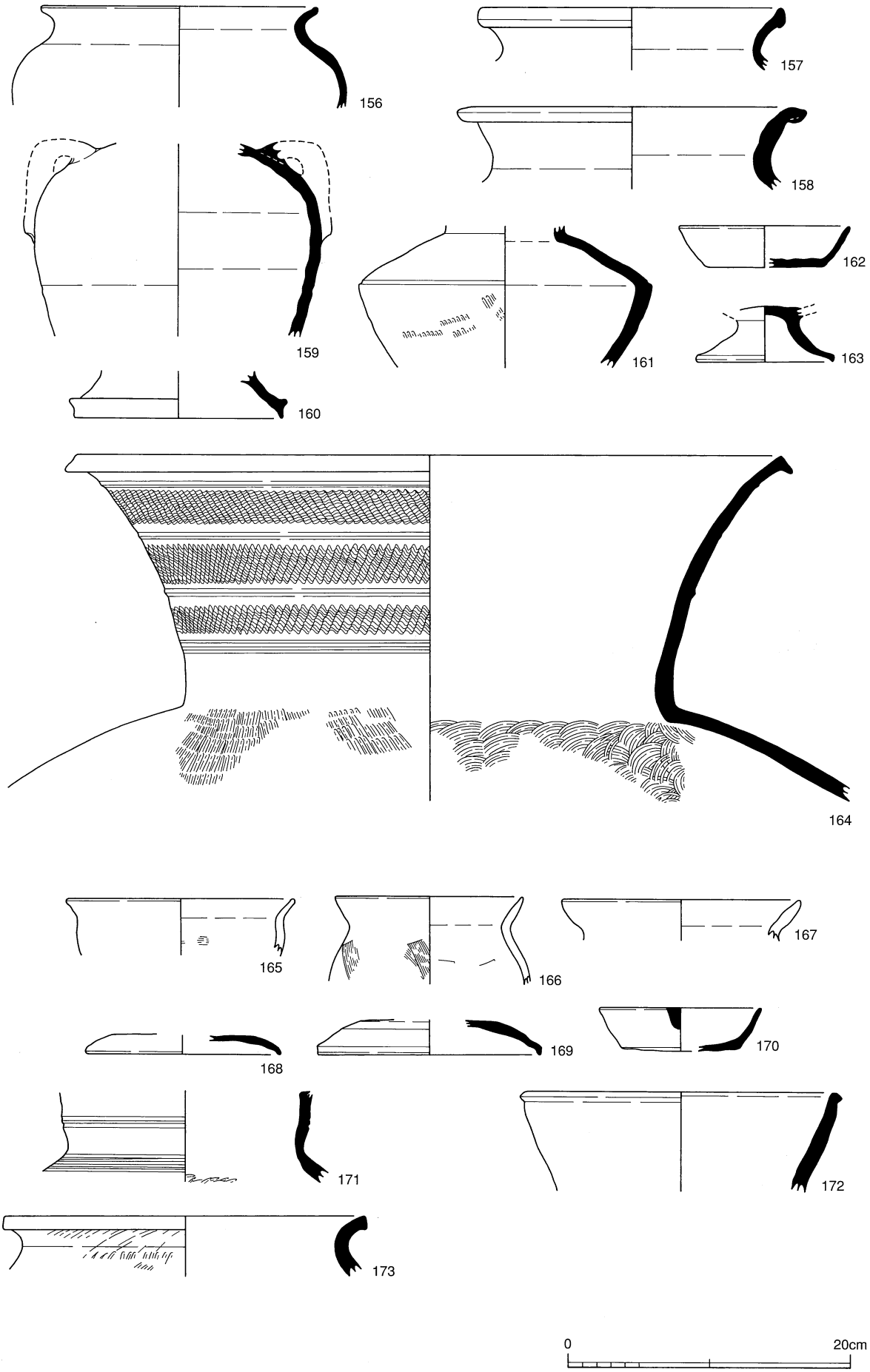

30
34
37
40
31
35
38
41
42
32
36
39
33
43
46
50
53
44
47
51
54
45
48
52
55
49
58
56
57
0
20cm

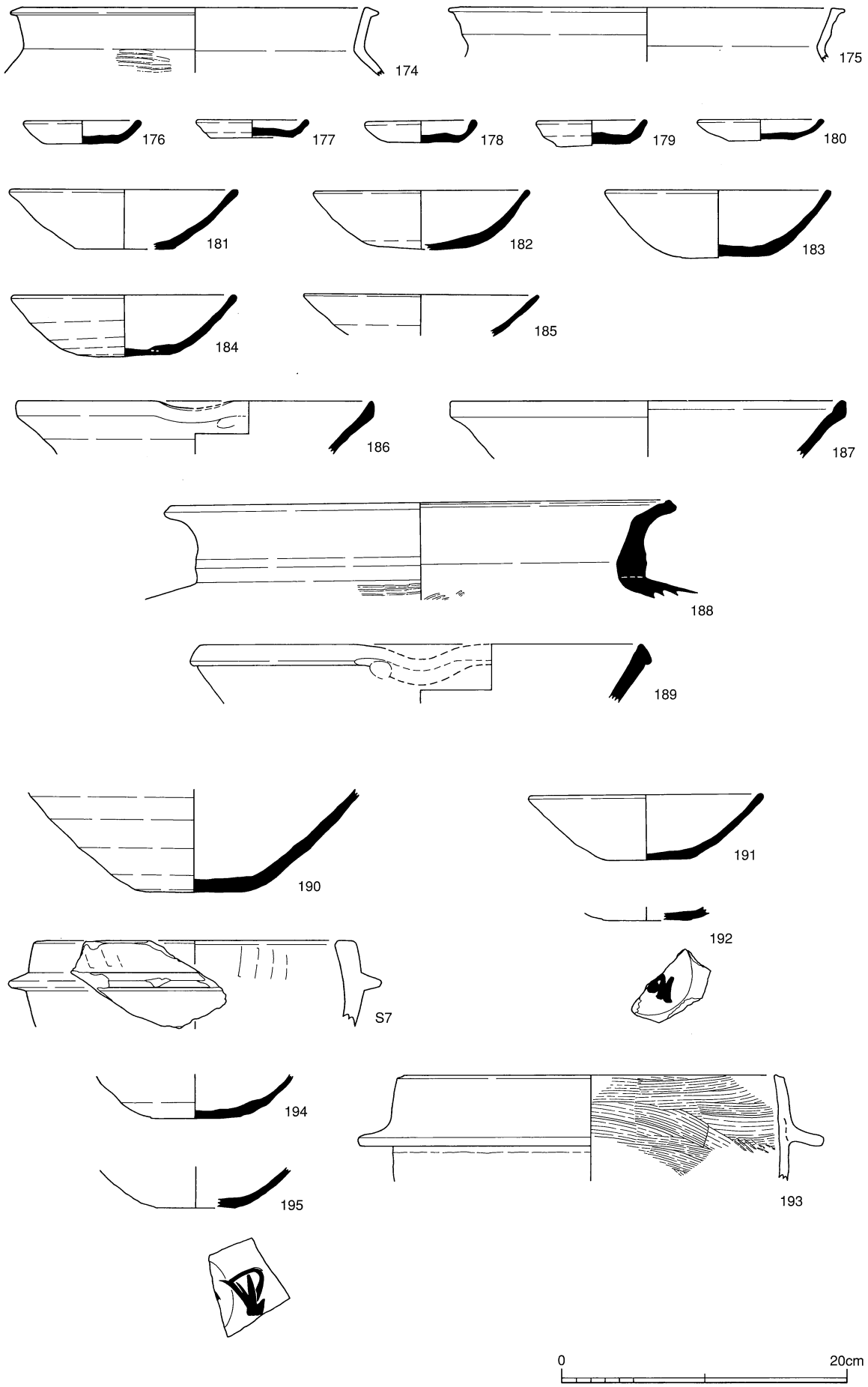
図版九八　古墳(3)出土遺物

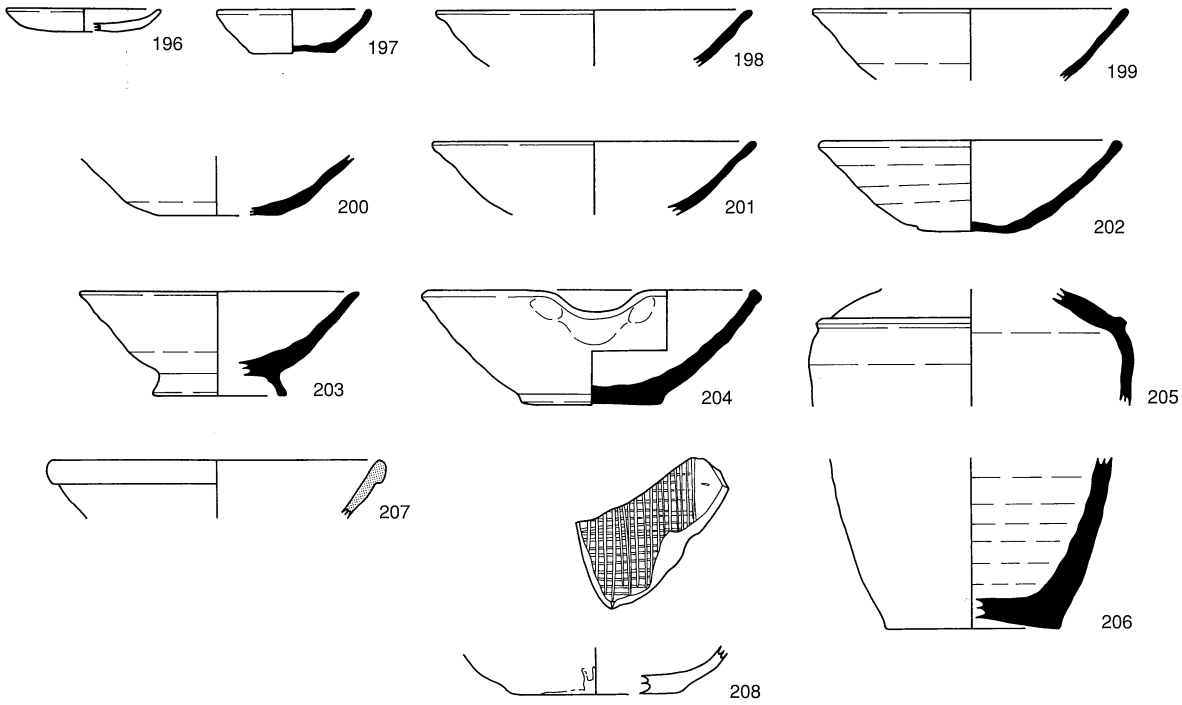


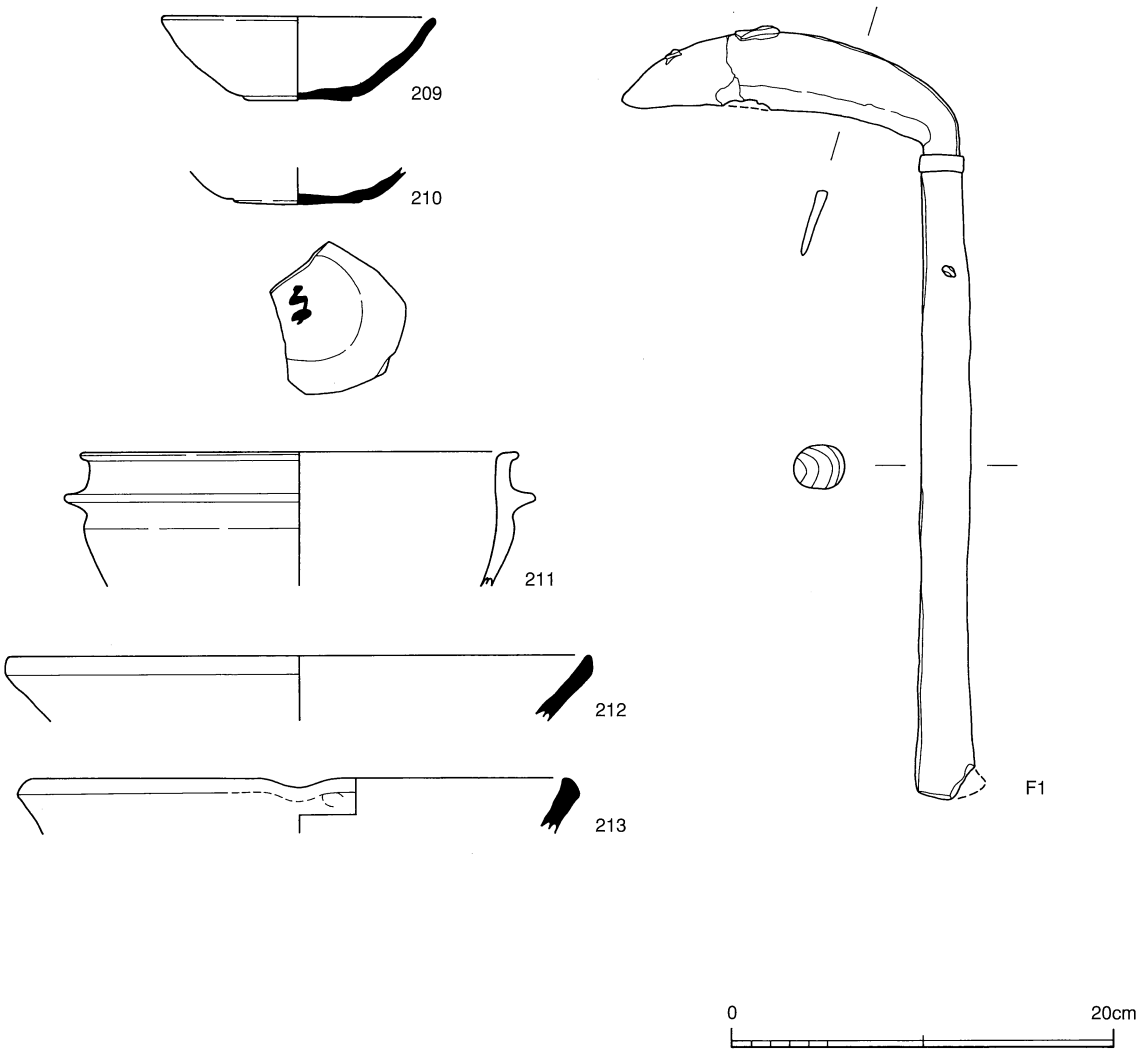

86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
98
97
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
115
119
117
118
120
0
20cm

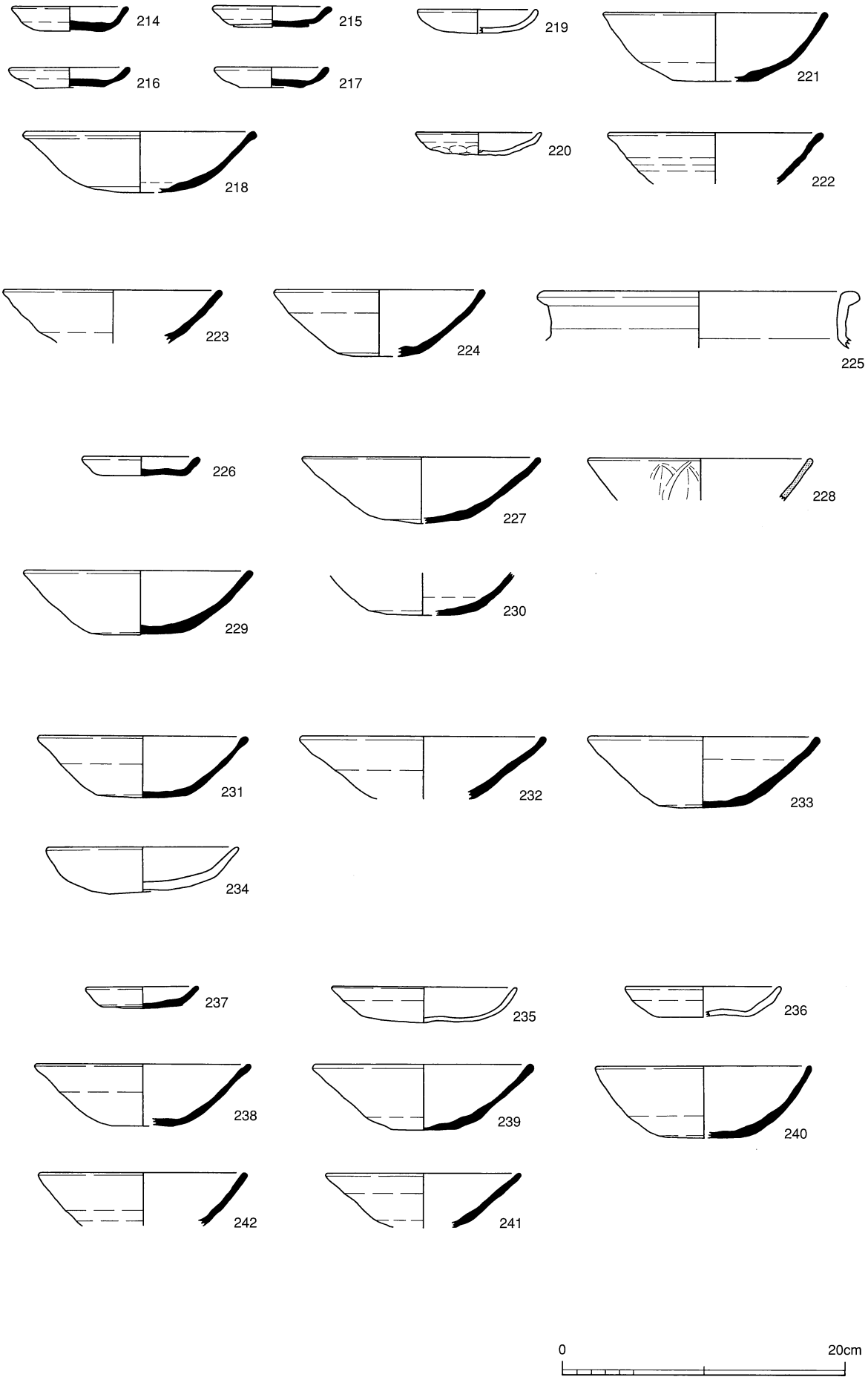

125
126
127
128
130
129
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
147
145
146
150
148
149
153
152
154
151
155
0
20cm

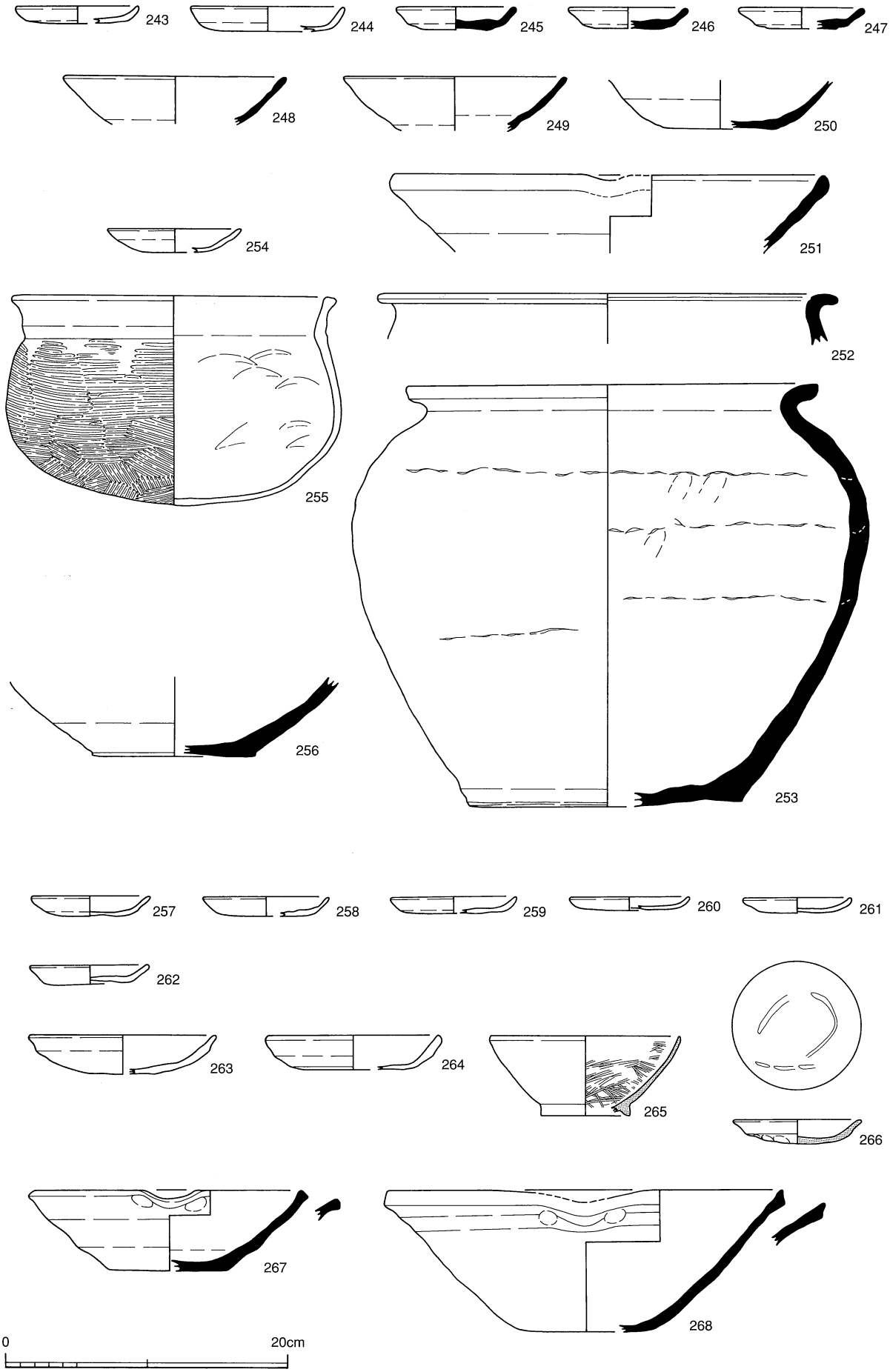

156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
0
20cm

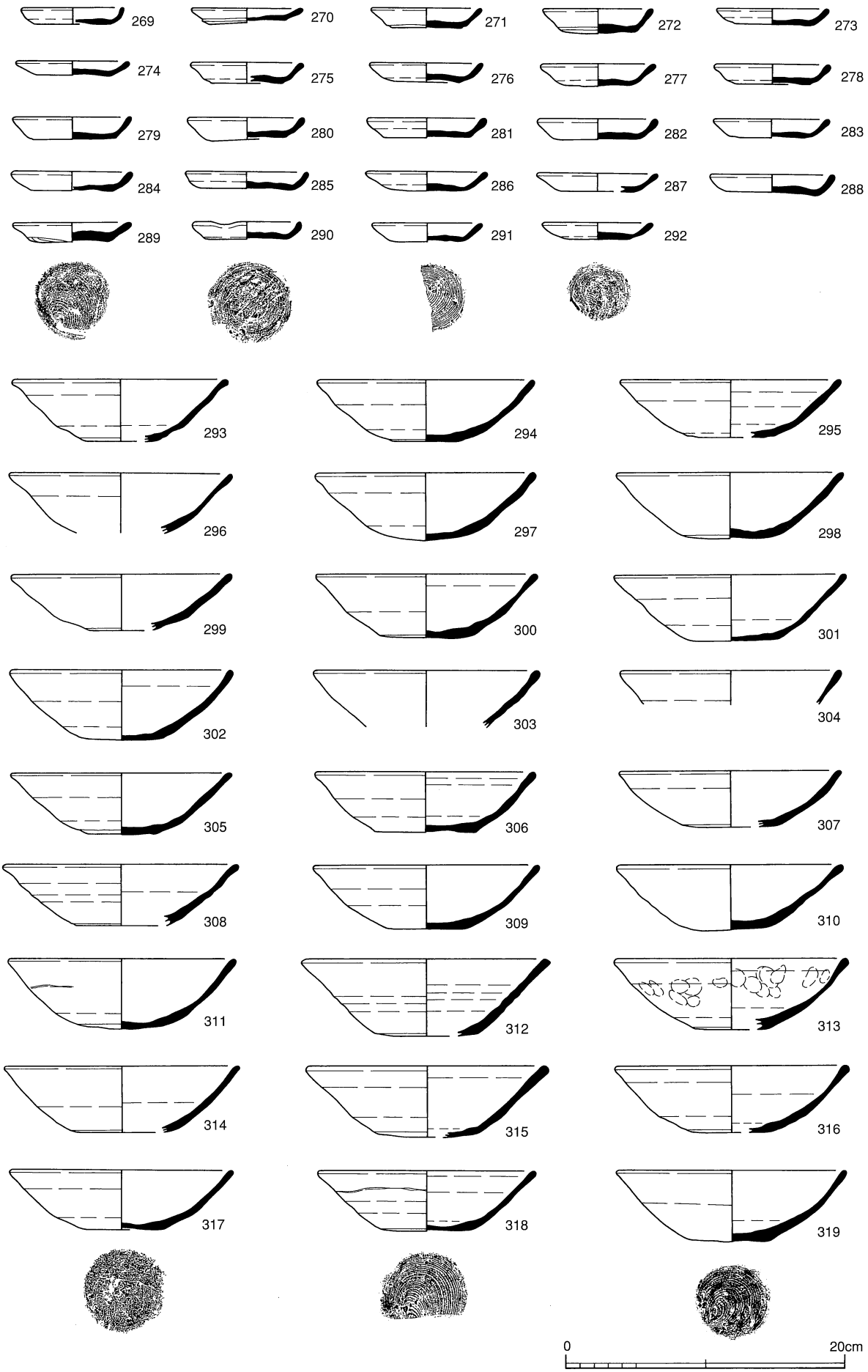

174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
S7
194
195
193
0
20cm

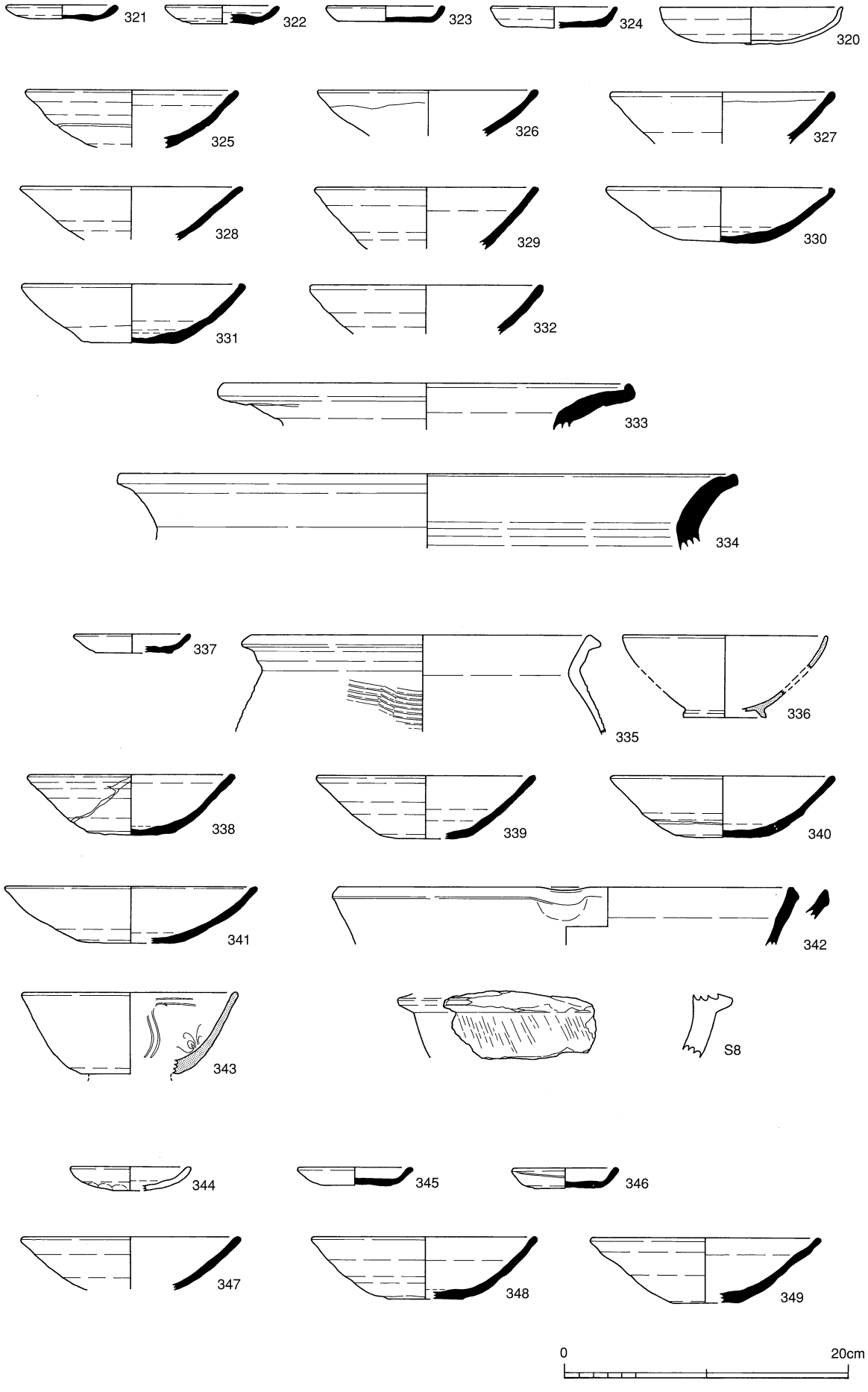

196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
207
206
208


209
210
211
212
213
F1
0
20cm

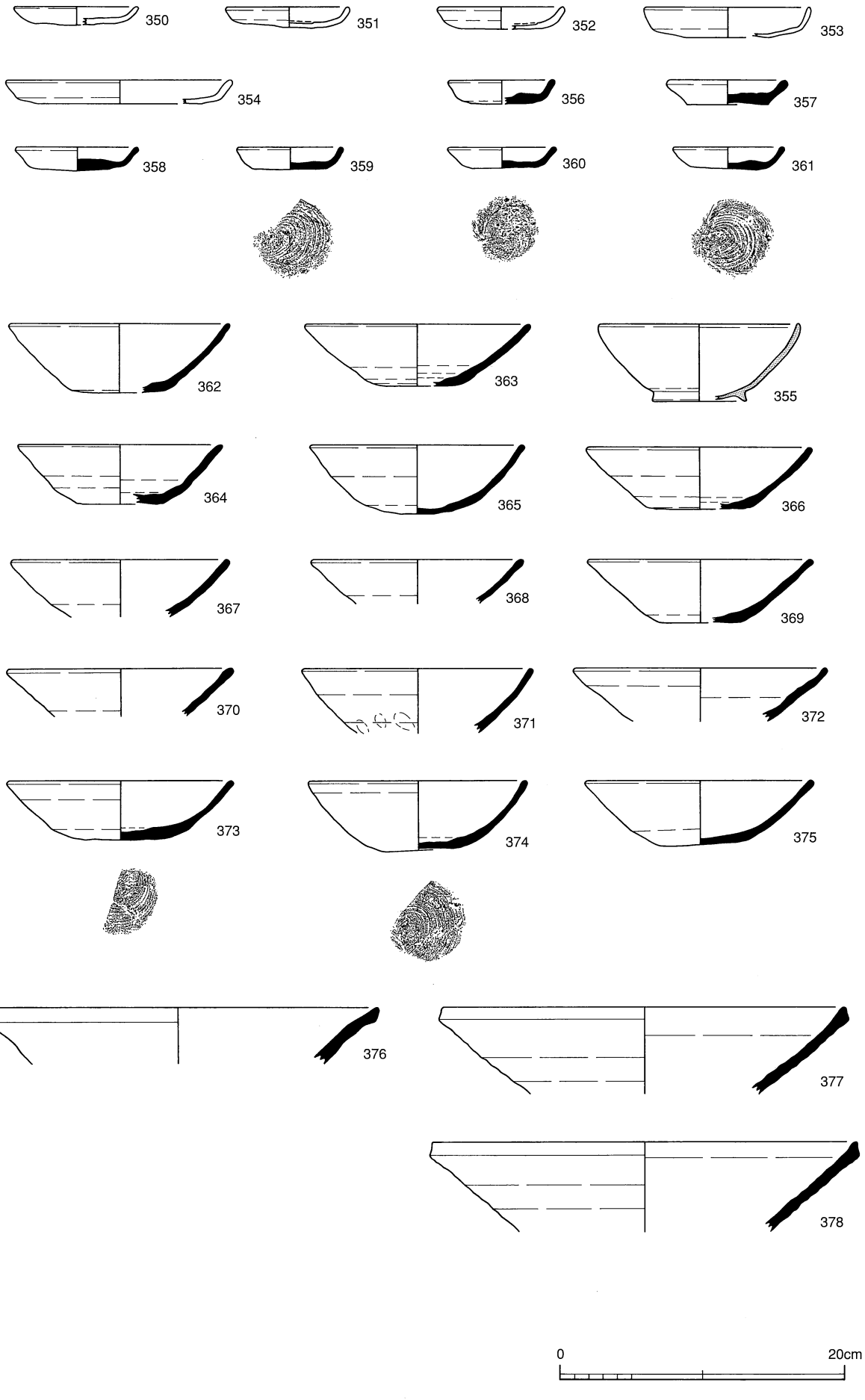

214
215
219
221
216
217
218
220
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
237
235
236
238
239
240
242
241
0
20cm

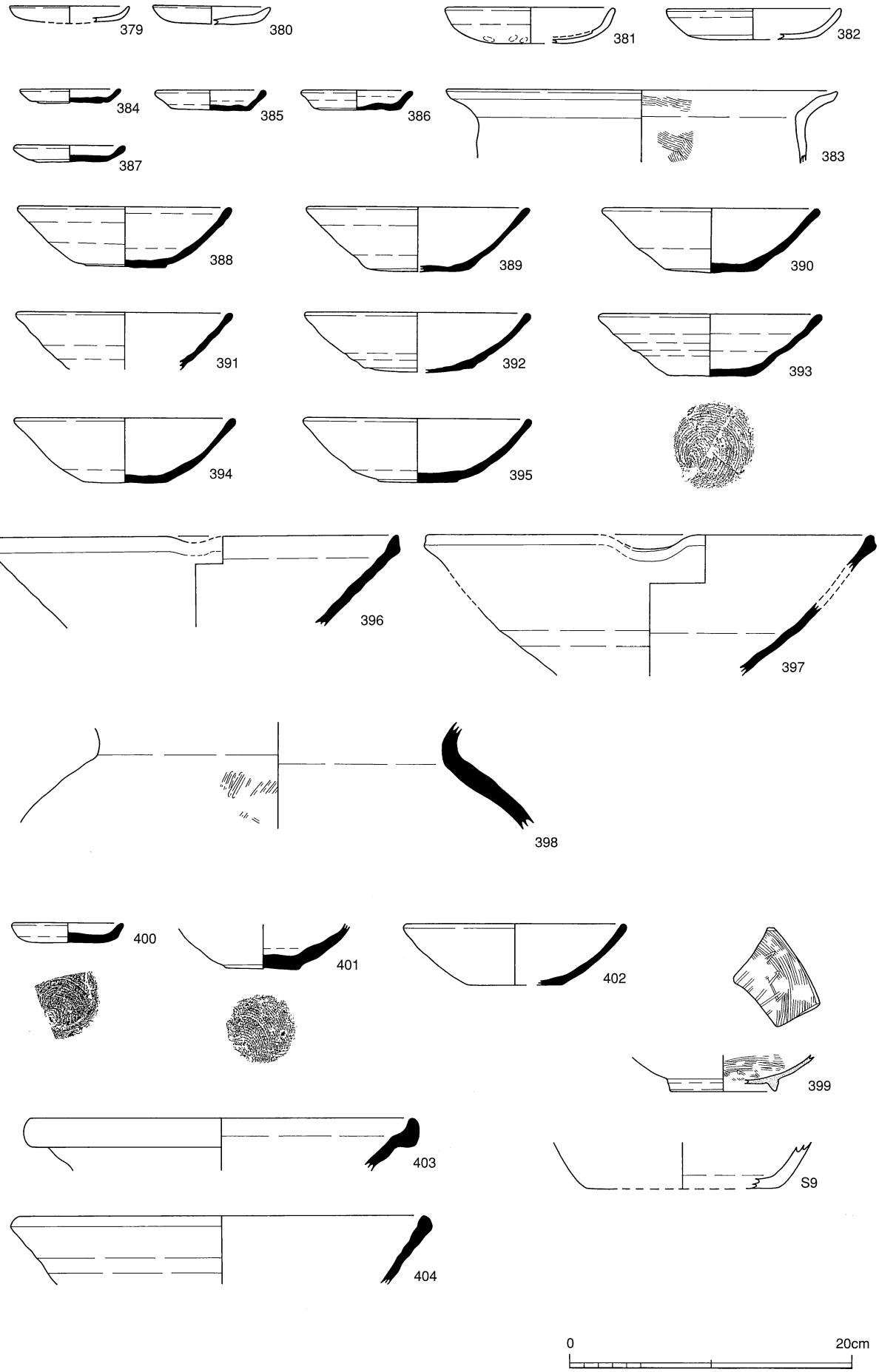

243
244
245
246
247
248
249
250
254
251
252
255
253
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
0
20cm

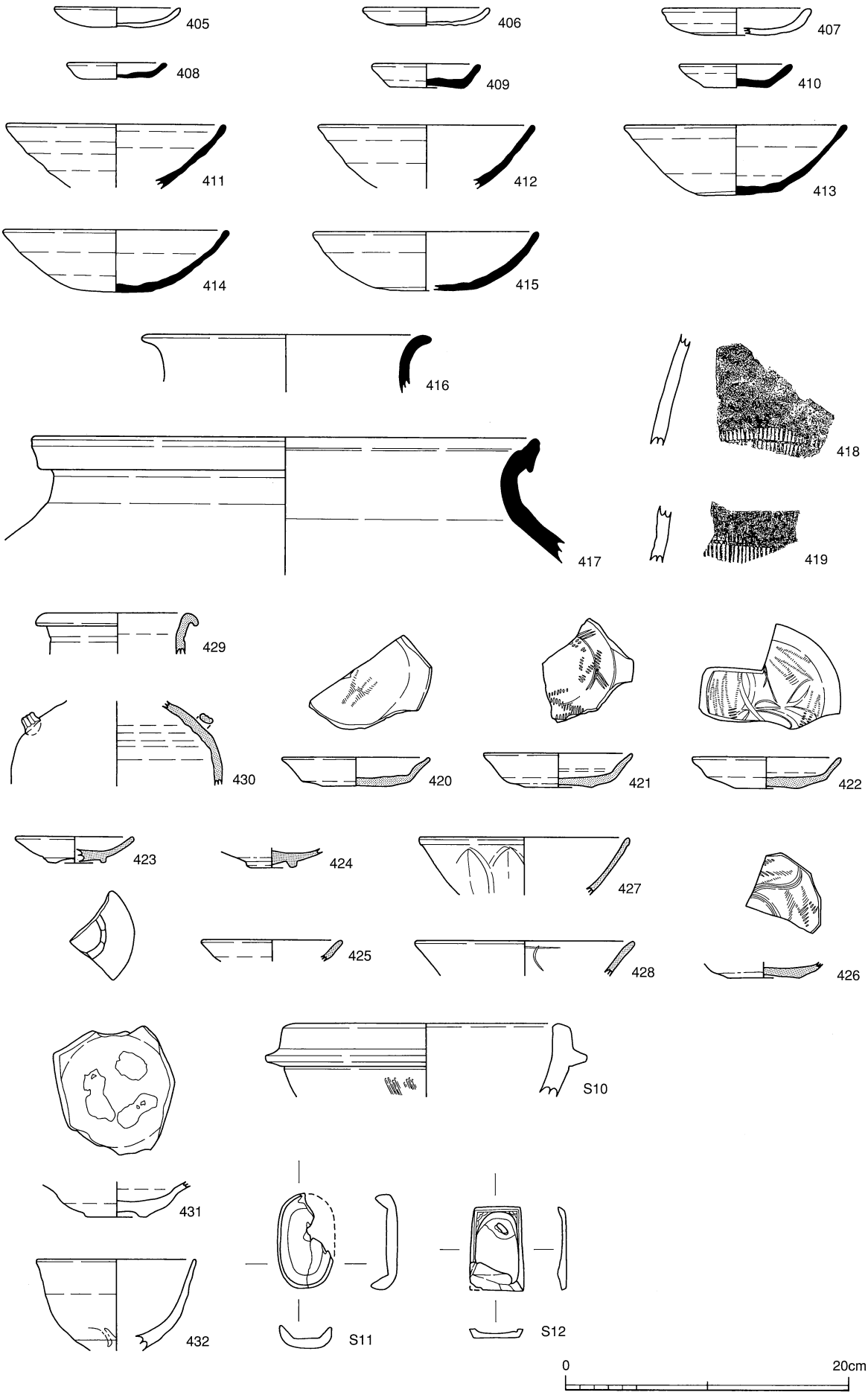

269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
0
20cm

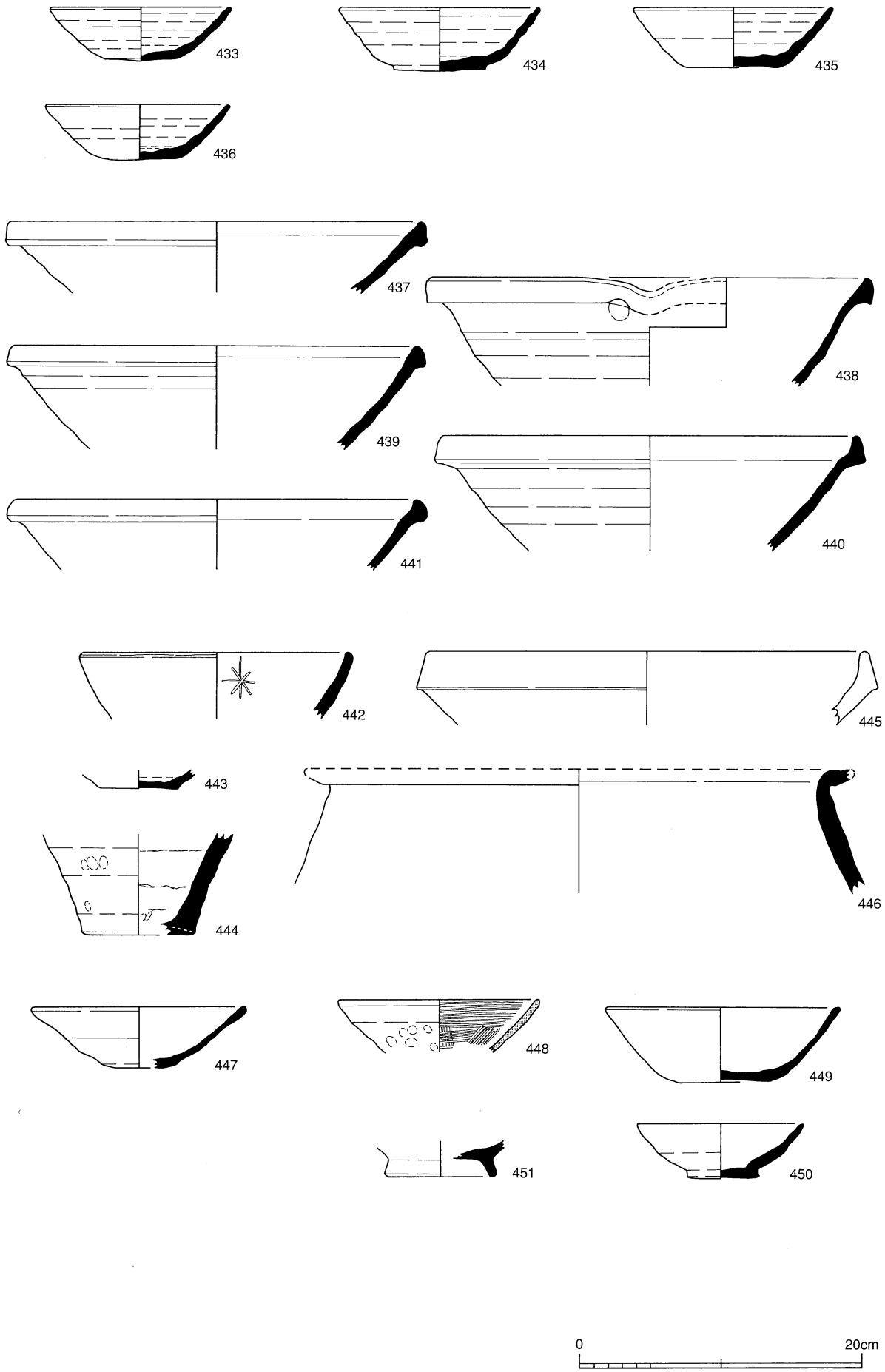

321
322
323
324
320
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
337
335
336
338
339
340
341
342
343
S8
344
345
346
347
348
349
0
20cm

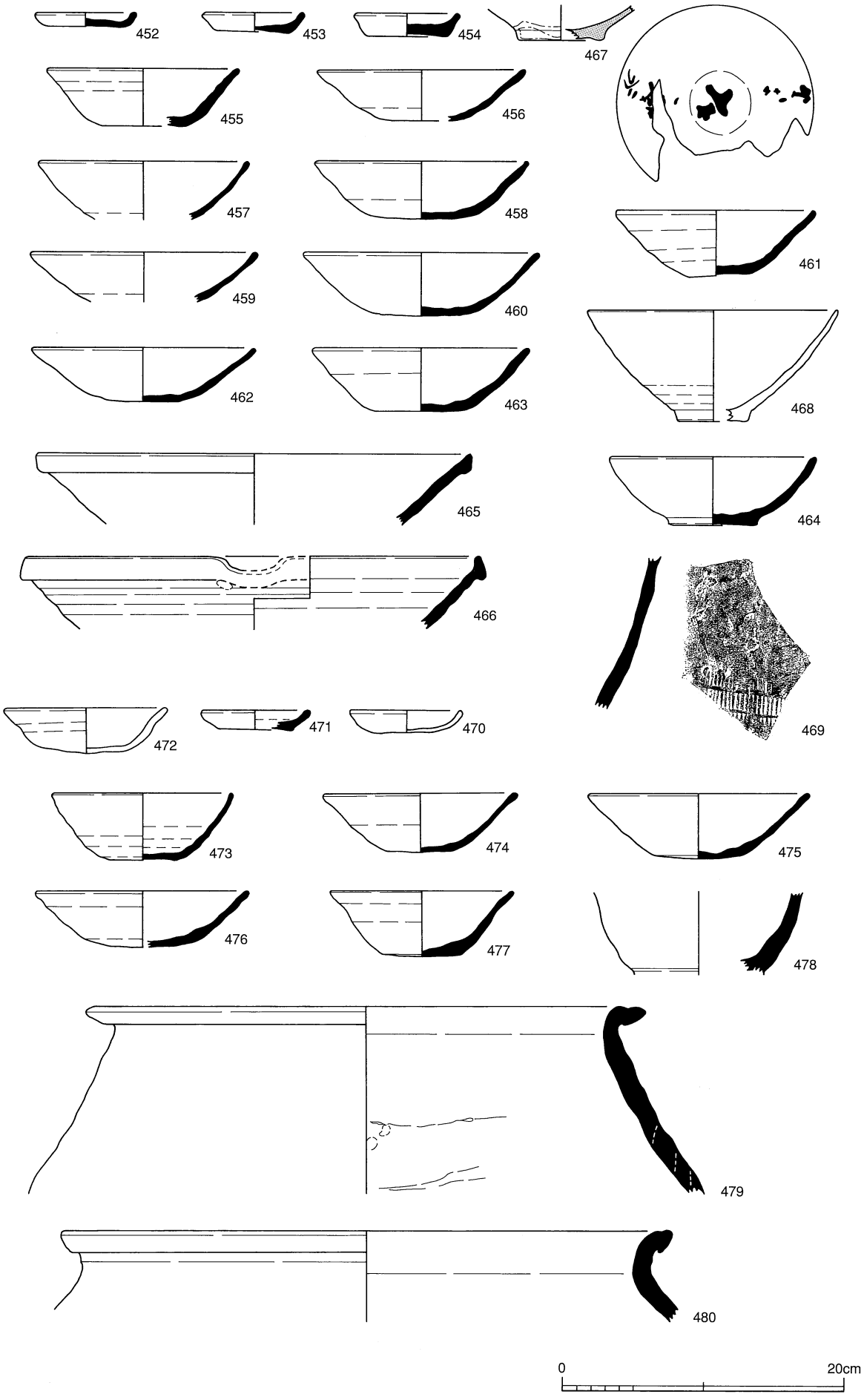
図版一〇八　第1次調査　中世Ⅰ区(7)出土遺物

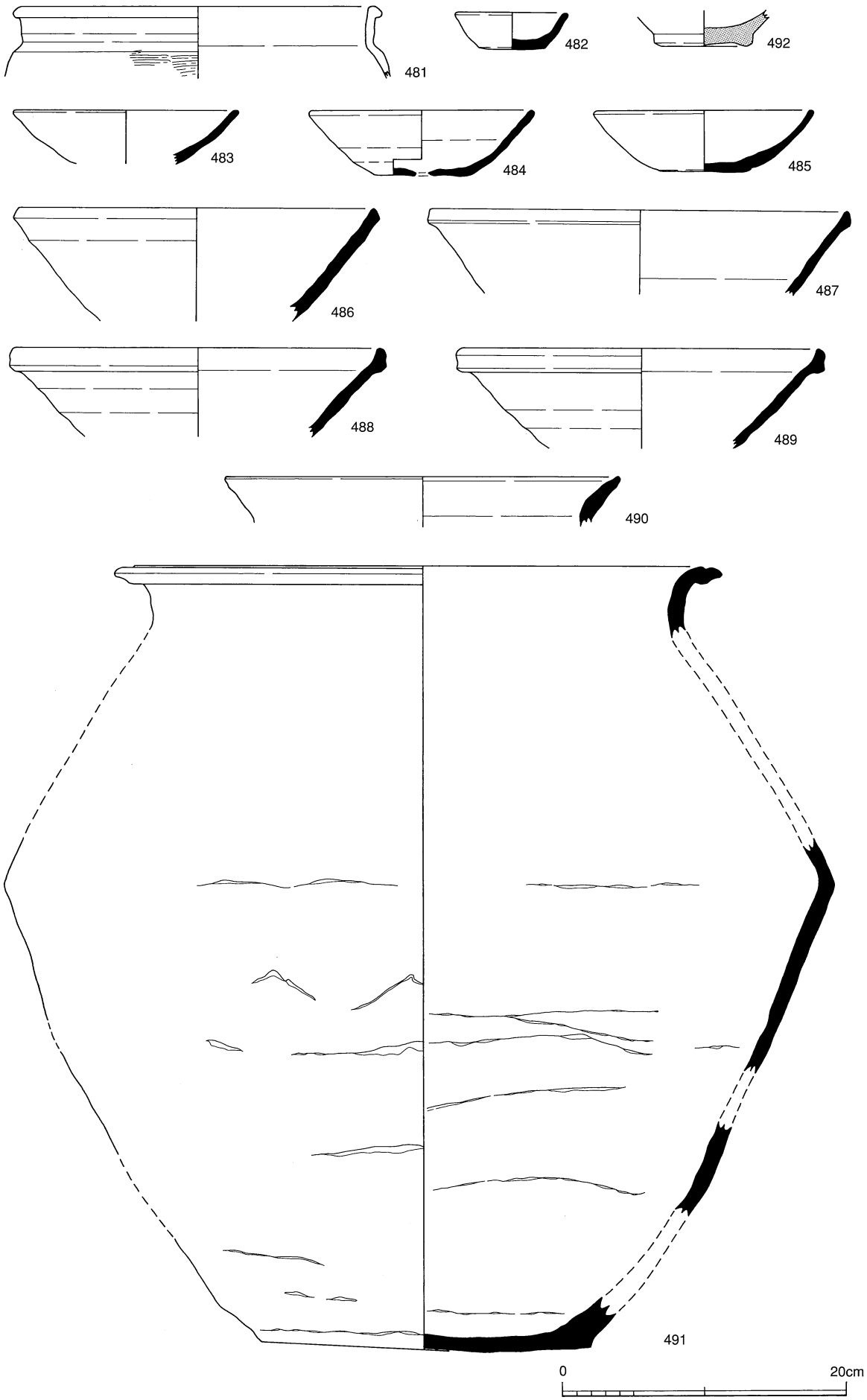


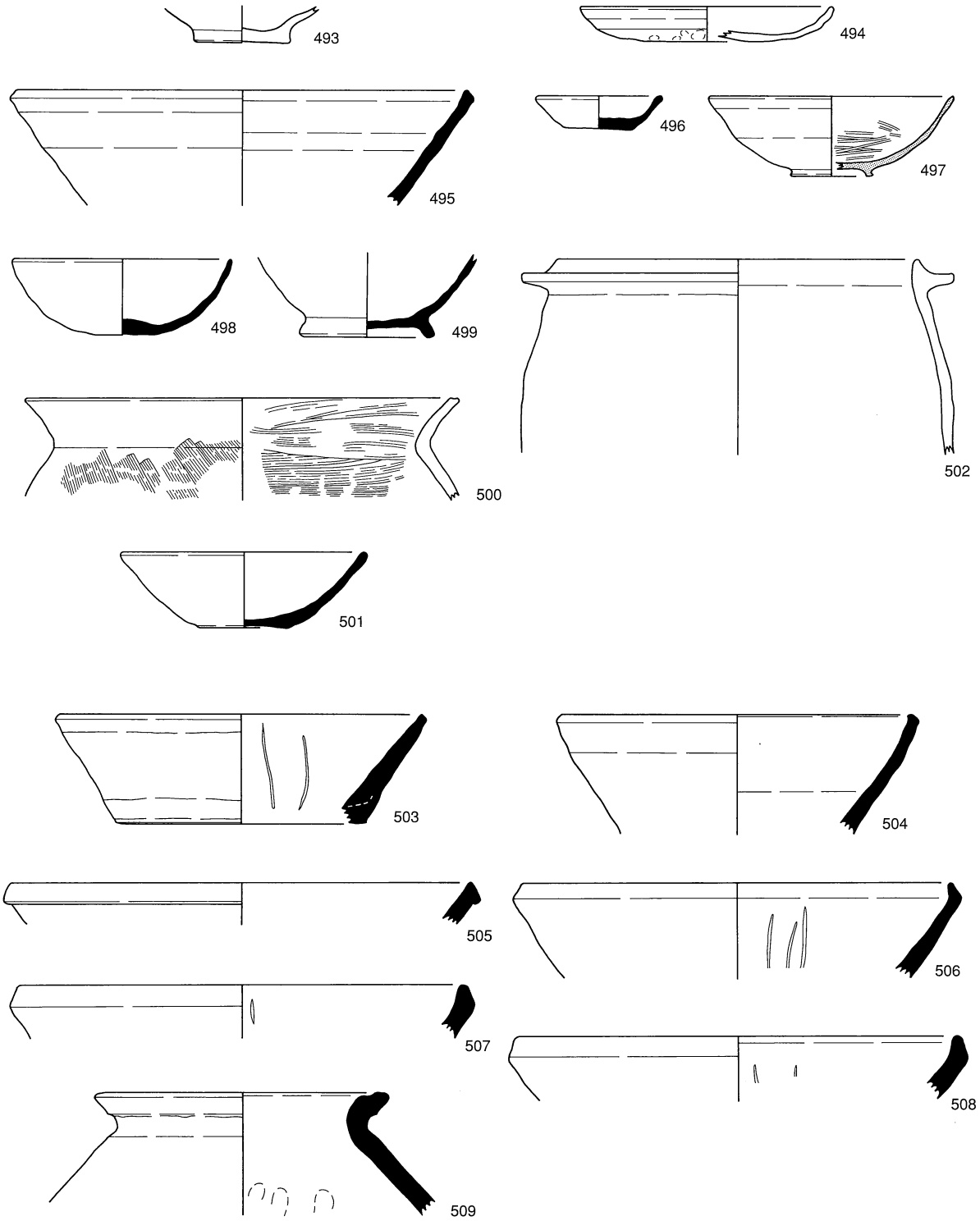

379
380
381
382
384
385
386
383
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
400
401
402
399
403
S9
404
0
20cm

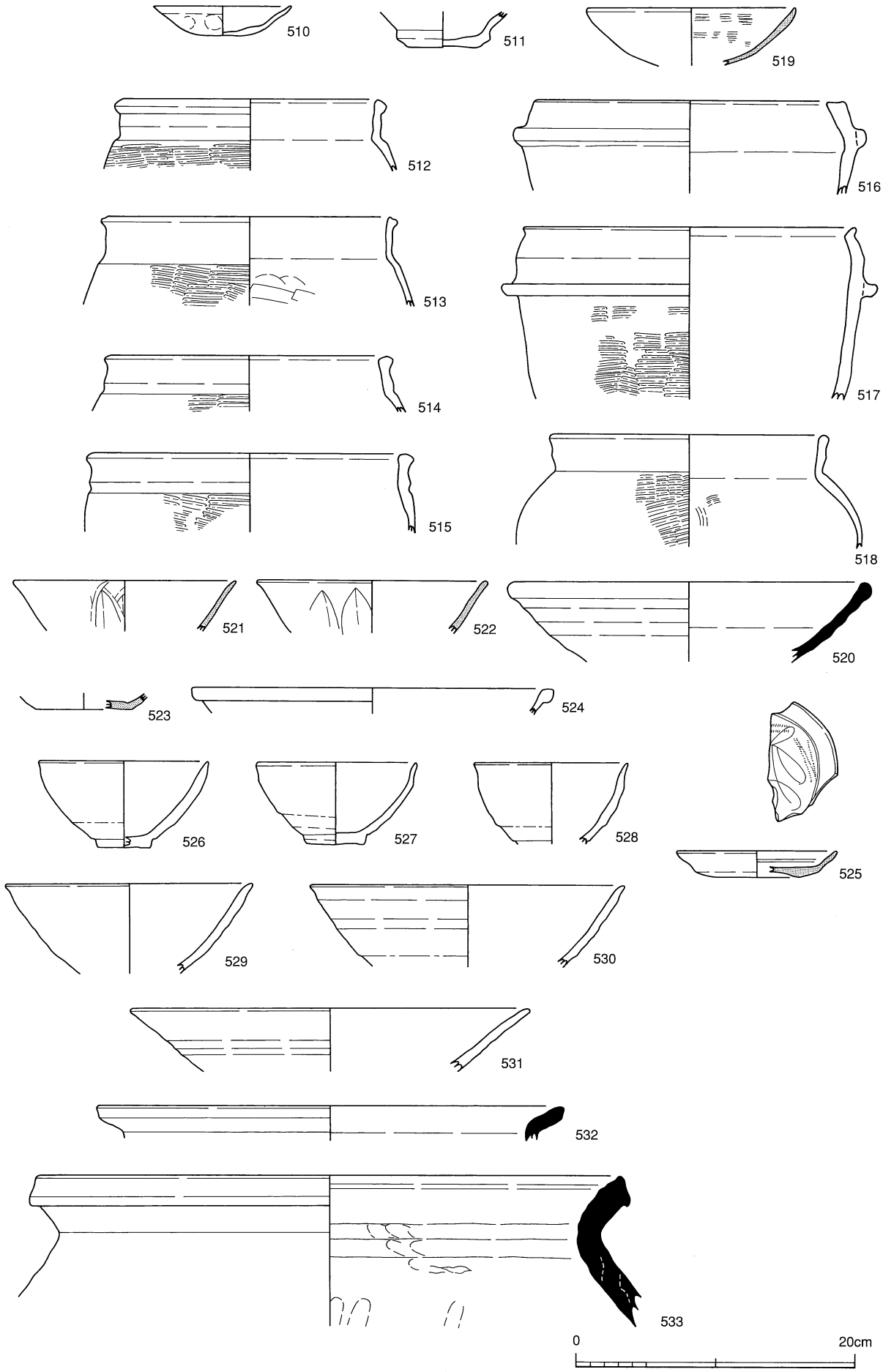

405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
S10
S11
S12
0
20cm

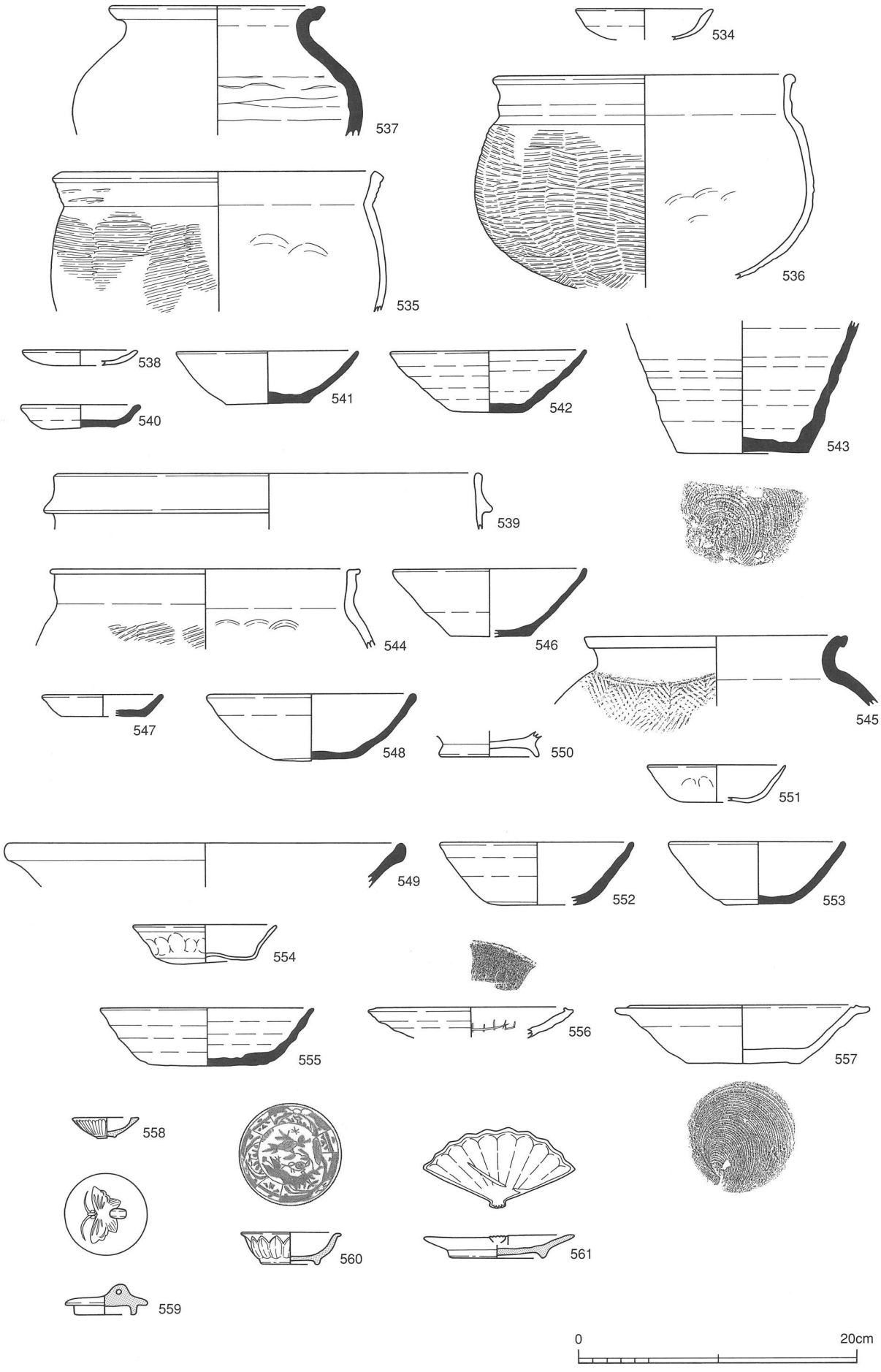

433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
0
20cm

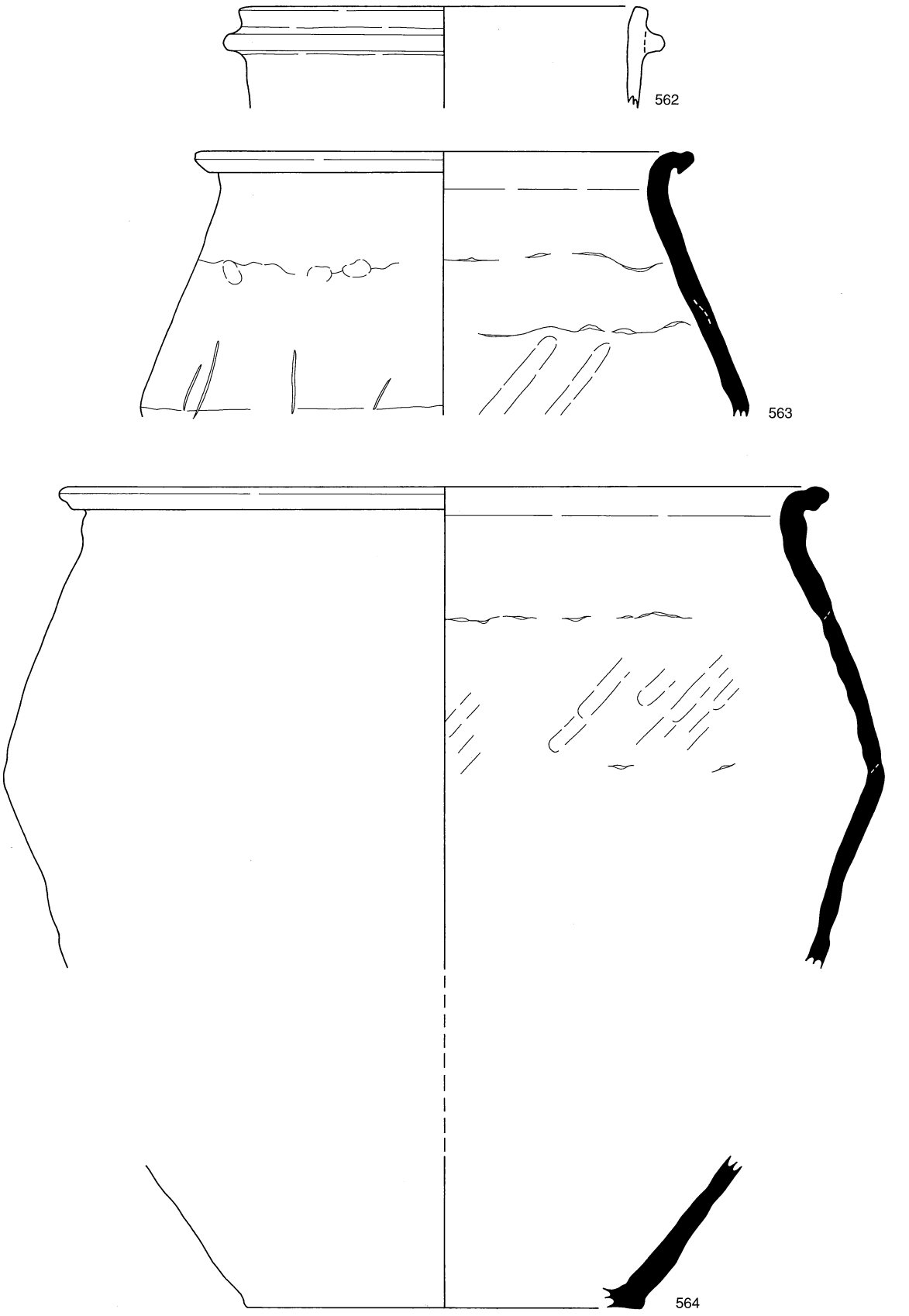

452
453
454
467
455
456
457
458
461
459
460
462
463
468
465
464
466
472
471
470
469
473
474
475
476
477
478
479
480
0
20cm

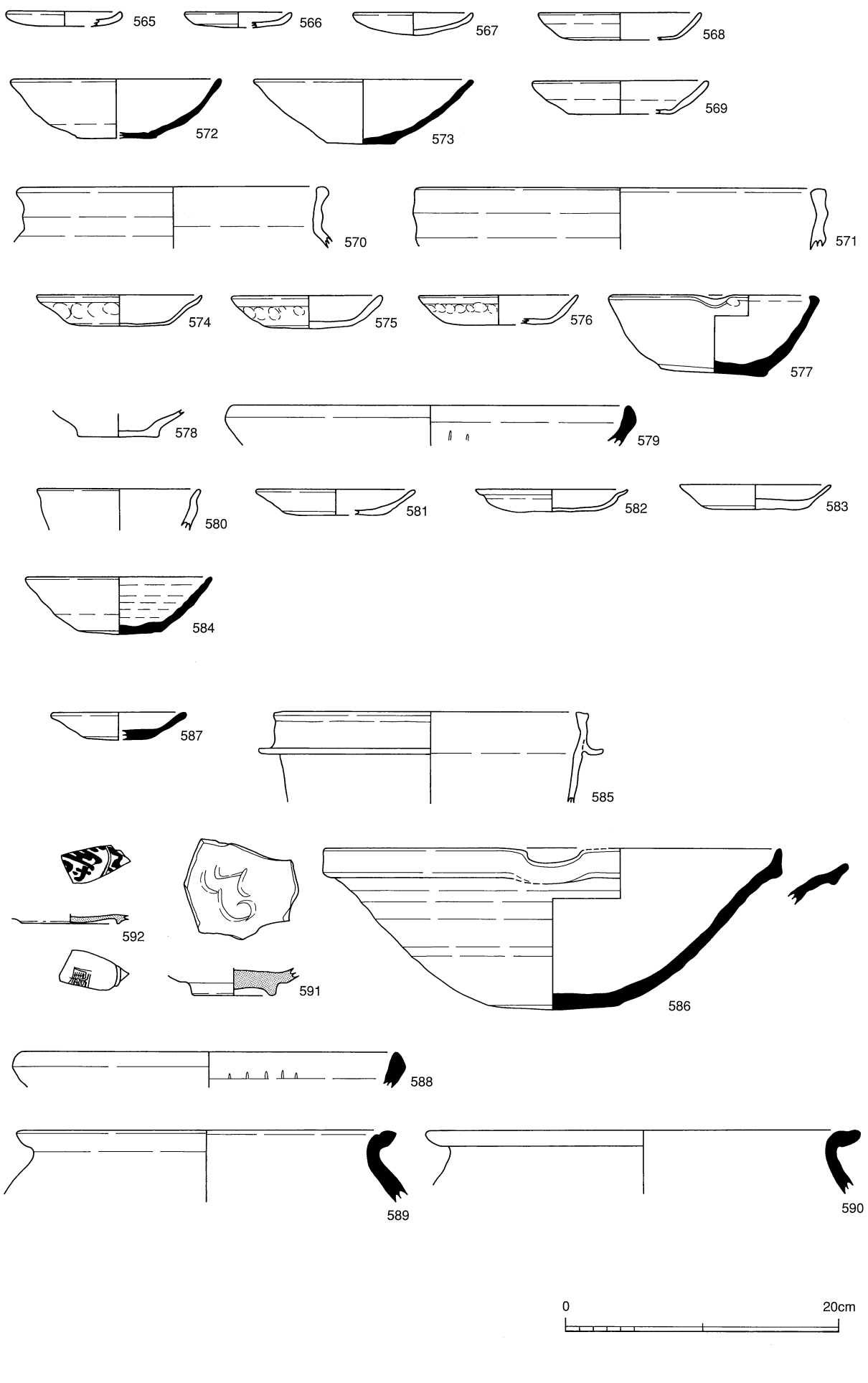

481
482
492
483
484
485
486
487
488
489
490
491
0
20cm

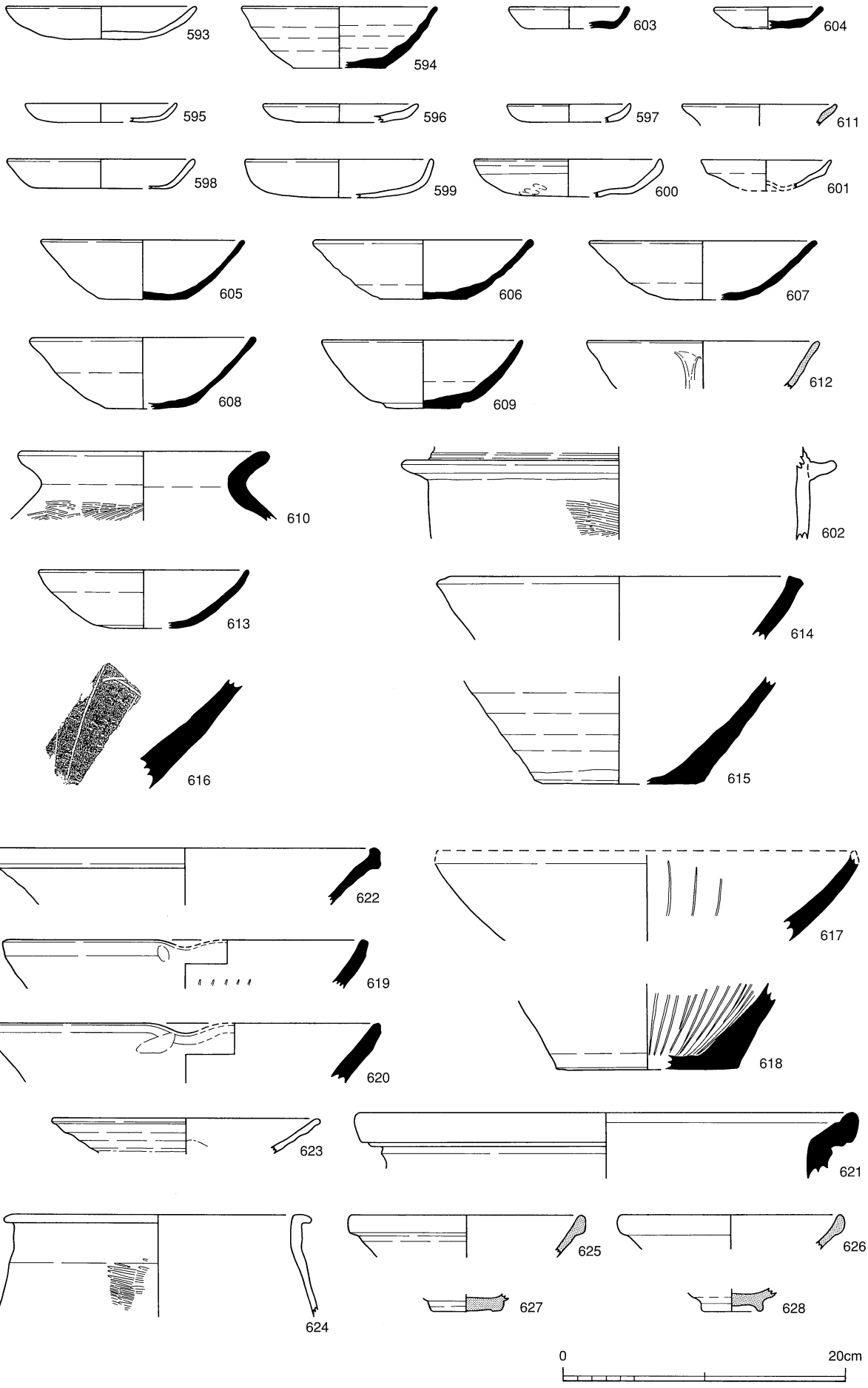

493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
0
20cm

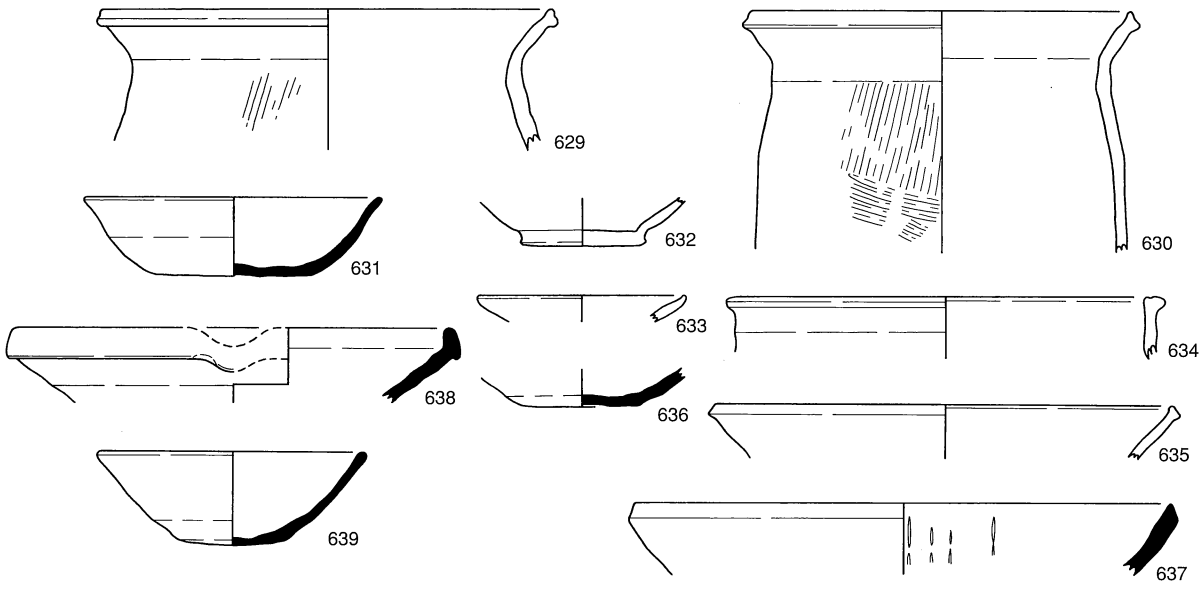

510
511
519
512
516
513
517
514
515
518
521
522
520
523
524
526
527
528
525
529
530
531
532
533
0
20cm

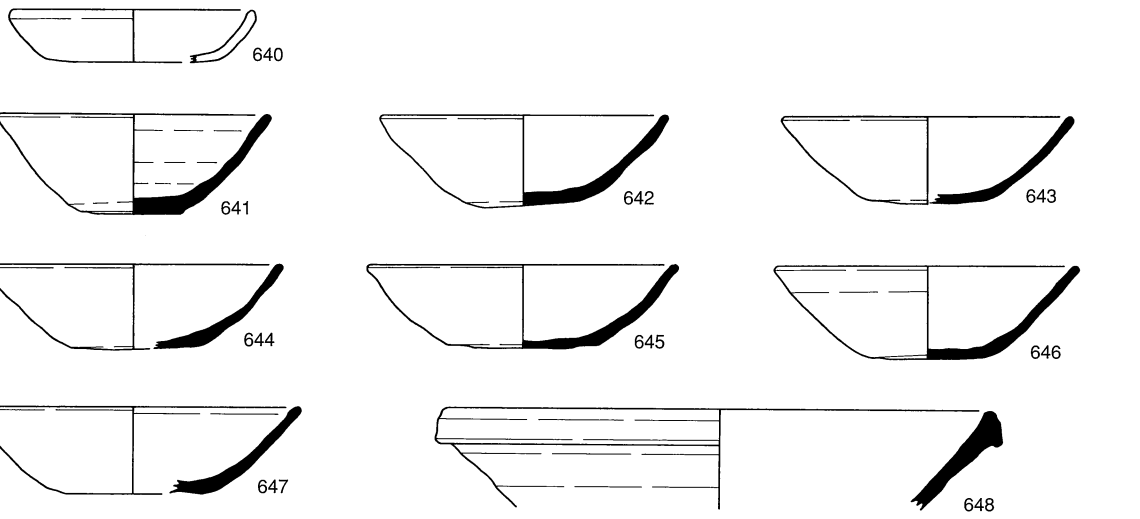

534
537
536
535
538
541
542
543
540
539
544
546
545
547
548
550
551
549
552
553
554
555
556
557
558
560
561
559
0
20cm

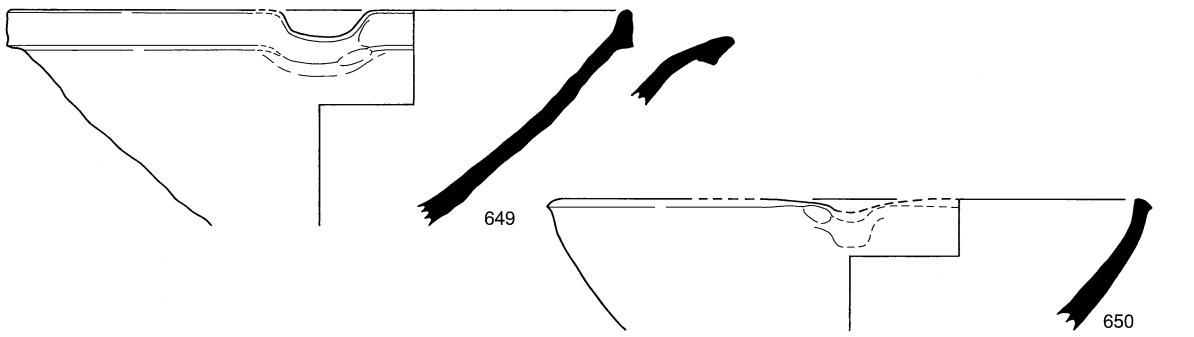

562
563
564
0
20cm


565
566
567
568
572
573
569
570
571
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
587
585
592
591
586
588
589
590
0
20cm

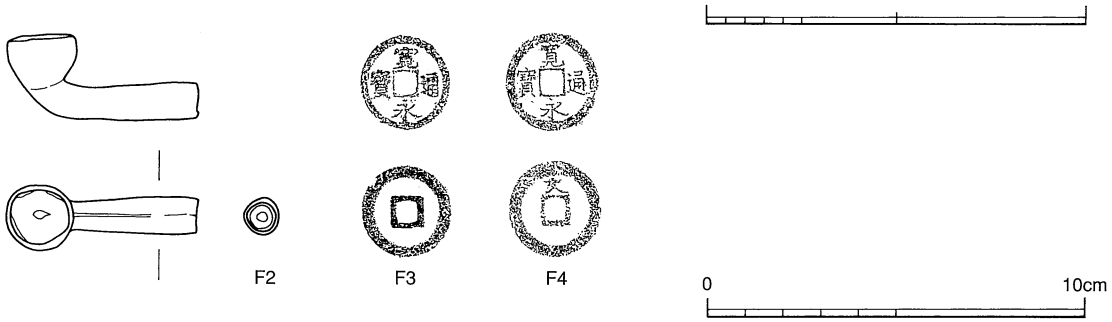

593
594
603
604
595
596
597
611
598
599
600
601
605
606
607
608
609
612
610
602
613
614
616
615
622
617
619
620
618
623
621
624
625
626
627
628
0
20cm

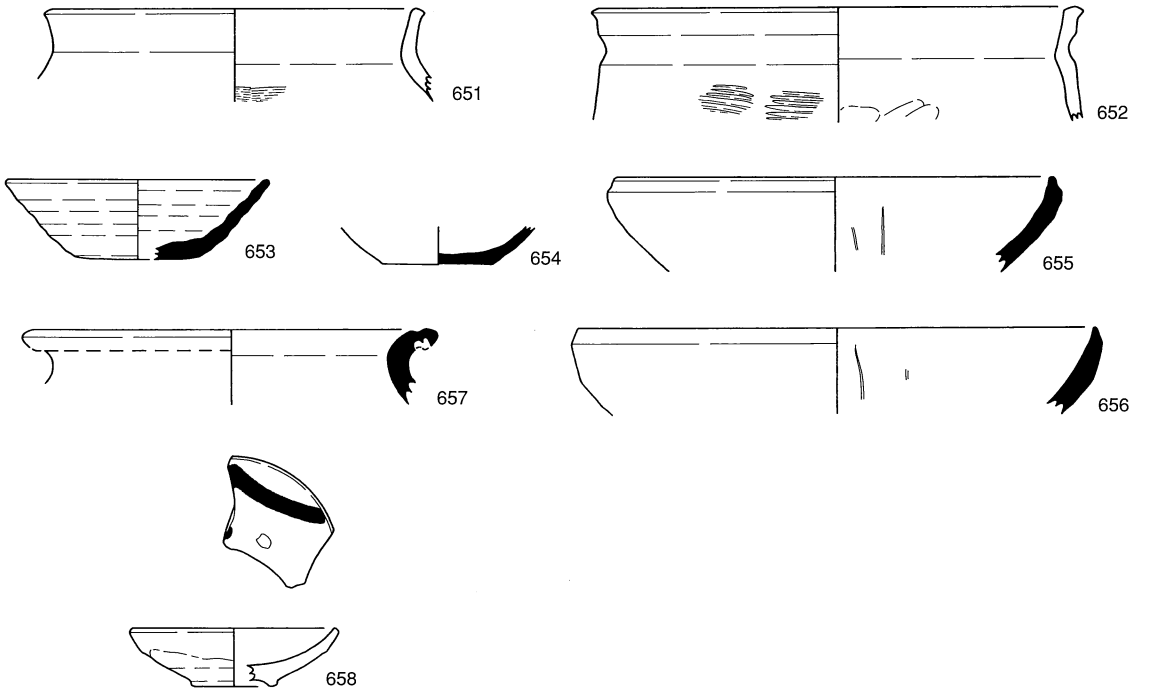

629
630
631
632
633
634
636
635
638
639
637

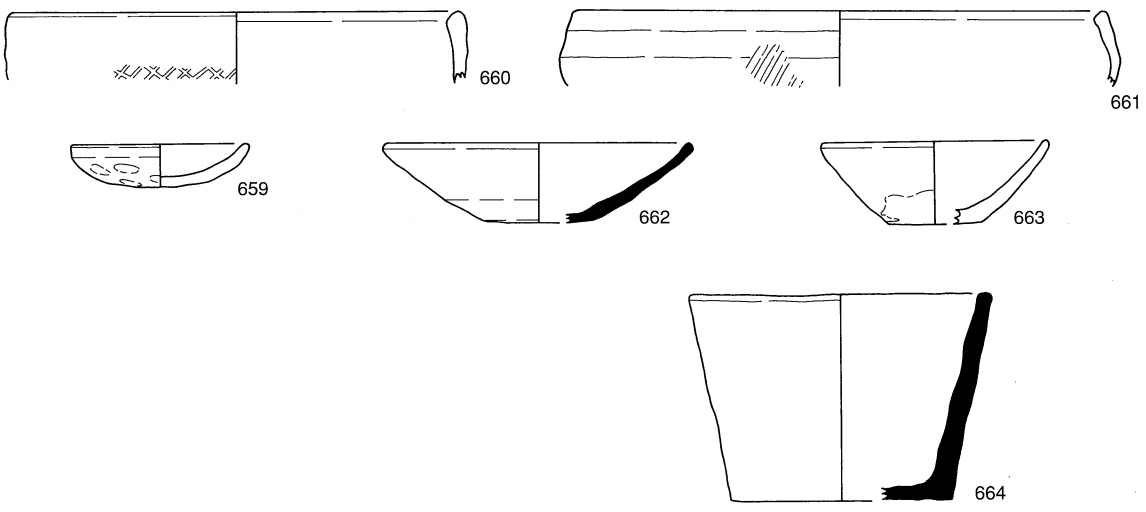

640
641
642
643
644
645
646
647
648

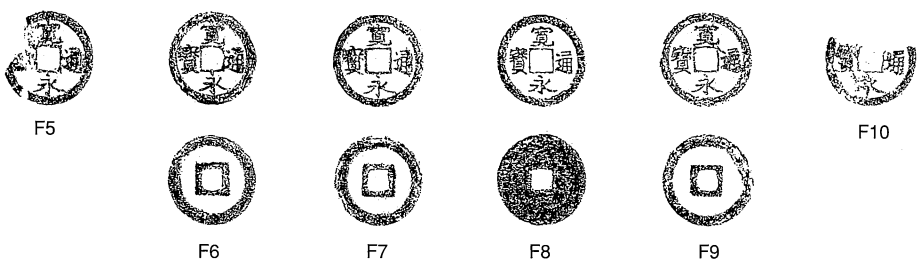

649
650

0
20cm

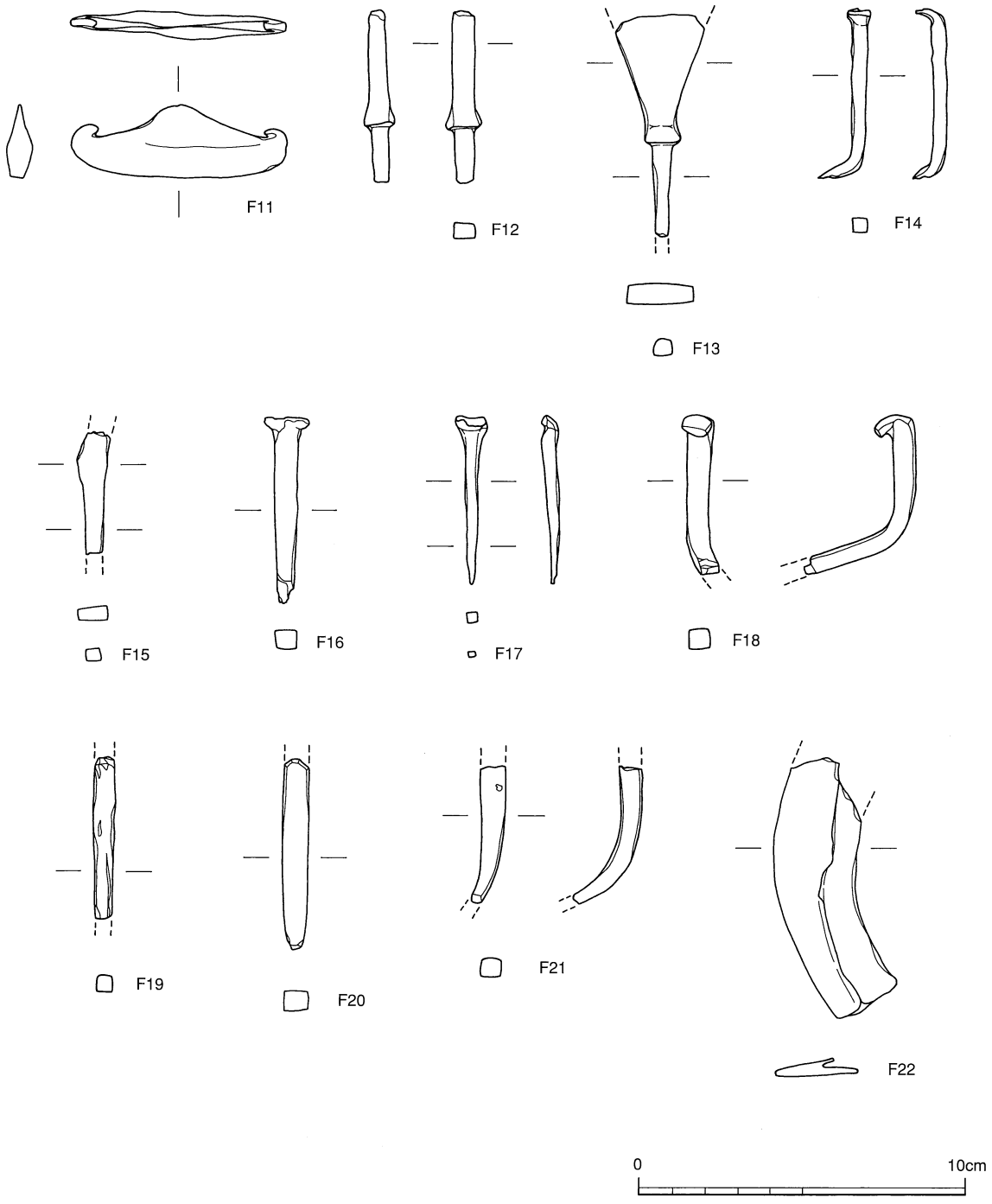

F2
F3
F4
0
10cm


651
652
653
654
655
657
656
658


660
661
659
662
663
664
0
20cm


F5
F10
F6
F7
F8
F9
0
5cm

図版一二一　中世　鉄製品



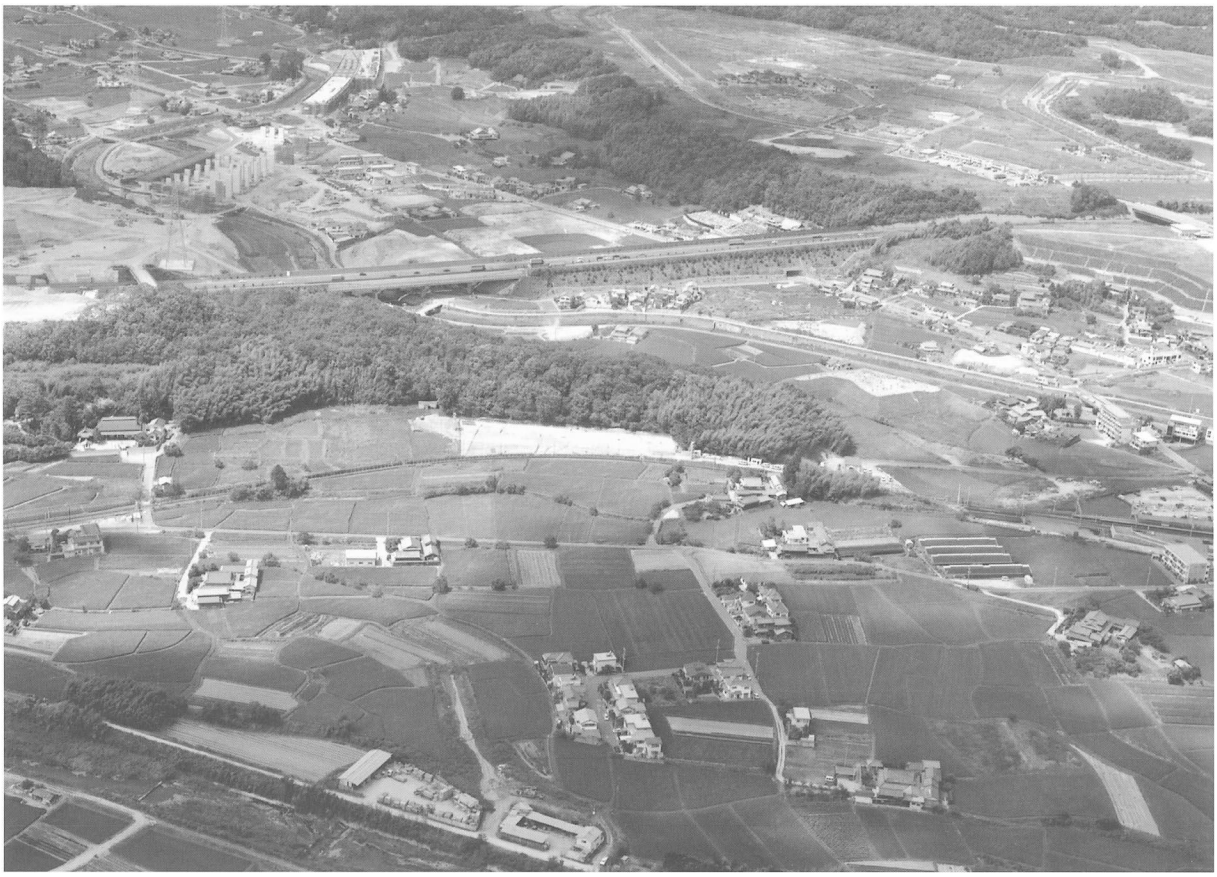
写真図版

南東から

東から

南から

東から



東から

北から

南東から

真上から

真上から

調査区全景（南から）

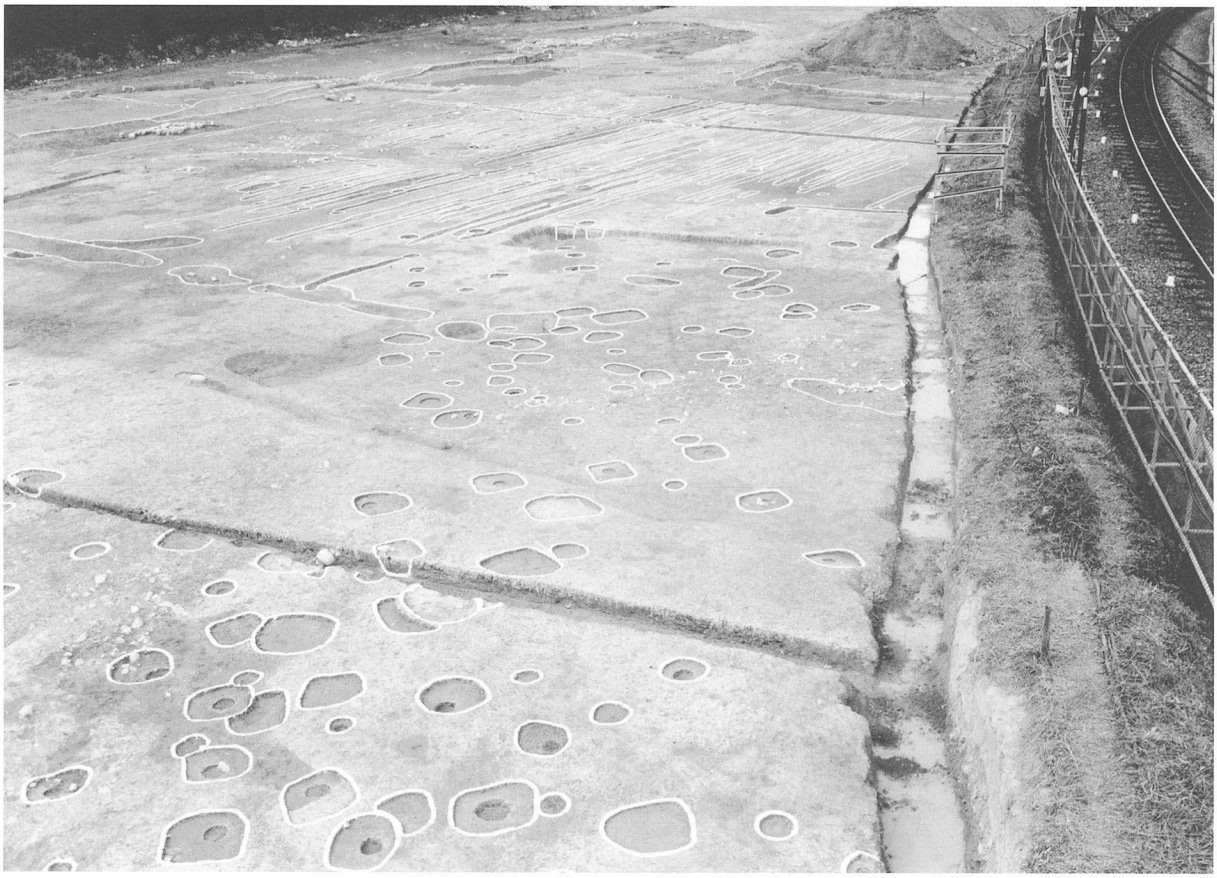
調査区全景（南から）

調査区北部全景（南から）

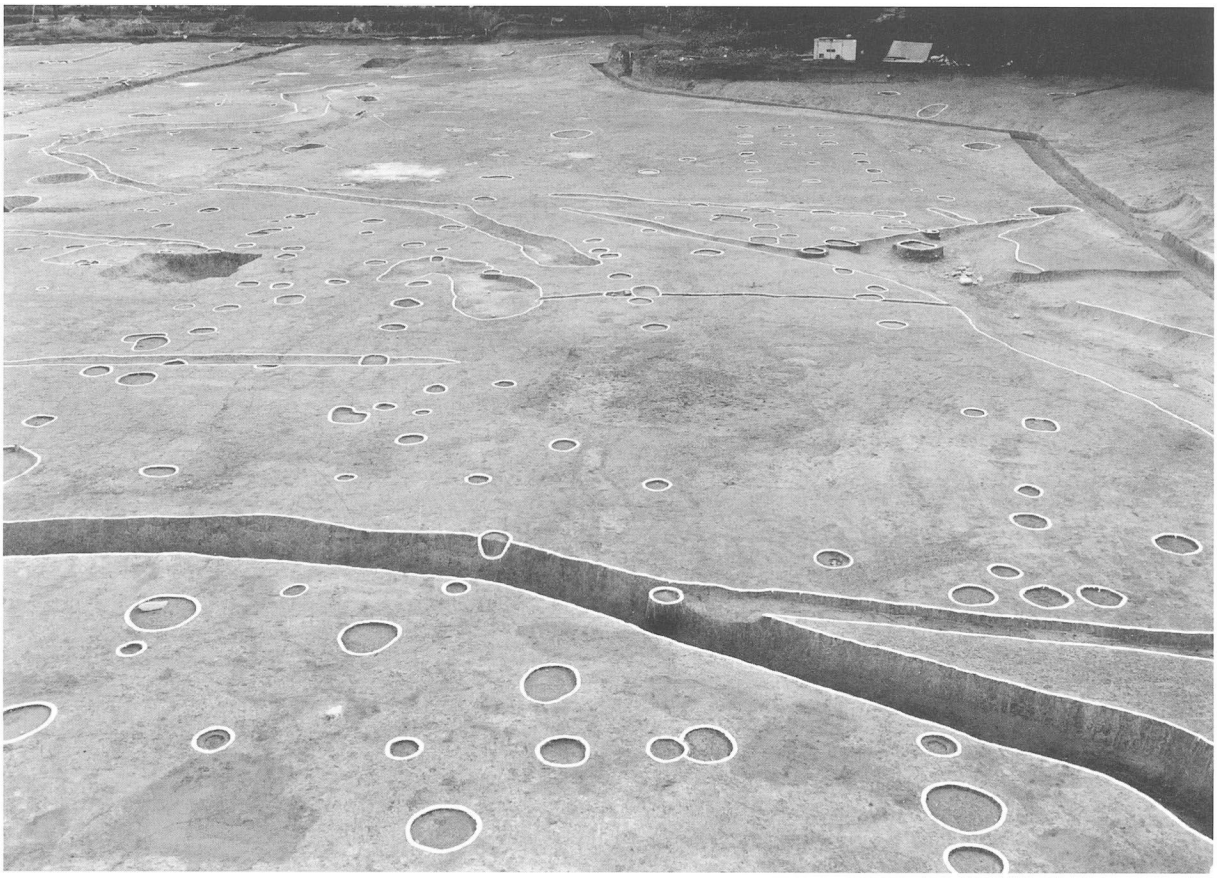
調査区全景（北から）

調査区北端全景（南から）

中世Ⅰ区　池1・3周辺（北から）



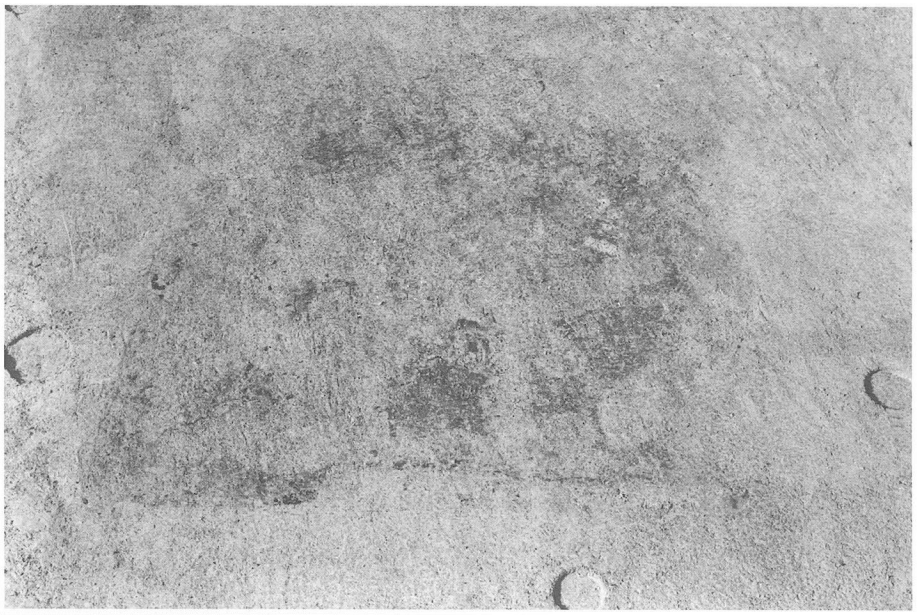
SB41周辺（南から）



SB48～50周辺（北から）

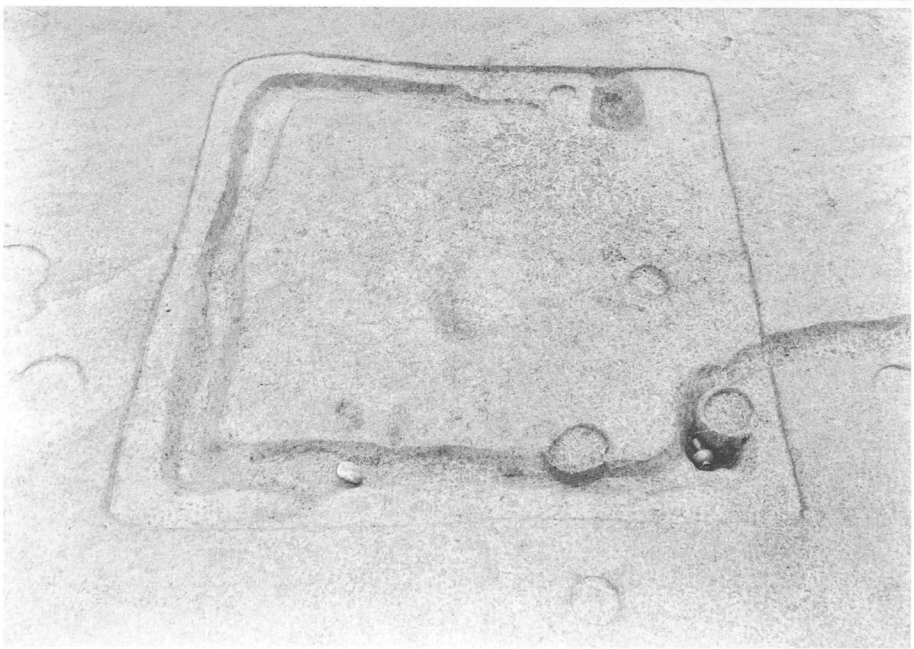
SH1（西から）

SH2・3（南から）

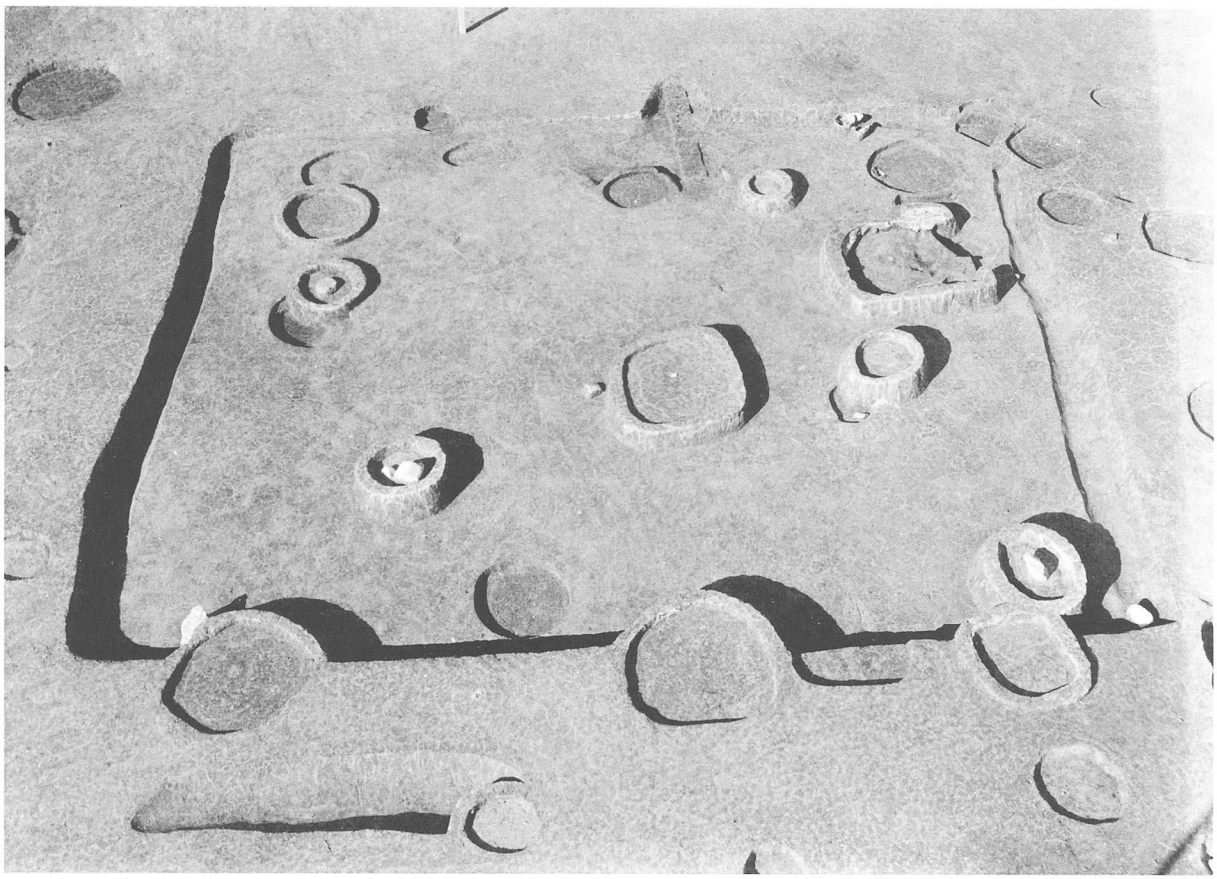


SH4検出（東から）

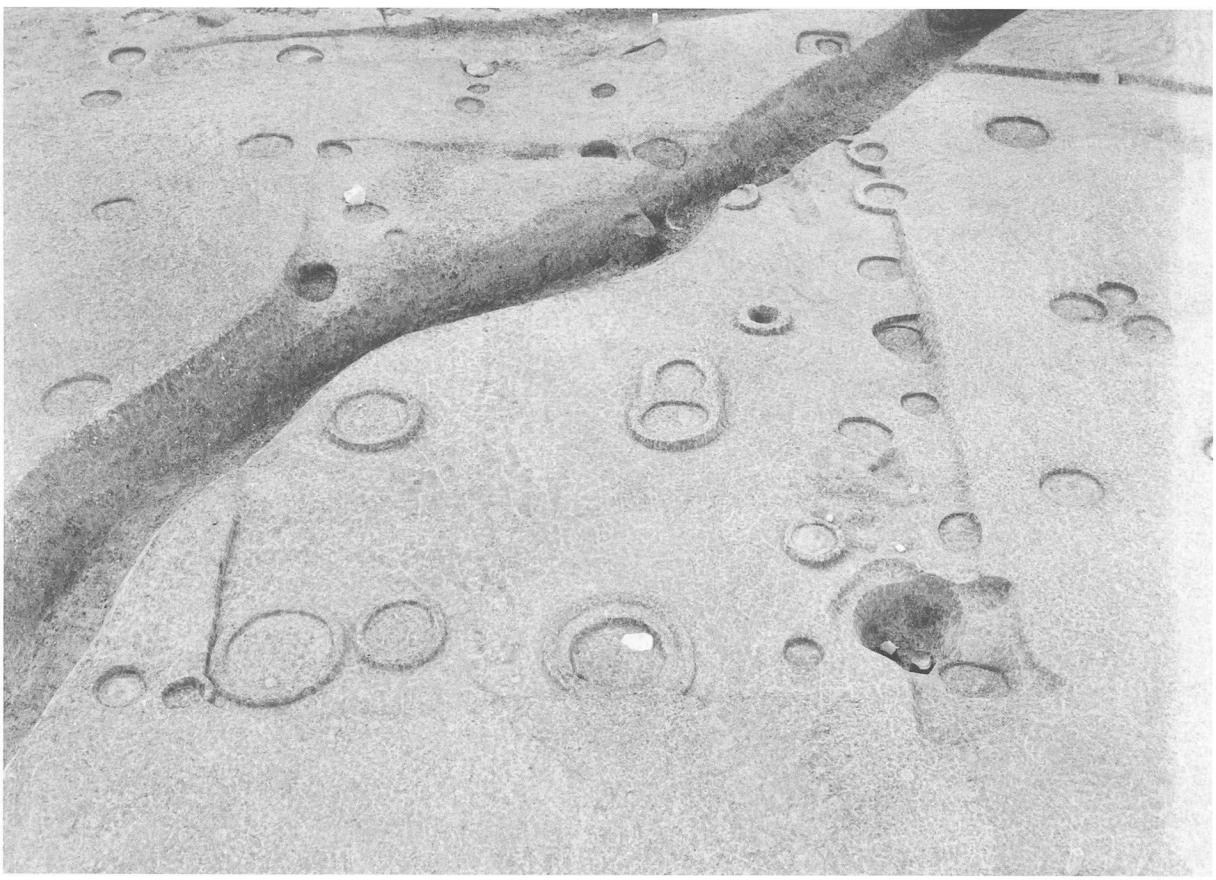
SH4焼失状況（東から）



SH4完掘状況（東から）



SH5（南から）



SH6（東から）

SH7～9（北から）

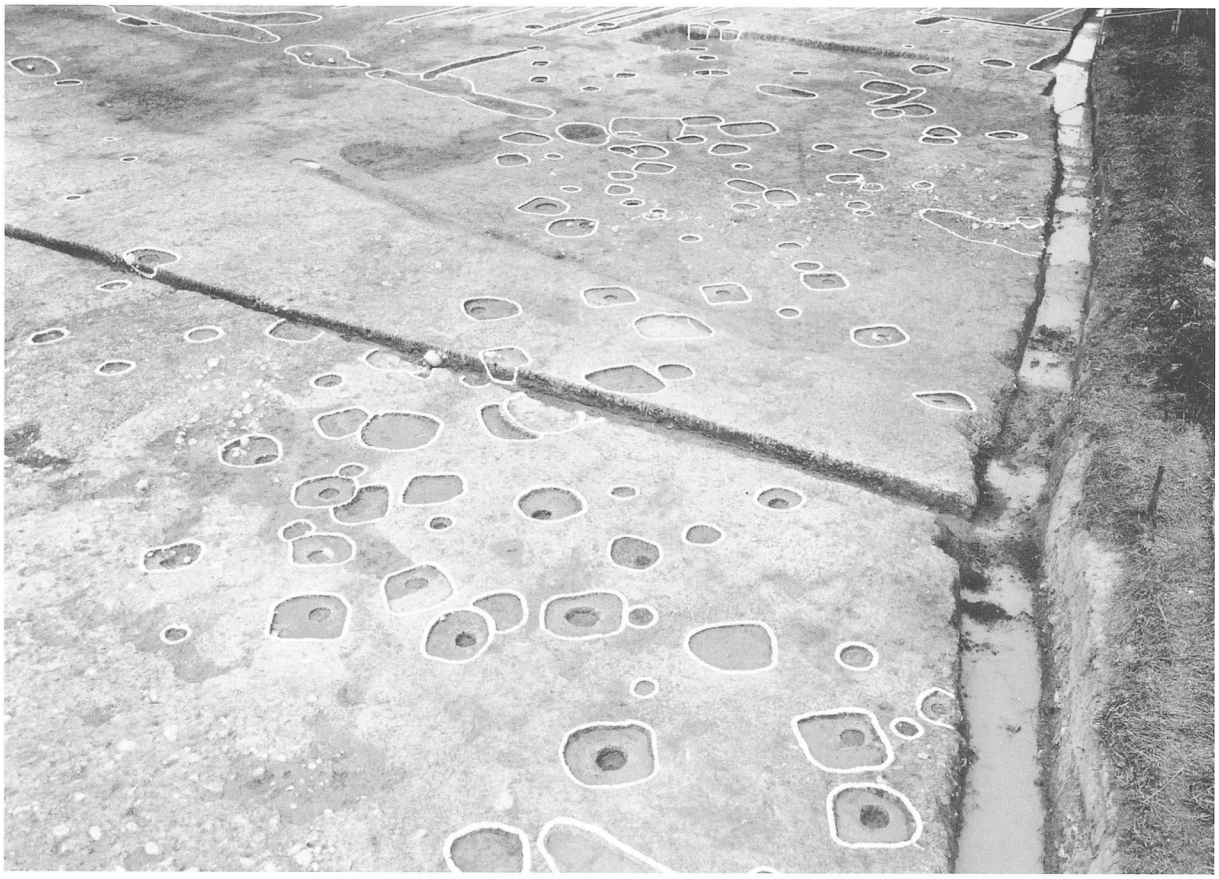
SH7～9（東から）

SH10・11（北から）

SH11（西から）

SB8（北から）

SB8　①P507（北から）　②P303（東から）　③P319（東から）　④P307（西南から）

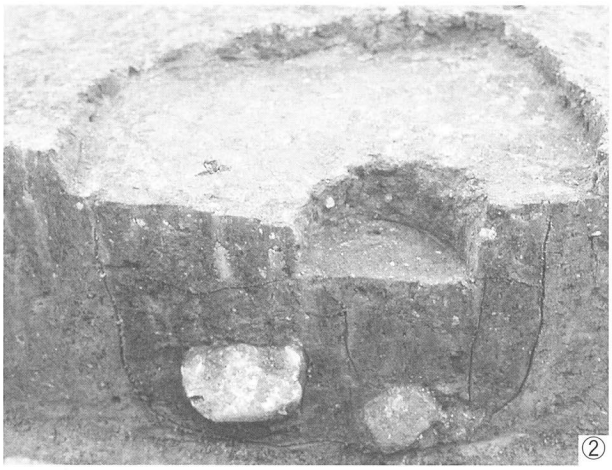


SB41周辺（南から）

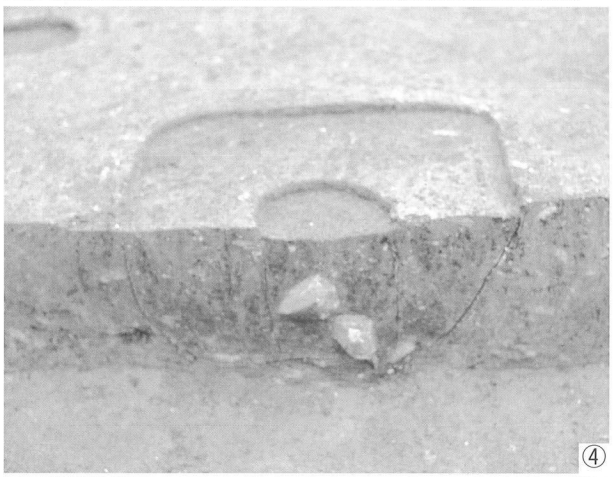
SB41周辺（北から）

SB41　①P1462（西から）　②P1382（西から）　③P1449（南から）　④P1956（北から）　⑤P1954（北から）

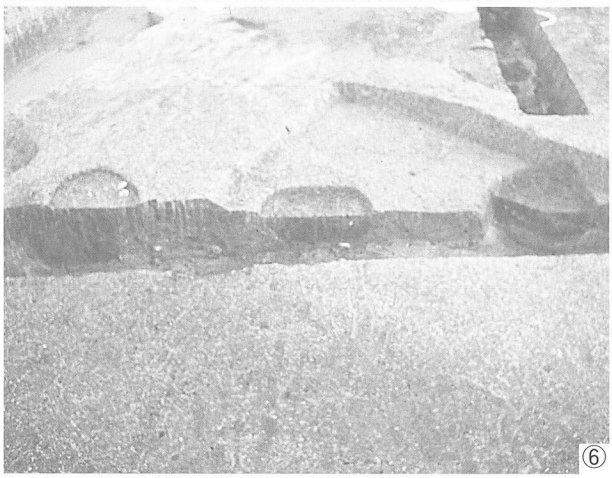
①


②

③


④

⑤


⑥

⑦

⑧

SB61　⑥P1950・1949・1948（北から）　⑦P1950（北から）　⑧P1949（西から）

SB56（東から）

SB56　①P1932（東から）　②P1922（北から）　③P1934（東から）　④P1935（南から）

SB15（北から）

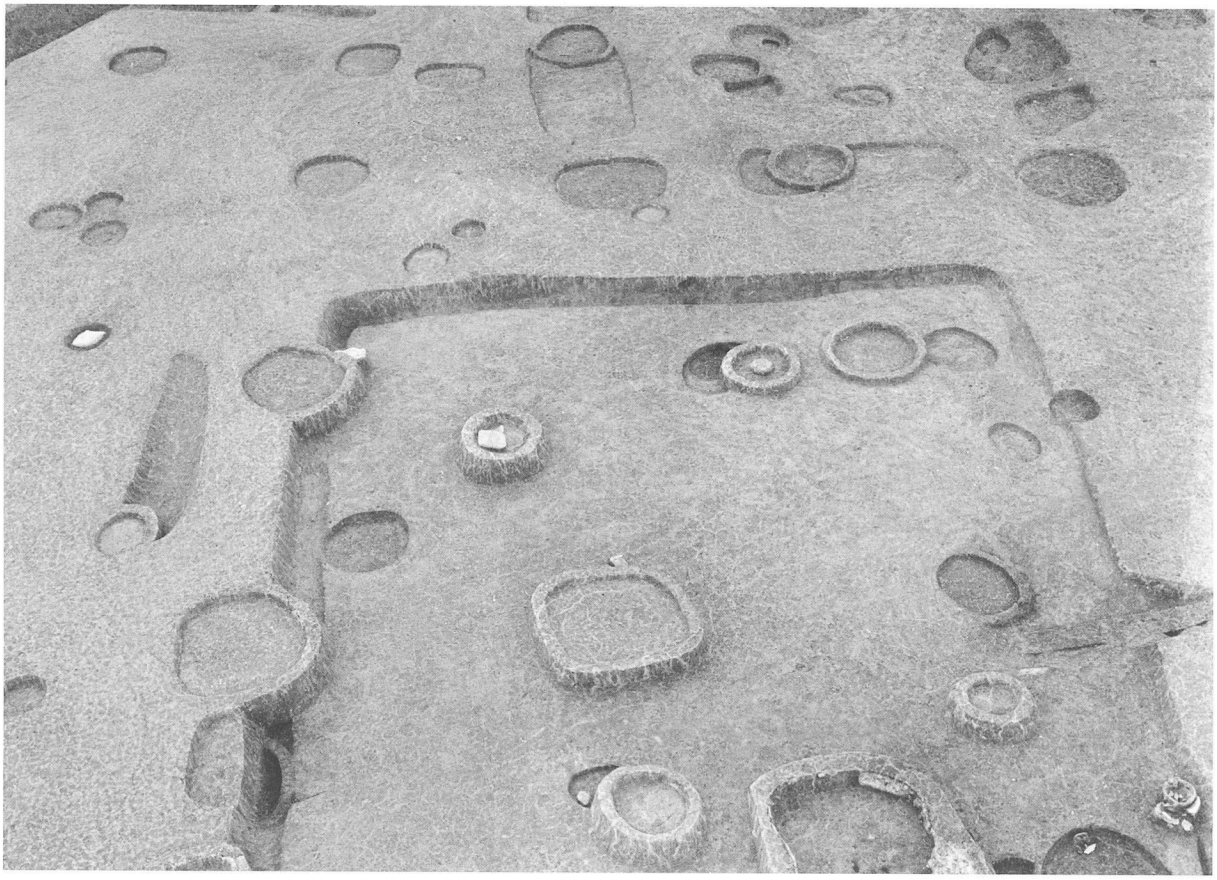
SB37・40（西から）

SB38・39（北から）

SB98・99（南から）

SB97（南から）

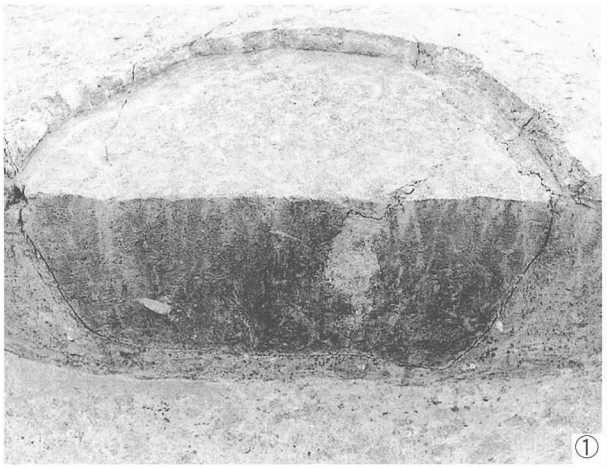
SB79（北から）



SB80（東から）

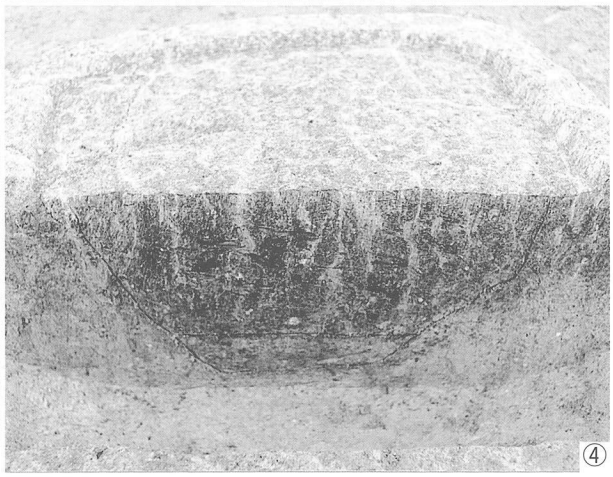
SB75（北から）

SB80　①P2685（南から）　②P2680（南から）　③P2684（南から）　④P2695（東から）


①

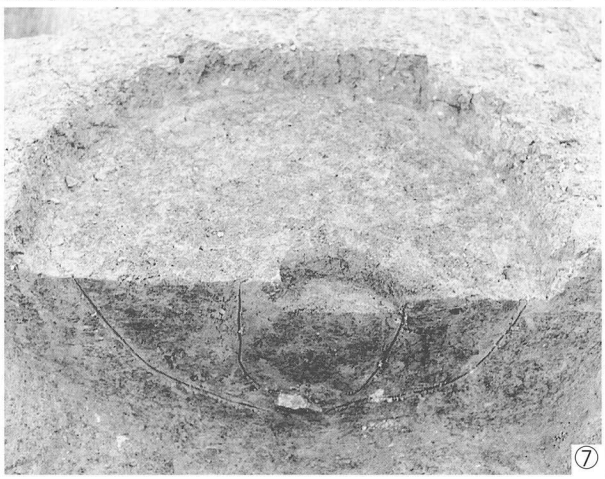
②

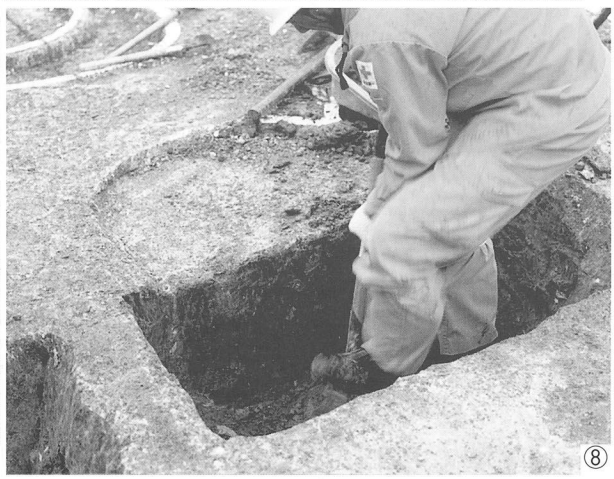
③


④

⑤

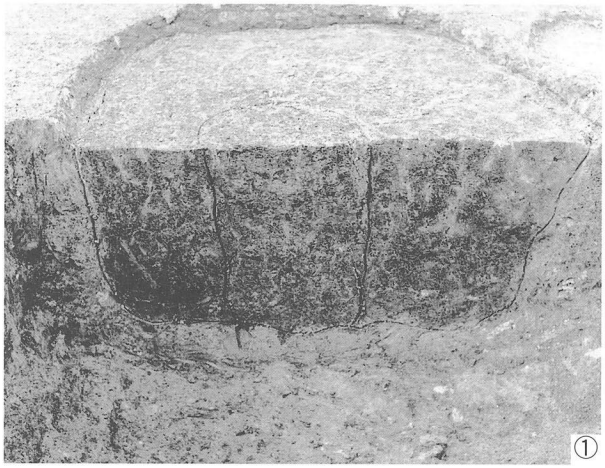
⑥

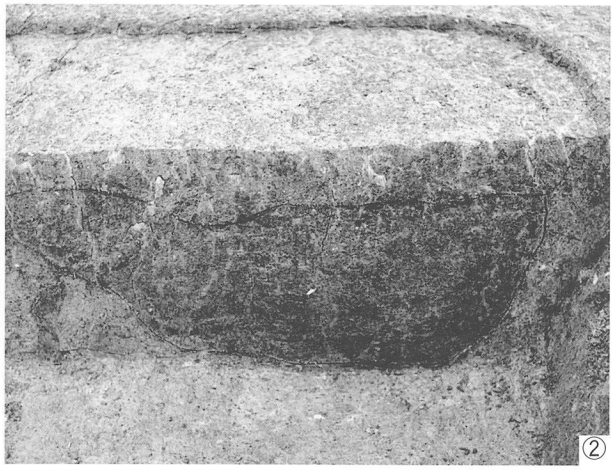

⑦

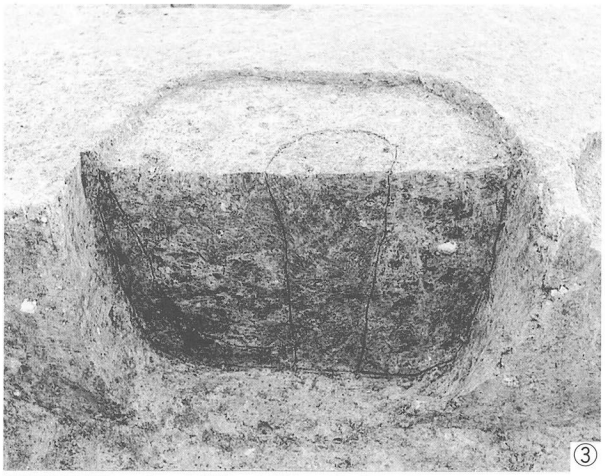

⑧

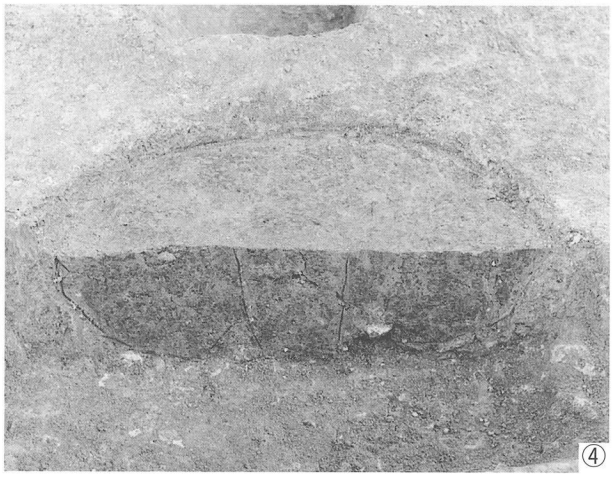
⑤P2690（北から）　⑥P2712（北から）　⑦P2713（北から）　⑧調査風景（東から）

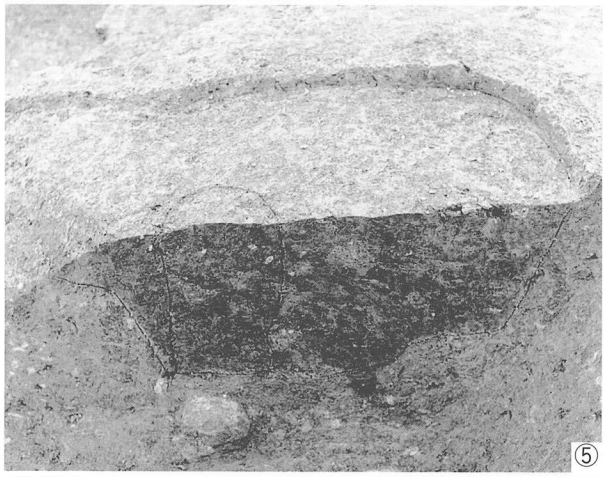
SB75　①P2701（南から）　②P2703・2704（東から）　③P2694（南から）　④P2705（東から）

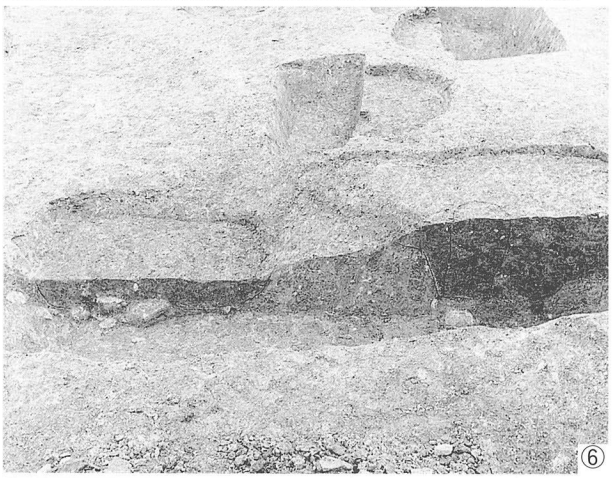

①

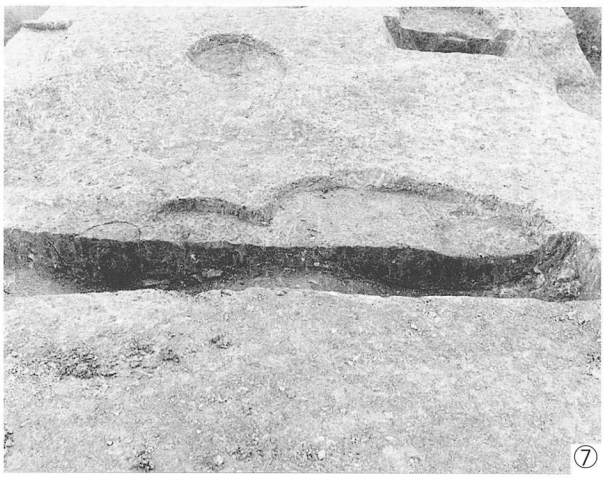

②


③


④

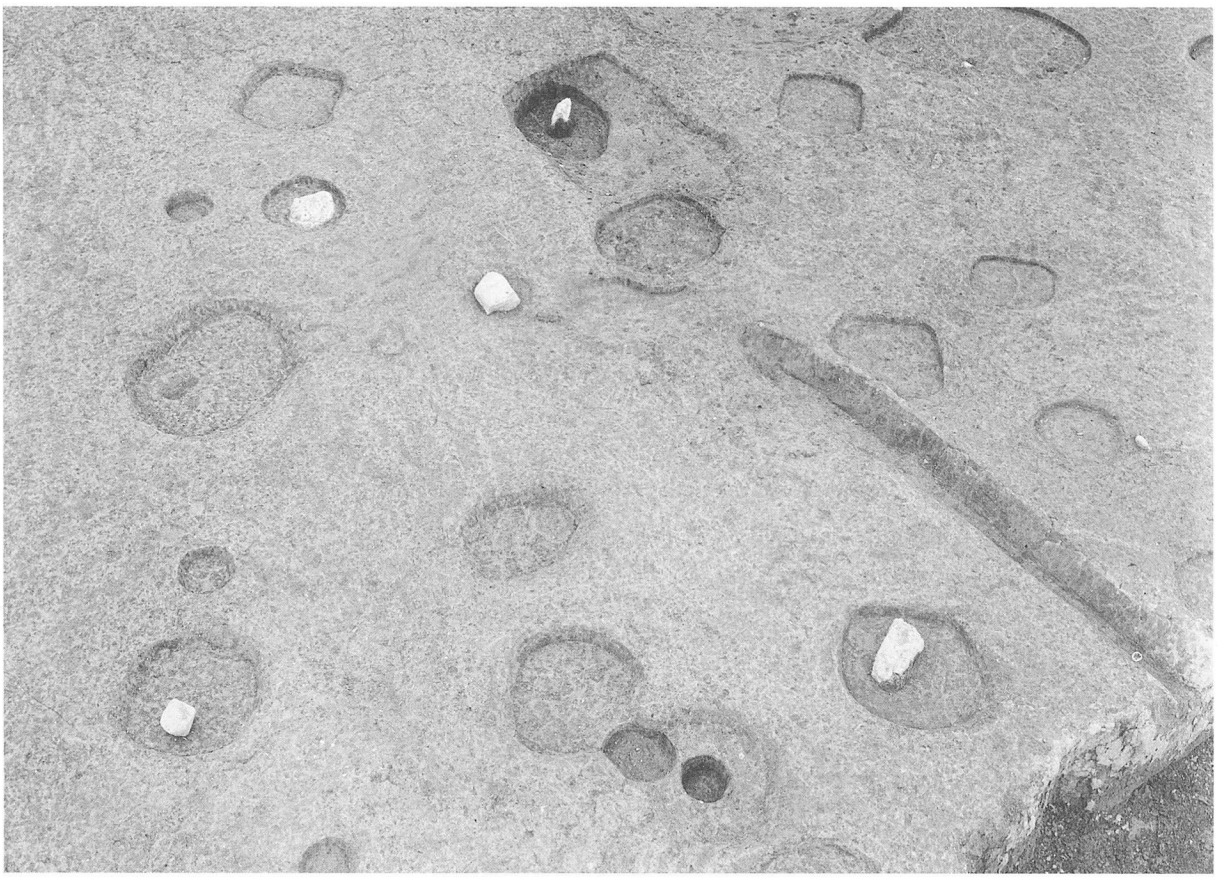

⑤


⑥


⑦

⑧

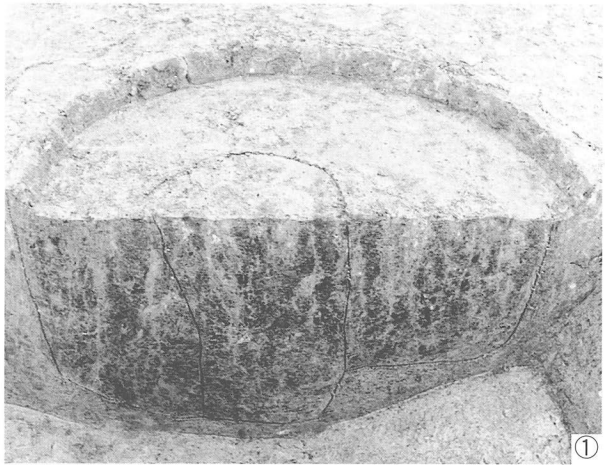
⑤P2711（西から）　⑥P2706・2707（北から）　⑦P2707・2708（北から）　⑧P2708（北から）



SB76（東から）

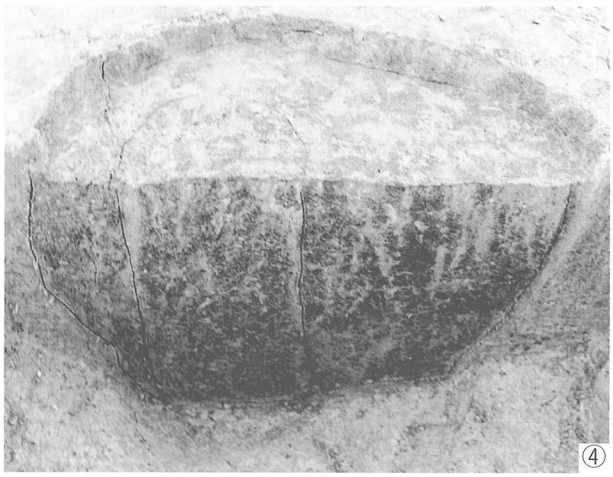
SB77（北から）

SB77　①P2006（南から）　②P2010（南から）　③P2018（西から）　④P2008（東から）　⑤P2013（西から）


①

②

③


④

⑤

⑥

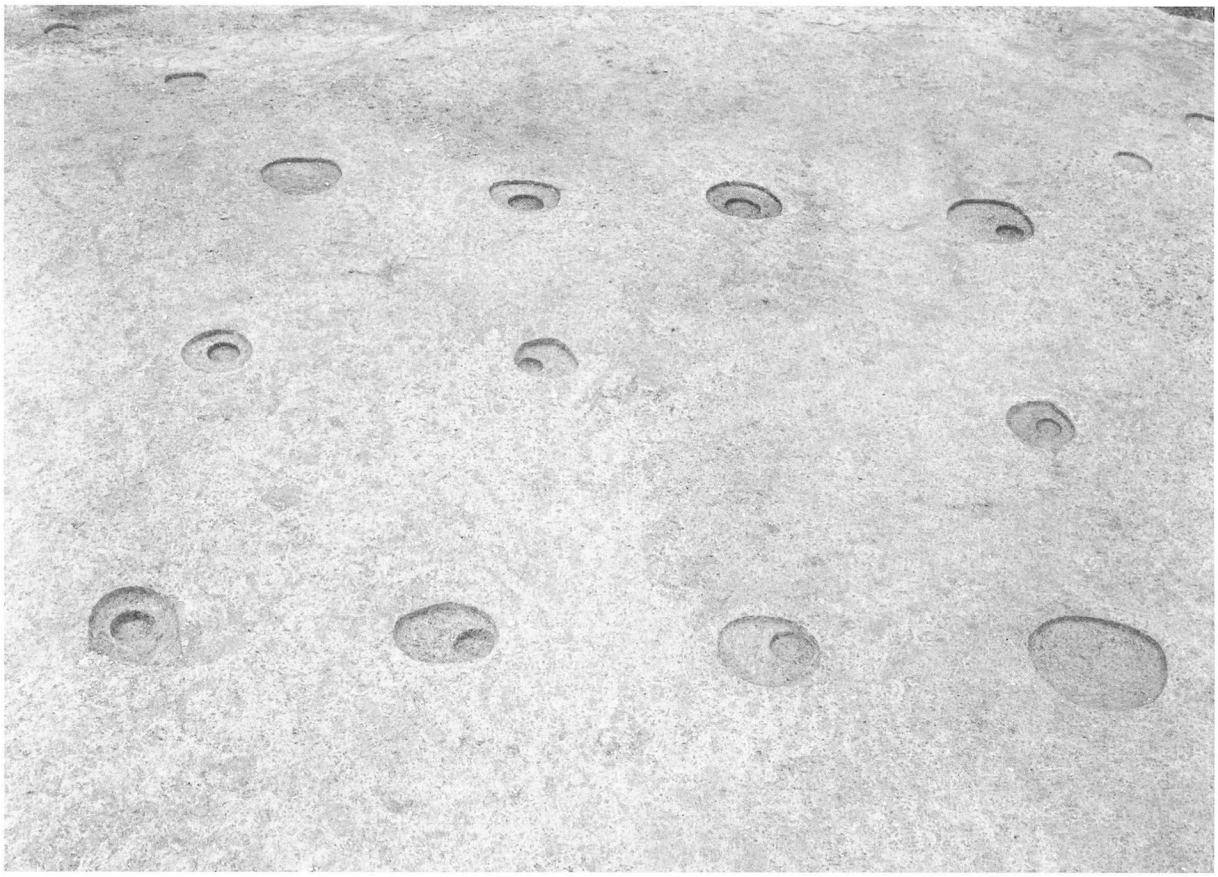
⑦

⑧

SB77　⑥P2681（北から）　SB76　⑦P1995（南から）　SB76・77　⑧P1996（南から）

SB48～50（南から）

SB48（東から）

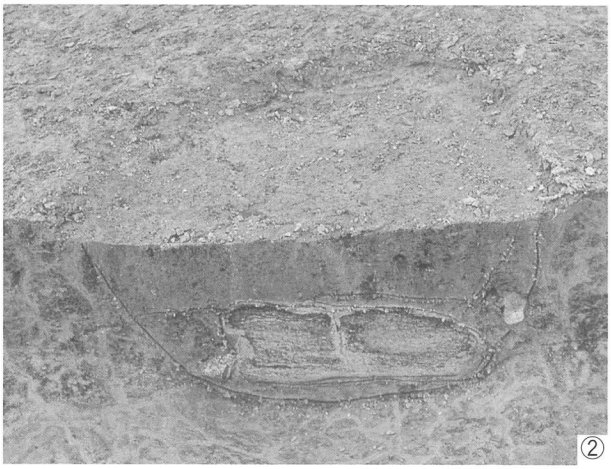


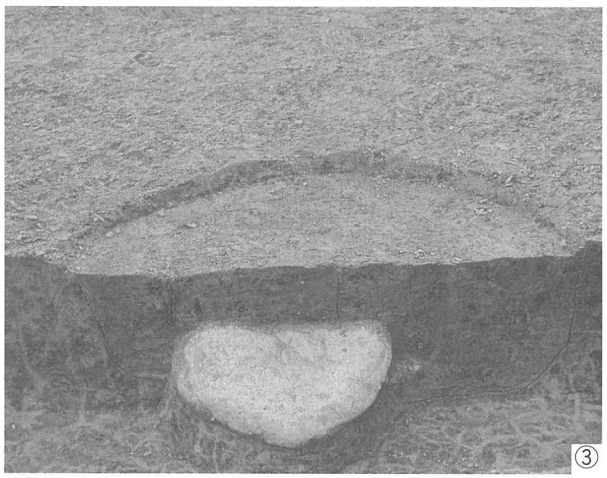
SB49（東から）

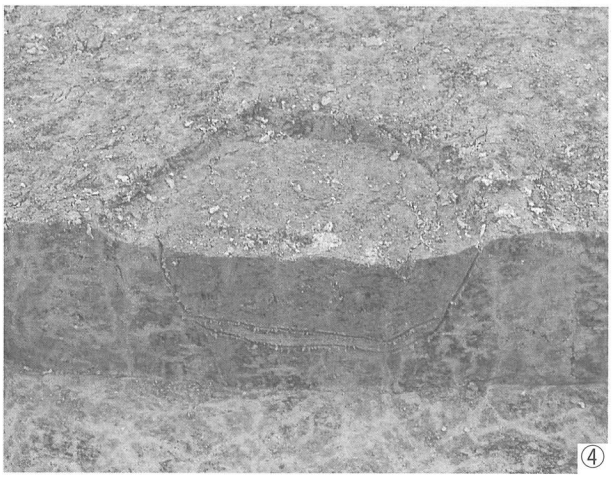
SB50（東から）

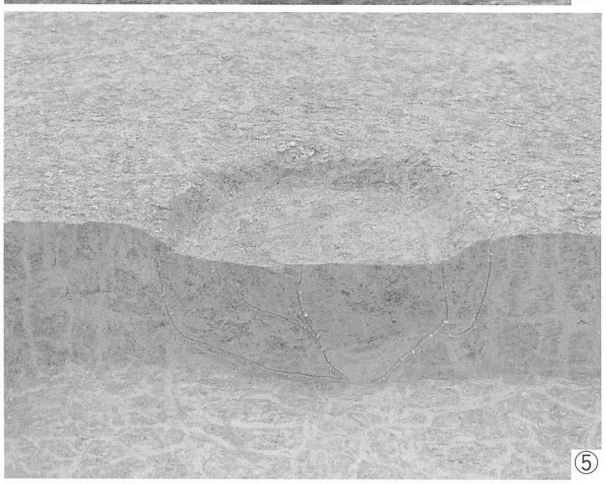
SB48　①P1592（南から）　②P1593（西から）　③P1594（西から）　④P1595（北から）

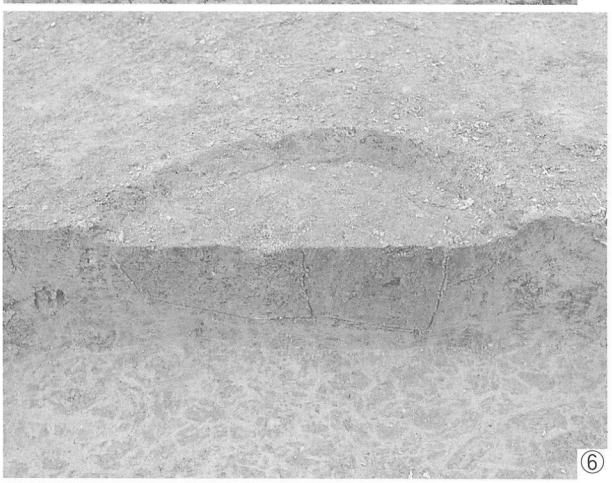
①


②

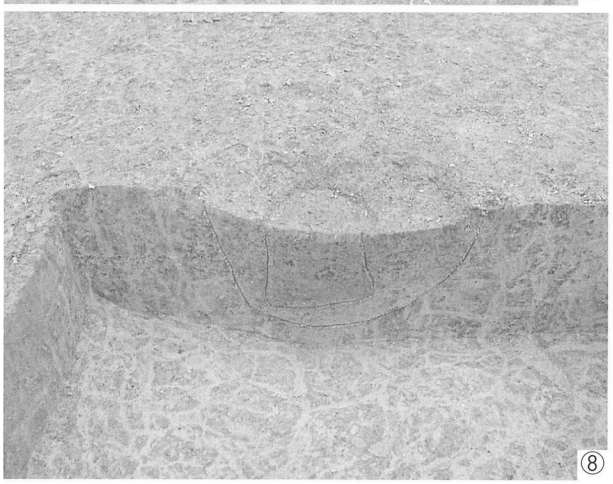

③


④


⑤

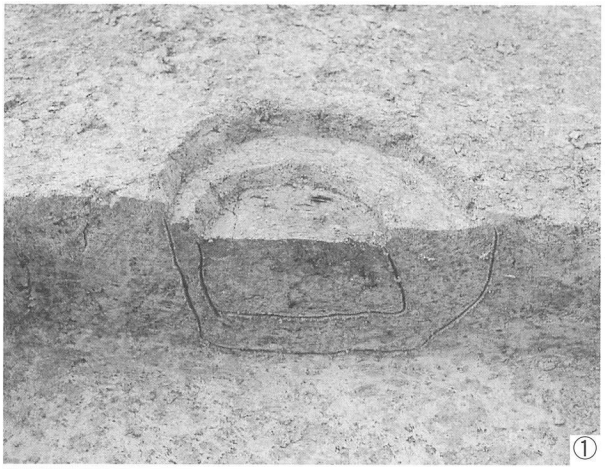

⑥

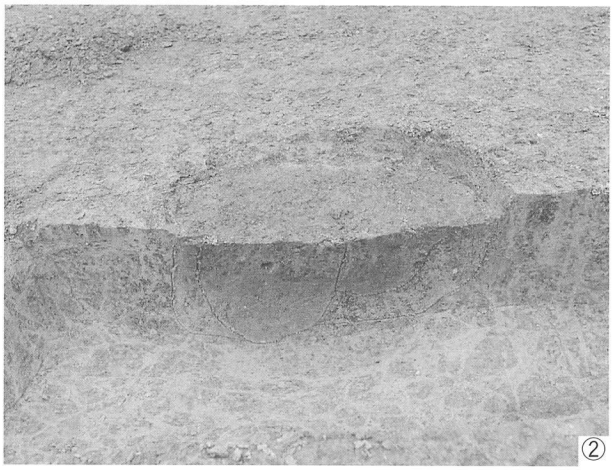
⑦


⑧

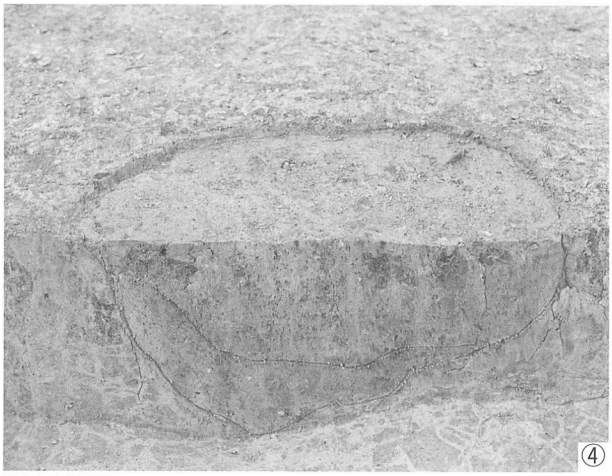
SB49　⑤P1600（南から）　⑥P1628（西から）　⑦P1627（西から）　⑧P1603（北から）

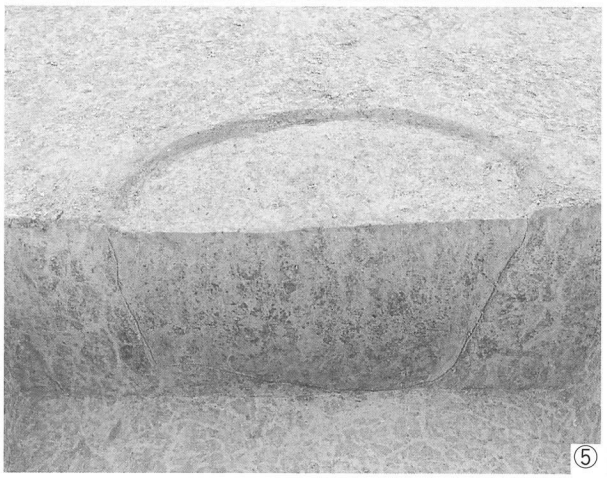
SB49　①P1605（南から）　②P1626（西から）　SB50　③P1703（西から）　④P1696（南から）

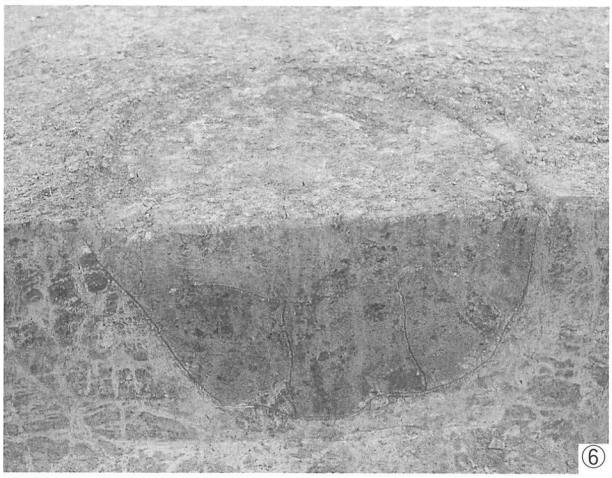

①

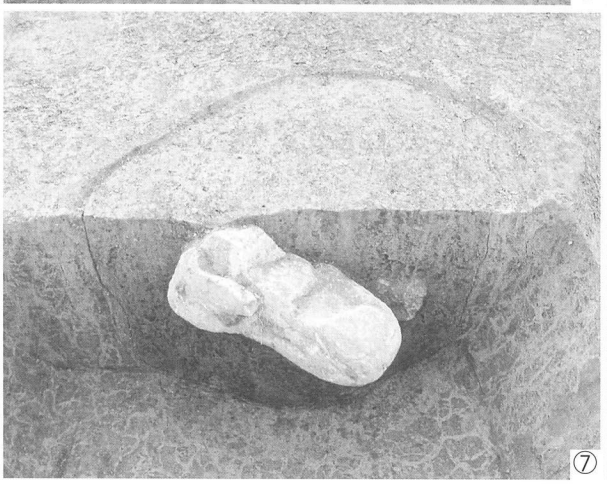

②

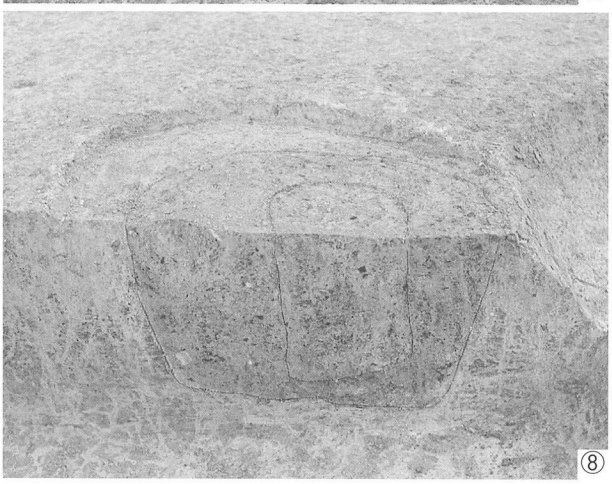
③


④

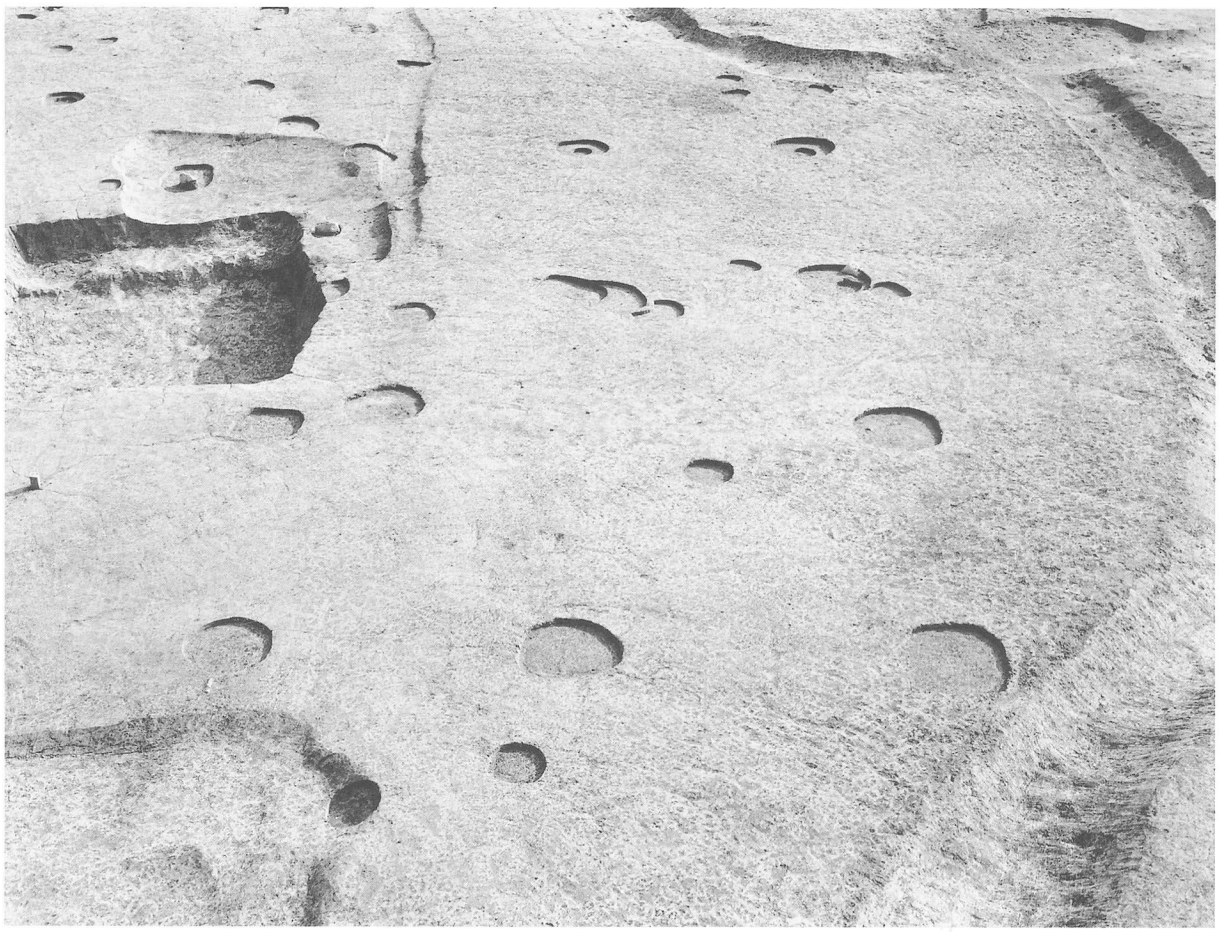

⑤


⑥


⑦

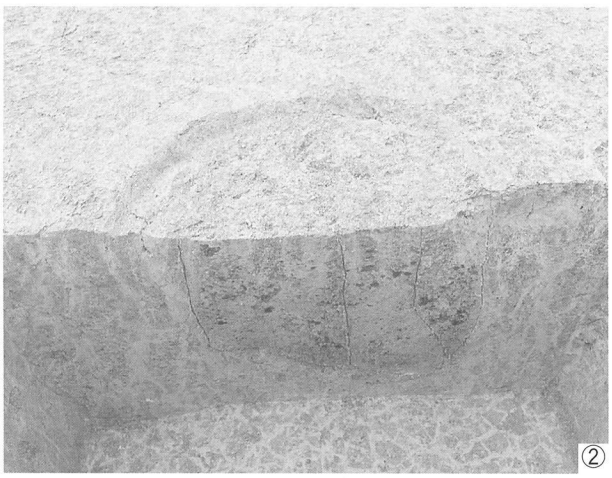

⑧

SB50　⑤P1692（東から）　⑥P1699（西から）　⑦P1704（東から）　⑧P1702（北から）



SB52（西から）

①



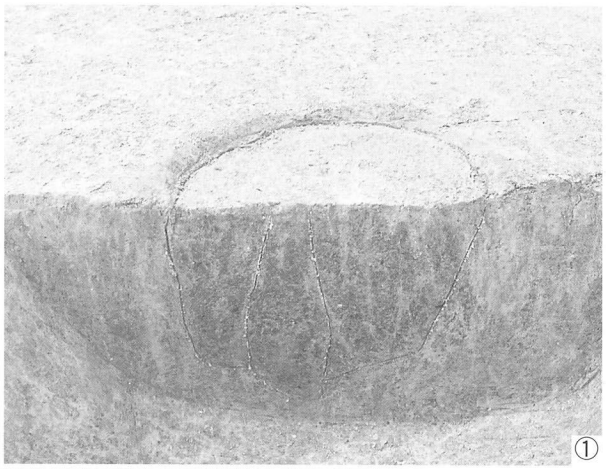
②

SB52　①P1679（北から）　②P1680（北から）

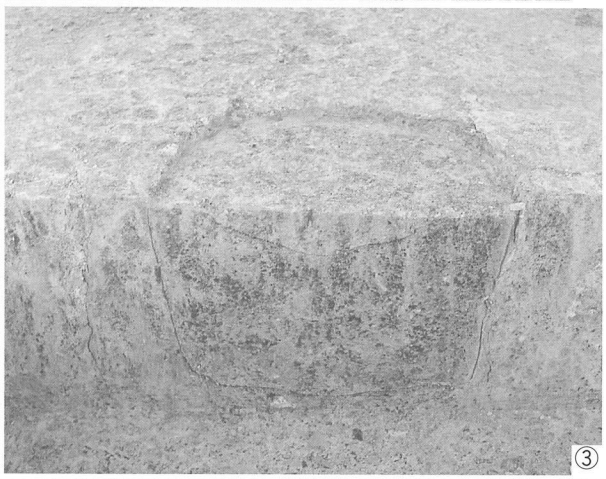
SB53（東から）

SB54（北から）

SB53　①P1727（東から）　②P1682（南から）　③P1681（西から）　④P1725（東から）


①

②


③

④

⑤

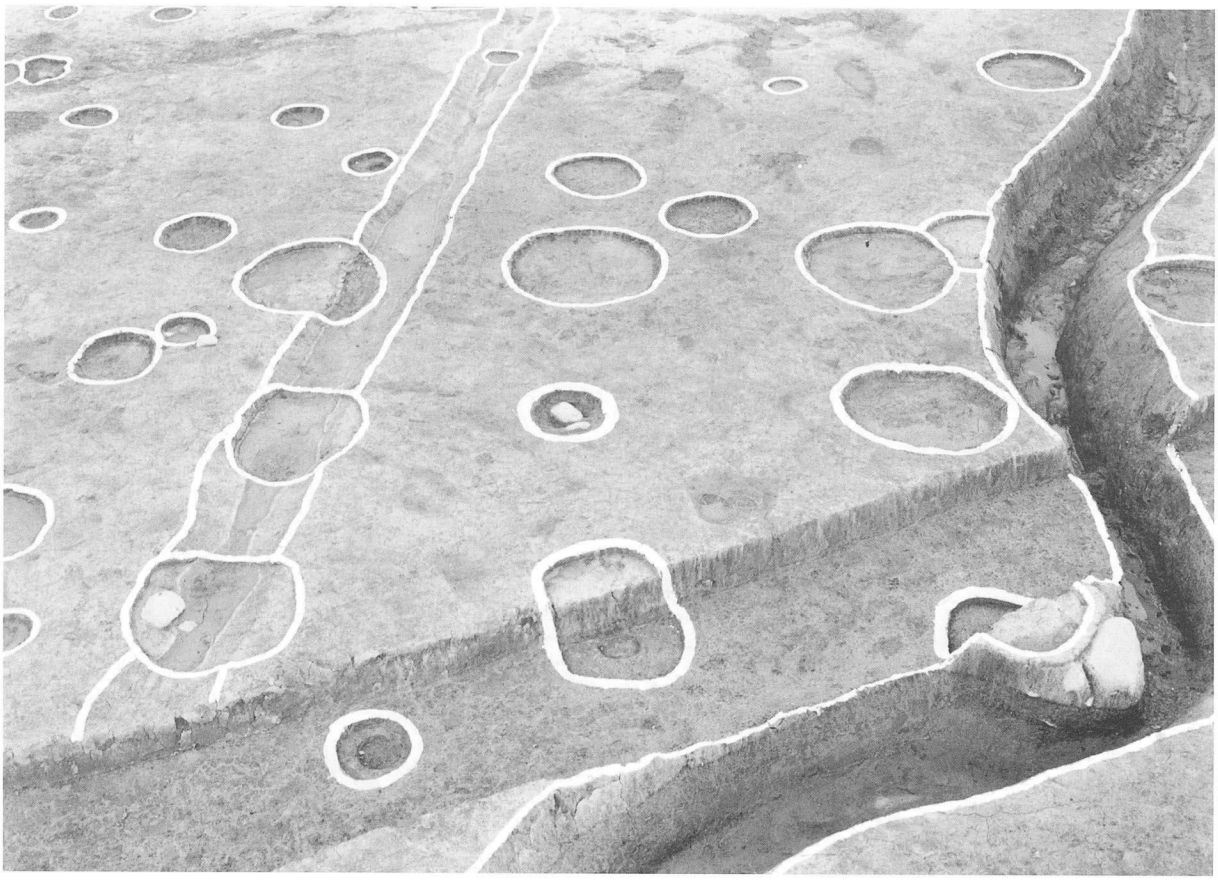
⑥

⑦

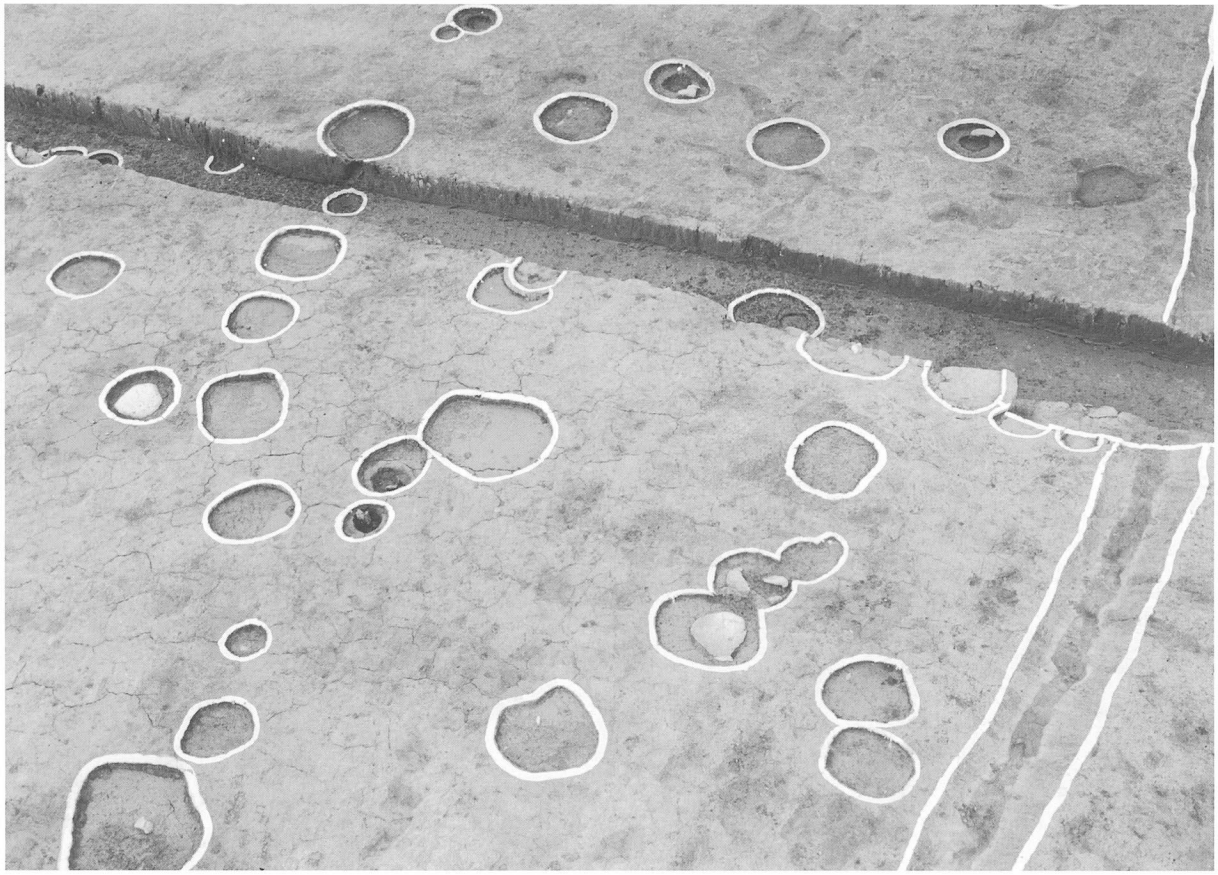
⑧

SB53　⑤P2110（西から）　⑥P1845（東から）　SB54　⑦P1650（南から）　⑧P1688（東から）

SB74（東から）



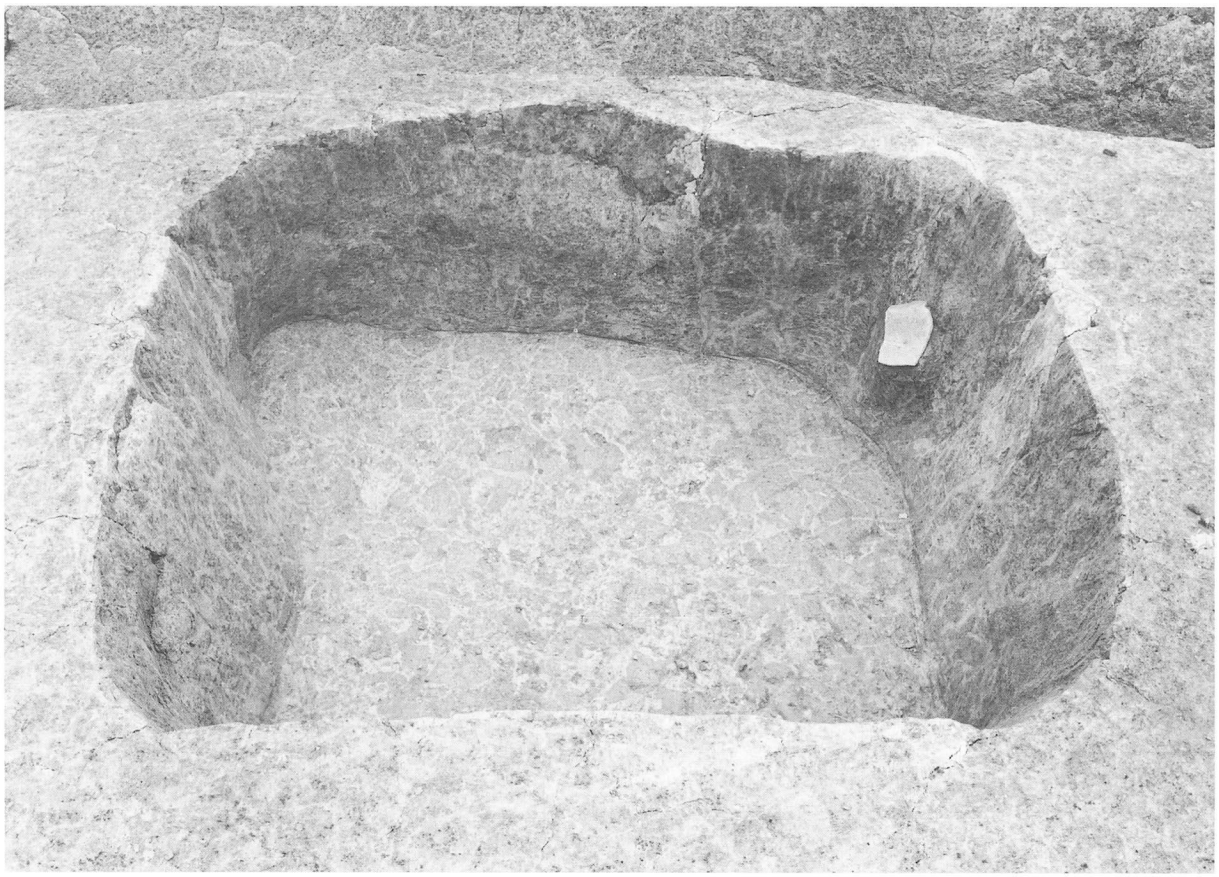
SB33（北から）



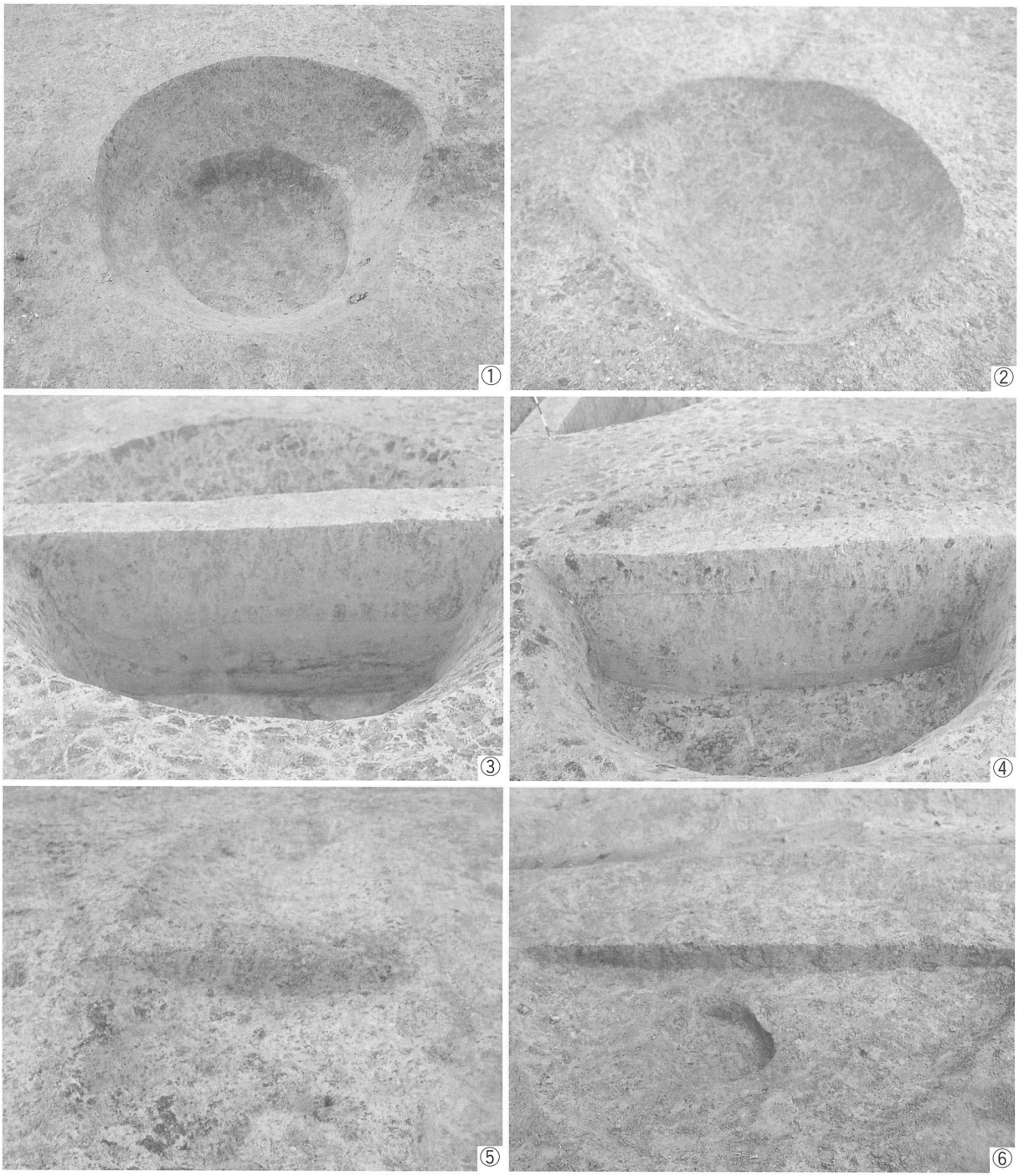
SB58（西から）

SB45（東から）

SK1（北から）

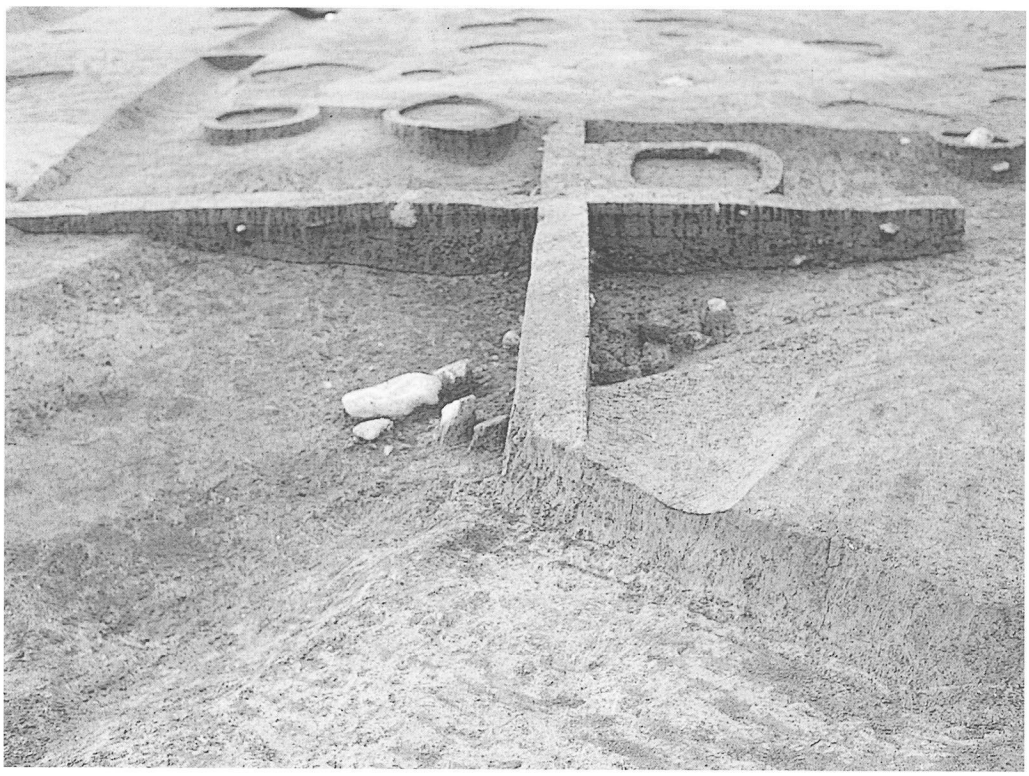


SK24（南から）



①SK49（東から）　②SK50（南から）　③SK52（東から）
④SK53（南から）　⑤SK56（北から）　⑥SK55（南東から）

SK68（北から）



SK68断面（東から）